

# 八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡

—東葉高速鉄道引込み線および車庫用地内埋蔵文化財調査報告書—

1989

東葉高速鉄道株式会社  
財団法人 千葉県文化財センター

やちよしなかのだい いせき しばやまいせき  
八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡

—東葉高速鉄道引込み線および車庫用地内埋蔵文化財調査報告書—

1989

東葉高速鉄道株式会社  
財団法人 千葉県文化財センター

## 序 文

八千代市を流れる新川をはじめとする大小の河川は、長い年月をかけて肥沃な土地を形成してきました。市内に所在する数多くの遺跡は、この豊かな自然が人々に古くから暮らした土地と生きる糧を与えてきたことを物語っています。

東京に隣接するこの地域では、近年ベッドタウンとして大規模な宅地化が進み、人口も年ごとに増加する傾向にあり、交通機関の整備が大きな課題となりました。これを解決するため千葉県、地元市町村、京成電鉄株式会社等による第3セクターの東葉高速鉄道株式会社が設立され、平成5年度の完成を目標として、西船橋から勝田台を結ぶ東葉高速鉄道の建設が計画されました。

その建設予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて、関係諸機関と慎重に協議した結果、記録保存の措置を講ずることになり、発掘調査は千葉県教育委員会の指導のもとに本センターが実施することとなりました。

東葉高速鉄道の工事は本線部分については日本鉄道建設公団が、駅舎、車庫及び本線から車庫に至る引込み線については東葉高速鉄道株式会社が建設することとなっています。この報告書は昭和60年度から昭和62年度にかけて調査した東葉高速鉄道車庫及び引込み線部分の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

調査の結果、八千代市芝山遺跡では先土器時代石器群が22地点、石器としてはナイフ形石器や局部磨製石斧等、また、平安時代の製鉄跡等貴重な成果を得ることができました。これらは当時の人々がどのように生活し、また、現在の私たちの暮らしにどう影響を与えたのかを紐解く貴重な手掛かりとなることでしょう。

本報告書を刊行するに当たり、本書が多方面の方々にと読まれ、活用され、埋蔵文化財の存在とその重要性を広く知っていただき、さらには文化財保護事業への理解が広まることを切に期待するものです。

最後に、発掘調査から整理作業に至るまで御指導・御協力をいただいた千葉県教育委員会、日本鉄道建設公団、東葉高速鉄道株式会社、八千代市教育委員会及び関係諸機関、並びに発掘調査、整理作業等に御協力いただいた調査補助員、地元の皆様により御礼申し上げます。

平成2年3月

財団法人千葉県文化財センター  
理事長 岩瀬良三

## 凡 例

1. 本書は、東葉高速鉄道建設に伴い事前調査した八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の実施は、東葉高速鉄道株式会社の依頼により、文化庁および千葉県教育委員会の指導を受けて、財団法人千葉県文化財センターが行った。
3. 各遺跡のコード番号は、行政管理庁指定統計コード、千葉県文化財センター遺跡コードを使用し、仲ノ台遺跡を 221-012、芝山遺跡を 221-008とした。
4. 本書の第1図は、国土地理院発行の1:25,000地形図、「習志野」を使用した。
5. 各遺跡の発掘調査は調査部長鈴木道之助（昭和59・60・61年度）・堀部昭夫（昭和62年度）、部長補佐岡川宏道（昭和59・60・61年度）・古内 茂（昭和62年度）、班長阪田正一（昭和59年度）・矢戸三男（昭和60・61年度）・小宮 孟（昭和62年度）の指導のもとに下記の調査研究員が担当した。

### 仲ノ台遺跡

昭和62年 8月22日～昭和62年 9月21日 班長代理 高田 博  
調査研究員 鈴木文雄

### 芝山遺跡

昭和60年 1月 7日～昭和60年 3月31日 調査研究員 服部哲則  
昭和60年 4月 1日～昭和61年 3月31日 調査研究員 土屋潤一郎  
昭和61年 4月 1日～昭和62年 3月31日 調査研究員 土屋潤一郎  
昭和62年 4月 1日～昭和62年 8月31日 班長代理 高田 博  
調査研究員 鈴木文雄

6. 整理作業は、調査部長堀部昭夫、部長補佐古内 茂（昭和62・63年度）・西山太郎（平成元年度）、班長小宮 孟（昭和62年度）・大原正義（昭和63年度）・上野純司（平成元年度）の指導のもとに下記の調査研究員が担当した。

昭和62年 9月 1日～昭和63年 3月31日 班長代理 高田 博  
昭和63年 4月 1日～平成 1年 2月28日 調査研究員 落合章雄  
平成元年 4月 1日～平成 2年 3月31日 技 師 落合章雄

7. 遺物の実測は、土師器の一部を高田が行ない、その他は落合が行なった。
8. 本書の執筆および編集は落合が行ない、一部主任技師上守秀明の協力を得た。
9. 第2篇、第3章、第2節、縄文時代中の包含層出土土器の分類は上守の協力を得た。
10. 遺構関係の写真撮影は、それぞれの担当者があたり、整理作業に伴う遺物写真の撮影は落合が行ない、一部主任技師大野康男の協力を得た。

11. 本書において使用した遺構番号は、発掘調査時のものを踏襲するが、先土器時代ブロックについては、仲ノ台・芝山遺跡とも整理作業時に変更した。
12. 本書に使用した航空写真は、京業測量株式会社の提供によるものである。
13. 本報告書内の遺構平面図中のスクリーントーンは、すべて焼面および焼土分布を表わすものである。
14. 第2篇芝山遺跡、第2章、第3節におけるカマド土層断面図中のスクリーントーンはカマド袖部の山砂などの構築材を表わすものである。
15. 先土器時代の遺物垂直分布図中に使用した土層中のスクリーントーンは、斜線は攪乱、上部はⅦ層、下部はⅨ層を表わす。また、最下部の破線はその調査区における掘削最深部を示すものである。
16. 先土器時代の接合資料実測図中に見られるスクリーントーンは、個々の剥片類の打面を表わすものである。
17. 発掘調査から報告書の刊行に当たりましては、下記の諸機関の御指導・御協力を賜りました。記して謝意を表します。

東葉高速鉄道株式会社、日本鉄道建設公団、千葉県教育庁文化課、八千代市教育委員会、石器文化研究会、西川博孝

# 本文目次

序文	
凡例	
序章	
第1節 発掘調査に至る経過	3
第2節 遺跡の位置と環境	3
第1篇 仲ノ台遺跡	
第1章 調査の方法と経過	9
第1節 層序	9
第2節 概要	10
第2章 遺構と遺物	13
第1節 先土器時代	13
第3章 小結	56
第2篇 芝山遺跡	
第1章 調査の方法と経過	61
第1節 層序	61
第2節 概要	62
第2章 遺構と遺物	65
第1節 先土器時代	65
第2節 縄文時代	130
第3節 平安時代	176
第3章 小結	190

## 挿 図 目 次

第 1 図	仲ノ台遺跡・芝山遺跡位置図	5
仲ノ台遺跡		
第 2 図	土層柱状図	9
第 3 図	仲ノ台遺跡発掘調査区およびグリッド配置図	12
第 4 図	仲ノ台遺跡遺構配置図	14
第 5 図	Aブロック遺物分布図	16
第 6 図	Aブロック出土石器実測図 (1)	17
第 7 図	Aブロック出土石器実測図 (2)	18
第 8 図	母岩別遺物分布図 (凝灰岩A)	20
第 9 図	凝灰岩A接合状態実測図	21-22
第 10 図	凝灰岩A接合資料石器実測図 (1)	23
第 11 図	凝灰岩A接合資料石器実測図 (2)	24
第 12 図	凝灰岩A接合資料石器実測図 (3)	25
第 13 図	凝灰岩A接合資料石器実測図 (4)	26
第 14 図	凝灰岩A接合資料石器実測図 (5)	27
第 15 図	凝灰岩A接合資料石器実測図 (6)	28
第 16 図	凝灰岩A接合資料石器実測図 (7)	29
第 17 図	凝灰岩A接合資料石器実測図 (8)	30
第 18 図	頁岩接合状態実測図	31-32
第 19 図	母岩別遺物分布図 (頁岩)	33
第 20 図	頁岩接合資料石器実測図 (1)	34
第 21 図	頁岩接合資料石器実測図 (2)	35
第 22 図	頁岩接合資料石器実測図 (3)	36
第 23 図	頁岩接合資料石器実測図 (4)	37
第 24 図	頁岩接合資料石器実測図 (5)	38
第 25 図	頁岩接合資料石器実測図 (6)	39
第 26 図	母岩別遺物分布図 (凝灰岩B)	40
第 27 図	凝灰岩B接合状態実測図	41
第 28 図	凝灰岩B接合資料石器実測図 (1)	42
第 29 図	凝灰岩B接合資料石器実測図 (2)	43

第30図	母岩別遺物分布図(珪質頁岩) .....	44
第31図	珪質頁岩接合状態実測図 .....	45
第32図	珪質頁岩接合資料石器実測図(1) .....	46
第33図	珪質頁岩接合資料石器実測図(2) .....	47
第34図	珪質頁岩接合資料石器実測図(3) .....	48
第35図	Bブロック遺物分布図 .....	49
第36図	Bブロック出土石器実測図 .....	50
第37図	母岩別遺物分布図(安山岩) .....	51
第38図	安山岩接合状態実測図 .....	52
第39図	安山岩接合資料石器実測図(1) .....	53
第40図	安山岩接合資料石器実測図(2) .....	54
第41図	安山岩接合資料石器実測図(3) .....	55
第42図	仲ノ台遺跡出土石器剥片剥離工程模式図 .....	56

## 芝山遺跡

第43図	土層柱状図(オー05-10グリッド) .....	61
第44図	昭和59・60年度調査範囲 .....	62
第45図	昭和61年度調査範囲 .....	62
第46図	昭和62年度調査範囲 .....	62
第47図	芝山遺跡遺構配置図 .....	63・64
第48図	第1ブロック遺物分布図 .....	67・68
第49図	第1ブロック出土石器実測図(1) .....	69
第50図	第1ブロック出土石器実測図(2) .....	70
第51図	第1ブロック出土石器実測図(3) .....	71
第52図	第1ブロック出土石器実測図(4) .....	72
第53図	第2ブロック遺物分布図(1) .....	77・78
第54図	第2ブロック遺物分布図(2) .....	79・80
第55図	第2ブロック出土石器実測図(1) .....	81
第56図	第2ブロック出土石器実測図(2) .....	82
第57図	第3ブロック出土石器実測図 .....	84
第58図	第3ブロック遺物分布図 .....	85
第59図	第4ブロック遺物分布図 .....	86

第 60 図	第 4 ブロック出土石器実測図	87
第 61 図	第 5 ブロック遺物分布図	88
第 62 図	第 5 ブロック出土石器実測図	89
第 63 図	第 6 ブロック遺物分布図	90
第 64 図	第 6 ブロック出土石器実測図	91
第 65 図	第 7 ブロック遺物分布図	92
第 66 図	第 7 ブロック出土石器実測図	93
第 67 図	第 8 ブロック出土石器実測図	94
第 68 図	第 9 ブロック遺物分布図	95
第 69 図	第 9 ブロック出土石器実測図	96
第 70 図	第 10 ブロック遺物分布図	98
第 71 図	第 10 ブロック出土石器実測図	99
第 72 図	第 11 ブロック遺物分布図	101
第 73 図	第 11 ブロック出土石器実測図	102
第 74 図	第 12 ブロック遺物分布図	102
第 75 図	第 12 ブロック出土石器実測図	103
第 76 図	第 13 ブロック遺物分布図	105
第 77 図	第 13 ブロック出土石器実測図 ( 1 )	106
第 78 図	第 13 ブロック出土石器実測図 ( 2 )	107
第 79 図	第 13 ブロック出土石器実測図 ( 3 )	108
第 80 図	第 13 ブロック出土石器実測図 ( 4 )	109・110
第 81 図	第 13 ブロック出土石器実測図 ( 5 )	111
第 82 図	第 14 ブロック遺物分布図	115
第 83 図	第 14 ブロック出土石器実測図	116
第 84 図	第 15 ブロック遺物分布図	118
第 85 図	第 15 ブロック出土石器実測図	119
第 86 図	第 16 ブロック遺物分布図	120
第 87 図	第 16 ブロック出土石器実測図 ( 1 )	121
第 88 図	第 16 ブロック出土石器実測図 ( 2 )	122
第 89 図	第 17 ブロック出土石器実測図	125
第 90 図	第 18 ブロック遺物分布図	126
第 91 図	第 18 ブロック出土石器実測図	127
第 92 図	第 19 ブロック出土石器実測図	128

第 93 図	第 7 文化層出土石器	129
第 94 図	110 号炉穴実測図	130
第 95 図	110 号炉穴出土遺物実測図	131
第 96 図	072 号土壇実測図	131
第 97 図	072 号土壇出土遺物実測図	132
第 98 図	072 号土壇内具層組成図	133
第 99 図	014 号土壇実測図	134
第 100 図	014 号土壇出土遺物実測図	134
第 101 図	106 号住居跡実測図	135
第 102 図	106 号住居跡出土遺物実測図	135
第 103 図	036 号住居跡実測図	136
第 104 図	036 号住居跡出土遺物実測図	137
第 105 図	104 号住居跡実測図	137
第 106 図	104 号住居跡炉跡実測図	138
第 107 図	104 号住居跡出土遺物実測図	138
第 108 図	陥穴状遺構形態分類図	140
第 109 図	陥穴状遺構配置図	141
第 110 図	陥穴状遺構実測図 1 (A 型)	142
第 111 図	陥穴状遺構実測図 2 (A 型)	143
第 112 図	陥穴状遺構実測図 3 (A・B 型)	144
第 113 図	陥穴状遺構実測図 4 (B・C 型)	145
第 114 図	陥穴状遺構実測図 5 (C・D 型)	146
第 115 図	陥穴状遺構実測図 6 (D 型)	147
第 116 図	陥穴状遺構実測図 7 (D 型)	148
第 117 図	陥穴状遺構実測図 8 (E 型)	149
第 118 図	早期土器拓影図	151
第 119 図	黒浜式土器拓影図 (1)	152
第 120 図	黒浜式土器拓影図 (2)	153
第 121 図	浮島・興津式土器拓影図 (1)	155
第 122 図	浮島・興津式土器拓影図 (2)	156
第 123 図	浮島・興津式土器拓影図 (3)	157
第 124 図	諸磯・十三菩提式土器拓影図	158
第 125 図	前期末葉～中期初頭土器拓影図 (1)	159

第 126 図	前期末葉～中期初頭土器拓影図 ( 2 )	160
第 127 図	前期末葉～中期初頭土器拓影図 ( 3 )	161
第 128 図	前期末葉～中期初頭土器拓影図 ( 4 )	162
第 129 図	前期末葉～中期初頭土器拓影図 ( 5 )	163
第 130 図	前期末葉～中期初頭土器拓影図 ( 6 )	164
第 131 図	中期初頭土器拓影図 ( 7 )	165
第 132 図	中期初頭土器拓影図 ( 8 )	166
第 133 図	中期初頭土器拓影図 ( 9 )	167
第 134 図	中期初頭土器拓影図 ( 10 )	168
第 135 図	中期初頭土器拓影図 ( 11 )	169
第 136 図	中期中葉土器拓影図 ( 1 )	170
第 137 図	中期中葉土器拓影図 ( 2 )	171
第 138 図	中期後半土器拓影図 ( 1 )	172
第 139 図	中期後半土器拓影図 ( 2 )	173
第 140 図	後期土器拓影図	174
第 141 図	001号住居跡実測図	177
第 142 図	001号住居跡カマド実測図	178
第 143 図	001号住居跡出土遺物実測図	178
第 144 図	009号住居跡実測図	179
第 145 図	009号住居跡カマド実測図	180
第 146 図	009号住居跡出土遺物実測図	181
第 147 図	010号住居跡実測図	182
第 148 図	010号住居跡カマド実測図	182
第 149 図	011・012号住居跡実測図	183
第 150 図	011号住居跡出土遺物実測図	184
第 151 図	018号住居跡実測図	184
第 152 図	018号住居跡出土遺物実測図	185
第 153 図	019号住居跡実測図	186
第 154 図	019号住居跡出土遺物実測図	186
第 155 図	019号住居跡カマド実測図	187
第 156 図	029号住居跡実測図	188
第 157 図	029号住居跡カマド実測図	188
第 158 図	004号製鉄跡実測図	189

# 表 目 次

## 仲ノ台遺跡

第1表	Aブロック出土石器表 (1).....	17
第2表	Aブロック出土石器表 (2).....	18
第3表	凝灰岩A接合資料石器表 (1).....	23
第4表	凝灰岩A接合資料石器表 (2).....	24
第5表	凝灰岩A接合資料石器表 (3).....	25
第6表	凝灰岩A接合資料石器表 (4).....	26
第7表	凝灰岩A接合資料石器表 (5).....	27
第8表	凝灰岩A接合資料石器表 (6).....	28
第9表	凝灰岩A接合資料石器表 (7).....	29
第10表	凝灰岩A接合資料石器表 (8).....	30
第11表	頁岩接合資料石器表 (1).....	34
第12表	頁岩接合資料石器表 (2).....	35
第13表	頁岩接合資料石器表 (3).....	36
第14表	頁岩接合資料石器表 (4).....	37
第15表	頁岩接合資料石器表 (5).....	38
第16表	頁岩接合資料石器表 (6).....	39
第17表	凝灰岩B接合資料石器表 (1).....	42
第18表	凝灰岩B接合資料石器表 (2).....	43
第19表	珩質頁岩接合資料石器表 (1).....	46
第20表	珩質頁岩接合資料石器表 (2).....	47
第21表	珩質頁岩接合資料石器表 (3).....	48
第22表	Aブロック母岩別資料石器組成表.....	48
第23表	Bブロック出土石器表.....	50
第24表	Bブロック母岩別資料石器組成表.....	51
第25表	安山岩接合資料石器表 (1).....	53
第26表	安山岩接合資料石器表 (2).....	54
第27表	安山岩接合資料石器表 (3).....	55

## 芝 山 遺 跡

第28表	先土器時代ブロック新旧名称対応表	65
第29表	第1ブロック出土石器表	74
第30表	第1ブロック母岩別資料石器組成表	75
第31表	第2ブロック母岩別資料石器組成表	83
第32表	第2ブロック出土石器表(1)	83
第33表	第2ブロック出土石器表(2)	84
第34表	第4ブロック出土石器表	86
第35表	第4ブロック母岩別資料石器組成表	87
第36表	第5ブロック出土石器表	89
第37表	第5ブロック母岩別資料石器組成表	89
第38表	第6ブロック出土石器表	89
第39表	第6ブロック母岩別資料石器組成表	91
第40表	第7ブロック出土石器表	93
第41表	第7ブロック母岩別資料石器組成表	94
第42表	第9ブロック出土石器表	97
第43表	第9ブロック母岩別資料石器組成表	97
第44表	第10ブロック出土石器表	99
第45表	第10ブロック母岩別資料石器組成表	100
第46表	第11ブロック出土石器表	100
第47表	第11ブロック母岩別資料石器組成表	100
第48表	第12ブロック出土石器表	103
第49表	第12ブロック母岩別資料石器組成表	104
第50表	第13ブロック出土石器表(1)	112
第51表	第13ブロック出土石器表(2)	113
第52表	第13ブロック母岩別資料石器組成表	113
第53表	第14ブロック出土石器表	117
第54表	第15ブロック出土石器表	117
第55表	第15ブロック母岩別資料石器組成表	117
第56表	第16ブロック出土石器表	123
第57表	第16ブロック母岩別資料石器組成表	124
第58表	第17ブロック出土石器表	125

第59表	第17ブロック母岩別資料石器組成表	126
第60表	第19ブロック母岩別資料石器組成表	127
第61表	第19ブロック出土石器表	128

## 図 版 目 次

図版 1 仲ノ台遺跡・芝山遺跡航空写真

### 仲ノ台遺跡

図版 2 1. 仲ノ台遺跡遠景（北より望む）

2. Aブロック遺物出土状況

3. Bブロック遺物出土状況

図版 3 Aブロック出土石器

図版 4 Aブロック凝灰岩A接合資料(1)

図版 5 Aブロック凝灰岩A接合資料(2)

図版 6 Aブロック凝灰岩A接合資料(3)

図版 7 Aブロック凝灰岩A接合資料(4)

図版 8 Aブロック頁岩接合資料(1)

図版 9 Aブロック頁岩接合資料(2)

図版10 Aブロック頁岩接合資料(3)

図版11 1. Aブロック凝灰岩B接合資料

2. Aブロック珪質頁岩接合資料(1)

図版12 Aブロック珪質頁岩接合資料(2)

図版13 1. Bブロック出土石器

2. Bブロック安山岩接合資料(1)

図版14 Bブロック安山岩接合資料(2)

### 芝山遺跡

図版15 1. 芝山遺跡遠景（南西より望む）

2. 芝山遺跡遠景（北東より望む）

図版16 1. 土層断面（オー06-03グリッド南壁）

2. 第1ブロック遺物出土状況

3. 局部磨製石斧出土状況

図版17 第1ブロック出土石器(1)

図版18 第1ブロック出土石器(2)

図版19 1. 第2ブロック遺物出土状況

2. 第2ブロック出土石器(1)

図版20 第2ブロック出土石器(2)

図版21 1. 第3ブロック遺物出土状況

2. 第3ブロック出土石器

3. 第4ブロック遺物出土状況

4. 第4ブロック出土石器

図版22 1. 第4ブロック出土石器(2)

2. 第5ブロック遺物出土状況

3. 第5ブロック出土石器

図版23 1. 第6ブロック出土石器

2. 第7ブロック遺物出土状況

3. 第7ブロック出土遺物

4. 第8ブロック出土遺物

図版24 1. 第9ブロック遺物出土状況

2. 第9ブロック出土遺物

3. 第10ブロック遺物出土状況

図版25 1. 第10ブロック出土遺物

2. 第11ブロック出土遺物

3. 第12ブロック遺物出土状況

- |      |  |      |  |
|------|--|------|--|
| 図版26 | 1. 第12ブロック出土遺物<br>2. 第13ブロック遺物出土状況<br>3. 第13ブロック出土遺物 (1)               | 図版38 | 1. 033号陥穴状遺構全景<br>2. 035号陥穴状遺構全景<br>3. 037号陥穴状遺構全景 |
| 図版27 | 第13ブロック出土遺物 (2)  | 図版39 | 1. 040号陥穴状遺構全景<br>2. 041号陥穴状遺構全景<br>3. 074号陥穴状遺構全景 |
| 図版28 | 第13ブロック出土遺物 (3)  |      |  |
| 図版29 | 1. 第14ブロック遺物出土状況<br>2. 第14ブロック出土遺物<br>3. 第15ブロック遺物出土状況及び出土遺物           | 図版40 | 1. 015号陥穴状遺構全景<br>2. 016号陥穴状遺構全景<br>3. 046号陥穴状遺構全景 |
| 図版30 | 1. 第16ブロック遺物出土状況<br>2. 第16ブロック出土遺物 (1)                                 | 図版41 | 1. 051号陥穴状遺構全景<br>2. 053号陥穴状遺構全景                   |
| 図版31 | 1. 第16ブロック出土遺物 (2)<br>2. 第17ブロック出土遺物<br>3. 第19ブロック出土遺物                 | 図版42 | 1. 028号陥穴状遺構全景<br>2. 056号陥穴状遺構全景<br>3. 058号陥穴状遺構全景 |
| 図版32 | 1. 第7文化層出土遺物<br>2. 110号炉穴全景<br>3. 110号炉穴出土遺物                           | 図版43 | 1. 059号陥穴状遺構全景<br>2. 064号陥穴状遺構全景<br>3. 065号陥穴状遺構全景 |
| 図版33 | 1. 072号土壇全景<br>2. 072号土壇貝層検出状況<br>3. 072号土壇出土遺物                        | 図版44 | 1. 021号陥穴状遺構全景<br>2. 022号陥穴状遺構全景<br>3. 023号陥穴状遺構全景 |
| 図版34 | 1. 014号土壇全景<br>2. 014号土壇遺物出土状況<br>3. 014号土壇出土遺物                        | 図版45 | 1. 024号陥穴状遺構全景<br>2. 026号陥穴状遺構全景<br>3. 038号陥穴状遺構全景 |
| 図版35 | 1. 036号住居跡・陥穴状遺構全景<br>2. 106号住居跡出土遺物<br>3. 036号住居跡出土遺物<br>4. 106号住居跡全景 | 図版46 | 1. 042号陥穴状遺構全景<br>2. 048号陥穴状遺構全景<br>3. 049号陥穴状遺構全景 |
| 図版36 | 1. 104号住居跡全景<br>2. 104号住居跡遺物出土状況<br>3. 104号住居跡出土遺物                     | 図版47 | 1. 050号陥穴状遺構全景<br>2. 052号陥穴状遺構全景<br>3. 060号陥穴状遺構全景 |
| 図版37 | 1. 017号陥穴状遺構全景<br>2. 030号陥穴状遺構全景<br>3. 032号陥穴状遺構全景                     | 図版48 | 1. 063号陥穴状遺構全景<br>2. 067号陥穴状遺構全景<br>3. 069号陥穴状遺構全景 |

- 図版49 1. 025号陥穴状遺構全景  
2. 045号陥穴状遺構全景  
3. 054号陥穴状遺構全景
- 図版50 1. 055号陥穴状遺構全景  
2. 061号陥穴状遺構全景
- 図版51 1. 062号陥穴状遺構全景  
2. 066号陥穴状遺構全景  
3. 068号陥穴状遺構全景
- 図版52 縄文時代包含層出土土器 (1)
- 図版53 縄文時代包含層出土土器 (2)
- 図版54 縄文時代包含層出土土器 (3)
- 図版55 縄文時代包含層出土土器 (4)
- 図版56 縄文時代包含層出土土器 (5)
- 図版57 縄文時代包含層出土土器 (6)
- 図版58 縄文時代包含層出土土器 (7)
- 図版59 縄文時代包含層出土土器 (8)
- 図版60 縄文時代包含層出土土器 (9)
- 図版61 1. 001号住居跡全景  
2. 001号住居跡カマド全景  
3. 001号住居跡鍛冶炉

- 図版62 1. 009号住居跡全景  
2. 009号住居跡カマド全景
- 図版63 1. 010号住居跡全景  
2. 010号住居跡遺物出土状況  
3. 010号住居跡カマド全景
- 図版64 1. 011号住居跡全景  
2. 012号住居跡全景  
3. 018号住居跡全景
- 図版65 1. 019号住居跡カマド検出状況  
2. 019号住居跡カマド断面
- 図版66 1. 019号住居跡・039号土壇全景  
2. 029号住居跡全景  
3. 029号住居跡カマド全景
- 図版67 平安時代住居跡出土遺物
- 図版68 1. 004号製鉄炉全景  
2. 004号製鉄炉壁面
- 図版69 1. 004号製鉄炉出土大型羽口  
2. 004号製鉄炉炉壁破片  
3. 004号製鉄炉出土鉄滓

# 序 章

## 第1節 発掘調査に至る経過

千葉県北西部の東京に近接する地域は、船橋市芝山団地や八千代市萱田地区等の大規模な住宅団地の造成が進められ、人口の増加が著しい地域である。そのためこの地域の交通手段である京成電鉄の朝夕の混雑は想像を上回るものである。このような現状をふまえ、千葉県及び船橋市、八千代市両市においては、既設路線の輸送力の強化と併せて昭和47年の都市交通審議会の答申による「中野一勝田台間の新線建設」の早期実現を図るため、関係鉄道事業者とともに第3セクターの東葉高速鉄道株式会社を設立した。

東葉高速鉄道株式会社は計画路線における埋蔵文化財について関係2市の教育委員会との協議を経て、昭和57年3月5日に船橋市区間の10.3kmの範囲について、また、昭和57年3月9日に八千代市区間の5.9km範囲内について埋蔵文化財の所在の有無について千葉県教育委員会に照会をした。

このため千葉県教育委員会は照会地の現況を把握するため現地踏査を実施したところ、船橋市区間で7か所、八千代市区間で5か所の包蔵地を確認するに至り、昭和57年7月2日付けで埋蔵文化財が所在する旨の回答をした。

東葉高速鉄道建設については日本鉄道建設公団民鉄方式により、車庫線及び車庫部分については東葉高速鉄道株式会社に施行し、本線部分については鉄道建設公団で施行することとなっている。

東葉高速鉄道株式会社の施行する部分はいずれも八千代市内に位置しており、先の千葉県教育委員会の回答にある5遺跡のうち2遺跡が該当することとなり、その取扱について千葉県教育委員会と協議したところ、建設計画の変更をして遺跡の現状保存をすることは難しいため、やむを得ず記録保存の措置を講じることに決定した。

記録保存に当たっては、当文化財センターが調査機関の指定を受け、千葉県教育委員会の指導により東葉高速鉄道株式会社との間に発掘調査の委託契約を締結し、調査を実施することとなった。

車庫線部分は八千代市吉橋字野犬作で仲ノ台遺跡が所在し、車庫部分は八千代市大和田新田字芝山で芝山遺跡が所在している。

なお、発掘調査の経過については、各遺跡の方法と経過の項で詳細を述べる。

## 第2節 遺跡の位置と環境

仲ノ台遺跡は千葉県八千代市吉橋字野犬作1,024番地に、芝山遺跡は同市大和田新田字芝山

877番地にそれぞれ所在する。(第1図)

遺跡の所在する八千代市は、関東地方南東部に広がる下総台地の一面に位置し、印旛沼に続く新川(旧平戸川)により台地を東西に二分され、さらに台地には印旛沼水系により形成された大小の支谷が複雑に侵入している。

芝山遺跡は新川に流入する桑納川の右岸、吉橋字花輪付近より南東に侵入する支谷の東岸に、仲ノ台遺跡は同支谷の最深部にあたる舌状台地にそれぞれ位置し、標高28m前後を測る。谷津の水田の標高は15m程であり、台地平坦部との高低差は13mとかなりの差がある。従って両遺跡の所在する台地縁辺部はかなりの勾配で谷に落ち込む感じである。

仲ノ台遺跡の所在する台地の平坦部は、八千代市教育委員会により発掘調査が実施され、縄文時代から平安時代に至る遺跡であることが確認されている。また、東側台地の発掘調査では縄文時代前期黒浜期の集落跡も確認されている。

芝山遺跡の所在する台地の東側、台地を1つ隔てた萱田地区には、先土器時代から歴史時代の長期にわたり集落が形成された権現後遺跡・ヲサル山遺跡があり、新川流域の埋蔵文化財の豊富さが窺える。

また谷津を挟んだ北側の台地では、成果の期待される高本遺跡の確認調査が昭和63年度より予定される。



第1圖 仲ノ台・芝山遺跡位置圖

## 第1篇 仲ノ台遺跡

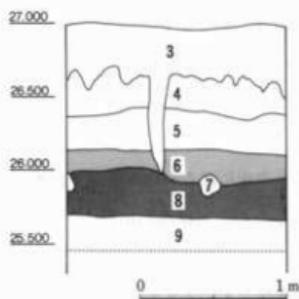
# 第1章 調査の方法と経過

## 第1節 層 序

仲ノ台遺跡の自然層は、下総台地における典型的な状態を呈しているといえる。概して地表から立川ローム層上面までが約0.5m、発掘調査時の掘削最深部は立川ローム層最下層の途中で終了しているため、立川ローム層上面より最下面までが約1.8m前後になるものと思われる。以下、各層について説明を行なう。

### 土層説明

黒色土の部分は先にも述べたが0.5m前後になるものと思われ、現在下総台地で一般に使用されている基本土層の呼称法により黒色土の部分を1層（耕作土層）・2層（遺物包含層、II層）として3層（III層）より表記する。



第2図 土層柱状図

3層：ソフトローム層。膨軟化が著しく、クラックの最深部は第2黒色帯にまで達する。よって第1黒色帯はこの層に含まれているものと思われ確認できない。（III層）

4層：明るい黄褐色を呈す。この層全体にATが含まれ、鎌により土層面を精査するとその感触が顕著に確認できる。（IV層）

5層：黄褐色土層。下位に位置する黒色帯の漸移層である。上部にはATが含まれるが、中位以下にはATが認められない。

6層：暗褐色土層。直径3mm内外の赤色スコリアを含む。第2黒色帯上部に対応するものである。（V層）

7層：黄褐色土層。黒色帯の間にブロック状に含まれるもので、一枚の層としては確認できないが、最近下総台地の複数の遺跡で一枚の層として確認できるため、それに対応するものとして一枚の層として扱うことにする。（VI層）

8層：暗褐色土層。6層より黒みを増し、固く締まっている。第2黒色帯下部に対応するものである。第2黒色帯上部に見られるスコリアよりもやや大きめのスコリアを含み、肉眼による簡単な観察であるが、量的にも多くなるのが瞭然としている。（IX層）

9層：黄褐色土層。立川ローム層最下層である。但し、今回の発掘調査における掘削深度は武蔵野ロームまでは達しておらず、武蔵野ローム上面までは現掘削面より更に30cmほど下であると思われる。（X層）

仲ノ台遺跡の所在する台地は谷の最深部に位置し、その中でも小規模な溺れ谷が入り込む分岐点に突出するものであり、かなりの急勾配で谷に落ち込む感がある。今回発掘調査の対象となった引込み線はこの谷の縁辺部をかすめるように通るもので、よって土層の堆積状況という点では、ある程度緩斜面という地形に影響され、二次的な堆積も若干あるように感じられる。特にATパミスを含むⅤ層については、発掘区斜面側では堆積が厚くATパミスが一様に散っており、色調もやや暗色がかかる傾向が見られる。また下総台地の立川ローム層の堆積状態で、緩斜面部ではATパミスがブロック状に列をなして確認される傾向があるが、仲ノ台遺跡で同様のものは見られなかった。

仲ノ台遺跡ではIX層に分布するブロックが2か所検出されているが、第2黒色帯については地形による影響は、Ⅴ層と異なりさほど感じられない。層の堆積状態も良好であり、Ⅴ層からⅥ層に漸移する部分での分層は容易におこなえる。また、Ⅵ層とIX層との分層も、色調、堅硬度、赤色スコリアの混入率から同じことがいえる。よって2ブロックの时期的な、換言すれば層位的位置づけは、垂直分布図に見られるとおりのものと考えてよからう。

## 第2節 概要

今回の発掘調査の対象となったのは、東葉高速鉄道本線より車庫に至る引込み線が、台地をかすめる、ほぼ南北に細長い延長100mにわたる部分である。このうち標高23m以上の800㎡について調査を実施した。

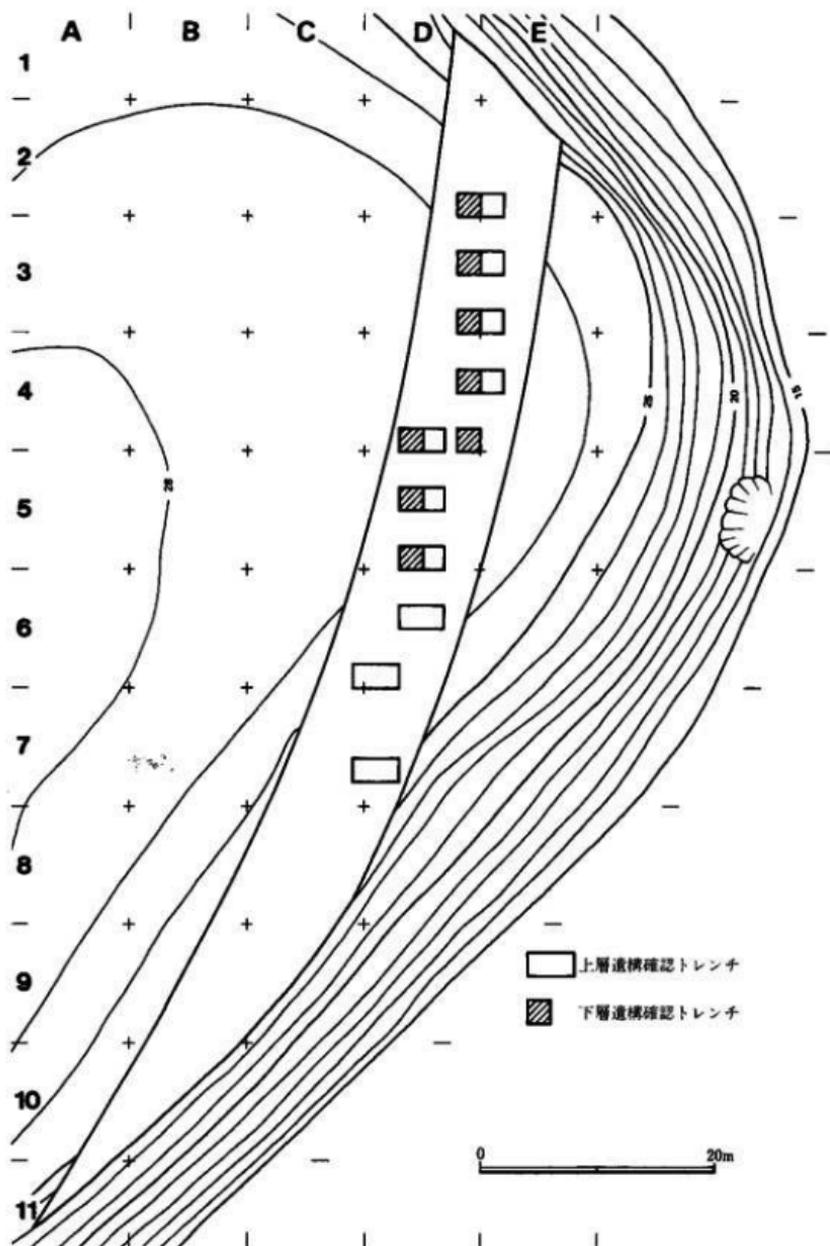
調査の方法は、グリッド方式とし、発掘調査に先がけ公共座標を元到大グリッド10m×10mを設定した。グリッド名称は、北西を基準に東へA・B・C・・・、南へ1・2・3・・・とし、A-1グリッド、D-3グリッド等と呼称した。

調査は先ず調査対象地に対して、4m×2mのトレンチにより上層遺構の確認をおこなうため、10か所のトレンチを設定し、人力により上層遺構確認面までの掘削および確認面の精査を実施した。しかし、上層遺構が検出されなかったため、引き続き2m×2mのグリッドにより下層遺構の確認をおこなった。下層遺構の確認グリッドは、上層遺構確認トレンチと同位置の西側に設定され、計8か所となった。確認調査の掘削深度は、立川ローム層を完掘し、武蔵野ローム層上面を確認するまでの深さを目安とした。下層遺構の確認調査を実施した結果、2か所のグリッドで遺物集中地点が確認されたため、本調査は下層の遺構のみを対象に行なわれた。

下層本調査は、調査期間が差し詰まっていたため、遺物出土地点の限界を追うようにおこなわれた。Aブロックは第5図を見てわかるように、遺物が狭い範囲で集中して分布しているため、遺物取り上げ時に労力を要したものの、調査は順調に進み、写真撮影、遺物取り上げを終

了，9月21日には発掘機材を撤収し，調査を終了した。

最終的な各ブロックの調査面積は，Aブロックが120㎡，Bブロックが35㎡であり，下層本調査の総面積は155㎡となった。



第3図 仲ノ台遺跡発掘調査区およびグリッド配置図

## 第2章 遺構と遺物

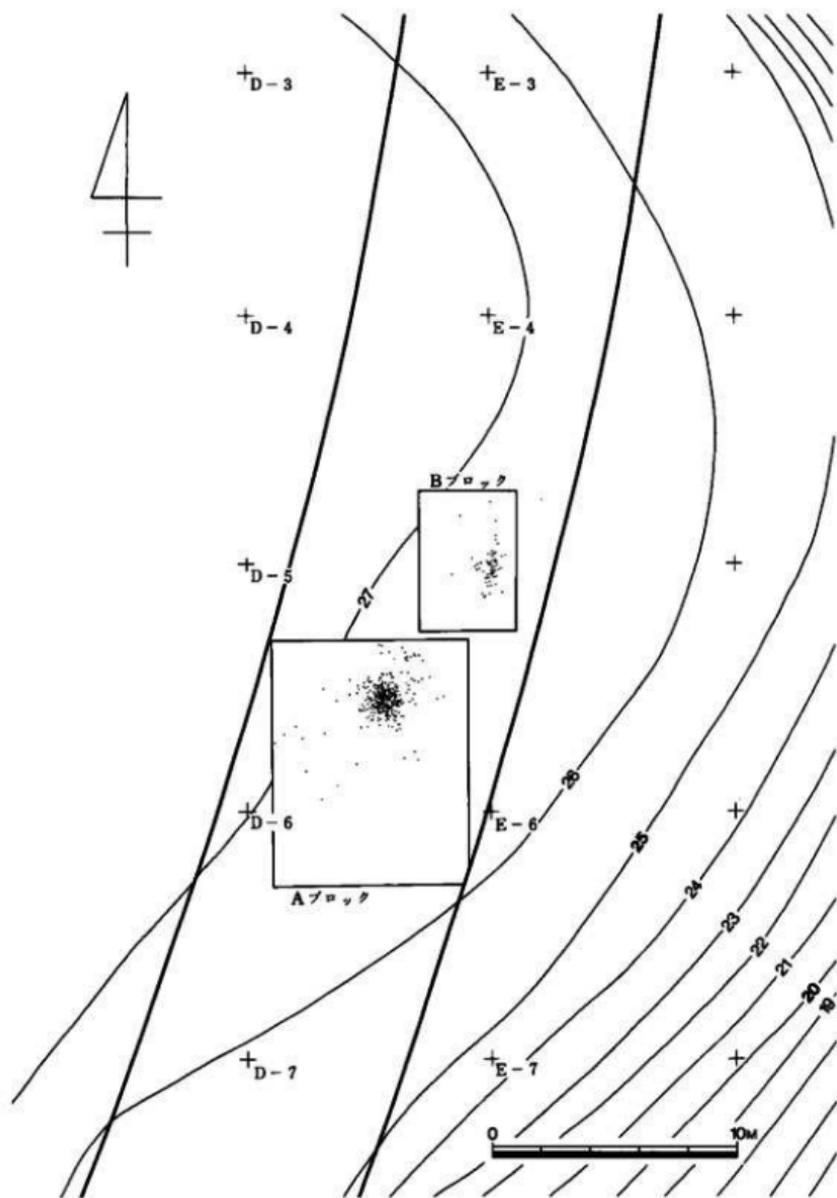
### 第1節 先土器時代

仲ノ台遺跡では、2ヶ所の石器集中地点が確認された。出土した石器の点数は、両ブロック合わせて総計482点を数える（第4図）。

A・Bブロック共、IX層にその分布が見られ、相互に同一母岩と思われる石器が混在しているが、接合関係は確認できなかった。しかし、剥片剥離技術は全く同一であると確認できるため、後に改めて記述するが、両ブロックは時期的に極めて近いものであることを示唆しておく。またA・Bブロック共に剥片剥離技術が明確にとらえられる接合資料が確認されたほか、単独の石質の石器も数点ブロック内に分布しているが、これはこの時期にみられる典型的な様相である。

以下、両ブロックを構成する石質の特徴を記述するが、これは科学的な分析によるものではなく、肉眼で見た特徴、接合関係、あるいは想像される母岩の大きさ等に因るものであることを付記しておく。

- ・凝灰岩A 灰褐色を呈し、きめの細かい感がある。原石面は光沢はないが、すべすべしている。質感に反し持った感じが軽い。
- ・凝灰岩B 白色を呈し、全体的に風化が進んでいるため表面がもろい。凝灰岩Aと同じく質感に反し持った感じが軽い。
- ・頁岩 原石面は黄土色、内は茶色を呈する。原石面は滑らかですべすべしているが、内（石器の表面）はむしろ目の細かい紙やすりを思わせる。質感に対し重く感じる。
- ・珪質頁岩A 原石面は黄土色もしくは緑色、内は緑色を呈する。表面は光沢があり、きめも細かい。所どころに黒色あるいは茶色の微粒子が混入する。質感に対し重く感じる。
- ・珪質頁岩B 特徴は珪質頁岩Aと全く同じであるが、珪質頁岩Aの母岩からは押取し得ない大きさのものであるため、珪質頁岩Aと区別した。
- ・珪質頁岩C 原石面は緑色、内は緑色と白色が縞模様となる。他の珪質頁岩に比べ表面に光沢があり、すべすべしている。
- ・安山岩 風化面は灰褐色であるが、新しい欠損面は黒色を呈す。表面はざらざらしており、縞状の節理が見られる。
- ・黒曜石 ガラス質の部分はきれいな半透明の黒色を呈するが、0.5mm程の球形の灰色の夾雑物を多く含む。



第4図 仲ノ台遺跡遺構配置図

## 1. Aブロック (第5図, 図版2)

Aブロックは、台地縁辺部にその分布がみられ、計413点の石器が出土している。石器の分布範囲は南北8m、東西6mを測る。

石器の出土層位は、VI層からX層までとかなりのレベル差があるが、大半はIX層中位にその分布をみる。

ブロックを構成する石質は、凝灰岩Aが最も多く、次いで頁岩、凝灰岩B、珪質頁岩A、珪質頁岩B、黒曜石、安山岩、珪質頁岩Cとなっている。このうち凝灰岩A、頁岩、凝灰岩B、珪質頁岩Aでは、ほぼ原石にまで復元できる良好な接合資料が確認され、この時期の剥片剥離技術を明らかにすることができた。

Aブロックの石器分布の様子をみると、ブロックの北寄りに2m×2m程の特に密に分布する個所があり、他の範囲には点々と散ったように分布する。特にブロック南西側に点在する石器は、若干Bブロックで出土している石質のものもあるが単独の石質のものが多く、それらは技術的にもAブロックにみられるものと多少の差異が認められる。

## Aブロック出土の石器及び単独母岩石器(第6・7図, 第1・2表, 図版3)

Aブロックでは製品としての石器の出土は数点であり、しかもその大半はAブロックで多数出土している石質以外のものである。

以下、若干の説明を記述しておく。

1・2はナイフ形石器である。1は基部と先端部に微細な調整が施され、素材剥片の形状をほぼ留めている。Bブロックで出土している安山岩と同一の石質である。2は素材剥片の打面を除去し、先端部に微細な調整を施し製品としている。

3は削器である。側縁にノッチ状の刃部をもつ。これも1のナイフ形石器と同様の安山岩製のものである。

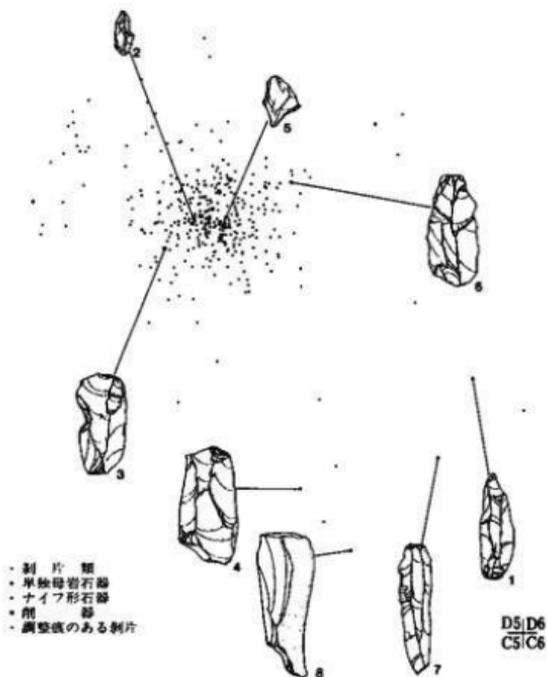
4・5は調整痕の認められる剥片である。4は剥片末端部に、5は側縁部に調整痕が認められる。

6は黒曜石製の剥片で、打面が欠損している。

7・8は珪質頁岩製の剥片である。7は表面にみられる剥離痕から上下両端に打面をもつ石核より搾取されたものと思われる。なお、仲ノ台遺跡で検出された2ブロックでの剥片剥離技術は、打面の位置が剥片剥離工程の最終段階まで持続され、主要な剥片の搾取はすべて一方からの搾取であるため、この剥片の搾取された際の剥片剥離技術と異なることが指摘できる。同時期に異なる剥片剥離技術が共存していることは、今後のこの時期の剥片剥離技術を考慮するにあたり、問題提起をするものと思われる。8の末端部に見られる剥離は、頭部調整痕である。あるいは打面再生剥片の可能性も考えられる。



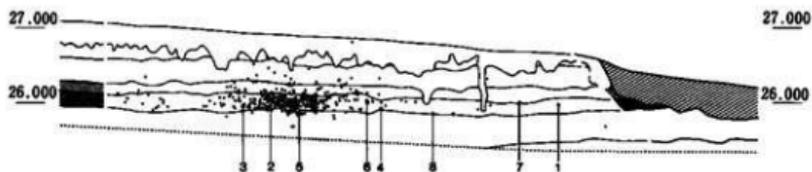
E5 | E6  
D5 | D6



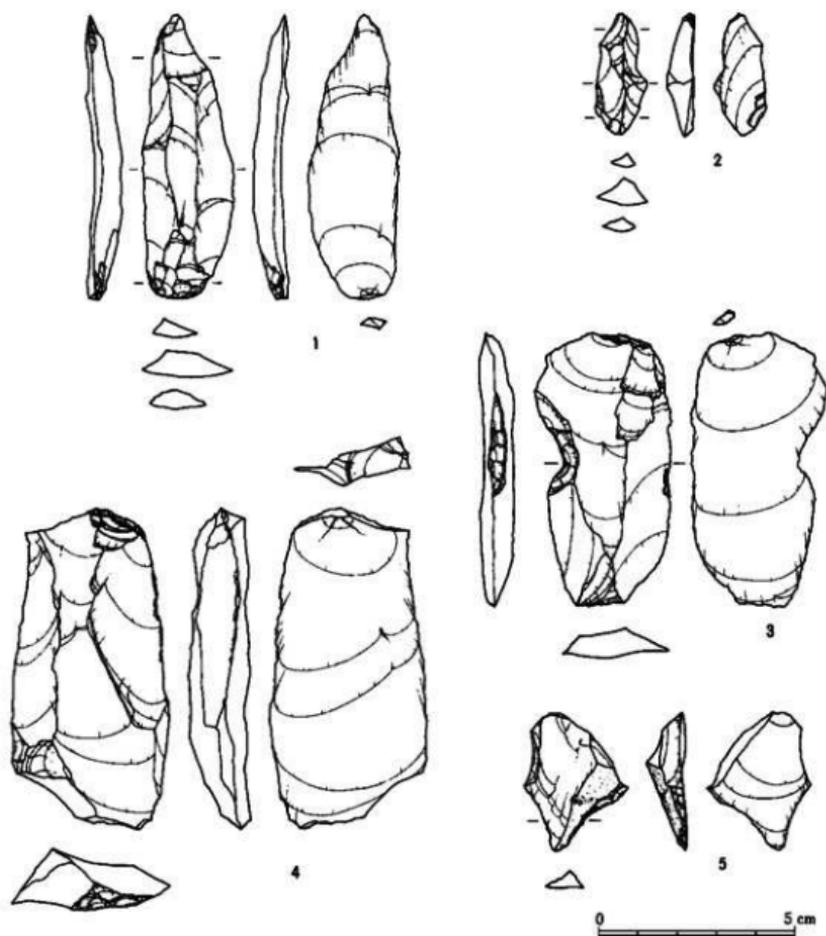
- ・ 剥片類
- ・ 単軸母岩石器
- ・ ナイフ形石器
- ・ 削器
- ・ 調整痕のある剥片

D5 | D6  
C5 | C6

0 4 m



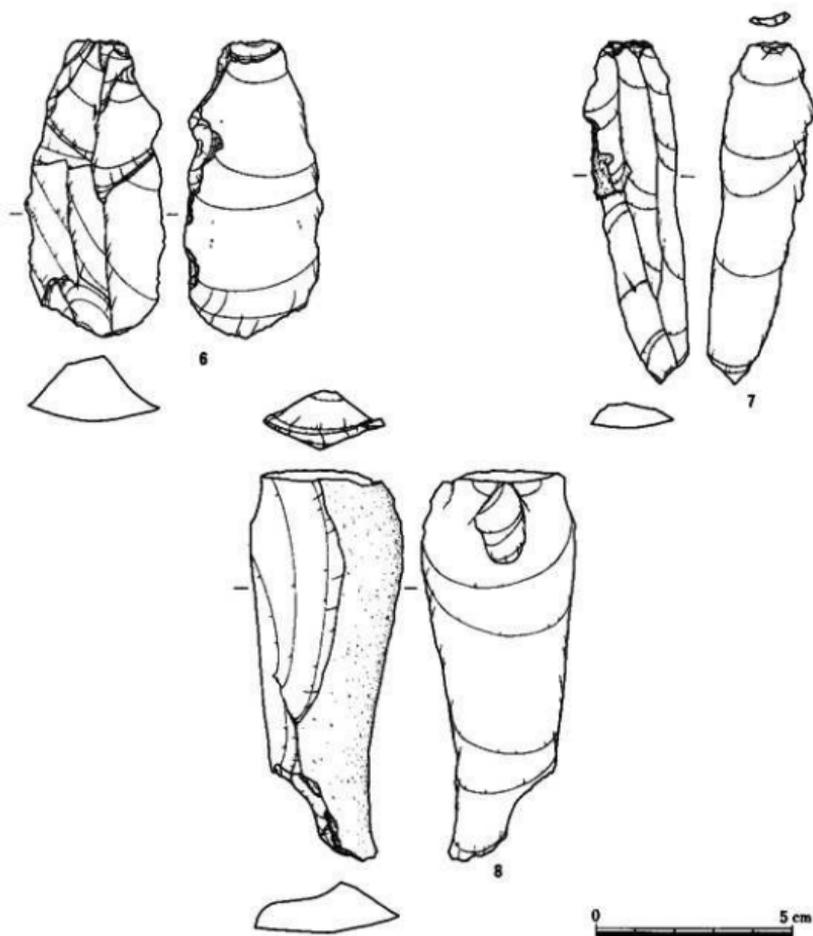
第5図 Aブロック遺物分布図



第6図 Aブロック出土石器実測図(1)

挿図 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
1	1	ナイフ形石器	安山岩	7.35	2.35	0.8	11.4	基部に微細な調整
2	43	ナイフ形石器	凝灰岩	3.2	1.3	0.6	1.8	先端部に微細な調整
3	173	ナイフ形石器	安山岩	6.9	3.8	0.9	21.2	側縁にノッチ状の刃部をもつ
4	8	調整痕ある剥片	珪質頁岩	8.2	4.1	1.5	49.2	剥片末端部に調整
5	415	調整痕ある剥片	頁岩	3.1	2.4	0.9	6.2	プランテイング状の調整

第1表 Aブロック出土石器表(1)



第7図 Aブロック出土石器実測図(2)

採回 番号	遺物番号	器	種 石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
6	87	剥	片 黒 曜 石	7.7	3.5	1.7	40.3	
7	4	剥	片 珪 質 頁 岩	8.8	2.4	0.95	16.2	原石面残す。
8	6	剥	片 珪 質 頁 岩	9.9	3.6	1.5	52.4	原石面残す。末端に頸部調整痕

第2表 Aブロック出土石器表(2)

## 接合資料

Aブロックでは、凝灰岩A、頁岩、凝灰岩B、珪質頁岩Aの各石質の良好な接合資料が確認された。以下、各々の接合資料について説明するが、個々の石器の挿入番号は剥片剥離工程に則して付け、石核が最終の番号となるようにしてある。また意図的に分割されたものと思われる剥片は、接合した状態で記載しており、あくまで一回の打撃により押取された剥片として扱っている。

以下で使用する剥片の名称であるが、打面再生剥片、石核整形剥片、主要な剥片の語句を用いた。主要な剥片については、目的剥片等とも言われているが、本遺跡では良好な接合資料が確認されているにもかかわらず、それらに伴う製品が出土しておらず、また打面再生剥片に調整痕のある剥片等が認められるため、製品の素材として押取されたと思われる剥片を主要な剥片とした。なお接合状態実測図のスクリーントーンは打面を表わしている。

### 1. 凝灰岩A (第8～17図, 第3～10表, 図版4～7)

直径10cm内外の棒状の礫を母岩としており、挿入番号2の打面再生剥片が剥片剥離工程の初期段階のものであることから、礫を分割した一方であることが想定できる。

接合した剥片類は38点で、出土した凝灰岩Aの総点数の21%を、重量では74.4%を占め、初期の母岩に近いところまで復元できた。

接合状態を解りやすく説明するために接合作業時の様子を記述するが、当初、主要な剥片と石核整形剥片とが倒立した鐘形に接合したものと別に、打面再生剥片が円盤状に接合した。円盤状に接合した打面再生剥片が、倒立した鐘形に接合した主要な剥片と石核整形剥片の口を塞ぐような状態で接合するのは予想できたが、なかなか接合点が見つからず、円盤状に接合した打面調整剥片を小刻みに回転していくうちにやっと接合したような状態だった。

打面再生は礫断面の円周上より、多方向から頻繁におこなわれており、それにより主要となる剥片の打面には稜が残っている。また、石核整形のために除去された剥片も明確に識別できる。言い換えれば、打面を再生する、石核を整形する、主要な剥片を押取するといった各々の目的により、母岩に対して打撃を加える部位が明確にされている。

### 2. 頁岩 (第18～25図, 第11～16表, 図版8～10)

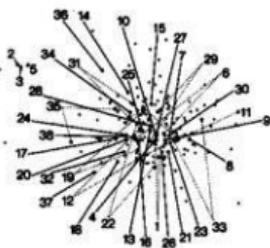
扁平礫を母岩とする。接合資料のはほぼ全周に原石面がみられ、幅10.5cm、厚み7cm程の母岩であることが想定できる。

接合した剥片類は40点で、頁岩の総点数の38%を、重量では89.7%を占め、凝灰岩Aと同様には剥片剥離工程初期の母岩にまで復元できた。

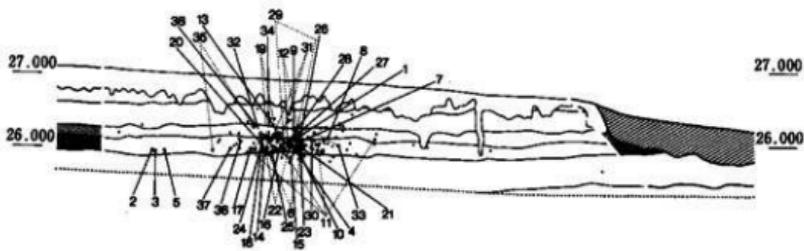
剥片剥離工程は凝灰岩Aとはほぼ同一であり、やはり打面再生剥片、主要な剥片、石核整形剥



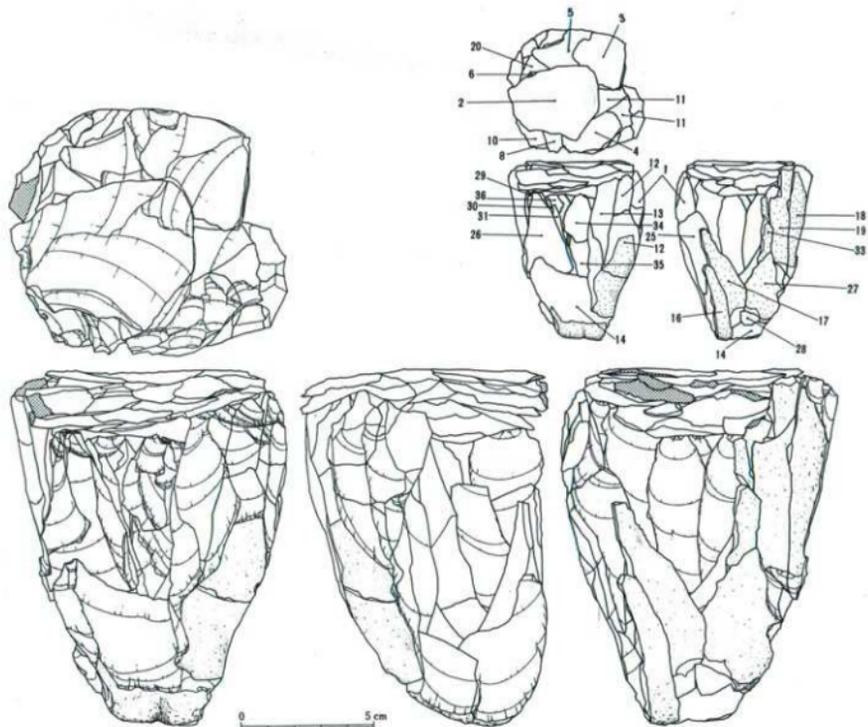
E5/E6  
D5/D6



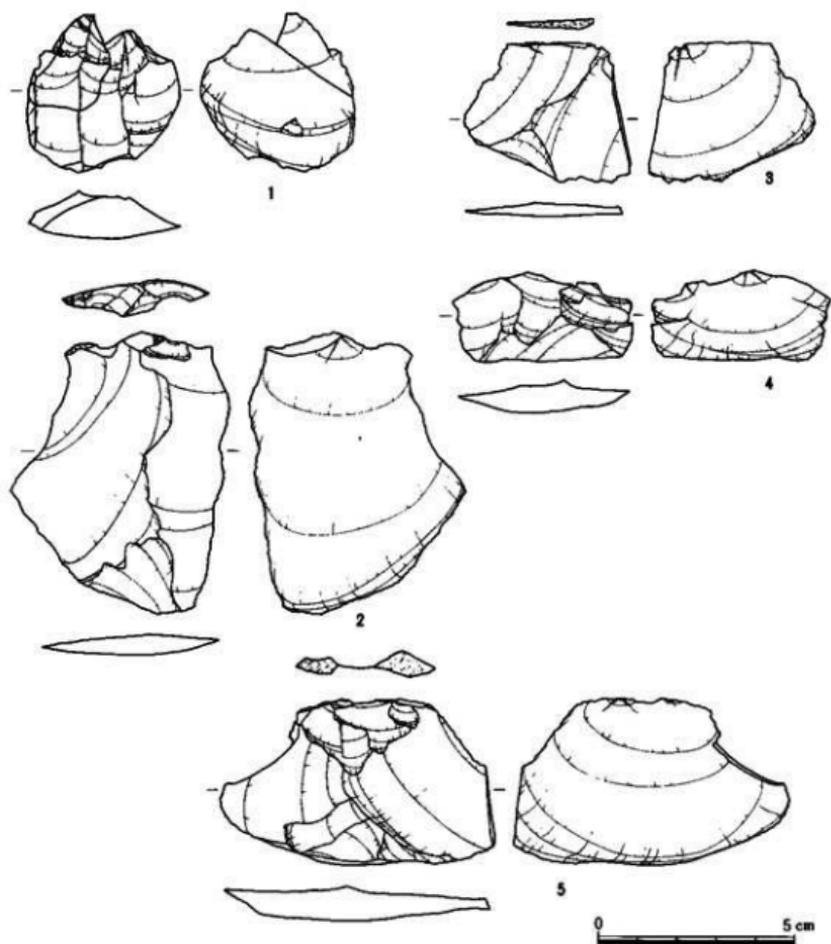
D5/D6  
C5/C6



第 8 图 母岩别遺物分布图(凝灰岩 A)



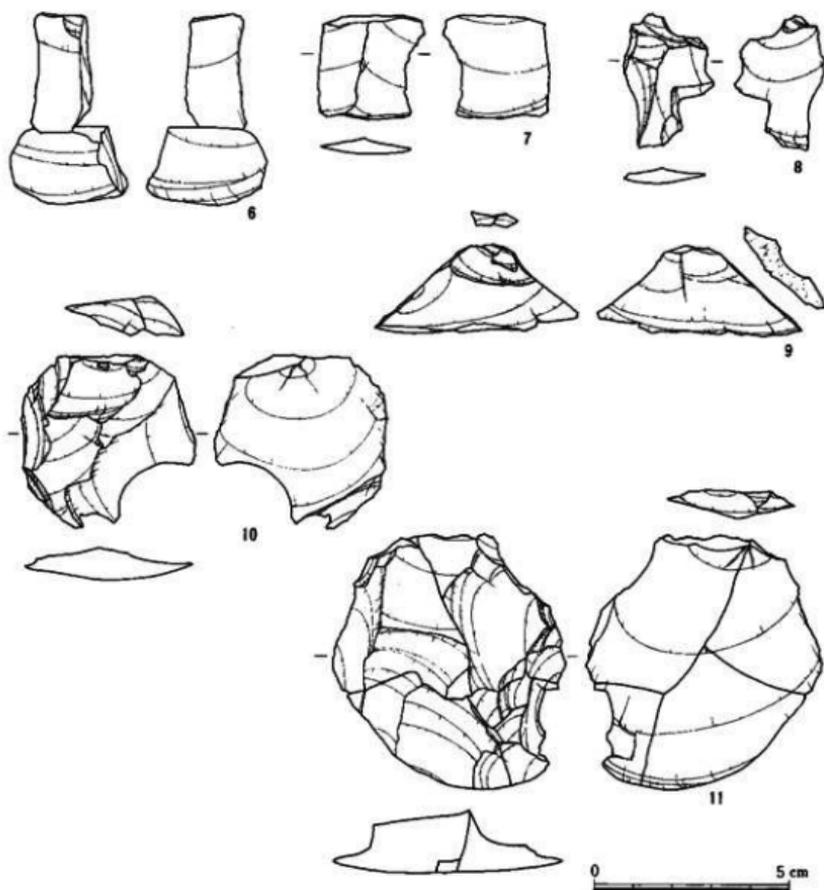
第 9 图 凝灰岩 A 接合状态实测图



第10図 凝灰岩A接合資料石器実測図(1)

挿図 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
1	310 107	剥 片	凝 灰 岩	4.2	3.9	1.6	20.7	
2	239	打面再生剥片	"	7.2	5.6	1.0	2.41	
3	276	打面再生剥片	"	3.7	4.25	0.4	5.8	原石面残す。
4	326	打面再生剥片	"	2.3	4.6	0.9	9.0	
5	238	打面再生剥片	"	4.25	7.1	1.05	30.1	原石面残す。

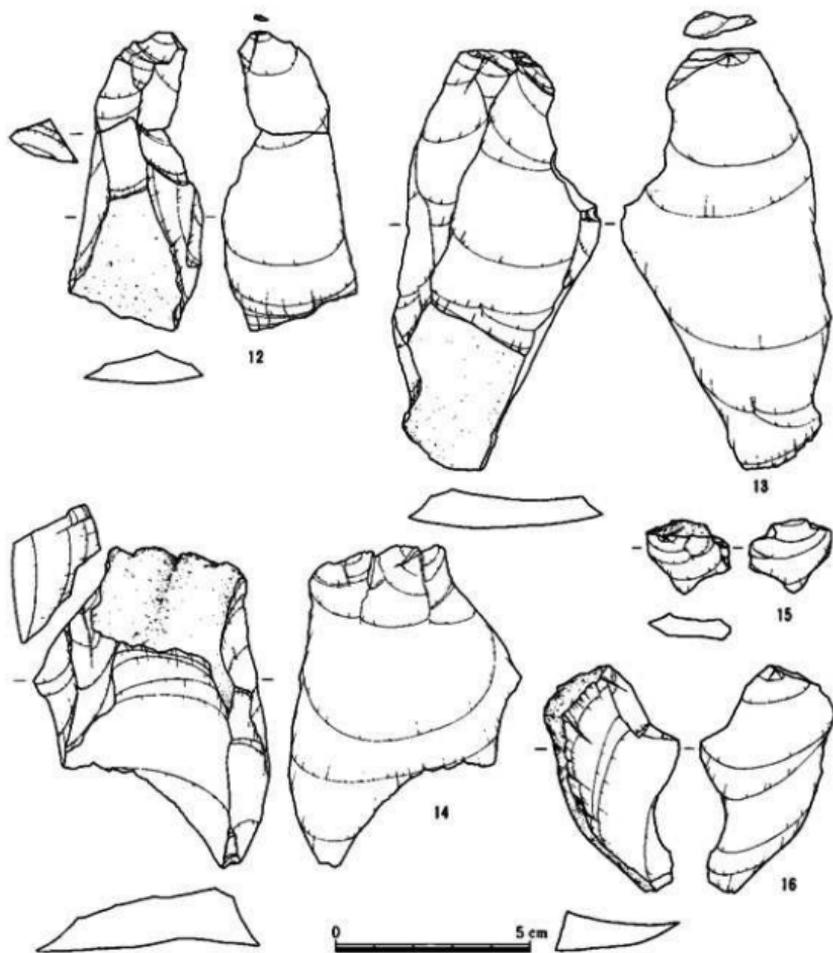
第3表 凝灰岩A接合資料石器表(1)



第11圖 凝灰岩A接合資料石器実測圖(2)

採出 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
6	140 431	打面再生剥片	凝 灰 岩	5.0	3.0	0.75	8.6	
7	299	打面再生剥片	"	2.8	2.8	0.4	2.41	
8	198	打面再生剥片	"	3.45	2.25	0.5	3.3	
9	96	打面再生剥片	"	3.35	4.1	0.9	7.1	原石面残す。
10	325	打面再生剥片	"	4.7	4.6	1.1	15.6	
11	403、16 199、123	打面再生剥片	"	6.5	6.0	1.7	46.0	

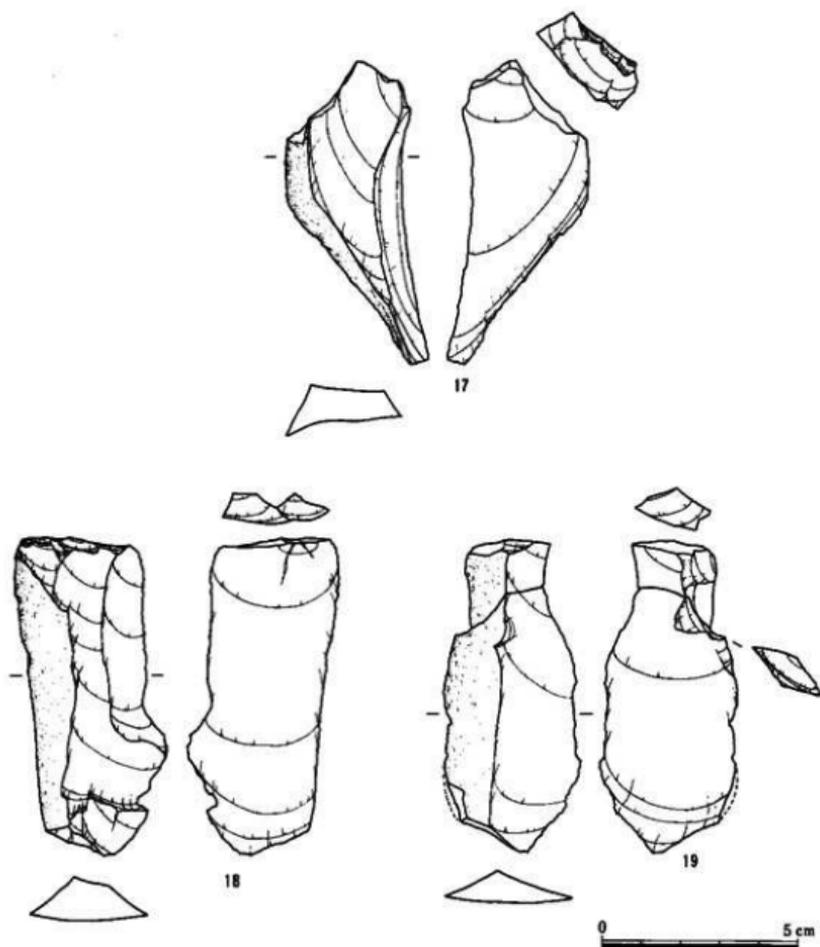
第4表 凝灰岩A接合資料石器表(2)



第12図 凝灰岩A接合資料石器実測(3)

邦国 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
12	311 133	剥 片	凝 灰 岩	7.7	3.4	1.3	23.0	原石面残す。
13	335	剥 片	"	10.9	5.1	1.3	51.9	原石面残す。
14	232	剥 片	"	7.55	6.7	2.0	65.1	原石面残す。
15	405	剥 片	"	1.9	2.15	0.9	2.4	原石面残す。
16	423	剥 片	"	5.8	3.4	1.3	20.3	原石面残す。

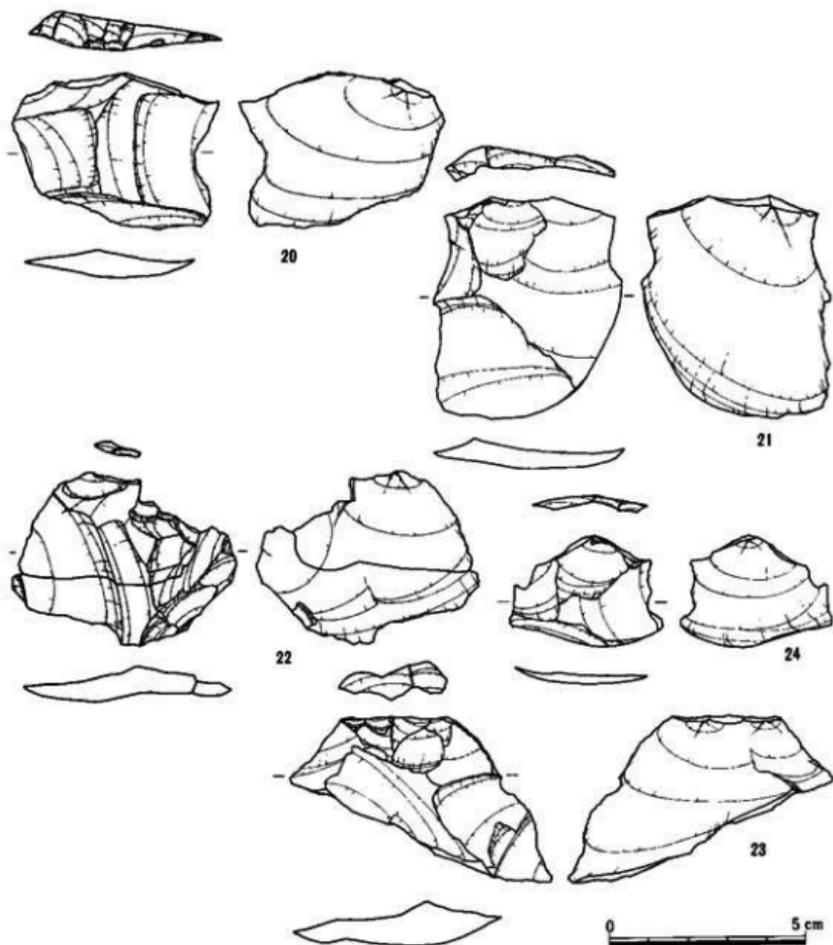
第5表 凝灰岩A接合資料石器表(3)



第13図 凝灰岩A接合資料石器実測図(4)

標 本 番 号	遺物番号	器	種	石	質	計 測 値				備 考
						長(m)	幅(m)	厚(m)	重量(g)	
17	250	剥	片	凝	6.0	6.0	0.7	33.8	原石面残寸。	
18	246	剥	片	"	8.0	4.35	1.25	33.8	原石面残寸。	
19	42 278	剥	片	"	7.9	3.5	1.25	23.8	原石面残寸。	

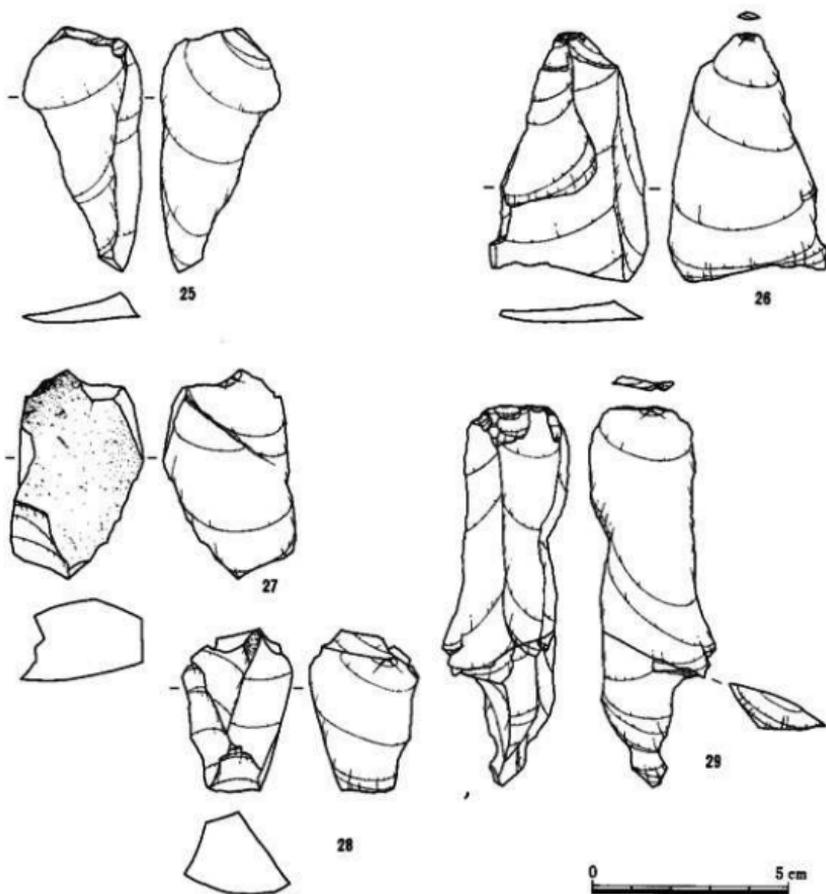
第 6 表 凝灰岩A接合資料石器表(4)



第14圖 凝灰岩A接合資料石器実測圖(5)

標圖 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
20	249	打面再生剥片	凝灰岩	5.15	5.2	1.05	16.9	
21	313	打面再生剥片	"	5.5	5.9	0.8	22.1	
22	185 421	打面再生剥片	"	4.4	5.7	1.0	16.0	
23	316	打面再生剥片	"	4.1	6.8	1.3	19.7	
24	286	打面再生剥片	"	2.9	3.9	0.45	5.9	

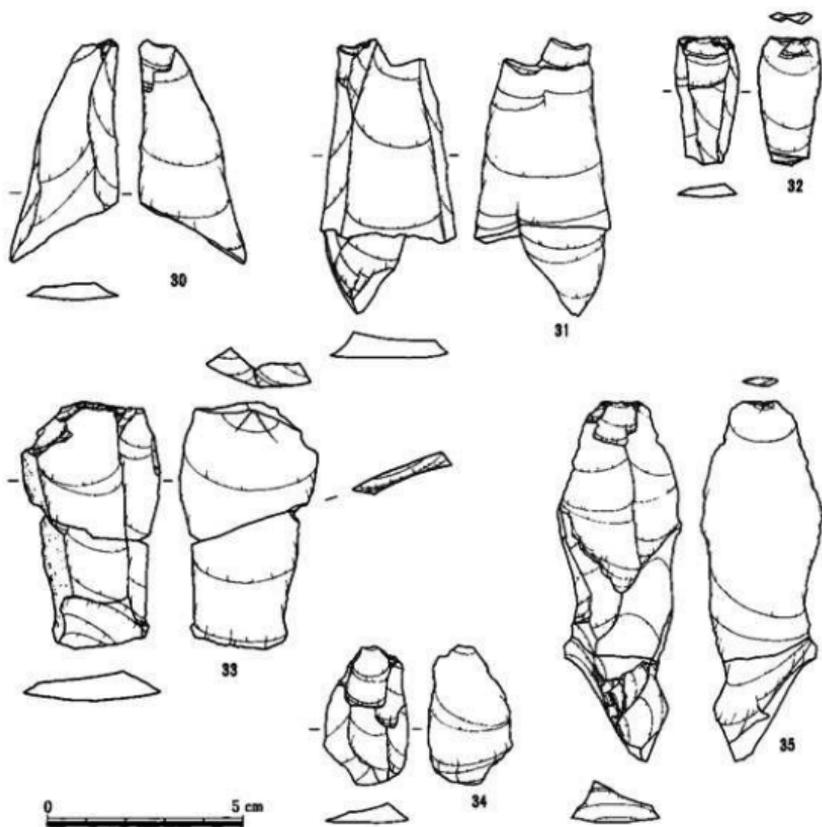
第7表 凝灰岩A接合資料石器表(5)



第15図 凝灰岩A接合資料石器実測図(6)

挿図 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
25	422	剥 片	凝 灰 岩	6.5	3.0	0.9	11.2	
26	270	剥 片	"	6.45	4.05	0.65	14.7	
27	290	剥 片	"	5.0	3.5	2.1	31.9	原石面残す。
28	132	剥 片	"	4.1	2.65	2.4	25.5	原石面残す。
29	<sup>93</sup> 424	剥 片	"	9.65	2.9	1.1	23.7	

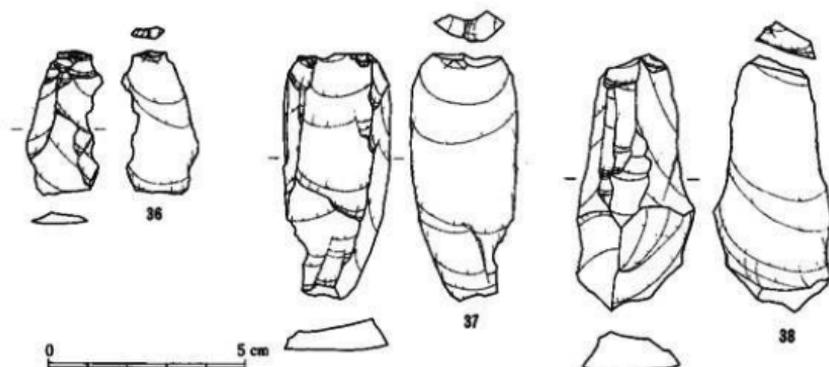
第8表 凝灰岩A接合資料石器表(6)



第16圖 凝灰岩A接合資料石器実測図(7)

挿圖 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
30	139	剥 片	凝 灰 岩	6.15	2.45	0.75	7.7	
31	281 231	剥 片	"	7.0	3.5	0.55	13.8	
32	64	剥 片	"	3.3	1.6	0.4	2.4	
33	205 97	剥 片	"	6.25	3.6	1.0	21.3	原石面残す。
34	122	剥 片	"	3.6	2.25	0.5	3.3	
35	242 113	剥 片	"	9.2	3.1	1.4	29.2	

第9表 凝灰岩A接合資料石器表(7)



第17図 凝灰岩A接合資料石器実測図(8)

神岡 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
36	60	剥	片 凝灰岩	3.7	1.9	0.3	2.2	
37	171	剥	片 "	6.35	2.75	0.9	16.8	
38	333	剥	片 "	6.6	3.1	1.7	26.2	

第10表 凝灰岩A接合資料石器表(8)

片に大別でき、各々の母岩に対する部位も同じである。ただ一つ凝灰岩Aと異なる点は、凝灰岩Aでは打面再生は多方向から頻繁におこなわれているが、頁岩では打点の方向が同じであり1・2回程度の剥離で打面を作出しているため、主要な剥片の打面はすべて平坦であることがあげられる。

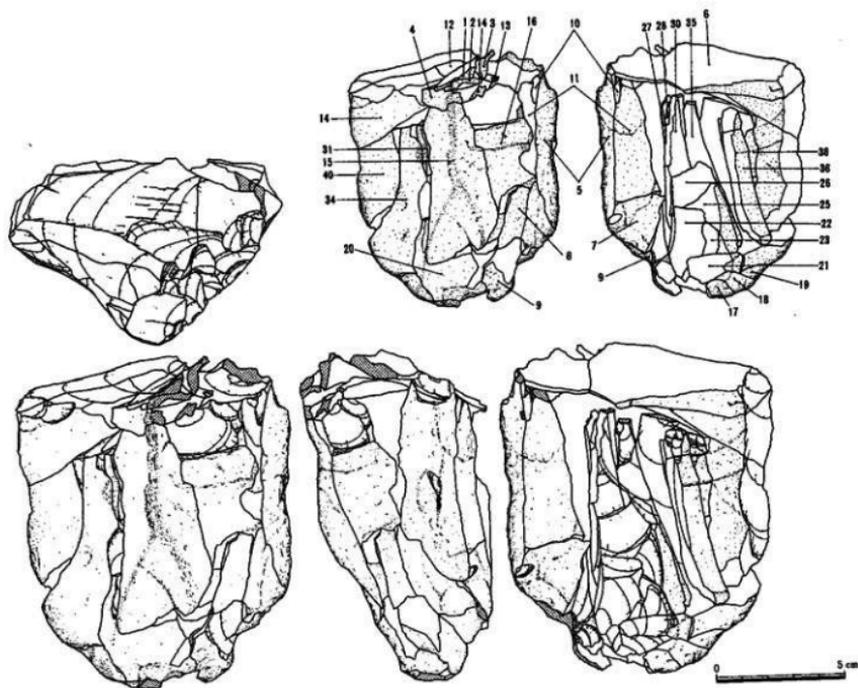
石核は逆円錐形を呈す。外周の約程に原石面を残し、下部からの石核整形剥離で剥片剥離作業を終了している。

### 3. 凝灰岩B (第26～29図, 第17・18表, 図版11)

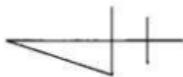
接合した剥片類は9点で、凝灰岩Bの総点数の11.8%を、重量では48.6%を占める。

接合した点数が少ないため、母岩の形状、大きさなどは想定できないが、技術的には凝灰岩A、頁岩と変わりがないといえる。打面再生剥片は接合していないが、現状では少なくとも2回は打面を再生しているのが確認できる。打面は平坦で、頁岩と同じく1・2回の剥離で打面を作出している。石核整形は頻繁におこなわれており、下方からの細かい石核整形剥離痕が多く残っている。

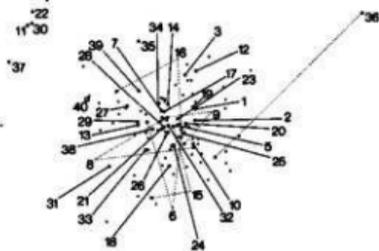
石核は扁平な四角錐状を呈す。背面には原石面を残し、剥片剥離工程最終段階の石核整形剥離痕が見られる。



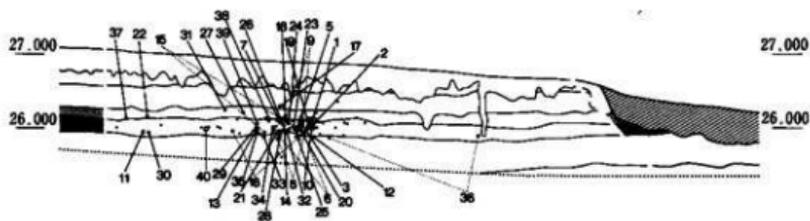
第16图 真若接合状螋蟊类图



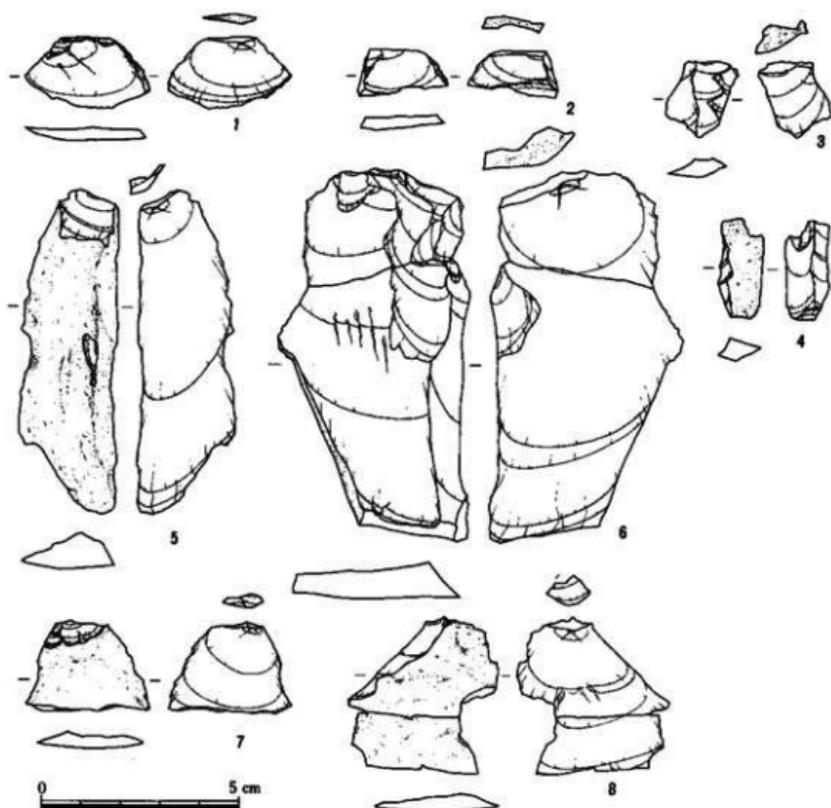
E5/E6  
D5/D6



D5/D6  
C5/C6



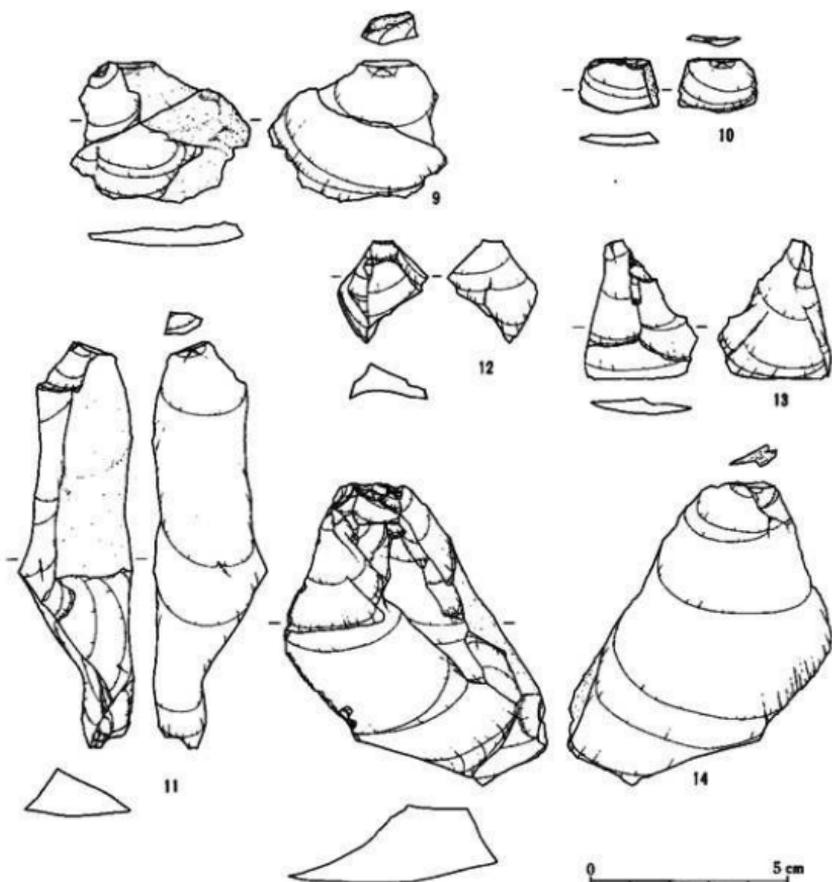
第19圖 母岩別遺物分布圖(頁岩)



第20図 頁岩接合資料石器実測図(1)

押図 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
1	410	打面再生剥片	頁 岩	1.85	3.15	0.4	2.5	原石面を打面とする。
2	266	打面再生剥片	〃	2.25	1.5	0.3	1.0	原石面を打面とする。
3	213	打面再生剥片	〃	2.0	1.6	0.5	1.4	原石面を打面とする。
4	注 記 無	打面再生剥片	〃	2.5	1.2	0.7	1.8	原石面を残す。
5	324	剥 片	〃	7.5	4.35	0.95	17.8	原石面残す。
6	267 332	打面再生剥片	〃	9.5	4.95	1.2	52.8	
7	222	剥 片	〃	2.6	3.05	0.6	3.4	原石面残す。
8	144 435	剥 片	〃	3.7	3.85	0.75	6.2	原石面残す。

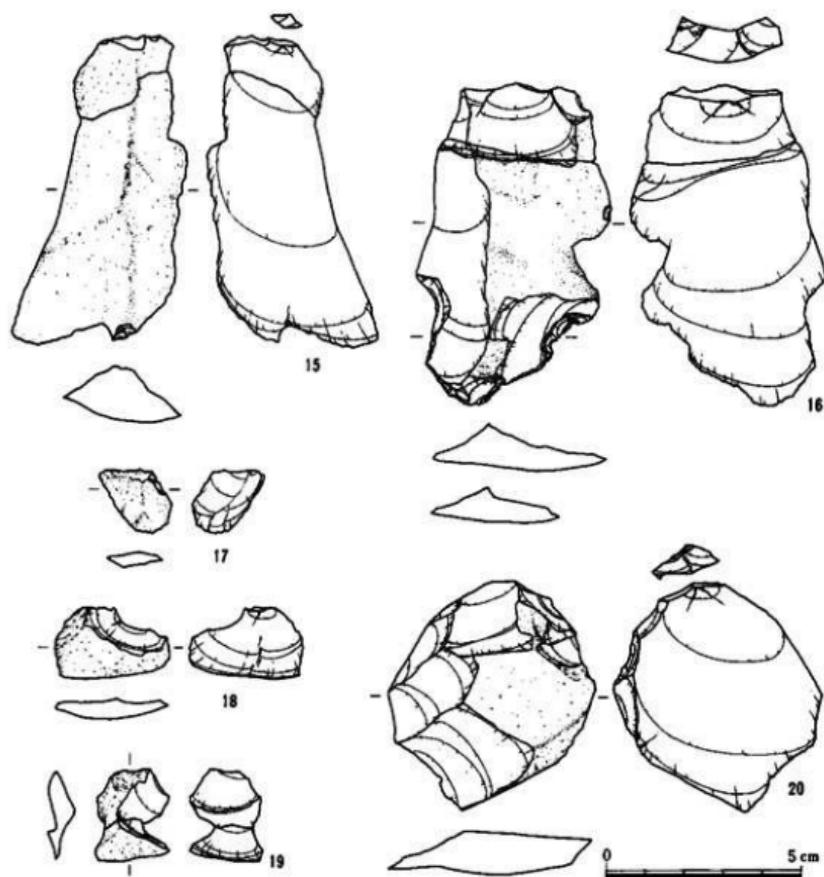
第11表 頁岩接合資料石器表(1)



第21圖 頁岩接合資料石器実測図(2)

標 記 番 号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
9	143 225	剥 片	頁 岩	3.6	4.7	0.9	10.4	原石面残す。
10	39	剥 片	"	1.9	2.0	0.3	1.2	
11	275	剥 片	"	9.5	5.3	1.5	27.6	原石面残す。
12	215	打面再生剥片	"	2.35	1.9	0.9	3.3	
13	178	打面再生剥片	"	3.7	3.0	0.55	3.8	
14	407	打面再生剥片	"	7.6	6.8	2.8	93.6	原石面残す。側縁に使用痕

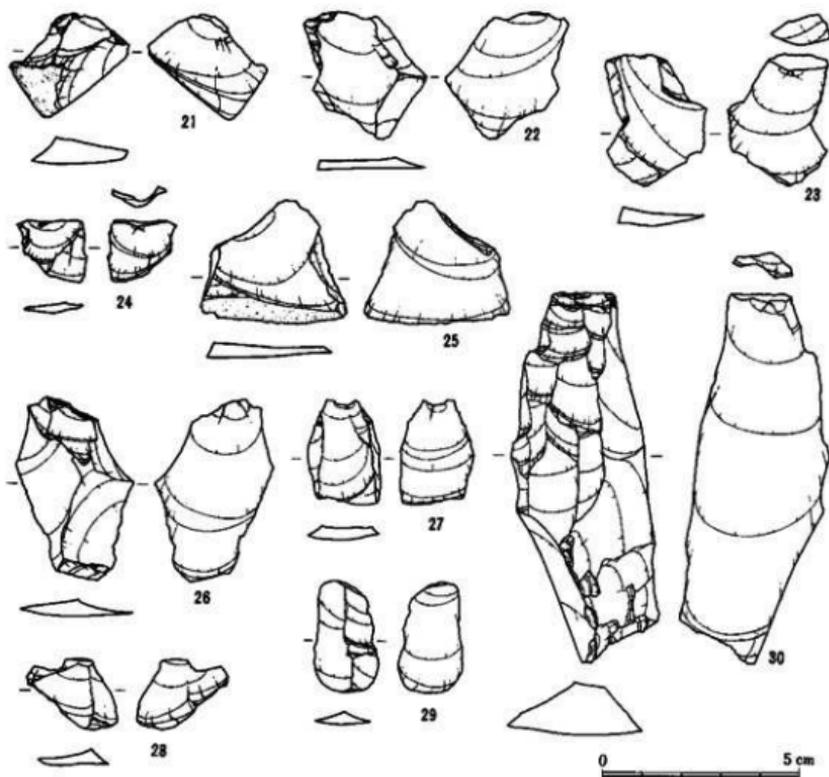
第12表 頁岩接合資料石器表(2)



第22図 頁岩接合資料石器実測図(3)

挿図 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(㎝)	幅(㎝)	厚(㎝)	重量(g)	
15	40 409	剥 片	頁 岩	9.2	4.25	1.5	32.0	原石面残寸。
16	188 401	削 片	〃	7.7	4.5	0.9	10.4	原石面残寸。
17	44	砕 片	〃	1.6	1.8	0.45	1.0	原石面残寸。
18	33	剥 片	〃	1.85	3.0	0.55	3.0	原石面残寸。
19	210	剥 片	〃	2.3	1.9	0.6	1.2	原石面残寸。
20	322	剥 片	〃	5.9	5.2	1.3	35.2	原石面残寸。

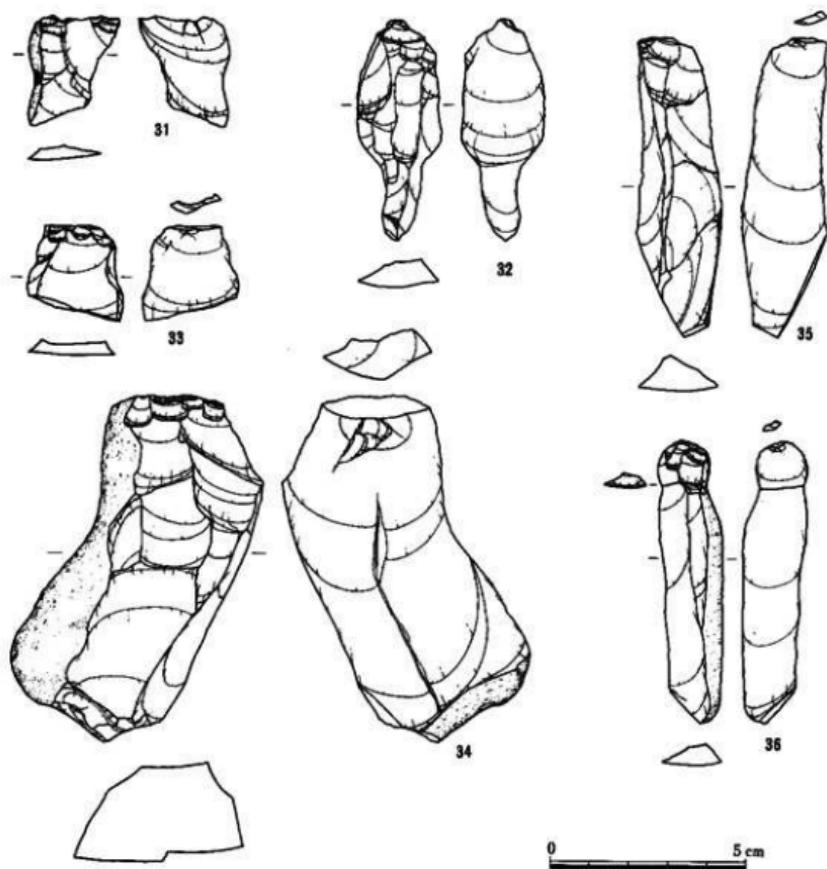
第13表 頁岩接合資料石器表(8)



第23図 頁岩接合資料石器実測図(4)

標 号	遺物 番号	器 種	石 質	計 測 値			備 考	
				長(㎝)	幅(㎝)	厚(㎝)		重量(g)
21	327	剥片	頁岩	1.95	2.9	0.95	5.1	原石面残す。
22	83	剥片	〃	3.1	3.3	0.4	2.7	
23	279	剥片	〃	3.4	2.55	0.6	3.9	
24	142	剥片	〃	1.6	1.8	0.3	0.8	
25	425	剥片	〃	3.2	3.7	0.5	4.8	原石面残す。
26	269	剥片	〃	4.7	2.95	0.55	4.9	
27	114	剥片	〃	2.7	1.8	0.3	1.7	
28	436	剥片	〃	1.8	2.3	0.45	1.2	
29	287	剥片	〃	2.25	1.9	0.35	1.7	
30	240	剥片	〃	9.4	3.7	1.8	44.4	

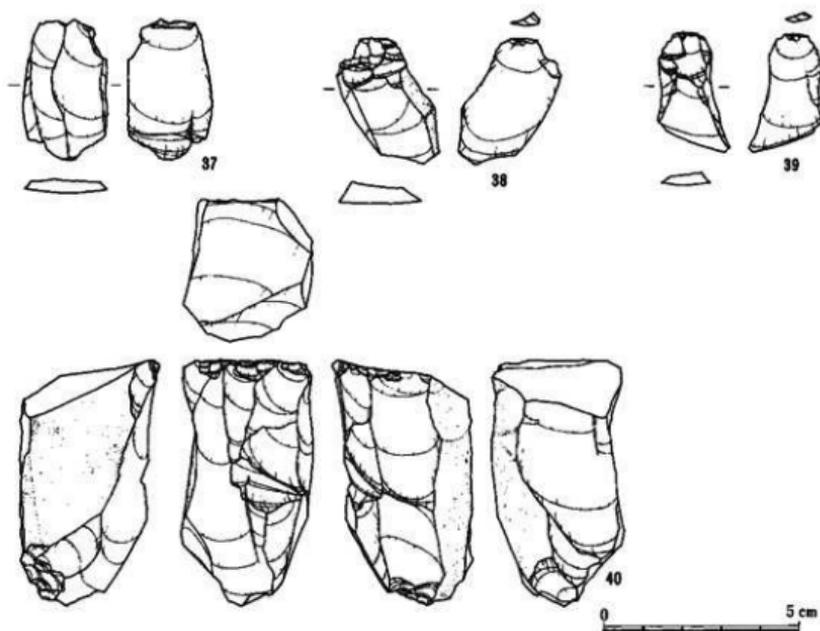
第14表 頁岩接合資料石器表(4)



第24図 頁岩接合資料石器実測図(5)

採回 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
31	71	剥	頁 岩	2.9	2.3	0.4	2.5	原石面残す。
32	432	剥	"	5.75	2.2	0.8	8.24	
33	338	剥	"	2.4	2.4	0.4	2.6	
34	402	剥	"	8.9	6.1	2.8	135.0	原石面残す。
35	164	剥	"	7.8	2.3	1.0	17.4	
36	181 11	剥	"	7.45	1.75	0.7	8.2	原石面残す。

第15表 頁岩接合資料石器表(5)



第25図 頁岩接合資料石器実測図(6)

標 本 番 号	遺物番号	器	種	石	質	計 測 値				備 考
						長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
37	82	剥	片	頁	岩	3.6	2.2	0.5	3.6	
38	224	剥	片	〃	〃	3.25	2.6	0.5	4.3	原石面残す。
39	230	剥	片	〃	〃	3.1	1.85	0.4	1.7	
40	168	石	核	〃	〃	5.5	3.8	3.5	91.5	原石面残す。

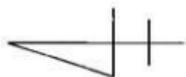
第16表 頁岩接合資料石器表(6)

#### 4. 珪質頁岩 (第30~34図, 第19~21表, 図版11・12)

直方体を呈す礫を母岩とする。ほぼ全周に原石面がみられるまでに復元でき、長さ6.5cm、幅7.5cm、厚み3.7cmを測る。

接合した剥片類は20点で、珪質頁岩の総点数の45%を、重量では83.5%を占め、重量比からみると主要な剥片はほぼ接合したことがわかる。

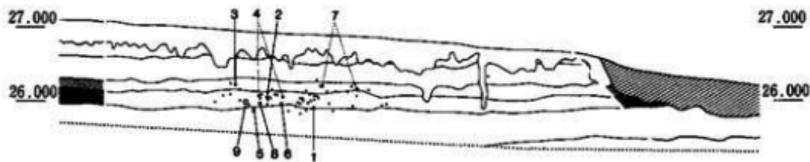
剥片の種類は主要な剥片がほとんどで、第31図4のような石核整形剥片が若干見受けられるが、打面再生剥片は全くみられない。これは母岩の平坦な原石面を打面としているためで、この打面は剥片剥離工程の最初から最後まで維持されている。



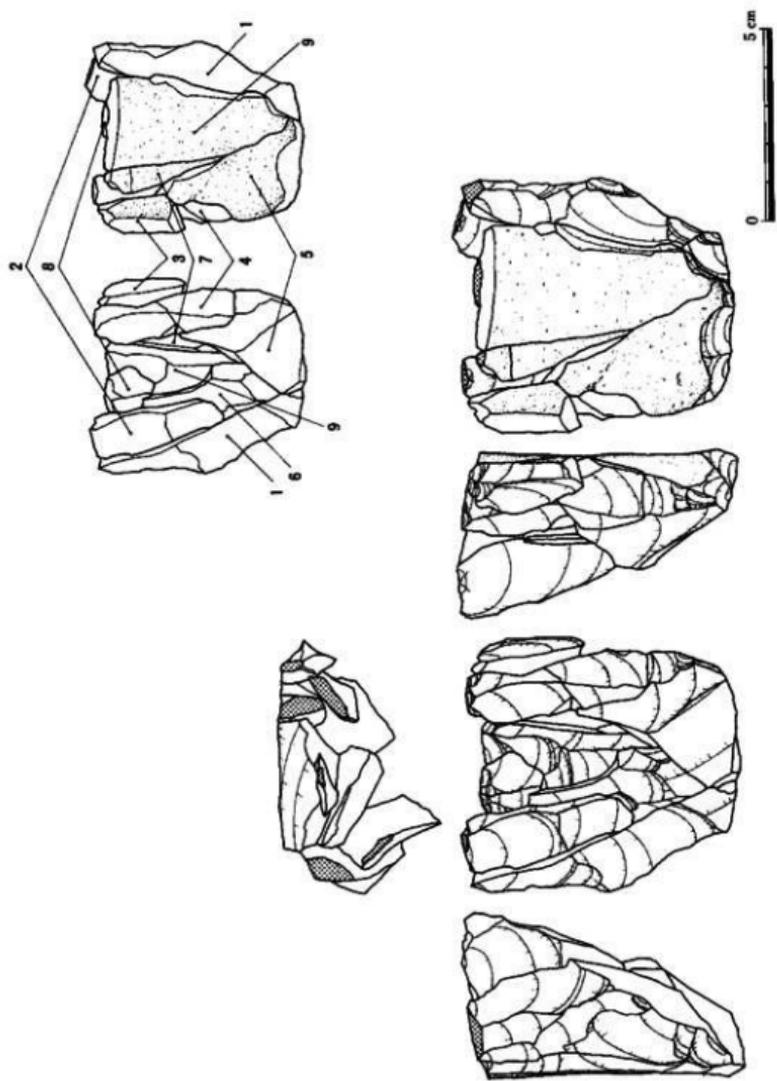
E5/E6  
D5/D6



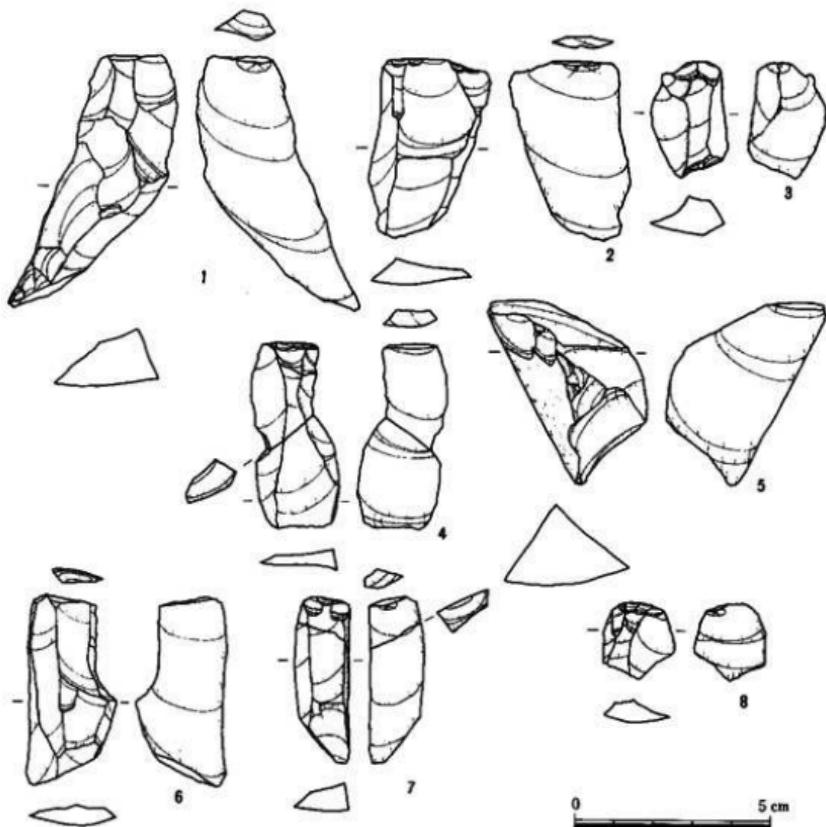
D5/D6  
C5/C6



第26图 母岩別遺物分布图(凝灰岩B)



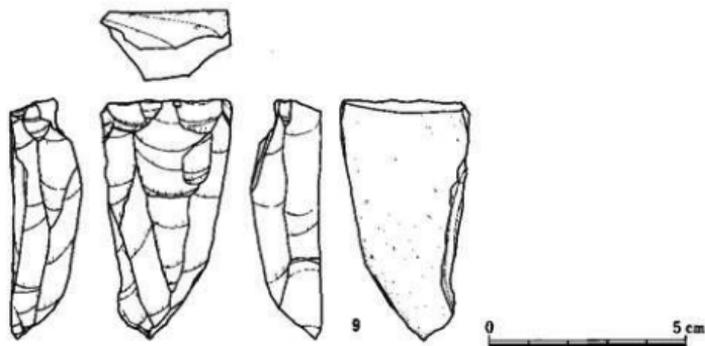
第27图 凝灰岩B接合状态实测图



第28図 凝灰岩B接合資料石器実測図(1)

挿図 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(㎝)	幅(㎝)	厚(㎝)	重量(g)	
1	428	剥	凝 灰 岩	6.65	4.1	1.5	24.1	
2	227	剥	"	4.7	3.1	0.75	8.0	
3	59	剥	"	2.7	1.9	1.0	6.2	
4	228 254	剥	"	5.65	2.1	0.9	9.3	
5	339	剥	"	5.2	2.9	2.5	33.3	原石面残す。
6	280	剥	"	4.8	2.4	0.7	7.3	
7	91 101	剥	"	4.8	1.4	0.8	5.6	原石面残す。
8	253	剥	"	1.9	1.9	0.6	2.2	

第17表 凝灰岩B接合資料石器表(1)



第29図 凝灰岩B接合資料石器実測図(2)

挿図 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
9	172	剥 片	凝 灰 岩	6.1	3.2	1.7	44.6	原石面残す。

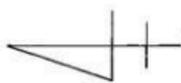
第18表 凝灰岩B接合資料石器表(2)

接合資料実測図の背面にみられる右側面からの剥離は、最初打面を作出するために第32図1・2の剥片を除去し、次いで主要な剥片を搾取しようとした剥離痕と思われる。

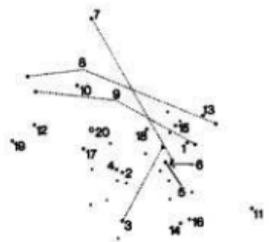
以上、Aブロックから出土した各々の接合資料について説明した。

凝灰岩A、凝灰岩B、頁岩、珪質頁岩のそれぞれの接合資料は、母岩の大小により若干の差異は認められるものの、剥片剥離技術はまったく同一のものと考えてよいだろう。この剥片剥離により搾取した縦長剥片を素材とし、基部または先端部に微細な調整を施したナイフ形石器を製作したのであろうことが推測される。しかしAブロックでの製品の出土は、基部調整のナイフ形石器2点を数えるのみであり、各石質の接合資料にも製品が伴わないため、単一打面より搾取した縦長剥片を素材とし、どのような形状の製品が製作されたかは推測の段階を越えられない。

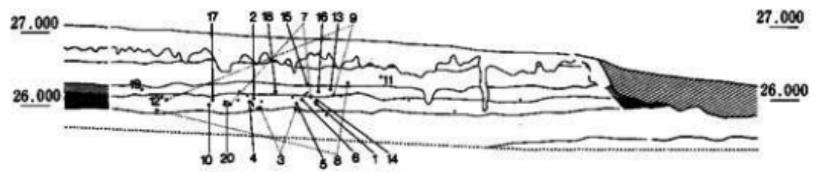
各々の接合資料により、Aブロックでは、短い期間に剥片剥離作業が行われたことが推測でき、広義の意味では石器製作跡であることは間違いないといえる。しかし前述したように接合資料に伴う製品が出土しておらず、また接合資料でも空白の箇所があるため、石器の素材となる剥片が、他の場所に持ち去られた可能性が充分考えられる。このことからAブロックの性格としては、石器製作跡よりも石器素材剥片を搾取した跡であると考えたほうが妥当かもしれない。



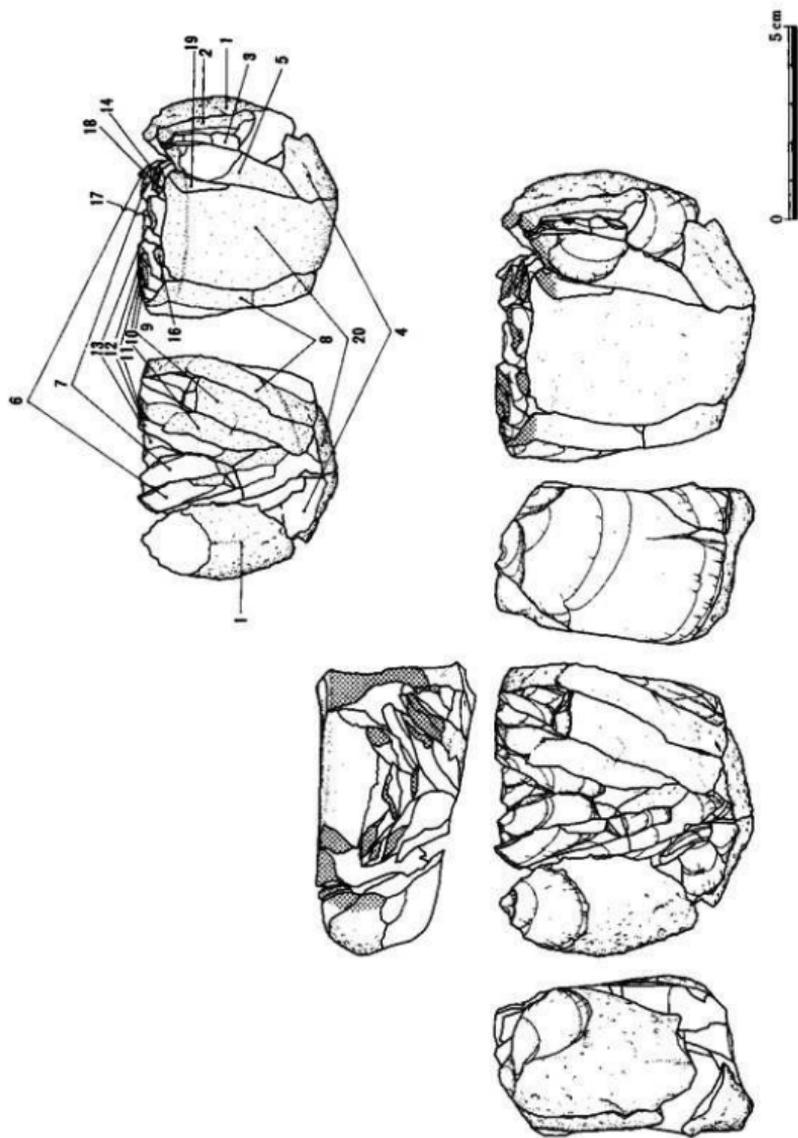
E5/E6  
D5/D6



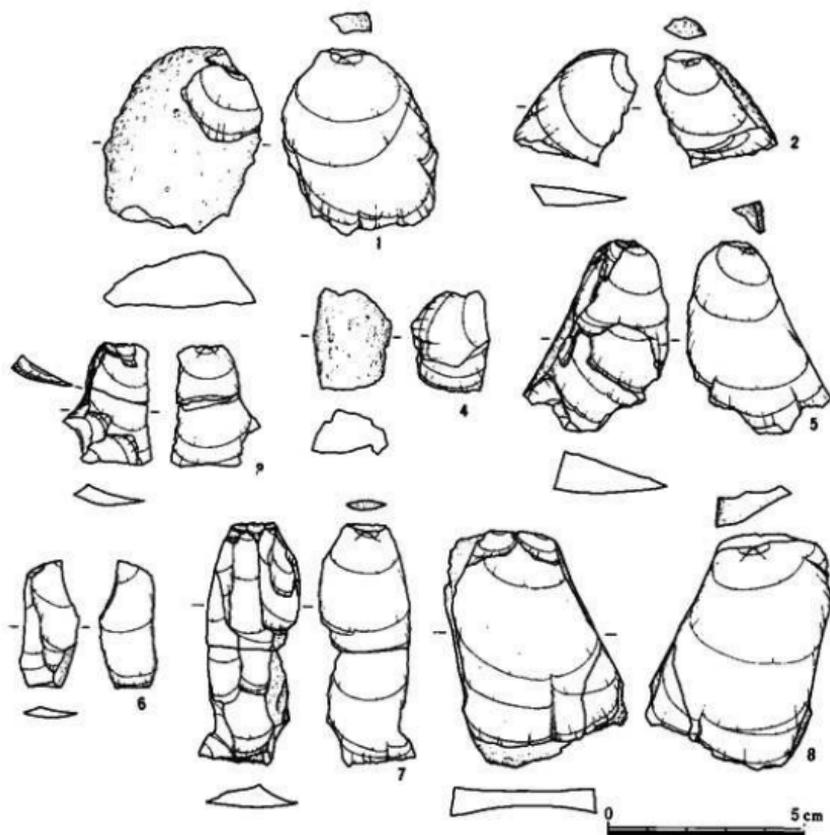
D5/D6  
C5/C6



第30图 母岩別遺物分布区 (珪質頁岩)



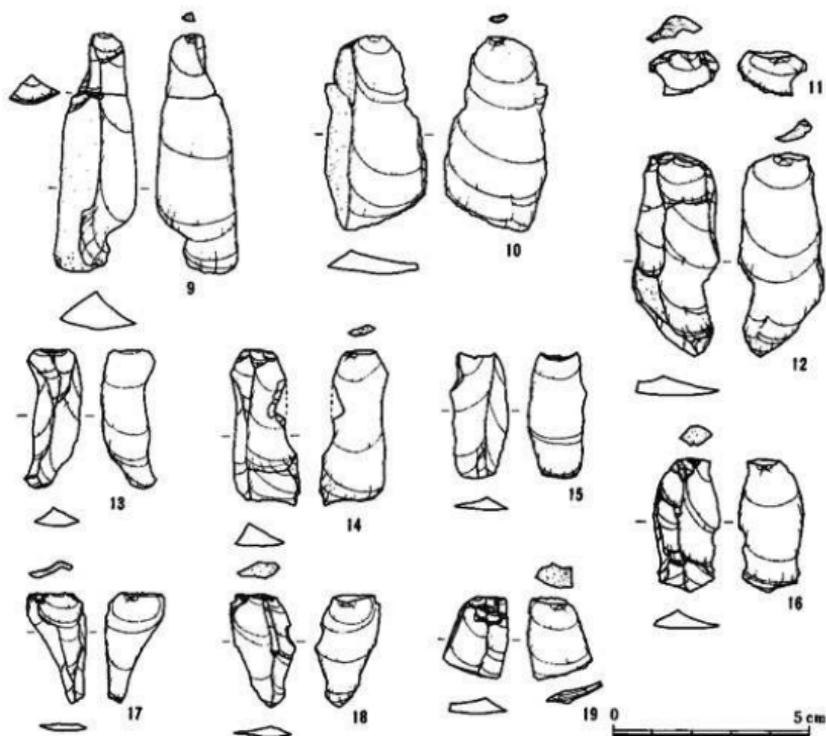
第31圖 珪質頁岩接合狀態實測圖



第32圖 珪質頁岩接合資料石器実測図(1)

採区 番号	遺物番号	器	種	石	質	計 測 値				備 考
						長(m)	幅(m)	厚(m)	重量(g)	
1	303	剥	片	珪	4.85	4.0	1.6	27.6	原石面残寸。	
2	65	剥	片	珪	3.2	2.4	0.7	4.8	原石面残寸。	
3	426 179	剥	片	珪	4.75	2.4	1.25	7.8		
4	174	剥	片	珪	2.8	2.0	1.25	6.1	原石面残寸。	
5	328	剥	片	珪	5.0	3.45	0.7	15.1		
6	223	剥	片	珪	3.3	1.5	0.35	1.3	打面欠。原石面残寸。	
7	235 201	剥	片	珪	6.55	2.4	0.6	9.6	原石面残寸。	
8	336 151	剥	片	珪	8.4	3.85	0.9	28.6	原石面残寸。	

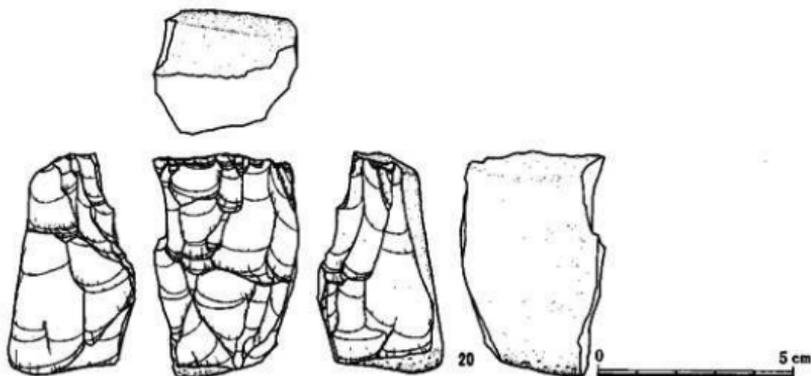
第19表 珪質頁岩接合資料石器表(1)



第33图 珉質頁岩接合資料石器実測図(2)

挿図 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(㎝)	幅(㎝)	厚(㎝)	重量(g)	
9	320 138	剥 片	珉質頁岩	6.35	2.05	1.1	10.8	原石面残寸。
10	80	剥 片	"	5.1	2.6	0.6	6.7	原石面残寸。
11	19	剥 片	"	1.1	1.75	0.45	0.5	原石面残寸。
12	78	剥 片	"	5.2	2.2	0.7	6.8	原石面残寸。
13	28	剥 片	"	3.55	1.45	0.5	1.9	
14	157	剥 片	"	4.0	1.8	0.55	3.6	
15	46	剥 片	"	3.2	1.5	0.4	1.7	
16	105	剥 片	"	3.4	1.7	0.6	3.0	
17	74	剥 片	"	2.8	1.5	0.2	0.7	
18	94	剥 片	"	2.85	1.65	0.3	1.3	
19	79	剥 片	"	2.1	1.65	0.5	1.9	原石面残寸。

第20表 珉質頁岩接合資料石器表(2)



第34図 珪質頁岩接合資料石器実測図(3)

標図 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値			備 考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)		重量(g)
20	167	石 核	珪質頁岩	5.8	3.7	3.2	78.3	原石面残す。

第21表 珪質頁岩接合資料石器表(3)

石材	器種	ナイフ	尖頭器	石 錐	鏟 器	刮 器	U- フレイク	石 芽	削 片	剥 片	石 核	石 片	計
		数量	数量	数量	数量	数量	数量	数量	数量	数量	数量	数量	数量
縞状岩A	数量	1	-	-	-	-	-	3	-	134	42	-	180
	%	(0.6%)	-	-	-	-	-	(1.7%)	-	(74.4%)	(23.3%)	-	43.6%
縞状岩B	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	46	20	1	76
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	(60.5%)	(26.2%)	(1.3%)	38.4%
頁 岩	数量	-	-	-	1	-	1	4	-	75	33	1	100
	%	-	-	-	(0.9%)	-	(0.9%)	(3.8%)	-	(75.5%)	(32.0%)	(0.9%)	25.4%
珪質頁岩 A	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	37	6	1	44
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	(84%)	(13.7%)	(2.3%)	30.7%
珪質頁岩 B	数量	-	-	-	-	-	1	-	-	2	-	-	3
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.7%
珪質頁岩 C	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.2%
安山岩	数量	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.5%
馬鞍山石	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	2
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.5%
計	数量	2	-	-	-	2	2	7	-	207	100	2	413
	%	0.5%	-	-	-	0.5%	0.5%	1.7%	-	71.9%	24.2%	0.7%	100%

第22表 Aブロック母岩別資料石器組成表

## 2. Bブロック (第35図, 図版2)

BブロックはAブロックの北東にその分布がみられ、両ブロック間の距離は4mと極めて近接した位置にある。

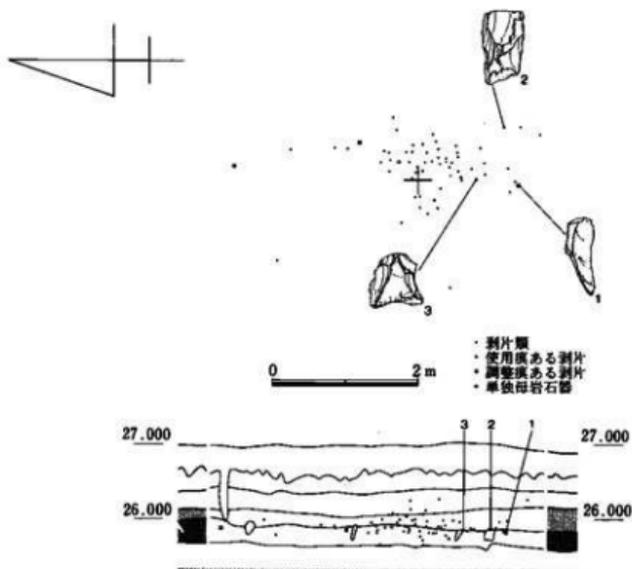
石器の出土層位は、Ⅵ層からⅨ層まで約0.5mとかなりのレベル差があるが、大半はⅨ層中に多く分布する。Aブロックと比較するとややBブロックの方が上部に分布する感があるが、地形の傾斜を考えるとBブロックもAブロックと同様、Ⅸ層中位に分布するものと思われる。

ブロックを構成する石質は、安山岩がもっとも多く、Bブロック出土石器点数69点のうち61点で88.4%を占め、良好な接合資料が確認された。この接合資料はAブロックで出土している接合資料と技術的にまったく同じものである。

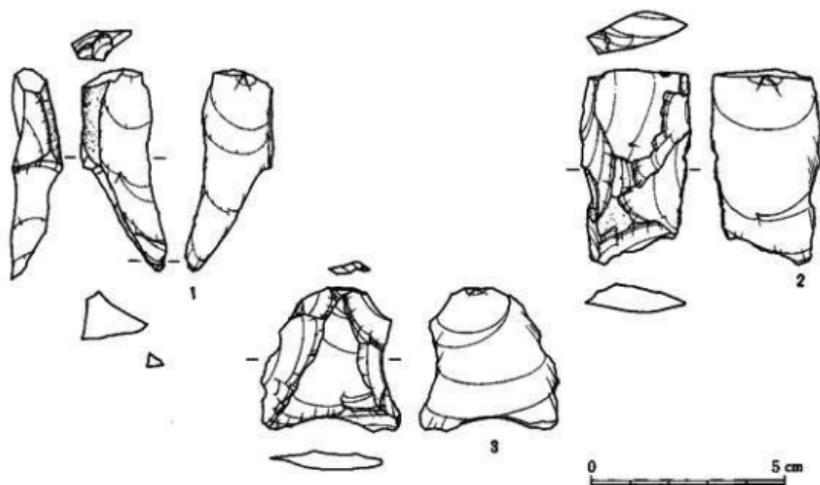
安山岩の他に単独の石質の剥片が若干出土している。このうち凝灰岩A、黒曜石はAブロックで出土しているものと特徴が良く似ており、同一母岩と思われるが、接合関係は確認できなかった。

Bブロックの石器分布の様子は、長径5m、短径2mで長軸は磁北を向いている。分布範囲の中にやや散布している感があり、特に部分的に密に分布している箇所はみられない。

ブロックの性格は、石質、技術基盤、層位などAブロックの性格と非常に良く似ており、位置的にも近接しているため、同一のブロックとしては離があるが、時期的、技術的に括れるものと思われる。



第35図 Bブロック遺物分布図



第36図 Bブロック出土石器実測図

採図 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
1	59	調整痕ある剥片	凝 灰 岩	5.3	2.25	1.15	8.9	原石面残す。剥片末端部に調整。
2	36	使用痕ある剥片	黒 曜 石	5.0	2.8	0.9	12.8	側縁部に使用痕。
3	58	剥 片	黒 曜 石	3.6	3.6	0.75	7.8	

第23表 Bブロック出土石器表

### Bブロック出土の石器及び単独母岩石器 (第36図, 第23表, 図版13)

Bブロックからは定形的な石器の出土はみられなかった。わずかに調整痕の認められる剥片と使用痕の認められる剥片が1点ずつ確認されたのみである。Bブロックから出土した総点数の大半を占める安山岩には、製品らしいものはまったく含まれていない。

以下、若干の説明を記述しておく。

1は調整痕の認められる剥片である。凝灰岩製の剥片の末端部に側縁から微細な調整を施したもので、ほかの部位には調整はみられない。接合関係は認められないが、Aブロックで出土している凝灰岩Aと同じ石質のものである。

2は使用痕の認められる剥片である。剥片の側縁に使用による細かい剥落痕がみられる。黒曜石製の剥片である。

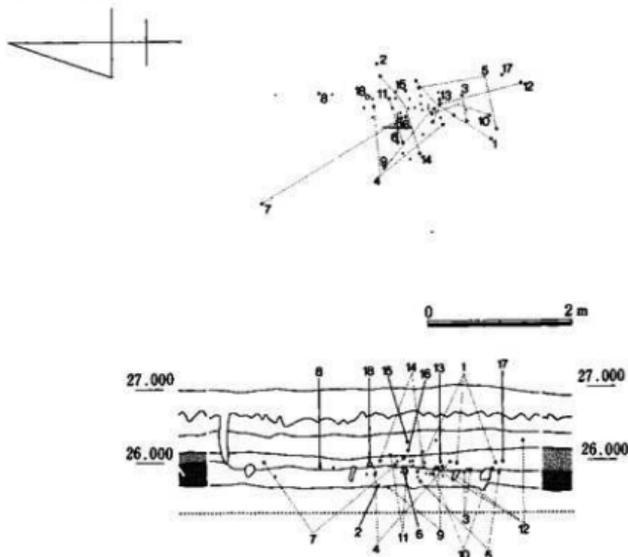
3は黒曜石製の剥片である。2・3の素材である黒曜石はAブロックより出土している黒曜石と特徴は同じであり、同一母岩と思われるが、これも接合関係は認められなかった。

## 接合資料 (第37~41図, 第25~27表, 図版13・14)

Bブロックでは、安山岩製の接合資料が確認された。先のAブロックで説明した各接合資料と、剥片剥離技術において共通点が多い。

接合した剥片類は18点で、出土した安山岩の総点数の34%を、重量では87.6%を占める。

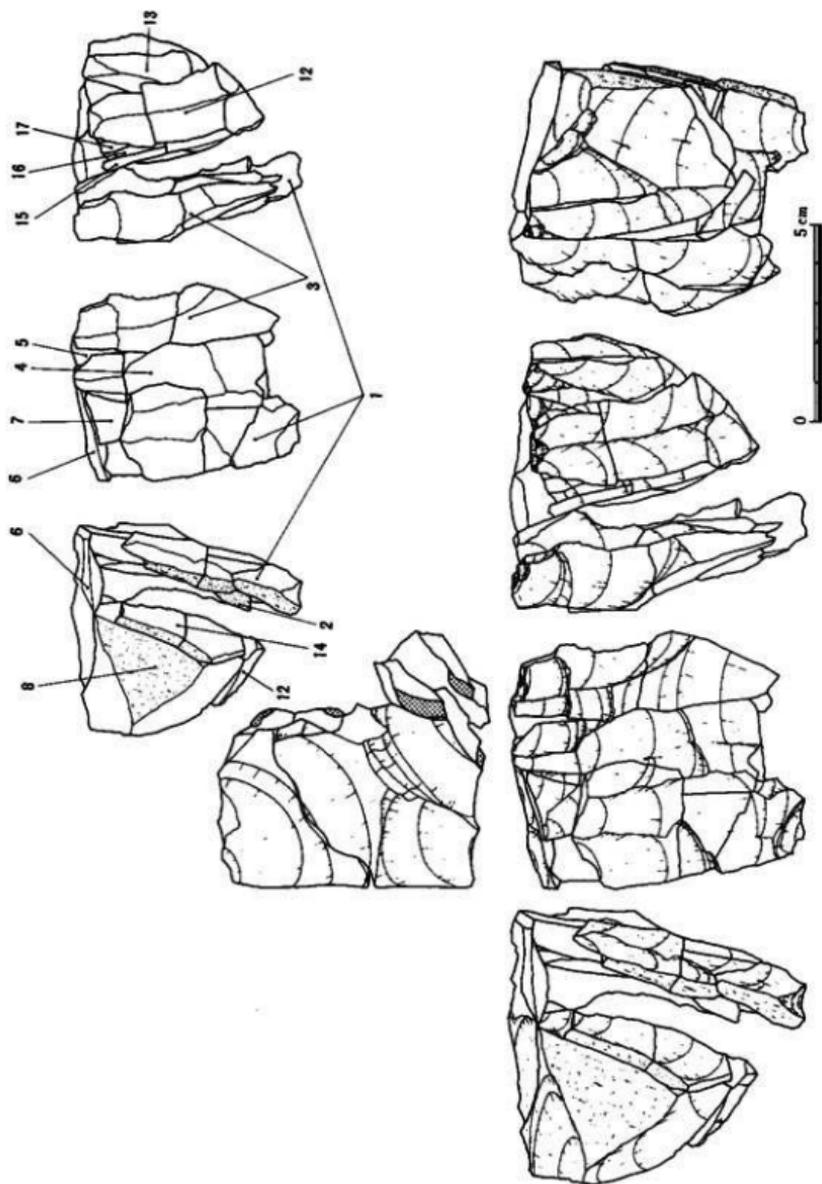
剥片剥離工程初期の母岩の形状は現状からはわからないが、打面を再生しながら主要な剥片を搾取し、石核整形剥片は接合しなかったが、石核にその剥離痕が確認できる。打面再生はAブロックで確認されている凝灰岩Aのように、頻繁にはないが多方向から数回にわたって行



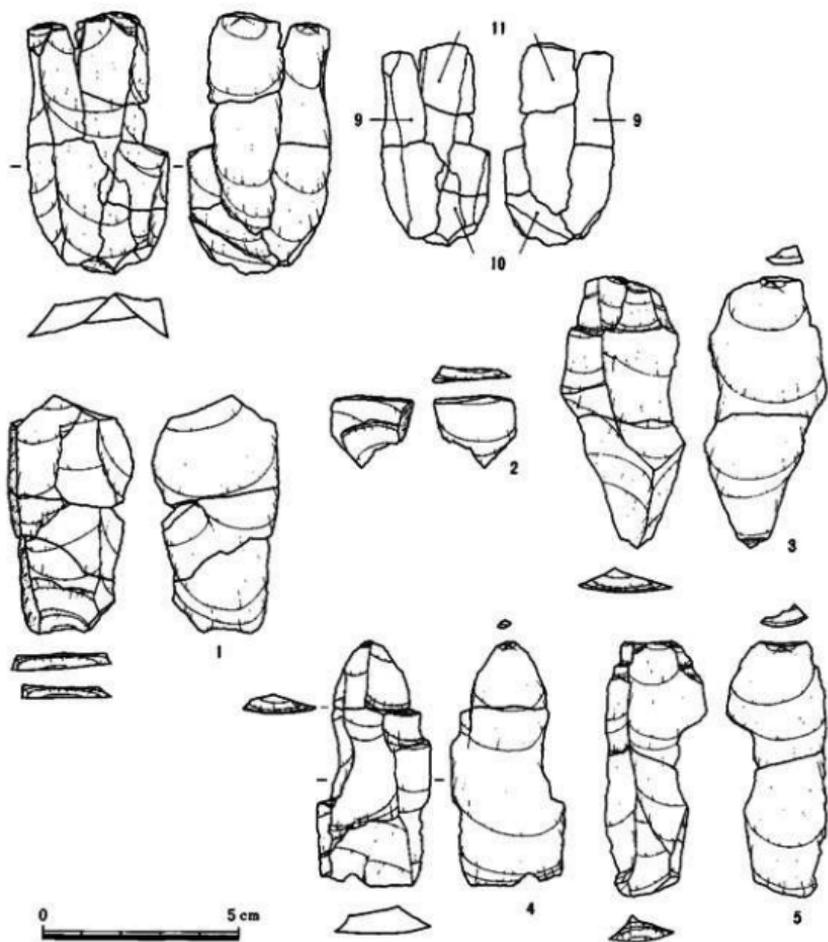
第37図 母岩別遺物分布図(安山岩)

石材	器種	ナイフ 砂心器	石鏃	石錐	石鏃	石鏃	P=A P.A.A.P.	E フリップ	D フリップ	石片	剥片	剥片	剥片	石核	石核	石核	石核	計
安山岩	数	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	45	15	1	-	-	-	61
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	73.6%	24.0%	1.7%	-	-	-	89.4%
黒曜石	数	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	4
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5.8%
比良頁岩B	数	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.5%
凝灰岩A	数	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	3
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.3%
計	数	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	49	17	1	-	-	-	69
	%	-	-	-	-	-	2.9%	-	-	-	-	71%	24.6%	1.5%	-	-	-	100%

第24表 Bブロック母岩別資料石器組成表



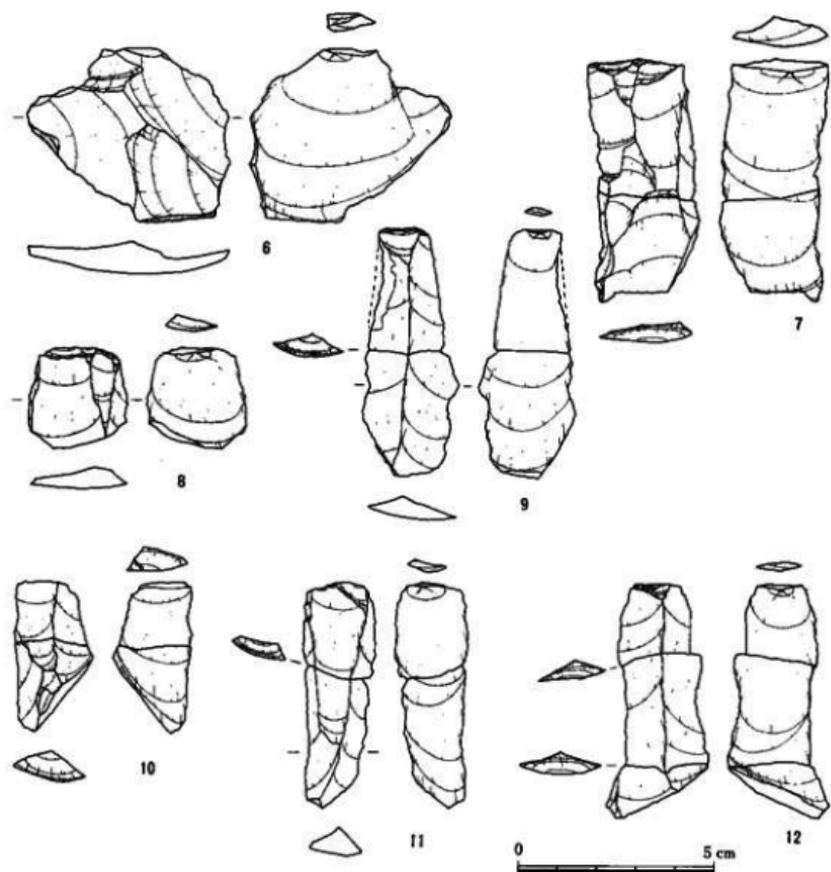
第38图 安山岩接合状态实例区



第39图 安山岩接合資料石器実測図(1)

插图 番号	遺物番号	器 種	石 質	測 値				備 考
				長(l)	幅(w)	厚(t)	重量(g)	
1	32, 22 28	剥 片	安山岩	7.25	3.2	0.6	12.7	原石面残寸。
2	64	剥 片	"	1.8	2.1	0.45	1.3	原石面残寸。
3	31 29	剥 片	"	7.25	4.0	0.95	13.6	
4	38 27	剥 片	"	6.4	2.9	0.7	11.4	
5	63 51	剥 片	"	7.0	2.6	0.8	10.1	

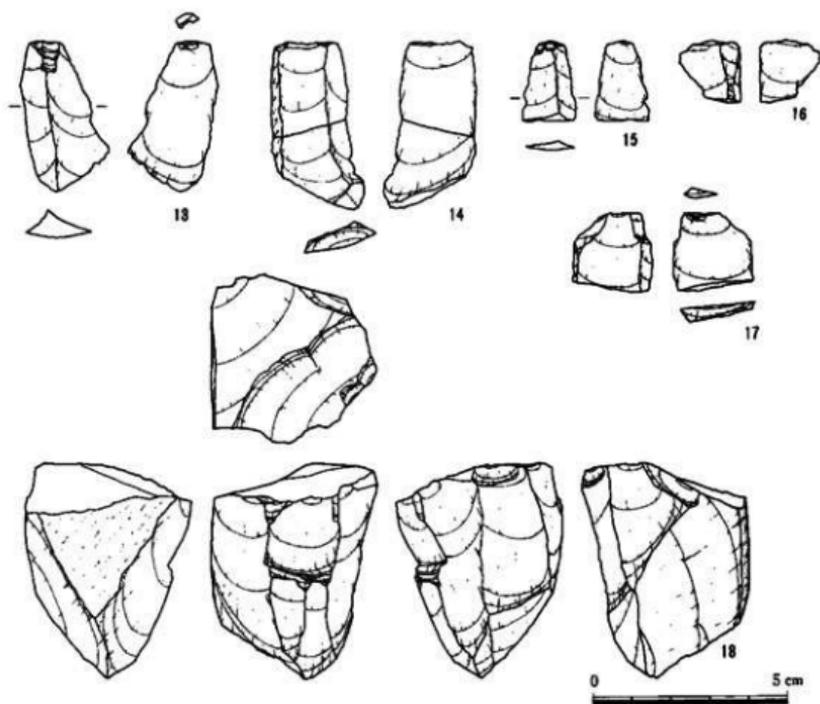
第23表 安山岩接合資料石器表(1)



第40圖 安山岩接合資料石器実測図(2)

挿圖 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(㎝)	幅(㎝)	厚(㎝)	重量(g)	
6	18	剥 片	安山岩	4.5	5.1	0.8	15.6	原石面積寸。
7	42 2	剥 片	"	6.55	2.6	0.95	14.6	
8	5	剥 片	"	2.5	2.5	0.65	4.2	
9	49 12	剥 片	"	6.55	2.5	0.8	9.9	
10	33 57	剥 片	"	4.35	2.0	1.2	8.0	
11	45 20	剥 片	"	6.1	1.9	0.75	6.3	
12	34、50 26	剥 片	"	7.6	2.55	0.65	8.0	

第26表 安山岩接合資料石器表(2)



第41図 安山岩接合資料石器実測図(3)

挿図 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(w)	幅(w)	厚(t)	重量(g)	
13	48	剥	片 安山岩	3.95	2.4	0.7	4.7	
14	<sup>8</sup> 14	剥	片 "	4.9	2.1	0.5	7.1	原石面残す。
15	21	剥	片 "	2.15	1.4	0.2	0.7	
16	19	剥	片 "	1.6	1.55	0.2	0.5	
17	35	剥	片 "	2.0	2.05	0.35	1.1	
18	9	剥	片 "	5.1	4.5	4.5	99.6	原石面残す。

第27表 安山岩接合資料石器表(9)

われており、このことから凝灰岩Aに近い技術的基盤をもったものといえるであろう。

挿図番号の9・10・11は剥片同士が接合したものである。正確な接合位置はわからないが、本文中の剥離の順番には支障ない。

### 第3章 小 結

#### 1. 仲ノ台遺跡出土接合資料の剥片剥離技術について

仲ノ台遺跡では今まで述べてきたように、A・B両ブロックから良好な接合資料が確認された。ここでは各接合資料をもとに、仲ノ台遺跡における剥片剥離技術について考えてみたいと思う。

仲ノ台遺跡では、凝灰岩A・B、頁岩、珪質頁岩、安山岩の各接合資料が確認されたが、いずれも石刃状の縦長剥片を搾取る目的で、剥片剥離作業をおこなっていたことがわかる。この主要な剥片を得るために、打面を再生するとともに、石核の形状を整える作業が一貫してみられる。下の図は凝灰岩A、頁岩、安山岩の剥片剥離工程を図化したものである。(第42図)

#### Aブロック 凝灰岩A

	1	2						3					
打 面 再 生		2 3 4 5 6							20 21 22 23 24				
		7 8 9 10 11											
主要な剥片搾取	1	12 13	18 19			25 26		29 30 31 32 33		34 35 36 37 38			
石 核 整 形		14 15 16 17							27 28				

#### Aブロック 頁岩

	1	2	3						
打 面 再 生	1 2 3 4	6	12		13		14		
主要な剥片搾取	5	10 11		15 16		27 28 29 30 31 32 33		34 35 36 37 38 39	
石 核 整 形	7 8 9		17 18 19 20 21		22 23 24 25 26				

#### Bブロック 安山岩

	1	2
打 面 再 生	6	
主要な剥片搾取	1 2 3 4 5	7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17
石 核 整 形		

第42図 仲ノ台遺跡出土石器剥片剥離工程模式図

最上段の数字は、打面を再生してから次の打面再生までを、一つの工程として表現したことを意味する。この図によると打面再生をおこない、打面を作出した後（図1段目）、主要な剥片を搾取し（図2段目）、石核を整形（図3段目）、さらに主要な剥片を搾取していることが見て取れると思う。ここでは凝灰岩A・B、頁岩、珪質頁岩、安山岩のうち、特に比較しやすい凝灰岩A、頁岩、安山岩に着目している。

事実記載での内容と重複する部分も多いと思うが、再確認の意味で改めて個々の接合資料の説明をしたいと思う。

凝灰岩Aは3工程により剥片剥離をおこなっている。第1工程では現状では主要な剥片を搾取しているのみであるが、打面再生が行われたあと搾取されたものと思われる。その後第2工程にはいり打面再生が為され、再生された打面より主要な剥片が搾取されるが、その間に一度石核整形がおこなわれている。第3工程にはいり、また多方向から打面再生がおこなわれ、第2工程と同じく主要な剥片を搾取→石核整形→主要な剥片の搾取、となる。

頁岩の工程は、凝灰岩Aの剥片剥離工程と同一であり、第1工程で、打面作出→主要な剥片の搾取、第2工程で、打面再生→石核整形→主要な剥片の搾取、第3工程で、主要な剥片を搾取→石核整形→主要な剥片の搾取、となり、第3工程で作業を終了している。

凝灰岩Aと頁岩を比較すると、打面再生の方法の点で違いが見られる。凝灰岩Aは多方向から頻繁に打面再生がおこなわれているのに対し、頁岩では打点の方向は常に一定であり、大型の剥片を搾取することにより平坦な打面を作出している。しかし、剥片剥離工程の点ではまったく同一であり、仲ノ台遺跡における剥片剥離技術を考える上では、特に着目する必要はないであろう。

安山岩は2工程により剥片剥離をおこなっている。第1工程では主要な剥片を搾取し、第2工程では打面を再生、主要な剥片を搾取している。安山岩の場合は、石核整形剥片の接合は確認できなかったため、現時点では工程として追うことはできないが、石核に残る下方からの剥離痕により、石核整形がおこなわれていたことは確実である。

仲ノ台遺跡では、他に珪質頁岩、凝灰岩Bの接合資料があるが、珪質頁岩は打面を再生せず、平坦な原石面を終始打面としており、凝灰岩Bは接合した点数が少数なため詳細は述べないが、技術的基盤はまったく同じである。

以上を総括すると、仲ノ台遺跡における剥片剥離技術の特徴は、打面の再生をおこなったのちに主要な剥片の搾取と石核整形を繰り返す点にあり、さらに打面再生の位置（打面の位置の一貫性）、個々の剥片の搾取された目的が明確であるという点も総合して言及できる。

仲ノ台遺跡で確認された接合資料に、層位、剥片剥離技術の点で類似した資料が柏市中山新田I遺跡で確認されている。

中山新田I遺跡では、複数のブロックから計20点の接合資料が確認されているが、このうち

石刃状剥片を擲取している接合資料のうちで、打面再生、石核整形を施しているものがある。

実際の剥片剥離工程で、主要な剥片の擲取と石核整形を、繰り返しおこなっているかは明らかではないが、同一層序からの出土であり、今後の比較・検討の資料としていきたいと思う。

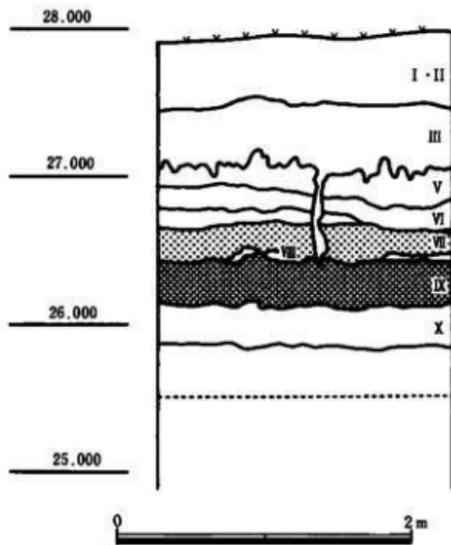
## 第2篇 芝山遺跡

## 第1章 調査の方法と経過

### 第1節 層序

芝山遺跡における立川ローム層の堆積状態は、先に報告した仲ノ台遺跡とはほぼ同様の堆積を示すものであり、層序名称および各層序の土層説明は、先に報告した仲ノ台遺跡のものを参照されたい。ここでは若干異なる点について補足説明をしたい(第43図)。

ソフトローム層のクラックとⅤ層の間には、若干暗色を帯びる層が確認され、第1黒色帯である可能性が高い。八千代市をはじめとする千葉県北西部では、概して立川ローム層の堆積が厚く、現在までの発掘調査でもこの地域での第1黒色帯の確認例は多い。



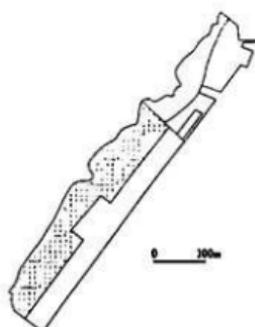
第43図 土層柱状図(オ-05-10グリッド)

仲ノ台遺跡でブロック状に確認されたⅤ層は、芝山遺跡の一部では完全な1枚の層で確認されており、第2黒色帯の中位に位置するⅤ層がさらに確実となっている。また、ク-00グリッド周辺には、等高線の状況から埋没谷が存在するものと思われるが、土層の記録が取られていないため、埋没谷が台地のどの位置まで入り込むのかははっきりとしない。先土器時代から平安時代までの遺構がこの周辺では検出されておらず、台地の更に細かい地形が各時代の生活にいくらかの影響を与えていることがある程度予想される。

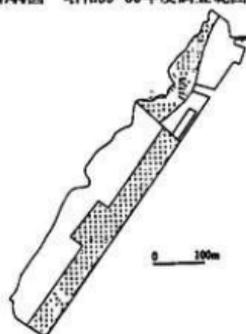
オ-05-10グリッドの掘削深度は地表面から約2.5mあり、立川ローム層最下層のX層を確認していると

ころで調査を終了している。調査者によれば、第43図に見られる掘削面を表わす破線の上部の実線が、立川ローム層と武蔵野ローム層の境界とされているが、スコリアの混入の様子から、破線部付近が境になると思われる。

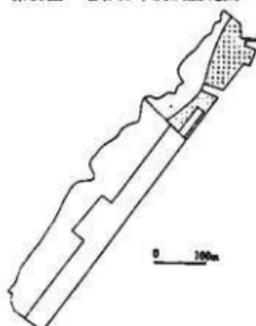
## 第2節 概要



第44図 昭和59・60年度調査範囲



第45図 昭和61年度調査範囲



第46図 昭和62年度調査範囲

芝山遺跡の発掘調査は、昭和60年から昭和62年までの3次にわたっておこなわれた。このうち昭和59年度にあたるものは確認調査である。

調査対象面積は67,200㎡で、各年度ごとの調査面積は以下のとおりである。

昭和59・60年度

対象面積：25,400㎡

(昭和59年度確認調査面積2,540㎡)

昭和61年度

対象面積：29,144㎡

昭和62年度

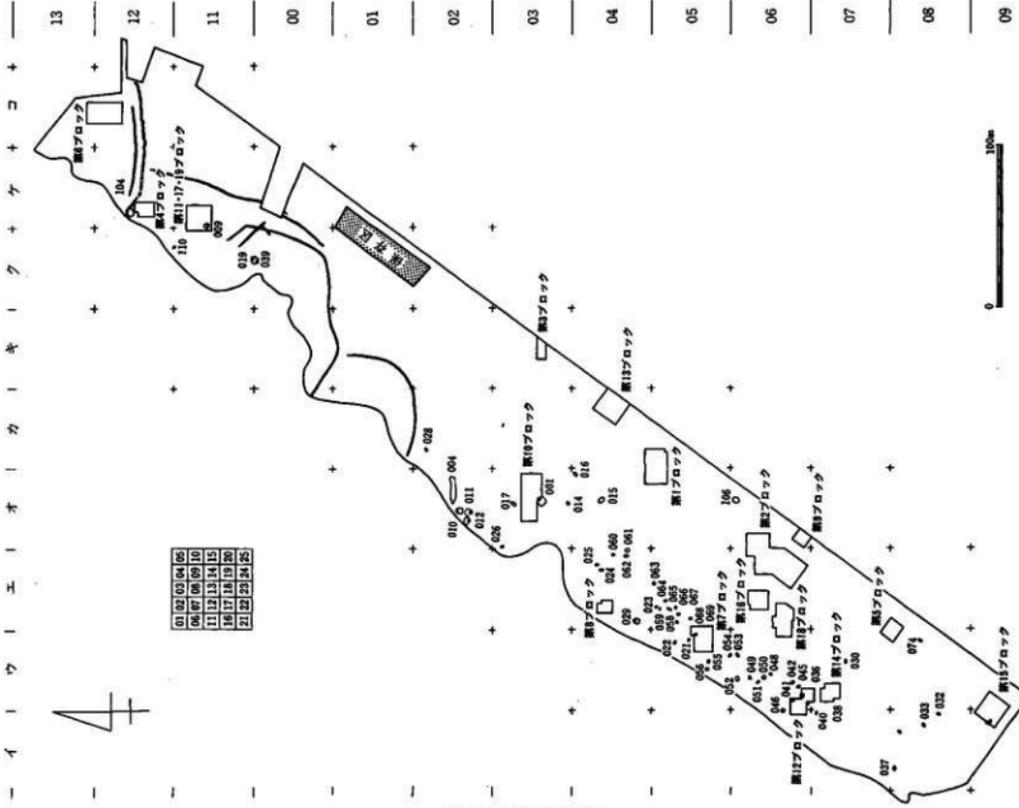
対象面積：12,656㎡

調査はグリッド方式によりおこなわれ、調査に先駆けて50m×50mの大グリッドを設定した。また、大グリッドを5m×5mの小グリッドに分割し、グリッド名称はイー08-01、コー12-25等とした。

調査は対象面積に対して遺構数は少ないものの数年次にわたり分割しておこなわれたこと、また下層遺構の多くが立川ローム層最下層に属し、広範囲に分布していることなどから困難を要したが順調に進捗し、調査終了予定の昭和62年8月31日には機材を撤収、対象面積全域の調査を終了した。



01	02	03	04	05
06	07	08	09	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25



第47図 芝山遺跡構造配置図

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 先土器時代

芝山遺跡では、計19ヶ所の先土器時代ブロックが検出された。

発掘調査区の谷側の境界線はほぼ標高24mの等高線に添っており、これより谷側はかなりの勾配で谷に落ち込む。台地縁辺とするよりは緩斜面にブロックが位置するといっても良いかもしれない。また、キー00グリッド付近から南東方向に向かって埋没谷が入り込むが、この埋没谷の南側付近にはブロックが検出されず、南西側のブロック群と北東側のブロック群とで、立地上の観点からではあるが分割できる感がある。

各ブロックの属する層序は多様であり、下部は立川ローム層の最下層から上部はソフトロームに至る。この遺跡の文化層という視点から、ある程度のまとまりを見出すことができそうである。そこで多少の層位の上下はあるが、発掘調査で確認された19ヶ所のブロックを7つの文化層に分類し、IX層に位置するブロック群を第1文化層、有舌尖頭器が出土しているソフトローム層を第7文化層とし、その間の文化層を古→新の順に番号付けをし、Ⅴ層—第2文化層、Ⅵ層—第3文化層、Ⅳ層—第4文化層、Ⅲ層中位—第5文化層、Ⅲ層上位—第6文化層と命名した。

芝山遺跡では第2黒色帯付近に位置するブロックが数多く確認されている。また、最近の発掘調査により、下総台地や群馬県等で事例の増加している環状ブロック群と思われるものが、2ヶ所検出されている。今回の発掘調査では、環状に巡ることは確認されていないが、層位、石器組成等はほぼ同様の傾向が見られ、今後、この時期の特色として環状ブロック群を位置づける上で、より明確な資料として活用されるであろう。

なお、発掘調査が多年度にわたり、ブロックの命名に統一が取れていないことにより、整理作業にあたって、発掘調査時の各ブロックの名称を下記のとおり改めた。

第1文化層 (IX層)	第2文化層 (V層)	第3文化層 (VI層)	第4文化層 (IV層)	第5文化層 (Ⅲ中)	第6文化層 (Ⅲ上)
新 名 称—旧 名 称	新 名 称—旧 名 称	新 名 称—旧 名 称	新 名 称—旧 名 称	新 名 称—旧 名 称	新 名 称—旧 名 称
第1ゾム・タープルJ	第6ゾム・タープル1P	第9ゾム・タープル1G	第13ゾム・タープル1E	第17ゾム・タープル1及中環	第19ゾム・タープル1及上環
第2ゾム・タープル1H-11	第7ゾム・タープル1H	第10ゾム・タープル1K	第14ゾム・タープル1B	第16ゾム・タープル1E	
第3ゾム・タープル1M	第8ゾム・タープル1I	第11ゾム・タープル1H下部	第15ゾム・タープル1B		
第4ゾム・タープル1A		第12ゾム・タープル1C	第18ゾム・タープル1G		
第5ゾム・タープル1E					

第28表 先土器時代ブロック新旧名称対応表

## 第1ブロック(プレ1J) (第48～52図, 第29・30表, 図版16～18)

小規模なブロックが弧状にめぐるのであり, 現在群馬県の後田遺跡, 下触牛伏遺跡, 千葉県の中山新田I遺跡, 池花南遺跡, 土持台遺跡などで確認されている環状ブロック群と同様のものである可能性が高い。

南側は未調査のため, 弧状に並ぶブロックが南側まで環状にめぐるのはわからないが, 上記の遺跡で確認されている環状ブロック群に見られる石器組成, あるいは石器形態と極めて類似し, かつほぼ同一層位からの出土のため, 他の類型と同じように環状ブロック群となるものであろう。

また, 芝山遺跡では第1ブロックの南西方向に, 別の環状ブロック群となる可能性のあるブロック群が確認できる。

他の遺跡との比較・検討は後に記述するものとして, ブロックの性格, 石器の観察結果を記述する。

第1ブロックは, 2～3m内外の小規模なブロックが, 約40mの範囲内に弧状に分布し, その半円の中心部にもブロックが確認できる。弧状に並ぶブロック相互に接合関係が確認できるため, 各小ブロックとも同一時期に形成されたものといってい良いだろう。

遺物の出土層位はIX層からX層であり, 特にIX層下部にその分布が密であることが認められる。また台形石器が出土している石器の組成の中の大半を占め, 砂岩製の局部磨製石斧が1点出土している。他には調整剥片が確認できないため, 石器単体の搬入品と思われる黒曜石製のナイフ形石器, 頁岩製の小型の剥片を素材としたナイフ形石器が出土している。

剥片の形状は概して小型であり, 横長剥片である。第50図11に見られるような縦長剥片は単独の石質であり, 搬入品である可能性が高い。石質はチャートと珩質頁岩が大半を占め, 若干砂岩, 黒曜石が混入するくらいである。珩質頁岩では, 剥片剥離工程が追える良好な接合資料が確認できた。また, 同様の石質の中でもさらに母岩別に分けたものが以下のとおりである。

チャートA: 緑あるいは青みがかった色調を呈する。全体にきめがこまかい。

チャートB: 灰色を呈し, 青い筋理状のものが縦横に入る。表面がざらざらしている。

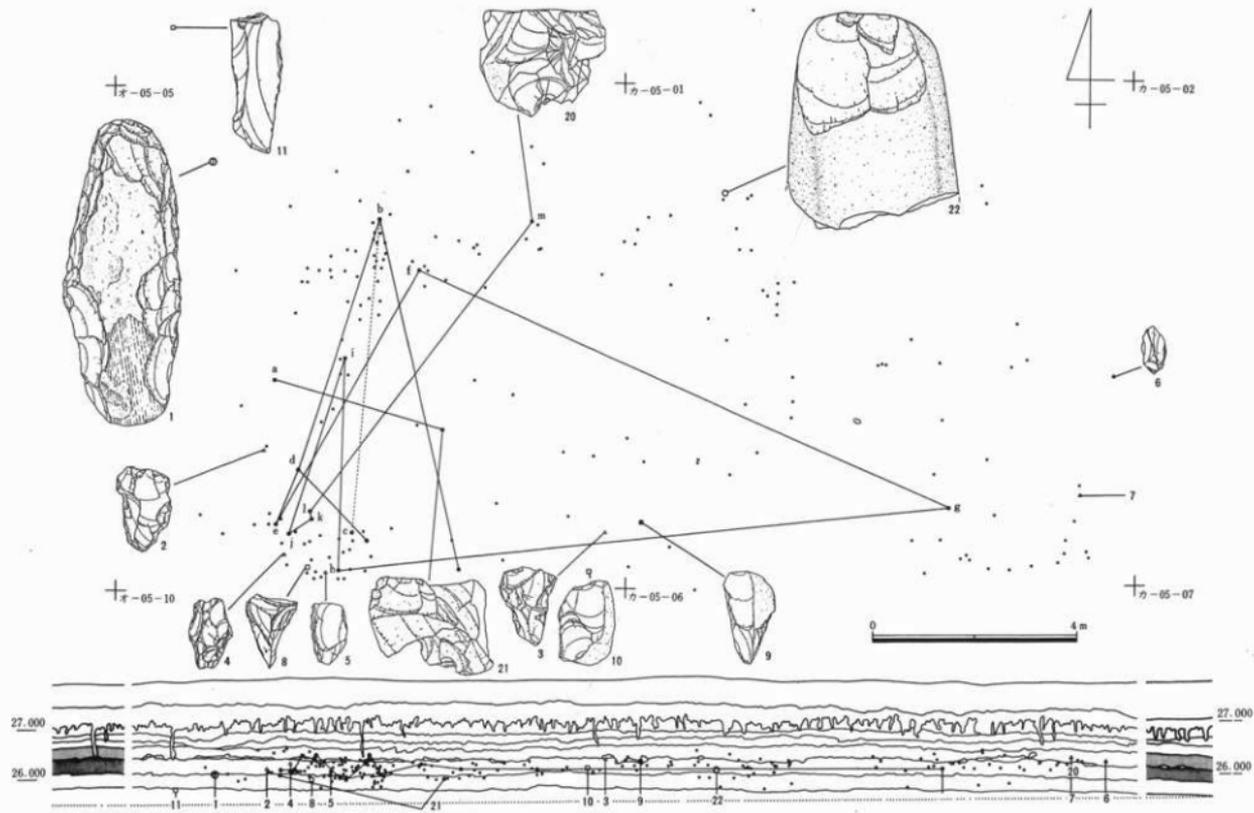
頁岩 A: 黒色を呈し, 表面はやざらざらする。

頁岩 B: 乳白色を呈し, 中に含まれる鉱物の粒は大きい。

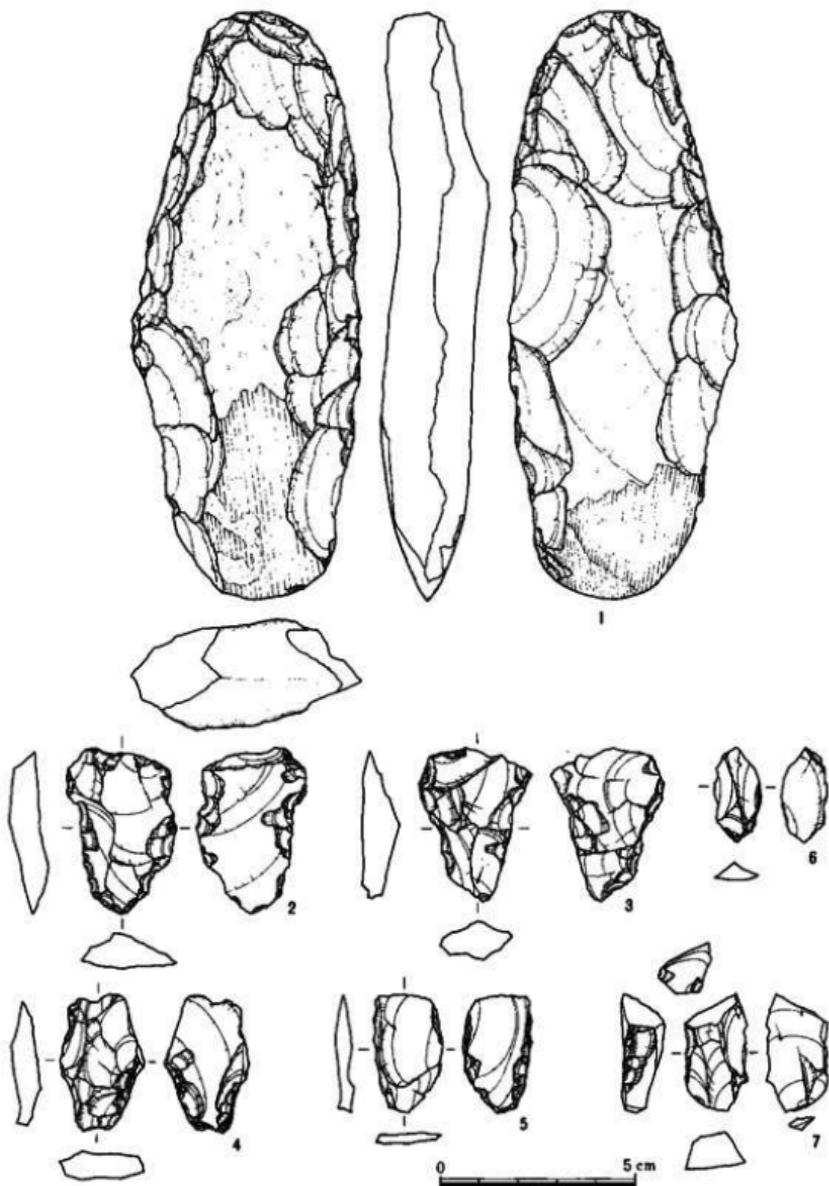
### 遺物

1は砂岩製の局部磨製石斧である。表面に原石面を残している。裏面に主要剥離面が確認できることから, 大型の剥片を素材としていることが窺える。

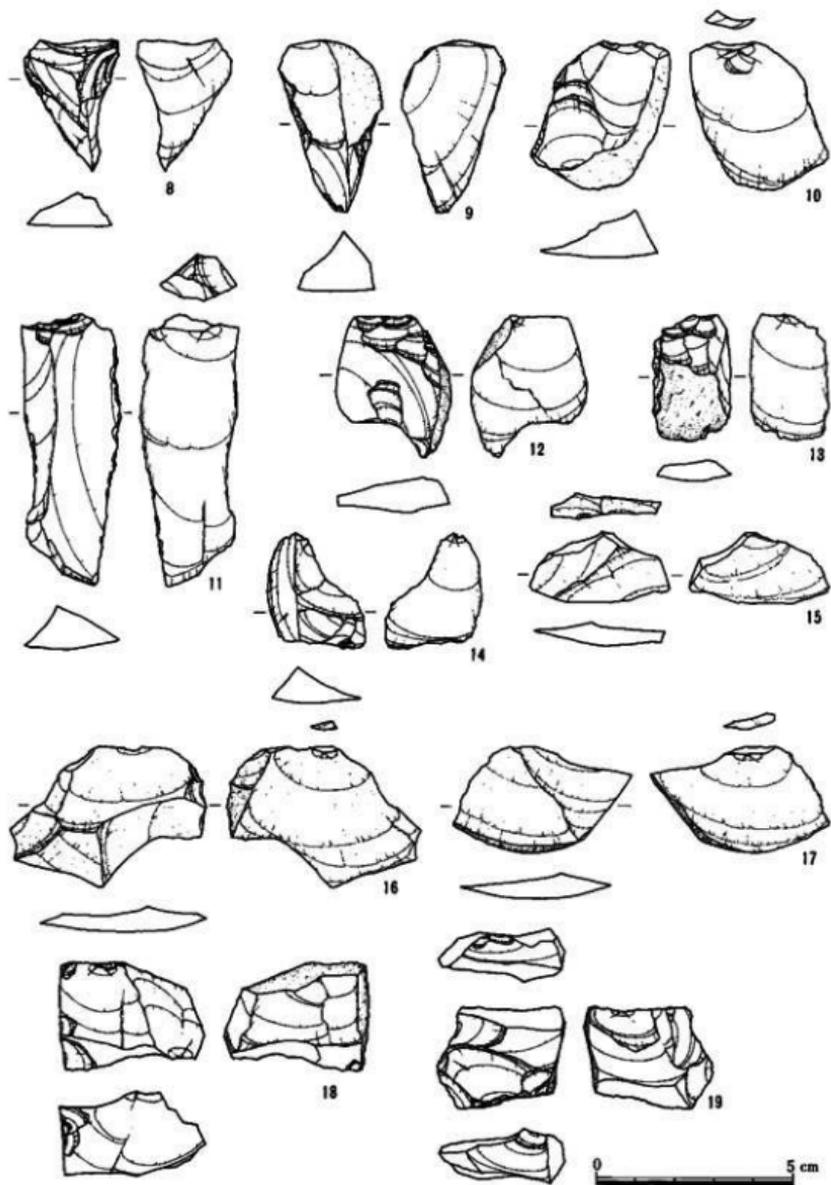
2から5は台形石器である。2はチャート製の横長剥片の打面を除去, 折断面の縁辺を刃部とし, 他の縁辺に微細な調整を施すものである。表面の剥離は方向が一定しておらず, 頻繁に打面を転移しているのがわかる。3はチャート製の台形石器である。2と同じような状況によ



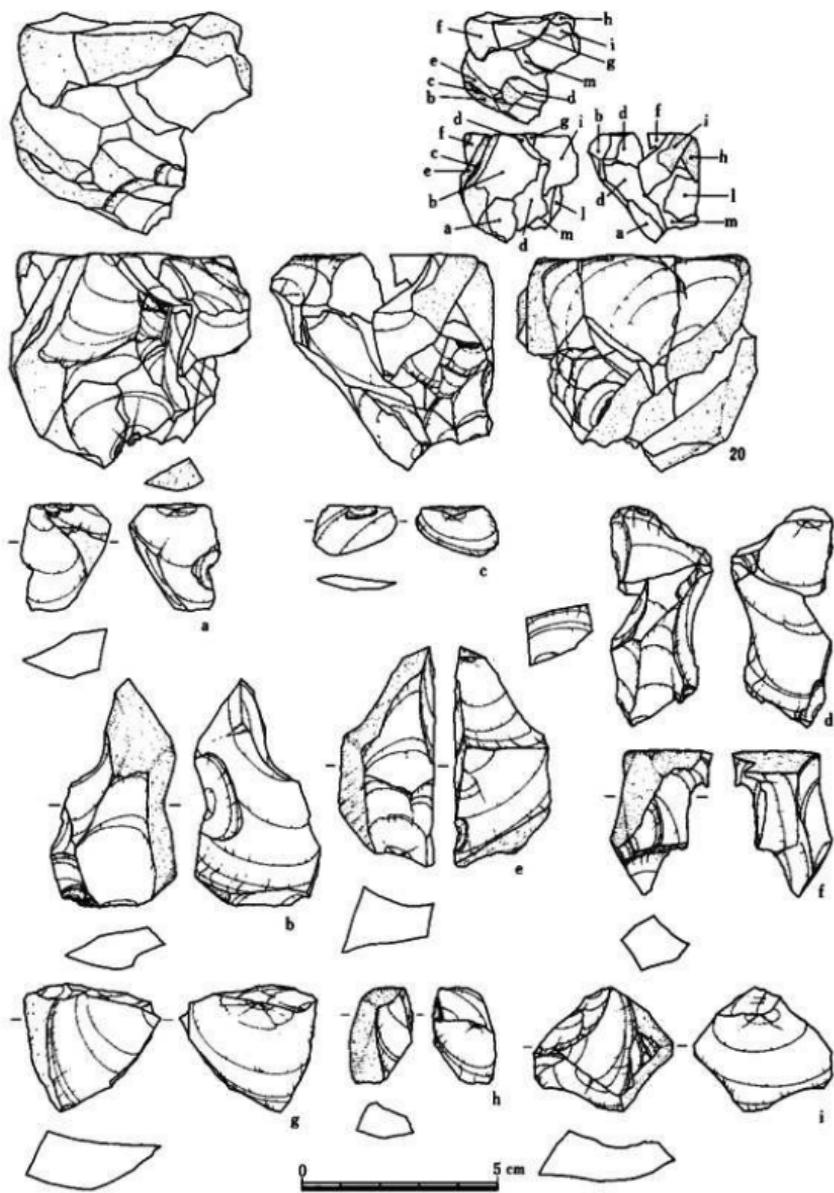
第48図 第1ブロック遺物分布図



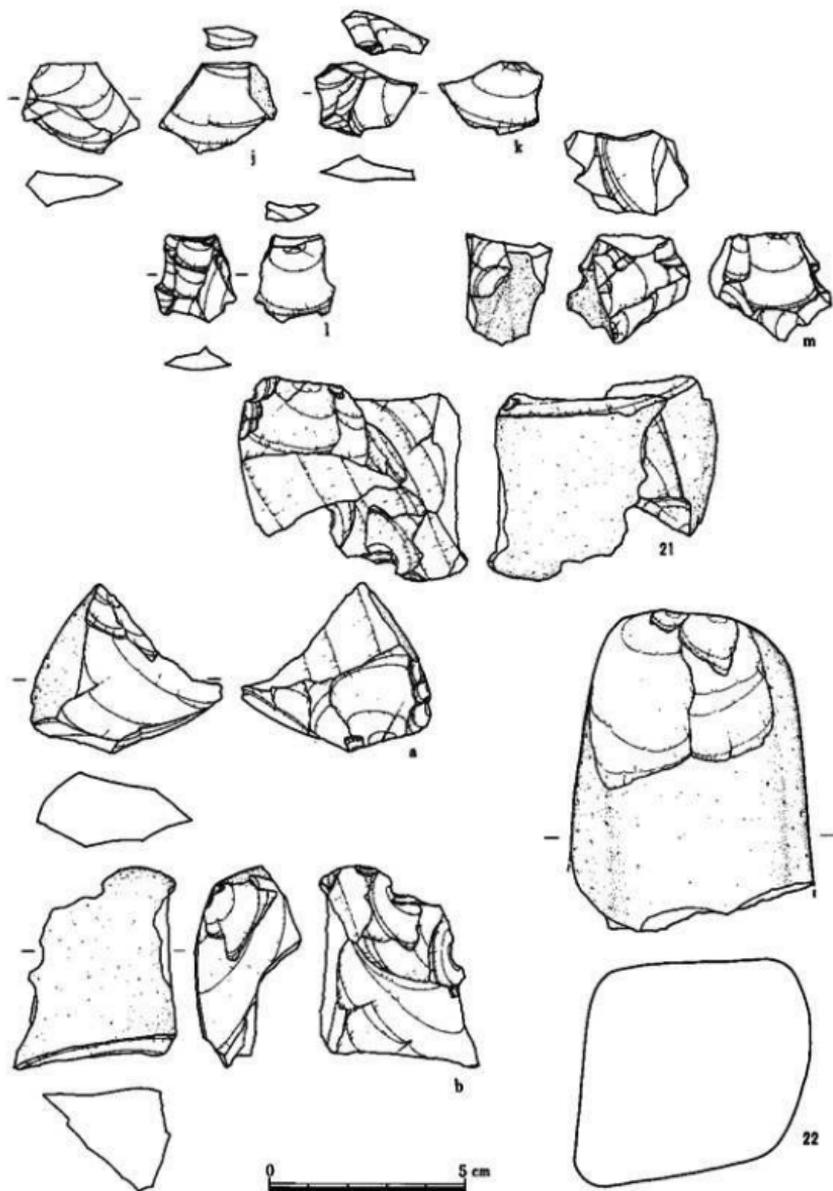
第49図 第1ブロック出土石器実測図(1)



第50図 第1ブロック出土石器実測図(2)



第51図 第1ブロック出土石器実測図(3)



第52図 第1ブロック出土石器実測図(4)

り押取された剥片を素材としているが、折断による打面除去ではなく、側縁の調整により打面を除去している。4は剥片の末端部に近い部位を刃部としている。3と同じように調整により打面を除去している。5は珪質頁岩製の横長剥片を素材とし、剥片の側縁を刃部として残り、打面および末端部に調整を施すものである。

6・7はナイフ形石器である。6は頁岩製の小型の剥片の打面部に、微細な調整を施している。素材となる剥片は、やはり頻繁に打面転移をおこなって得られた剥片であろう。7は黒曜石製の縦長剥片を素材としている。刃部側が欠損しているため、素材となる剥片の推定の長さは明確ではないが、横に対して縦がだいぶ長い剥片であると思われる。6・7のナイフ形石器は単独の石質のものであり、剥片剥離工程の違いは指摘できないが、調整剥片、あるいは同一の石質の剥片が見られないことから、搬入品であろうことが指摘できる。

8から11は調整痕のある剥片である。8はチャート製の剥片の打面側を折断し、側縁に微細な調整を加えている。このブロックから出土している台形石器の中には、折断により刃部を作出しているものも含まれるため、台形石器あるいはその未製品である可能性も十分考えられる。9はチャート製の剥片の末端部および打面側に調整を施すものである。かなり厚な剥片であり、表面に見られる剥離痕から他方向から押取された剥片であることが窺える。10はチャート製の剥片の側縁に微細な調整を施すものである。11は頁岩製の縦長剥片の側縁部に微細な調整を施す。単独の石質のものであり、搬入品と考えられる。

12~14はチャート製の、15~17は安山岩製の剥片である。いずれも横長の剥片であり、表面に残る剥離痕は同一方向からのものや、多方向からのものなど一定していない。

18・19はチャート製の石核である。立方体を呈する形状で、頻繁に打面を転移し剥片を押取しているのが窺える。

20は珪質頁岩製の接合資料である。こぶし大の礫を母岩とし、頻繁に打面転移を繰り返しているのがわかる。最終的に残る石核の形状は、先に述べたチャート製の石核の形状に近く、立方体を呈する。また、剥片剥離工程の初期の段階で押取された、比較的大きな剥片をさらに折断し、剥片を押取しようとしていることが窺える。あるいはこのブロックで出土している石核は、全てではないが剥片利用石核も若干含まれる可能性が考えられる。なお、この珪質頁岩製の接合資料に伴う製品は出土していない。

21は安山岩製の剥片が接合したものである。bには剥片として押取された後の剥離痕が確認でき、剥片利用石核と思われる。やはり各部に残る剥離痕により多方向から打撃を加えられているのが確認できる。

22は砂岩製の台石である。上部の平坦面のはほぼ中央に打撃の痕があり、表面に見られる剥離痕は、剥片を押取するためのものとは思えない。ただし台石上で剥片押取を行なった場合、その剥片あるいは石核の表面には、楔形石器に見られるような潰れた剥離痕が見られるが、第1ブ

ブロックからは、それらしい剥片・石核等は確認されていない。

検出 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
1	4-05-5	局部磨製石斧	砂 岩	14.7	5.7	2.3	674.3	原石面を残す。
2	ブレJ-151	台形石器	チャート	4.25	2.8	1.1	11.9	
3	ブレJ-63	台形石器	チャート	3.9	2.9	1.1	8.7	
4	ブレJ-155	台形石器	チャート	3.5	2.2	0.9	6.3	
5	ブレJ-160	台形石器	チャート	3.0	1.85	0.5	2.4	
6	ブレJ-122	ナイフ形石器	頁岩B	2.4	1.2	0.5	1.0	
7	ブレJ-123	ナイフ形石器	黒曜岩	3.0	1.8	1.1	4.5	
8	ブレJ-188	調整痕ある剥片	チャート	3.6	2.5	1.15	5.8	
9	ブレJ-109	調整痕ある剥片	チャート	4.5	2.1	1.9	14.6	
10	ブレJ-65	使用痕ある剥片	チャート	3.9	3.6	1.5	16.3	
11	ブレJ-78	使用痕ある剥片	頁岩C	6.9	2.5	1.2	21.0	
12	ブレJ-110	剥片	チャート	3.5	3.0	1.1	9.3	
13	ブレJ-111	剥片	チャート	3.2	2.0	0.5	4.5	
14	ブレJ-13	剥片	チャート	2.8	2.5	0.9	4.3	
15	ブレJ-67	剥片	安山岩	1.8	3.6	0.7	4.4	
16	ブレJ-106	剥片	安山岩	3.5	5.1	0.7	9.8	
17	ブレJ-133	剥片	安山岩	2.7	4.6	0.7	8.7	
18	ブレJ-23	石核	チャート	2.7	3.6	1.8	25.9	
19	ブレJ-28	石核	チャート	2.6	3.3	1.3	12.4	
20		接合資料	珪質頁岩					
a	ブレJ-69	剥片		2.7	2.3	1.1	7.2	
b	ブレJ-169	剥片		5.8	3.2	1.0	17.6	
c	ブレJ-167	剥片		1.3	2.1	0.4	1.0	
d	ブレJ-71 76	剥片		5.4	2.4	1.1	19.8	
e	ブレJ-181	剥片		5.5	2.7	1.6	19.8	
f	ブレJ-147	剥片		3.5	3.3	1.7	12.7	
g	ブレJ-135	剥片		3.2	3.6	1.3	14.4	
h	ブレJ-187	剥片		2.4	1.6	1.0	4.0	
i	ブレJ-172	剥片		3.2	3.6	1.3	11.9	
j	ブレJ-185	剥片		2.3	3.0	0.9	5.2	
k	ブレJ-79	剥片		1.9	2.6	1.1	3.8	
l	ブレJ-177	剥片		2.2	2.0	0.7	2.7	
m	ブレJ-145	石核		2.2	2.9	2.6	17.1	
21		接合資料	安山岩					
a	ブレJ-51	剥片		3.8	4.6	1.8	28.3	
b	ブレJ-59	剥片		4.8	4.4	2.8	43.3	
22	b 05 1,2	台石	砂 岩	11.1	8.4	8.0	1011.5	

第29表 第1ブロック出土石器表

石種	用途	ナイフ形石器			石片	剥片	石核	石片	石片	計									
		ナイフ	石片	石片															
砂岩 A	数量			1										2	2		1	1	7
	%			14.4										28.4	26.4		14.4	14.4	3.6
頁岩 A	数量		3				2							44	32	10			91
	%		3.3				2.2							48.3	35.2	11			46.9
頁岩 B	数量		1																1
	%																		0.5
凝灰岩	数量													15	3	1			19
	%													78.9	15.8	5.3			9.8
安山岩	数量													32	25	2			59
	%													54.2	42.4	3.4			30.4
凝灰岩	数量													6	2	2			10
	%													60	20	20			5.2
頁岩 A	数量						1							2		1			4
	%								25					50		1			4
頁岩 B	数量	1																	1
	%																		0.5
頁岩 C	数量									1									1
	%																		0.3
黒曜石	数量	1																	1
	%																		0.5
計	数量	2	4	1			2	2						101	64	16	1	1	194
	%	1	2.1	0.5			1	1						52.1	32	8.3	0.5	0.5	100

第30表 第1ブロック母岩別資料石器組成表

## 第2ブロック (プレ1H・1I) (第53～56図, 第31～33表, 図版19・20)

第2ブロックは、直径40mの範囲で遺物が環状に出土しており、第1ブロックと同様に環状ブロック群となる可能性が高い。

第1ブロックのように明確に小ブロックが環状に巡るものではなく、ただ環状に均一に石器が出土する感がある。

出土している石器の石質は多様であり、砂岩、頁岩、凝灰岩、安山岩等で構成されている。製品は台形石器が主であり、他に基部加工のナイフ形石器が出土している。エ-06-15グリッドには砂岩製の剥片が集中して出土しており、その形状、表面の剥離痕の状況から局部磨製石斧の整形剥片と思われる。先の第1ブロックで出土している局部磨製石斧の石質と全く同一で

ある。しかしかなりの時間を費やし接合を試みたのだが、接合するには至らなかった。

第1ブロックと第2ブロックの直線距離は、双方のブロック群が環状に巡るものと仮定した場合、その中心からの距離で80mほどであり、環状ブロック群どうしがこれほど近接して検出された例はない。両ブロック群は出土層位から見ても関係の深いものであるといえよう。ただし、使用されている石材、台形石器の形状には相違点が多く、石器製作技術の面では、端的に両ブロックの密接な関係は指摘できない。

#### 遺物

1～6は台形石器である。1は黒曜石製で刃部に相当する部位は、剥片を折断して作出している。主要剥離面の剥離の方向より察すると、剥片の打面側の側縁に調整を施し、折断して分離することにより石器を作出している。3の台形石器の接合例によりこのことがより明確になる。あるいは主要剥離面側に基部加工を施すナイフ形石器である見方もできるが、X層段階の裏面基部加工のナイフ形石器の出土例が確認されていないため、現段階では台形石器として扱いたいと思う。2は黒曜石の破片に微細な調整を施したものである。同様の石器が八千代市権現後遺跡第11ブロックで出土しており、他にも類例のあることがわかる。4は凝灰岩の剥片を折断し、その折断面より調整を加えるものである。5は片面に原石面を残す剥片の主要剥離面に調整を加えるものである。6はチャート製の剥片の主要剥離面に調整を加えるものであり、5の石器製作技法と極めて類似する。

7は凝灰岩製のナイフ形石器である。剥片の打面側に微細な調整を施すものである。

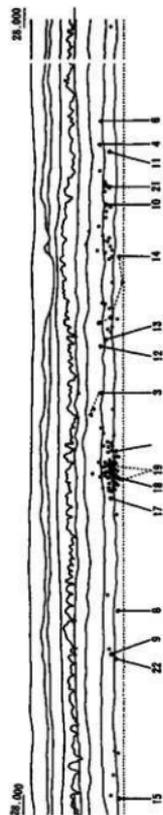
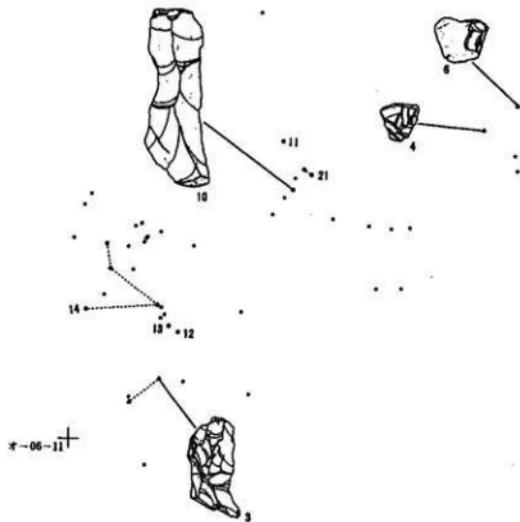
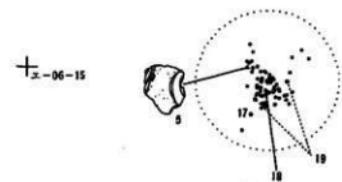
8・9は頁岩製の剥片である。表面に見られる剥離の方向から頻りに打面を転移しているのが窺える。10から13は砂岩製の剥片である。いずれも同一の石質であるが、石刃状の剥片は10の1点のみである。14は先の砂岩と同一のものであるが、剥離の状況から小型の剥片を搾取しているのが窺える。15は安山岩製、16は頁岩製の剥片である。このブロックより出土しているものの中では、大型の部類に入るものである。

17から19は砂岩製の剥片である。打面を広くとり、打面に垂直に打撃を加えており、剥片末端部の形状は、階段状剥離あるいは鎌番剥離になる。また稜を作出しようとしたのか、剥片の中にはねじれた形状のものも見受けられる。先に述べたように第1ブロックで出土している局部磨製石斧と同一の石質である。接合関係こそ確認できなかったが、第1ブロックで出土した局部磨製石斧を作出した際の破片とも考えられる。

20は流紋岩製の接合資料である。円礫を打割し、剥片搾取を行なっている。

21から22は石核である。第2ブロックから出土している石核はこの2点が主なものであり、打面再生を両方ともおこなっている痕跡が見られる。先の第1ブロックではサイコロ状の石核が大半を占めているが、第2ブロックではそれが見られず、台形石器の石器形態の相違と共に剥片剥離技術の面での相違点も指摘できる。

4



第53図 第2ブロック遺物分布図(1)

4

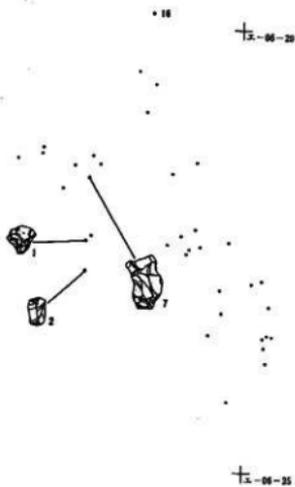
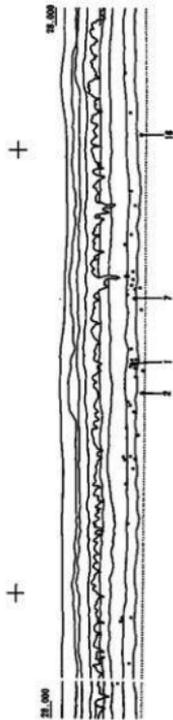
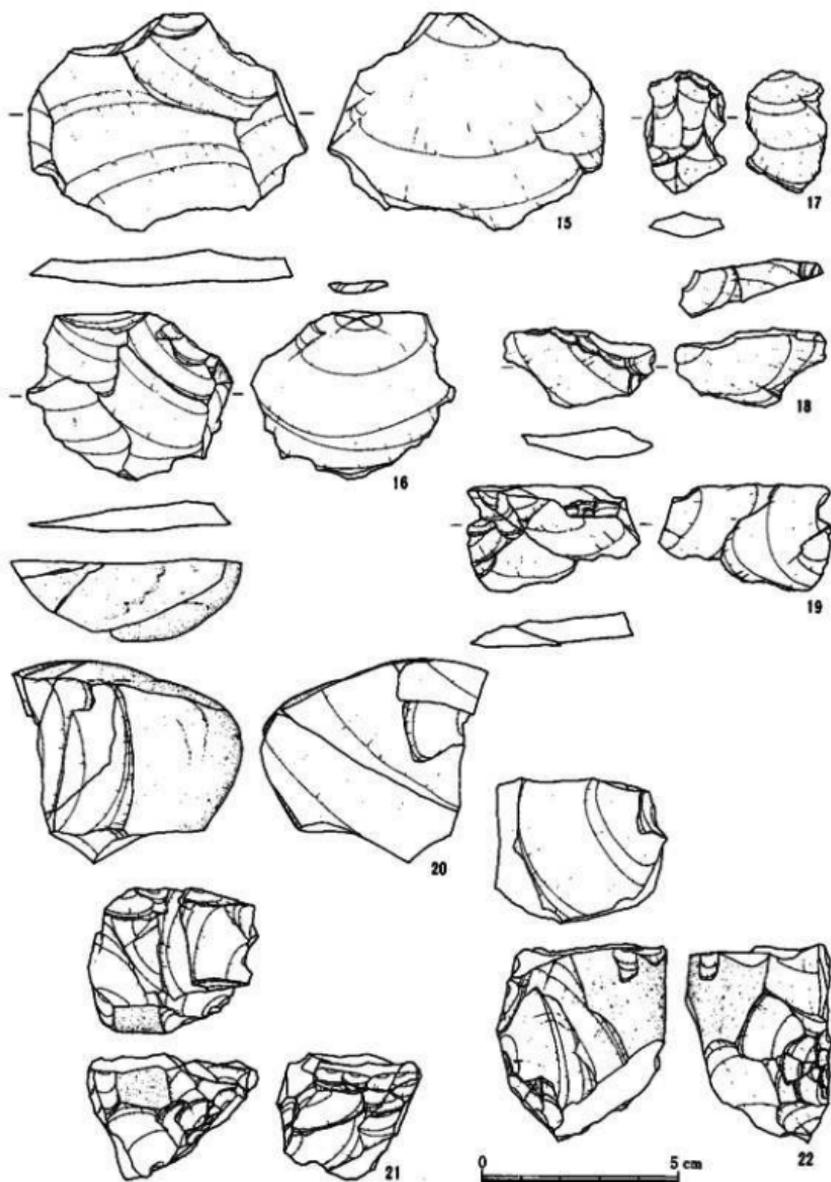


图54图 第2ブロック遺物分布図(2)





第55図 第2ブロック出土石器実測図(1)



第56図 第2ブロック出土石器実測図(2)

石種	器種		石質	黒曜石	凝灰岩	砂岩	U- トラップ	石片	片	片	石片	石片	石片	計
	ナイフ 形石器	台形 石器												
黒曜石	数量		3								4			7
	N		43								57			3.9
凝灰岩	数量	1	1							5	4			11
	N	9.5	9.5							45	36			6.1
砂岩	数量		1							9	2			12
	N		8							75	17			6.7
砂岩	数量									18	20			38
	N									47	53			21.1
砂岩	数量									18	46			56
	N									18	82			31.1
チャート	数量		1								6	1		8
	N		12.5								75	12.5		4.5
頁岩	数量									18	19	1		21
	N									47.6	47.6	4.8		11.7
頁岩	数量									1	4	0		5
	N									20	80			2.8
火山岩	数量									7	5			12
	N									58.3	41.7			6.7
凝灰岩	数量									3		1		4
	N													2.2
珪質頁岩	数量									3	1			4
	N													2.2
ノコウ	数量									1				1
	N													0.5
ホルン フェルス	数量									1				1
	N													0.5
計	数量	1	4							98	102	3		198
	N	0.5	3							38	57	1.5		100

第31表 第2ブロック母岩別資料石器組成表

採出 番号	遺物番号	器種	石質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
1	ブレIH-26	台形石器	黒曜石	1.6	1.75	0.7	0.9	
2	ブレIH-27	台形石器	黒曜石	1.6	1.05	0.3	0.6	
3	ブレI-4,5	台形石器	黒曜石	5.0	2.8	1.0	12.3	
4	ブレII-66	台形石器	凝灰岩	1.8	1.9	0.65	1.8	
5	ブレII-41	台形石器	砂岩	2.5	2.0	0.5	3.5	

第32表 第2ブロック出土石器表(1)

押出 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(㎝)	幅(㎝)	厚(㎝)	重量(g)	
6	プレII-68	台形石器	チャート	2.3	2.7	0.8	4.8	
7	プレII-18	ナイフ形石器	凝灰岩	3.2	2.2	0.5	3.6	
8	プレII-2	剥片	頁岩	3.2	3.2	0.6	6.5	
9	プレII-4	剥片	頁岩	2.7	2.8	1.3	8.0	
10	プレII-19	剥片	砂岩	8.8	3.2	1.3	33.9	
11	プレII-24	剥片	砂岩	4.0	4.2	2.0	32.3	
12	プレII-11	剥片	砂岩	3.1	2.5	0.7	7.6	
13	プレII-10	剥片	砂岩	3.3	3.9	0.9	7.5	
14	プレII- <sup>31</sup> <sub>7-9</sub>	接合資料	砂岩	4.0	6.3	2.3	45.6	
15	プレII-8	剥片	安山岩	5.7	7.1	1.0	39.2	
16	プレII-68	剥片	頁岩	4.3	5.2	0.7	19.7	
17	プレII-46	剥片	砂岩	3.2	2.1	0.7	4.4	石斧の調整剥片と思われる。
18	プレII-65	剥片	砂岩	2.0	3.9	1.1	8.7	石斧の調整剥片と思われる。
19	プレII- <sup>64</sup> <sub>52</sub>	剥片	砂岩	2.7	4.4	0.7	10.9	石斧の調整剥片と思われる。
20	<sup>106</sup> <sub>15</sub> <sup>4</sup> <sub>3</sub>	接合資料	流紋岩	5.2	5.8	2.1	63.3	
21	プレII- <sup>31</sup> <sub>22</sub>	石核	頁岩	3.2	4.3	3.7	53.5	
22	プレII-51	石核	砂岩	5.0	4.3	3.7	108.4	

第33表 第2ブロック出土石器表(2)

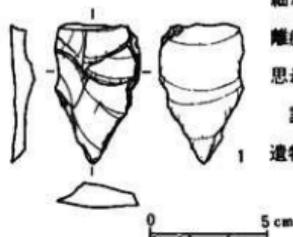
### 第3ブロック (プレIM) (第57・58図, 図版21)

IX層に属し、4点のみの小規模なブロックである。出土した石器は台形石器1点のみで、他は砕片であり、図示するには至らなかった。1点凝灰岩の他はチャートである。

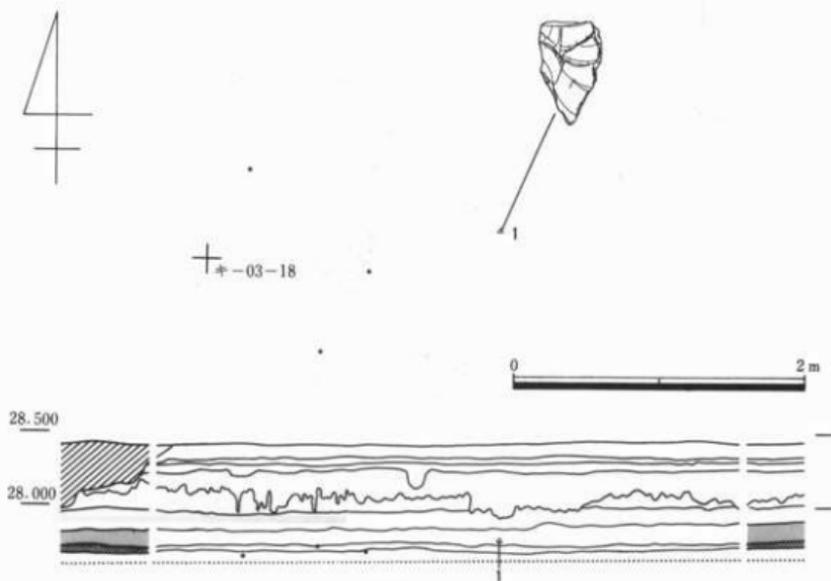
#### 遺物

1はチャート製の台形石器である。縦長の剥片の末端部側縁に微細な調整を施しており、打面側は折断により除去される。表面の剥離痕から、素材となる剥片は頻繁に打面を転移して得られたものと思われる。

計測値は長さ3.5cm、幅2.2cm、厚さ0.7cm、重量5.2gを測り、遺物取り上げ時の番号は4である。



第57図 第3ブロック出土石器実測図



第58図 第3ブロック遺物分布図

#### 第4ブロック (プレ1A) (第59・60図, 第34・35表, 図版21・22)

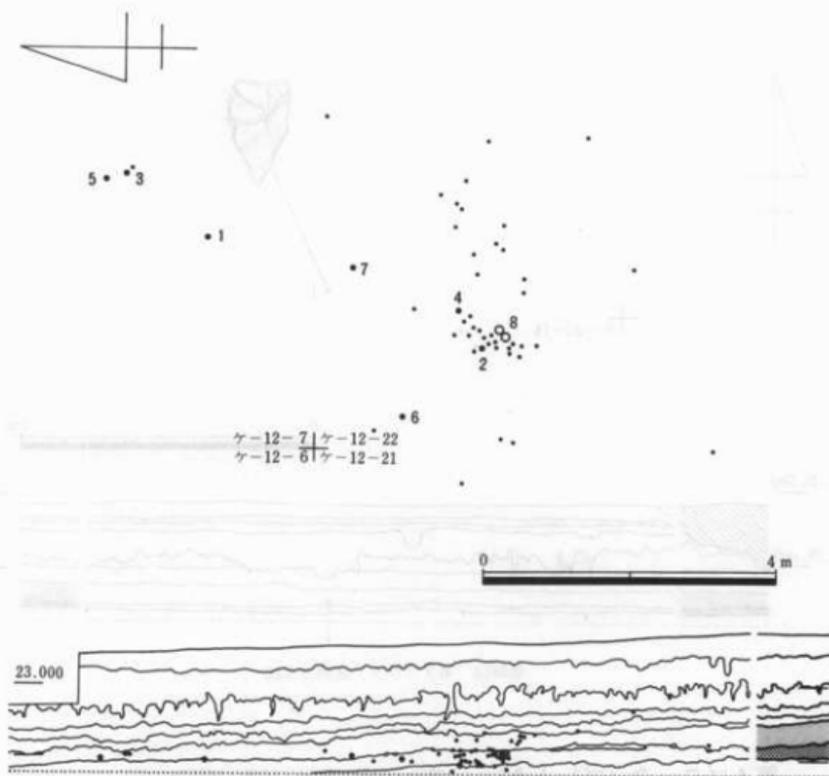
第4ブロックは、Ⅵ層からⅨ層にかけて分布し、特にⅨ層に分布の中心がみられる。平面分布は長軸8m、短軸5mの楕円形を呈す。

石器の石質は安山岩が大半を占め、ごく少数チャートが含まれる。定型的な石器、調整痕・使用痕のある石器はみられず、剥片・碎片のみが出土したブロックである。

##### 遺物

1・2はチャート製の剥片である。剥離面の様子、色調からみると、同一母岩より搾取された剥片と思われるが、接合関係はない。また、第4ブロックより出土したチャート製の剥片はこの2点のみである。

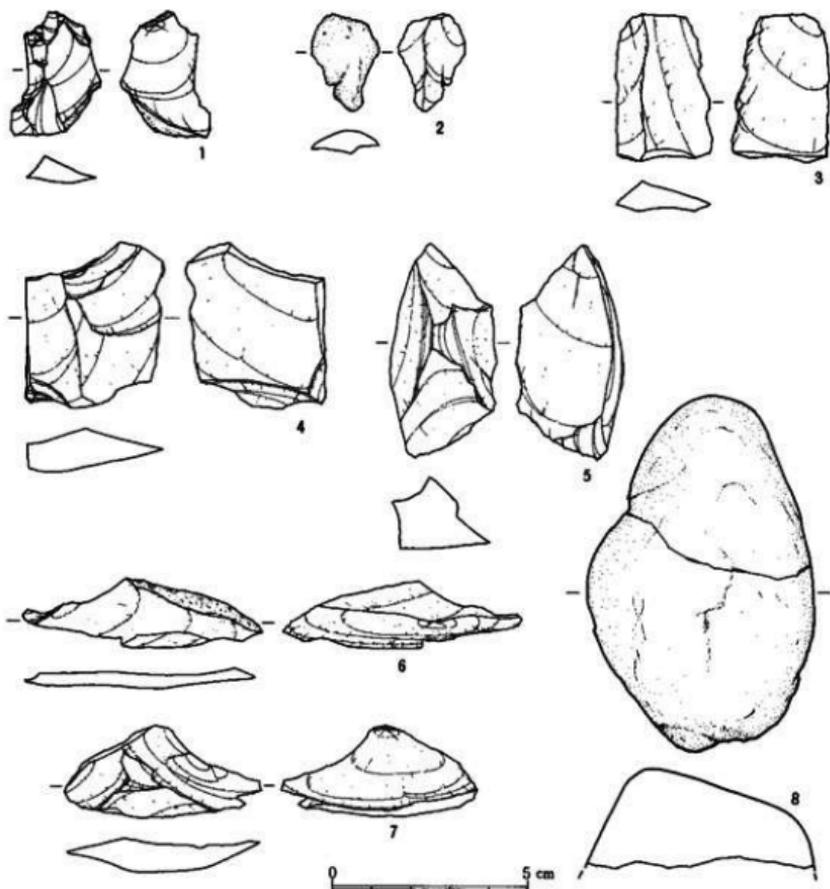
3～7は安山岩製の剥片で、すべて同一母岩より搾取された剥片と思われる。第3ブロックより出土した安山岩製の剥片は、3～5のような比較的縦長の剥片と、6・7のような横長剥片がみられるように、剥片の形状にはっきりとした違いがみられるが、剥片の接合関係が確認できないため、形状の違いが剥片剥離工程の中での目的の違いによるものなのかはわからない。



第59図 第4ブロック遺物分布図

採回 番号	遺物番号	器	種	石	質	計				備	考
						長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
1	ブレ1A-5	剥	片	チャート	3.4	2.3	1.1	5.0			
2	ブレ1A-45	剥	片	チャート	2.7	1.7	0.5	2.0			
3	ブレ1A-3	剥	片	安山岩	3.9	2.6	0.8	7.7			
4	ブレ1A-24	剥	片	安山岩	4.1	4.9	1.1	21.7			
5	ブレ1A-2	剥	片	安山岩	2.9	5.4	1.9	25.7			
6	ブレ1A-10	剥	片	安山岩	1.3	6.0	0.7	4.5			
7	ブレ1A-7	剥	片	安山岩	2.3	4.9	0.8	8.9			
8	ブレ1A <sup>18</sup> <sub>19</sub>		礫	頁岩	9.1	5.8	2.5	141.7			

第34表 第4ブロック出土石器表



第60図 第4ブロック出土石器実測図

石材	器種	ナイフ	尖頭器	石鏟	石鐮	石斧	石錐	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	計
		母岩別													
安山岩	数量								20	21					41
	%								48.8	51.2					98
チャート	数量									2					2
	%														5
燧石	数量										1				1
	%														2
頁岩	数量												1		1
	%														2
計	数量								22	22				1	45
	%								49	49				2	100

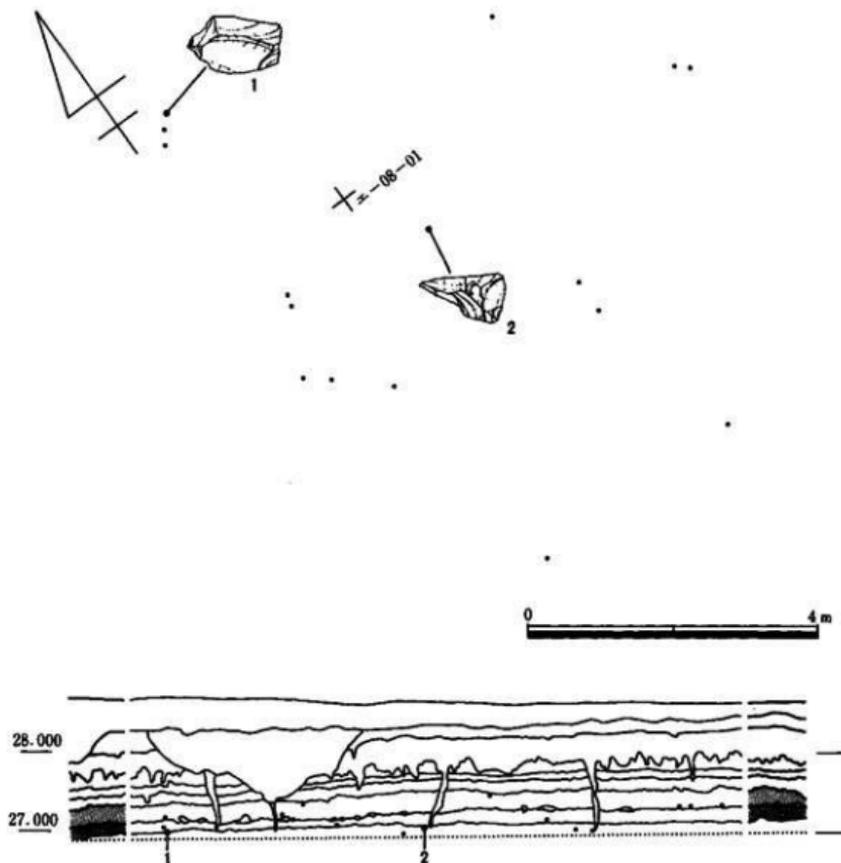
第35表 第4ブロック母岩別資料石器組成表

8は頁岩製の礫である。剥片を搾取するため等、人為的に割られたのかどうかは定かではない。特に被熱した様子は見られない。

### 第5ブロック (プレ1E) (第61・62図, 第36・37表, 図版22)

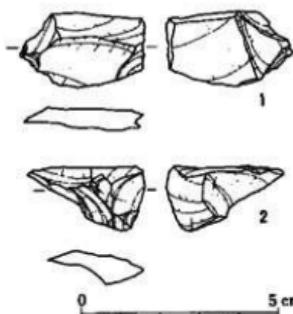
出土層位はVII層からX層にかけてであり、散漫な出土状態である。遺物の出土範囲は径8m内に納まる。IX層に属するものと思われる。

遺物はほとんどが碎片であり、定型的な石器の出土は見られなかった。石質は砂岩が大半を占



第61図 第5ブロック遺物分布図

め、他は若干頁岩が混入している程度である。



遺物

1・2は砂岩製の剥片である。両方とも打面転移を頻繁に繰り返して得られた剥片であることが、表面の剝離痕によって確認できる。

第62図 第5ブロック出土石器実測図

挿図番号	遺物番号	器種	石質	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
1	ブレIE-16	剥片	砂岩	1.9	3.2	0.7	5.6	
2	ブレIE-8	剥片	砂岩	1.6	3.0	1.0	3.6	

第36表 第5ブロック出土石器表

石材	タイプ 群石器	尖頭器	石鏃	石錐	石鏃	計													
																			A
砂岩	剥片																		14
	尖頭器																		73.7
頁岩	剥片																		4
	尖頭器																		21.1
頁岩	剥片																		1
	尖頭器																		5.2
計	剥片																		19
	尖頭器																		100

第37表 第5ブロック母岩別資料石器組成表

第6ブロック (ブレ1P) (第63・64図, 第38・39表, 図版23)

第6ブロックは、Ⅴ層下部からⅥ層上部にかけて散漫に分布し、計4点の出土をみる。

遺物の出土点数、分布状況から見ると、ブロックと呼べるかどうか疑問だが、同一層からの出土のため、あえてブロックとしてとらえることにする。

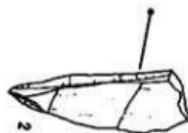
定型的な石器は伴わず、チャート製の調整痕のある剥片を1点出土したに止まる。他は、粘板岩製の剥片である。

挿図番号	遺物番号	器種	石質	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
1	ブレ1P-4	調整痕ある剥片	チャート	1.8	2.6	0.7	2.2	
2	ブレ1P-1	剥片	粘板岩	6.1	2.2	0.7	11.9	

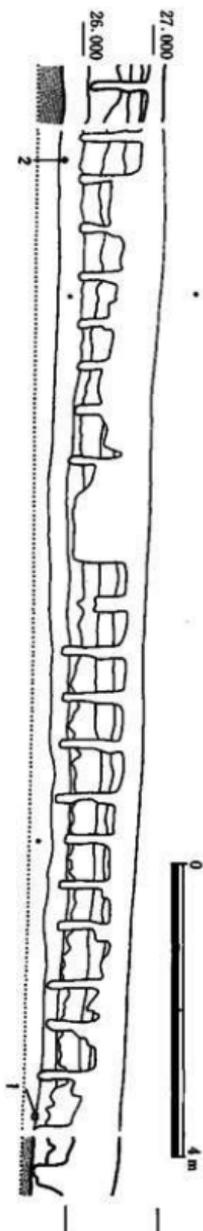
第38表 第6ブロック出土石器表



マ-12-3  
マ-12-2



マ-12-8  
マ-12-7



第63図 第6ブロック遺物分布図



第64図 第6ブロック出土石器実測図

### 遺物

1は調整痕の認められる剥片で、チャート製のものである。やや部厚な横長剥片を素材とし、剥片末端部に微細な調整を施すものである。表面の剥離は多方向から行なわれており、一定ではない。

2は粘板岩製の剥片である。板状に剥離する石質のため、全体の剥離は人為的なものかどう

か不明であり、どのような石器を製作しようとしたのかはわからない。

石種	調整痕	ナイフ 砂石器	尖頭器	石 錘	投 擲 器	削 器	C.A.S. メサ フリフ	C. フリフ	石 片	剥 片	剥 片	石 核	石 片	計
チャート	調整痕							1						1
	N													25
粘板岩	調整痕									2	1			3
	N													75
計	調整痕							1		2	1			4
	N							25		50	25			100

第39表 第6ブロック母岩別資料石器組成表

## 第7ブロック (プレH) (第65・66図, 第40・41表, 図版23)

第7ブロックは長径5m, 短径3mの範囲で石器が集中しており, 集中地点より北にも数点分布している。

出土層位は土層断面図がないため確認は出来ないが, 発掘調査時の記録によるとⅦ層からの出土となっている。あるいはⅦ層より多少レベル的に下に来る可能性もある。

定型的な石器は見られず, チャート製の調整痕の認められる剥片2点が出土している程度である。

### 遺物

第7ブロックからは計49点の石器が出土している。出土した石器の大半はチャート製のものであり, 他に安山岩製の剥片類が若干混入している。なおチャート製の石器はすべて同一母岩であるが, 接合関係は確認できなかった。

1・2はチャート製の調整痕の認められる剥片である。1は剥片末端部に, 2は打面に近い

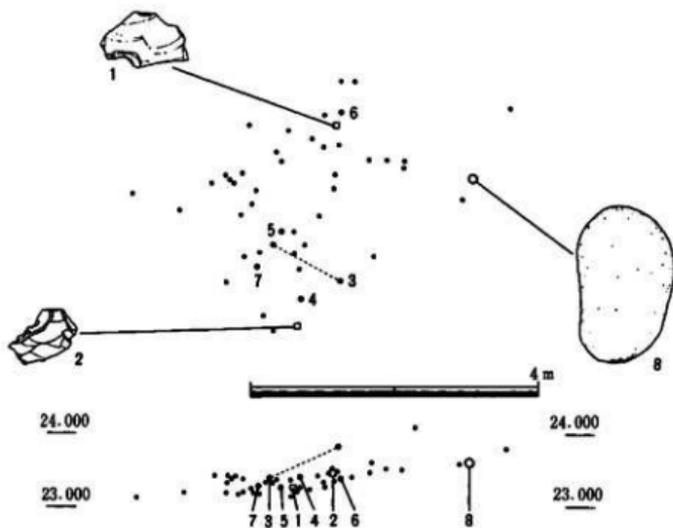
片側縁に調整が施される。

3から5はチャート製の剥片である。剥片の表面に見られる剥離痕より察すると、打面転移はそれほど頻繁にはおこなわれていない。

6はチャート製、7は安山岩製の石核である。双方とも剥片採取方法が全く同一のものと思われ、よって最終的な石核の形状も類似している。どちらも主要剥離面と思われるポジティブな剥離面が確認でき、剥片利用石核である可能性が高い。剥片採取方法は縁辺部より交互に打



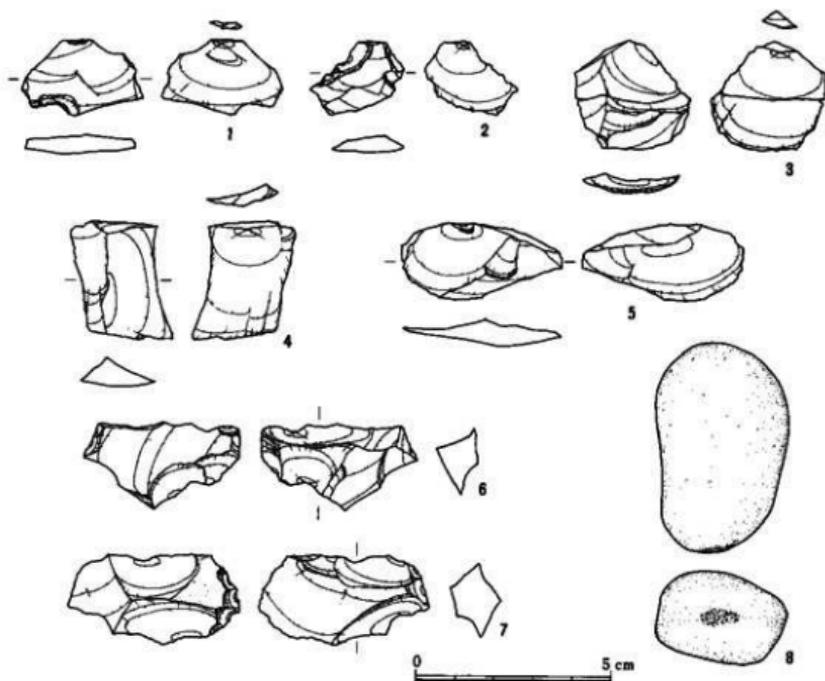
15-05-16



第65図 第7ブロック遺物分布図

撃を加えており、前に押取した剥片のネガティブ面をそのまま打面として活用しているのが窺える。

8は砂岩製の敲石である。微細な敲打痕が確認できる。



第66図 第7ブロック出土石器実測図

標記 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(m)	幅(m)	厚(m)	重量(g)	
1	ブレH-28	調整痕ある剥片	チャート	1.9	3.0	0.5	2.8	
2	ブレH-33	調整痕ある剥片	チャート	1.85	2.4	0.5	1.9	
3	ブレH-44	剥 片	チャート	2.8	2.8	0.5	4.6	
4	ブレH-11	剥 片	チャート	3.0	2.8	1.1	6.6	
5	ブレH-22	剥 片	チャート	2.05	4.1	1.0	5.1	
6	ブレH-32	石 核	チャート	2.2	4.0	1.0	8.1	
7	ブレH-49	石 核	安山岩	2.3	4.3	1.3	11.4	
8	ブレH-39	敲 石	砂 岩	5.3	3.4	2.4	61.5	

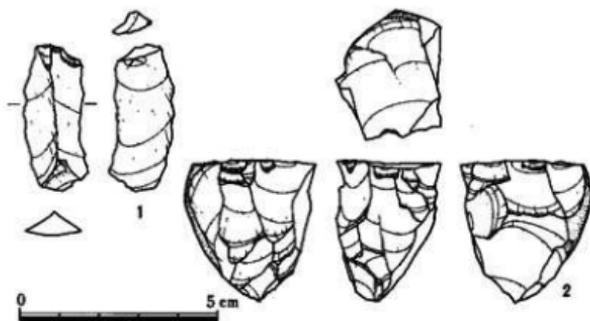
第40表 第7ブロック出土石器表

石種	種類	計															
		ナイフ 形石器	尖頭器	石鏃	鏃頭	角器	ヒメス スチール	ヒ スチール	U- チップ	石片	削片	剥片	砕片	石核	燧石	燧石	燧石
ナール	数量							2				27	12	1			42
	%							4.8				64.3	28.5	2.4			85.6
安山岩	数量										2	1	1				4
	%										50	25	25				8.1
砂岩	数量													1			1
	%																2.1
凝灰岩	数量										1						1
	%																2.1
頁岩	数量												1				1
	%																2.1
計	数量							2				30	13	3	1		49
	%							4.1				61.2	26.5	6.1	2.1		100

第41表 第7ブロック母岩別資料石器組成表

### 第8ブロック (プレ1) (第67図, 第42・43表, 図版23)

第8ブロックからは計5点の石器の出土が確認された。石器は径4mの範囲に散漫に分布している。出土層位は土層断面図がないため確認は出来ないが、発掘調査時の記録によると窪層より出土となっている。石器は凝灰岩製の剥片と石核の他は砕片である。ここでは図示可能な剥片と石核の2点について説明を加える。



第67図 第8ブロック出土石器実測図

#### 遺物

1は凝灰岩製の縦長剥片である。単一打面から連続的に搾取されたものであることが、表面の剥離痕で理解できる。末端部に見られる剥離痕は、石核整形時の剥離痕と思われる。長さ3.6cm, 幅2.1

cm, 厚み0.7cm, 重量3.8gを測る。

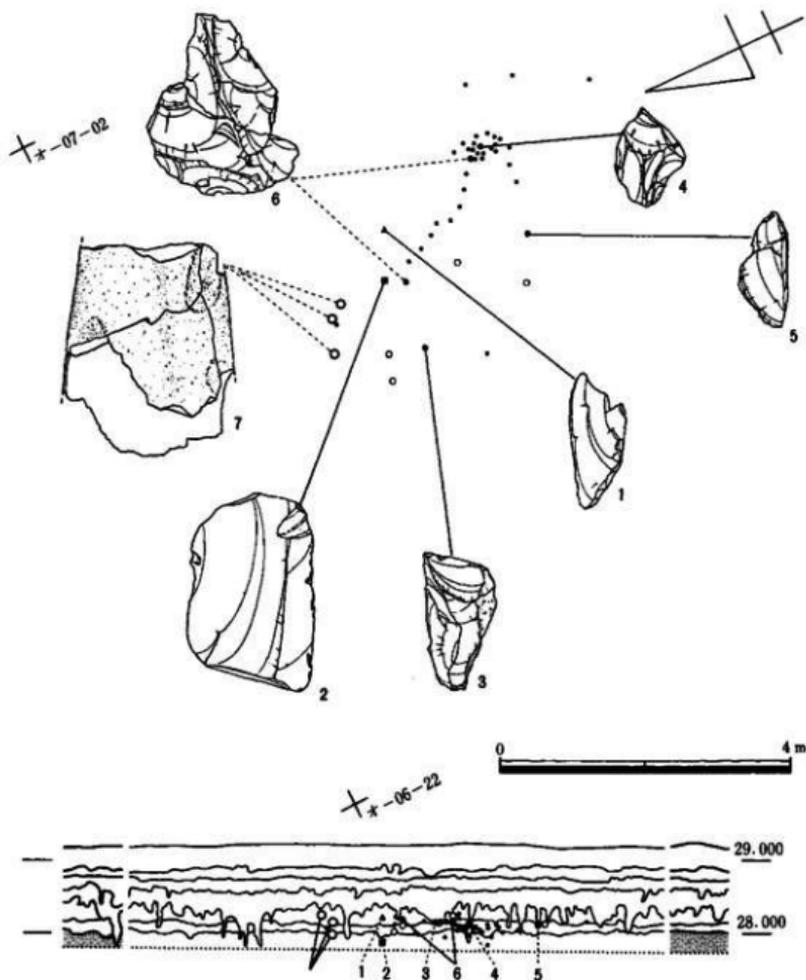
2は凝灰岩製の石核である。ある程度石核の形状を整形した後に、単一の打面より連続的に剥片を搾取しているのが窺える。また剥片搾取の合間に、石核整形のための剥離をおこなって

いる。長さ3.6cm, 幅2.7cm, 厚み3.4cm, 重量37.5gを測る。

**第9ブロック (プレ1G)** (第68・69図, 第42・43表, 図版24)

第9ブロックは, VI層上部からVII層上部にかけて石器が出土し, 特にVI層に分布の中心がみられる。平面分布は径5m内外の円形を呈す。

いずれも破片であるが, ブロック内に安山岩の礫を含み, 一様に被熱している。

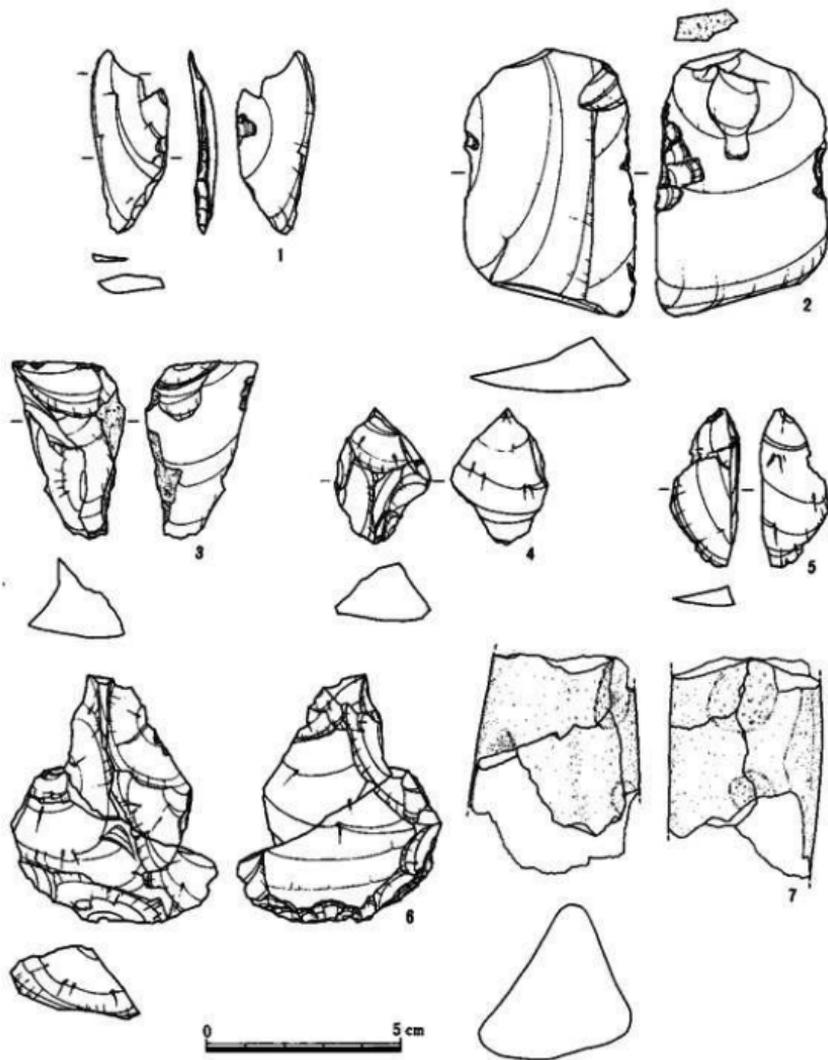


第68図 第9ブロック遺物分布図

石器の石質は大半が黒曜石で、若干珪質頁岩・メノウが含まれる。

遺物

1は黒曜石製のナイフ形石器である。薄い横長剥片を素材とし、打面を除去するように調整を施している。2は珪質頁岩製のスクレイパーである。大型の剥片の両側縁の一部に刃部作出の調整を施す。第9ブロックから出土した珪質頁岩はこの1点のみであり、他に同一母岩より



第69図 第9ブロック出土石器実測図

採回 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(㎝)	幅(㎝)	厚(㎝)	重量(g)	
1	ブレIG-12	ナイフ形石器	黒曜石	4.6	2.0	0.4	3.7	
2	ブレIG-8	スクレイパー	珪質頁岩	6.1	5.3	1.5	46.8	
3	ブレIG-6	調整痕ある剥片	メノウ	4.5	2.9	2.0	17.5	
4	ブレIG-25	調整痕ある剥片	黒曜石	3.3	2.5	1.4	8.8	
5	ブレIG-16	剥片	黒曜石	3.9	1.8	0.5	3.1	
6	ブレIG <sup>9</sup> <sub>29</sub>	剥片石核	黒曜石	7.9	3.4	2.3	50.5	
7	ブレIG-5	敲打痕ある礫	安山岩	7.2	5.8	5.3	150.5	敲打痕あり。

第42表 第9ブロック出土石器表

押取された剥片・石核などは確認されなかった。

3は調整痕のある剥片である。打面を除去し、形状を整える剥離を施すが、最終的に製作しようとした石器の形状は不明である。また側縁部に微細な調整が施される。4は黒曜石製の調整痕のある剥片である。部厚な剥片の打面を除去し、剥片の形状を大きく変える調整を施す。

5は黒曜石製の剥片である。折断面が側縁にみられる。

6は黒曜石製の剥片利用石核である。大型の剥片からさらに剥片を押取している。

7は安山岩製の敲打痕の認められる礫で、断面三角形を呈す。被熱している。

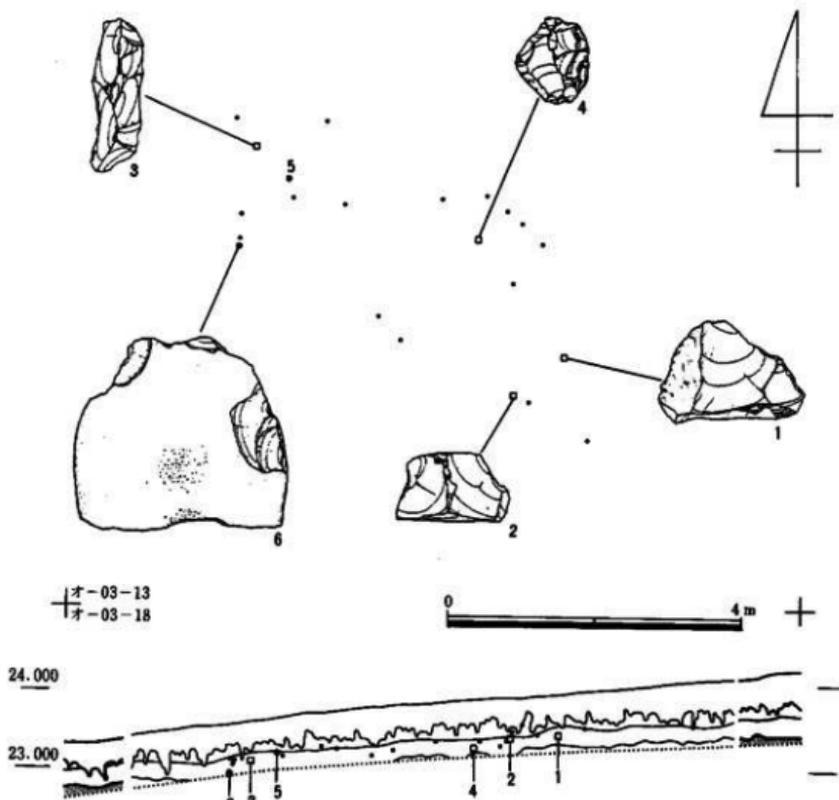
石種	器種 ナイフ 形石器	尖頭器	石鏃	投擲器	削器	D=ス メス -メ	E フレイク	U- フレイク	石片	剥片	剥片	石核	黒石	剥片	計
黒曜石	数量	1					1			13	18	3			36
	重量	2.8					2.8			36.1	50	8.3			78.3
珪質頁岩	数量				1										1
	重量														2.2
メノウ	数量						1								1
	重量														2.2
安山岩	数量													5	5
	重量													10.8	10.8
頁岩	数量												2		2
	重量												4.3		4.3
石英結晶	数量												1		1
	重量												2.2		2.2
計	数量	1			1		2			13	18	3		8	46
	重量	2.2			2.2		4.3			38.3	39.1	6.5		17.4	100

第43表 第9ブロック母岩別資料石器組成表

第10ブロック (プレK) (第70・71図, 第44・45表, 図版24・25)

第10ブロックは、Ⅴ層上部にその分布がみられ、平面分布は長軸6m、短軸3mの楕円形を呈す。

定型的な石器は含まず、調整痕のある剥片が主体となっている。その他に砂岩製の台石が出土している。



オ-03-13  
オ-03-18

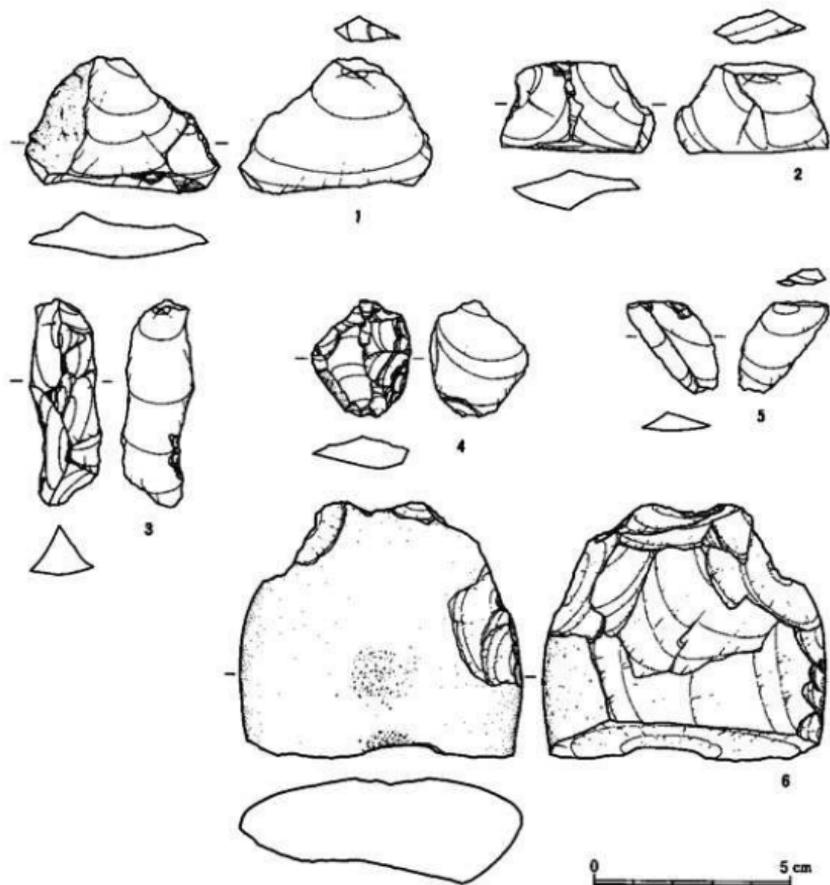
0 4m

第70図 第10ブロック遺物分布図

遺物

1から4はチャート製の調整痕のある剥片である。1・2は横長剥片の側縁部に微細な調整が施され、2は末端部が折断される。3は稜整形の剥片の側縁部に刃部作出の調整を施す。4は形状を整える調整が多方向より施されるが、正面図右側縁にみられる調整は、刃部作出のものとは思えない。

5は安山岩製の剥片である。なお剥片類はすべて平坦打面である。



第71図 第10ブロック出土石器実測図

挿図 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(w)	幅(w)	厚(t)	重量(g)	
1	ブレK-22	調整痕ある剥片	チャート	3.4	4.9	1.1	15.1	
2	ブレK-20	調整痕ある剥片	チャート	2.4	3.9	1.0	9.1	
3	ブレK-5	調整痕ある剥片	チャート	5.2	1.95	1.3	9.8	
4	ブレK-14	調整痕ある剥片	チャート	3.0	2.55	0.8	5.5	
5	ブレK-7	剥 片	安山岩	2.6	1.9	0.55	2.2	
6	ブレK-4	台 石	砂 岩	6.4	7.2	2.8	176.9	敲打痕あり。

第44表 第10ブロック出土石器表

6は砂岩製の台石である。原石面に敲打したと思われる痕が2ヶ所認められる。台石として使用した後に剥片剥離が行なわれており、廃棄される直前の石器の性格を考えると、器種は石核とするのがよいのかもしれない。末端部の折断面は、台石として機能していた際の敲打により分割したものである。

石材	器種	ナイフ 剥片	尖頭器	石鏃	石錐	石鏃	計									
																ビニル メッシュ
チャート	敲打													10	2	16
	N													25		80
安山岩	敲打													3		3
	N															15
砂岩	敲打															1
	N															5
計	敲打													4		13
	N													20		65

第45表 第10ブロック母岩別資料石器組成表

### 第11ブロック (プレ1N) (第72・73図, 第46・47表, 図版25)

第11ブロックは第17・19ブロックと近接した位置にあるため調査時のブロックの名称は同一であるが、属する層位が異なり、平面分布も離れているため整理段階で分割した。第11ブロックはVI層に位置するものである。

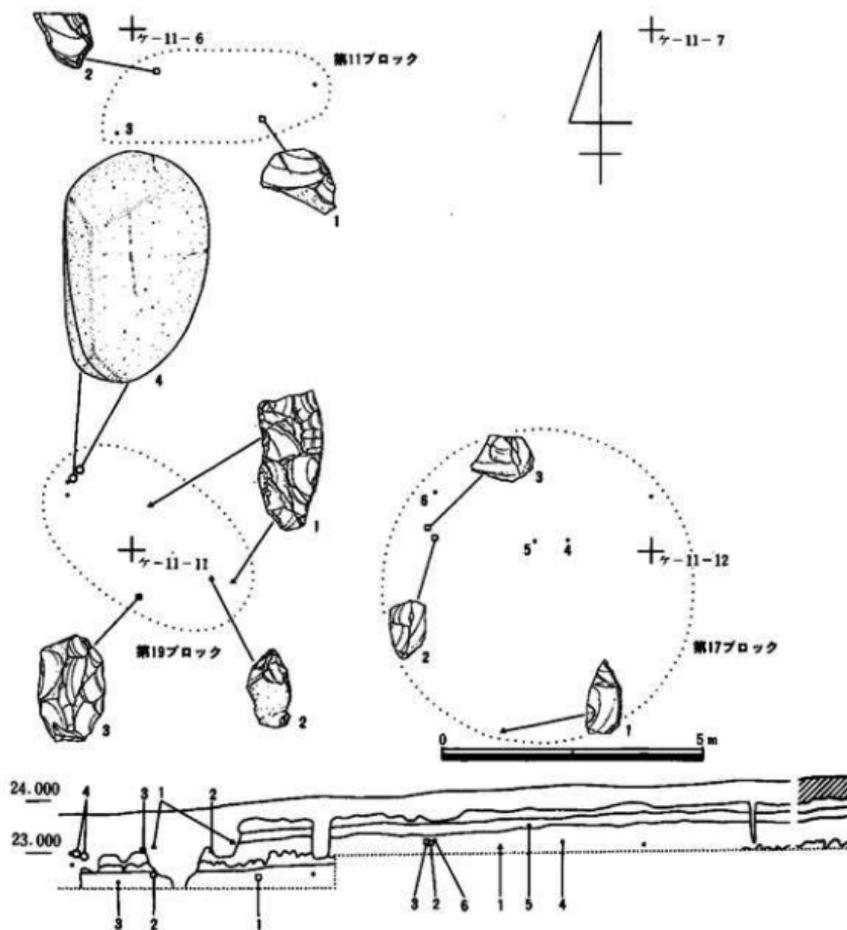
出土した遺物は4点でいずれも石質はチャートである。出土層位はVI層であり、散漫な分布を見る。(第72図点線部分)

揮回 番号	遺物番号	器種	石質	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
1	プレ1N-15	調整痕ある剥片	チャート	3.2	3.0	0.4	2.4	
2	プレ1N-16	調整痕ある剥片	チャート	2.2	2.3	0.4	1.9	
3	プレ1N-17	剥片	安山岩	2.2	2.6	0.5	3.4	

第46表 第11ブロック出土石器表

石材	器種	ナイフ 剥片	尖頭器	石鏃	石錐	石鏃	計								
															ビニル メッシュ
チャート	敲打													1	3
	N													75	75
安山岩	敲打													1	1
	N													100	25
計	敲打													2	4
	N													50	100

第47表 第11ブロック母岩別資料石器組成表

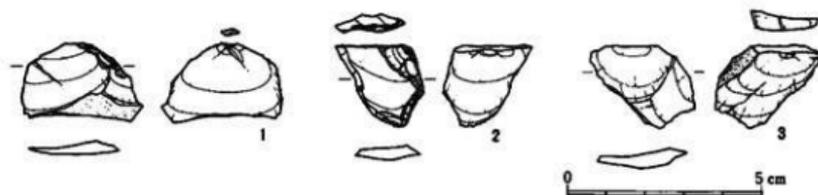


第72図 第11ブロック遺物分布図

**遺物**

4点のうち図示可能なものは3点であり、石材はチャート製のものが3点、安山岩製の剥片が1点混入する。

1・2は調整痕の認められる剥片である。1は打面側の側縁に微細な調整を施す。2は剥片



第73図 第11ブロック出土石器実測図

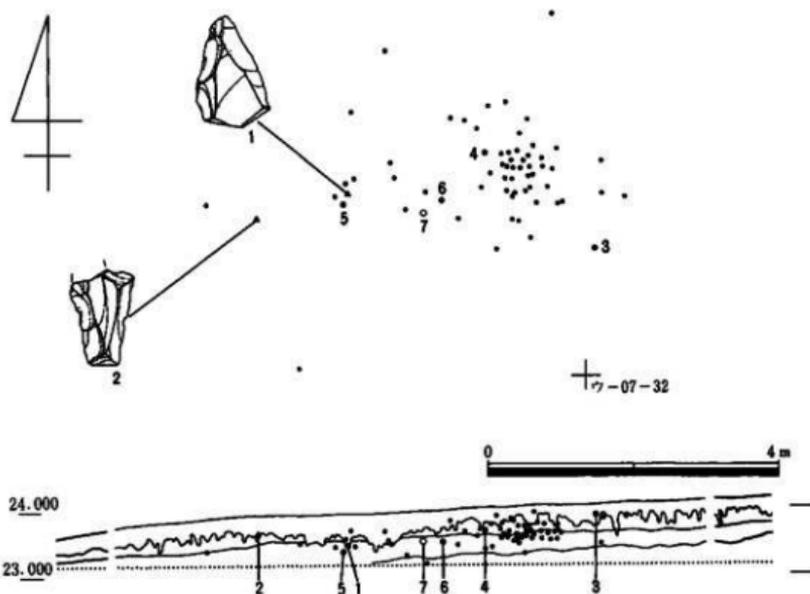
の側縁部に調整を加えるものである。

3は安山岩製の剥片である。原石面の一部に残す。

### 第12ブロック (プレC) (第74・75図, 第48・49表, 図版25・26)

第12ブロックは長径8m, 短径6mの範囲で石器が集中して出土している。出土層位はソフトーム下部からⅥ層上部にかけてであり, Ⅵ層に属するものと思われる。

石器の石材は安山岩, 黒曜石, 凝灰岩であり, 安山岩, 黒曜石で大半を占める。量的には安山岩より黒曜石が多いが, 黒曜石のほとんどは碎片であり, 同一母岩内の黒曜石の碎片が占め

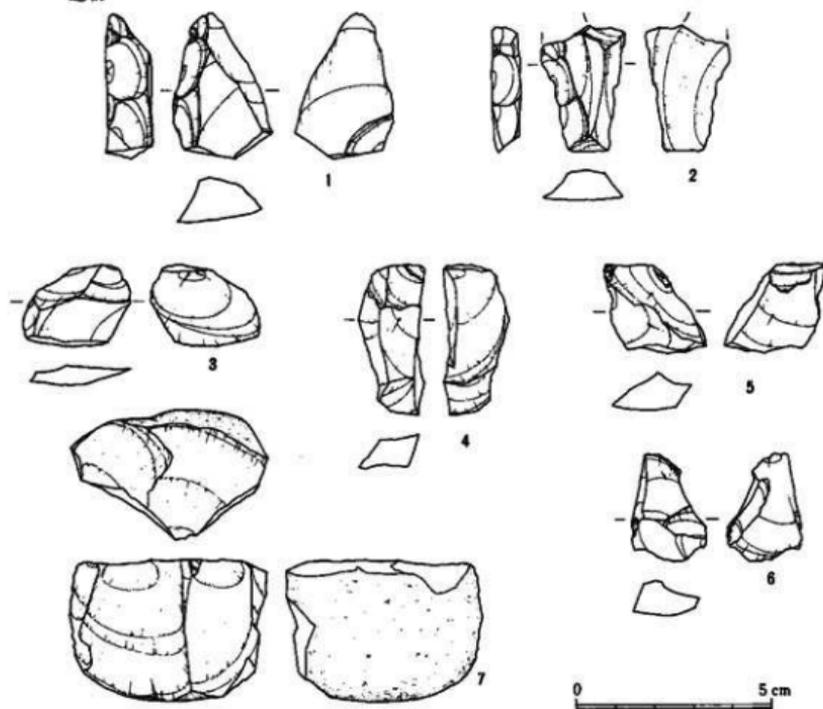


第74図 第12ブロック遺物分布図

る割合はかなり高いことがわかる。

定型的な石器はナイフ形石器 2 点のみであり、黒曜石製の石器の存在は確認されなかった。

遺物



第75図 第12ブロック出土石器実測図

標図 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
1	ブレC-55	ナイフ形石器	凝灰岩	3.3	2.5	1.2	10.8	基部欠損
2	ブレC-28	ナイフ形石器	安山岩	3.2	2.15	0.7	5.3	先端部欠損
3	ブレC-20	剥 片	凝灰岩	2.0	2.8	0.6	3.6	
4	ブレC-4	剥 片	安山岩	3.85	1.8	0.9	6.6	
5	ブレC-56	剥 片	黒曜石	2.3	2.6	0.9	5.6	
6	ブレC-50	剥 片	黒曜石	2.9	1.9	0.8	3.4	
7	ブレC-27	石	凝 灰 岩	3.7	5.1	3.1	64.8	原石面残す。

第48表 第12ブロック出土石器表

1・2はナイフ形石器である。1は凝灰岩製で素材剥片の末端部側を先端としている。基部が欠損しているが、片側縁のみの調整と思われる。2は安山岩製で、先端部が欠損している。

横長剥片を素材とし、打面側を除去するように調整を施している。

3から6は剥片である。3は凝灰岩製、4は安山岩製、5・6は黒曜石製である。剥片相互に、形状における共通点は見られず、4の剥片以外では表面に見られる剥離痕の方向もまちまちである。

7は安山岩製の石核である。単一打面から剥片を搾取している。

石材	種類	ナイフ 形石器	尖頭器	石 錐	錐 器	削 器	X・M・S・R ミナホ・ム	U- フレイト	石 斧	削 片	剥 片	剥 片	石 核	石 器	石 器	石 器	計
安山岩	数量	1									10	11	1				22
	重量	4.3									43.5	47.8	4.3				32.9
凝灰岩	数量	1									3						4
	重量	25									75						5.7
黒曜石	数量										5	38					43
	重量										11.6	88.4					81.4
計	数量	2									18	49	1				70
	重量	2.7									35	70	1.3				108

第49表 第12ブロック母岩別資料石器組成表

### 第13ブロック (プレIK) (第76~81図, 第50~52表, 図版26~28)

第13ブロックは長軸12m, 短軸9mの範囲に分布し、1つのブロックとしてはかなり広範囲で石器が出土しているのがわかる。細かく平面分布を観察すると、北側の径4mほどの集中地点と、南側の特に密に分布する部分とにブロックが分離する感があるが、接合関係が確認されたため、同一のブロックとして扱うことにする。

出土層位はソフトローム層の下部に集中しており、Ⅱ層からⅤ層にかけてに属するものと思われる。

石器はナイフ形石器を中心に彫刻刀形石器、削器等多様である。そのほかに黒曜石、珪質頁岩の接合資料が確認されている

使用されている石材は多様であり、見た目ではあるが、同一名の石材でも明らかに原石が異なるものがある。黒曜石、珪質頁岩がその例であり、特に黒曜石に関しては彫刻刀形石器1点の石質が、同ブロックで出土しているそれと異なり、単独の搬入品である可能性が高い。第13ブロックにおいて出土した石器の石質の観察を以下に記す。

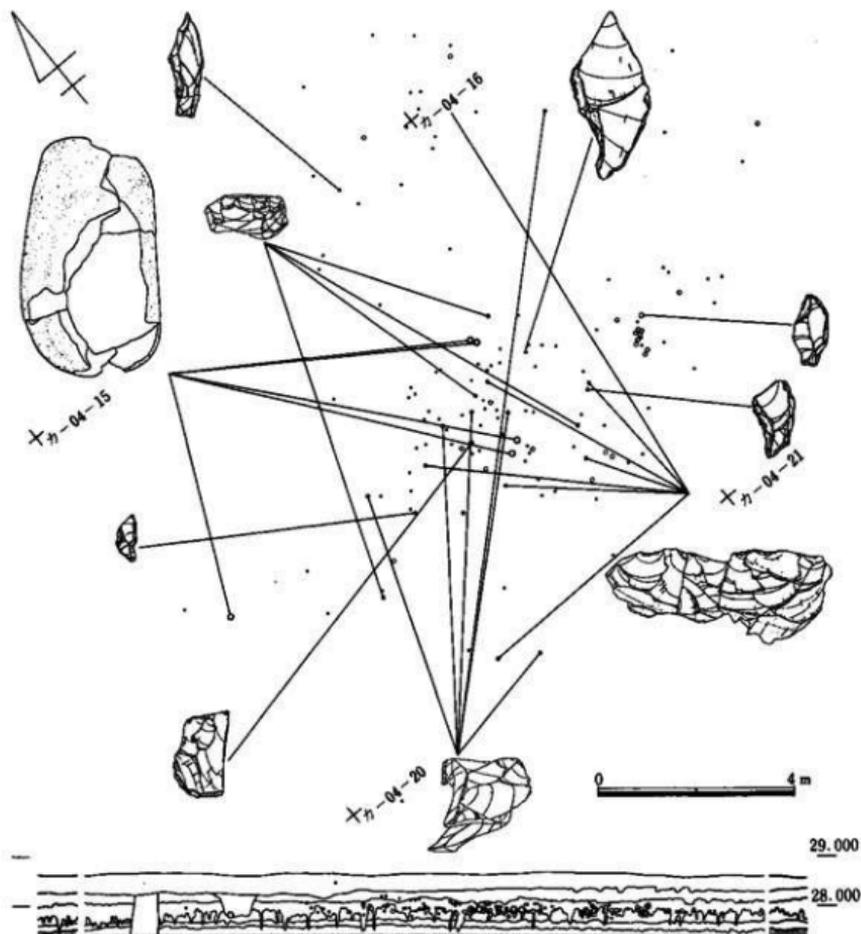
黒曜石A : 夾雑物を多く含み、節理面は荒れた感がある。

黒曜石B : 夾雑物を全く含まず、黒色の縞状の模様が見られる。黒曜石Aよりガラス質の感がある

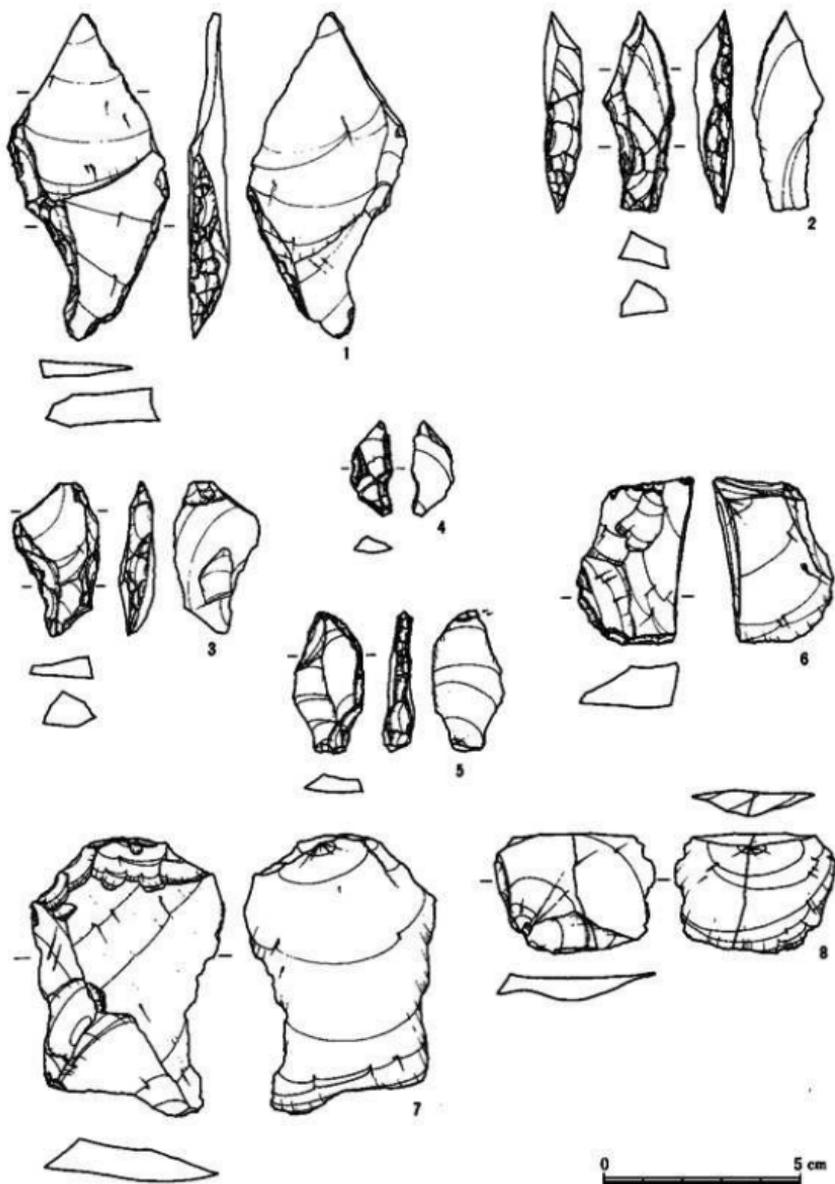
珪質頁岩A : 乳白色であるが、ところにより赤色が混在している。剥離面は光沢があるが、

細かい凹凸が見られる。

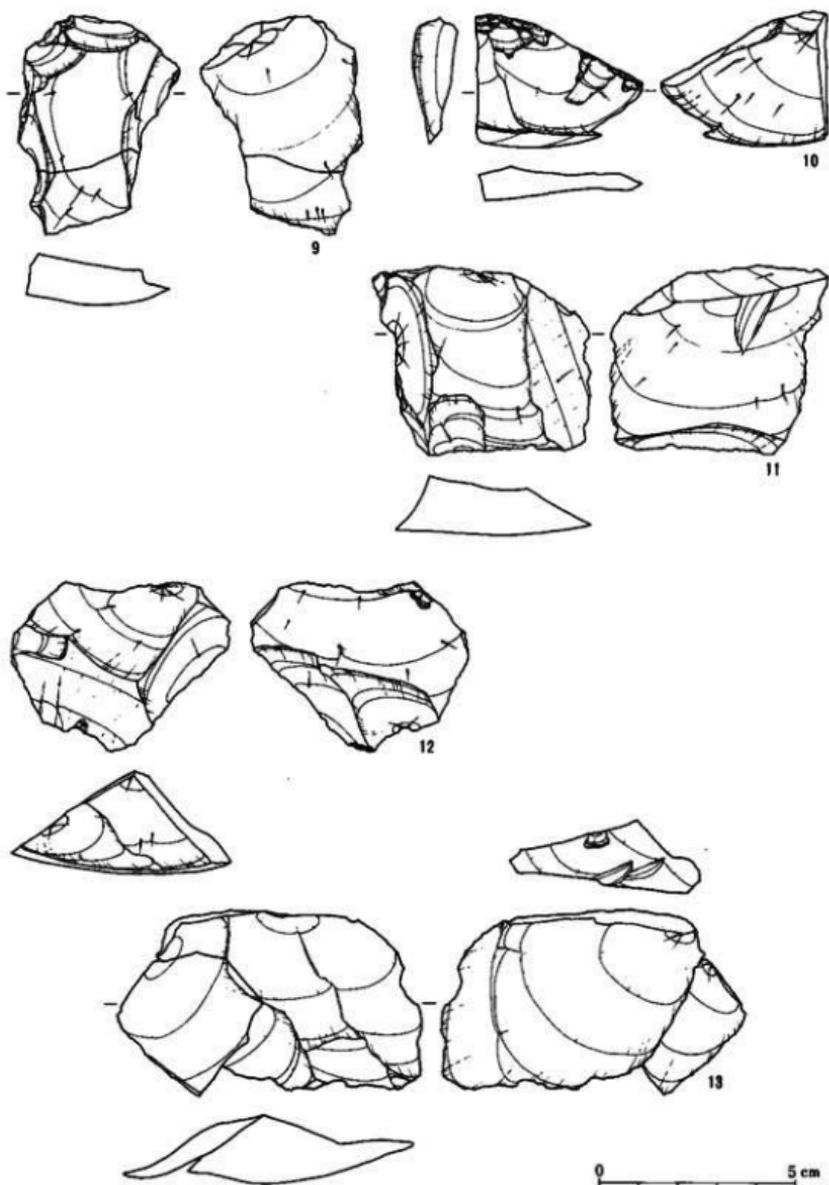
珩質頁岩B：色調は黄色で原石面に近い所は茶色を呈す。珩質頁岩Aに比べ、剥離面がすべすべしている。



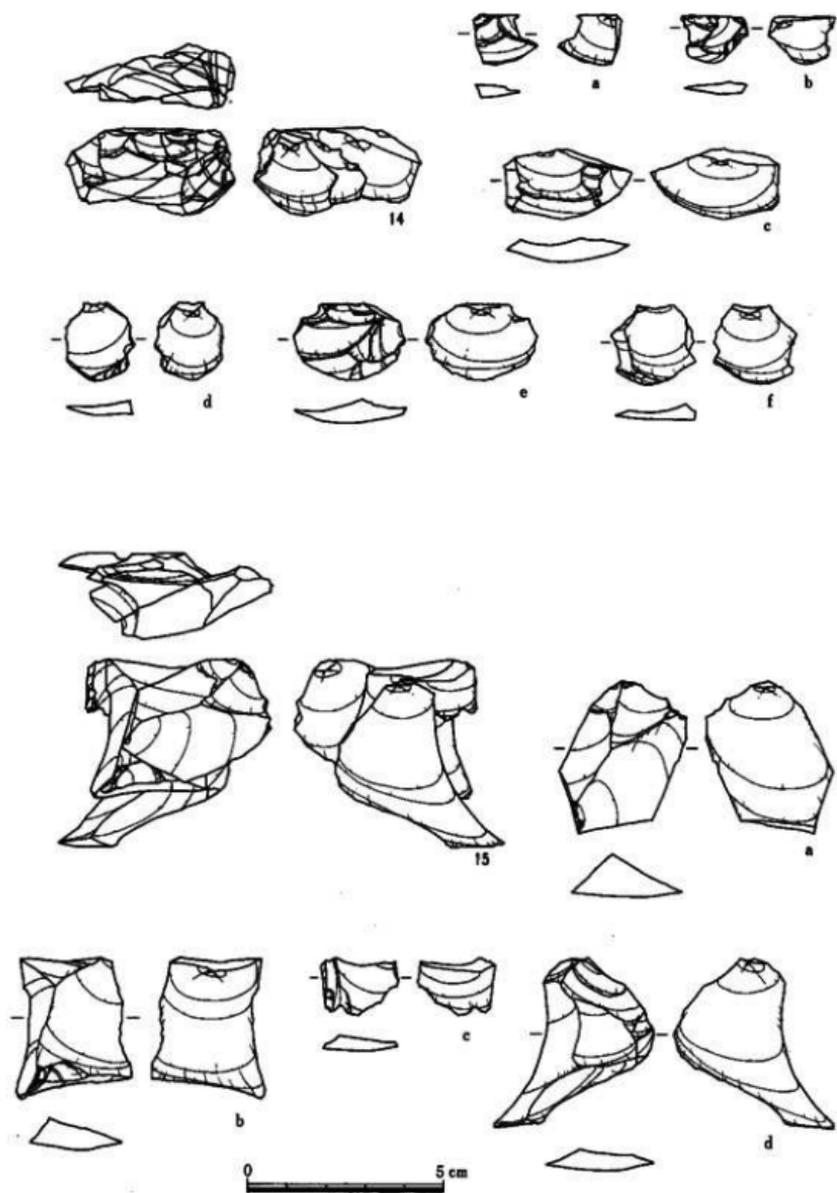
第76図 第13ブロック遺物分布図



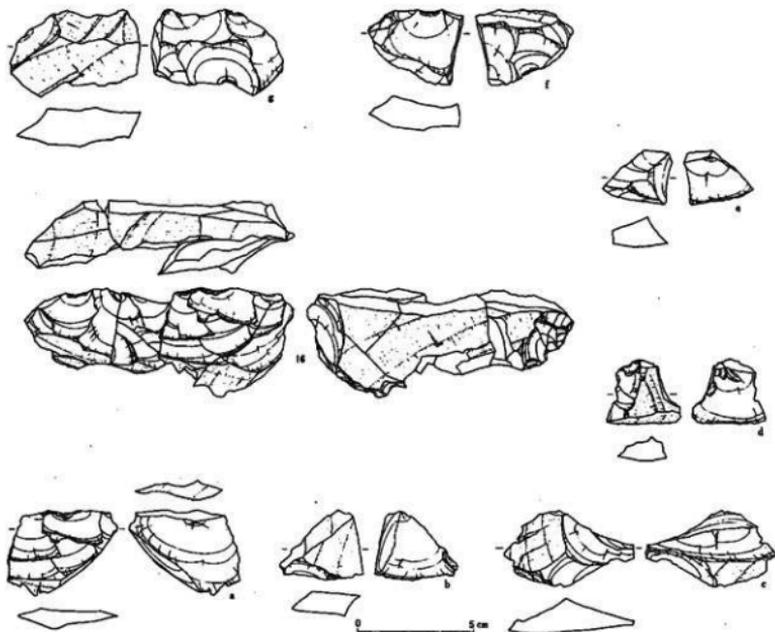
第77図 第13ブロック出土石器実測図(1)



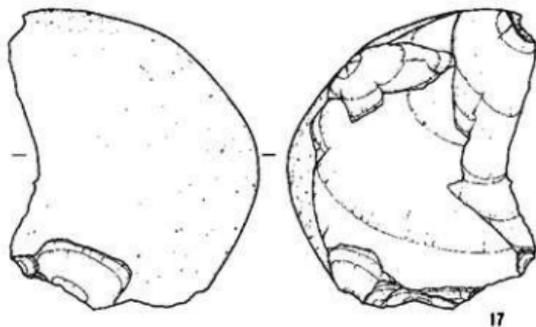
第78図 第13ブロック出土石器実測図(2)



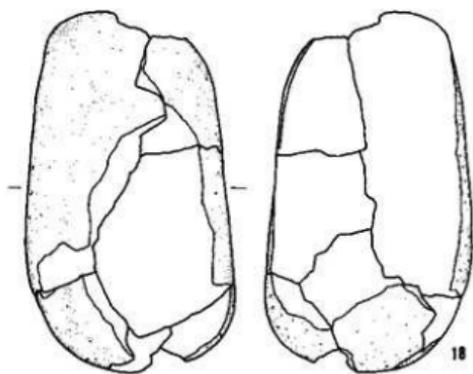
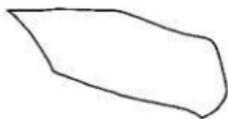
第79図 第13ブロック出土石器実測図(3)



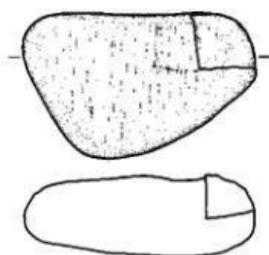
第30図 第13ブロック出土石器実測図(4)



17



18



19



第81図 第13ブロック出土石器実測図(5)

## 遺物

第13ブロックより出土した石器はナイフ形石器を中心に、彫刻刀形石器、削器などがそのほかに含まれている。また礫片が伴い、総量で8個体分あるものと思われる。

1から4はナイフ形石器である。大半が黒曜石製で、2のみが珩質頁岩を素材としている。

1は大型の剥片を素材とし、打面に近い両側縁に調整を施している。左側縁の調整は主要剥離面側、右側縁の調整は表面側よりおこなわれている。2は素材剥片の打面側と末端部に調整を加えている。打面側の調整は、打面側を折断した後に加えられたものと思われる。3は剥片の打面と末端部に調整を加えている。先端部に見られる剥離は欠損部分である。4は小型の剥片の側縁に調整を加え形状を整えている。

5は黒曜石製の彫刻刀形石器である。先に述べたように同一の石材の剥片、碎片が見られな

検出 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
1	ブ1K-50	ナイフ形石器	黒曜石A	8.4	4.1	1.1	24.9	
2	ブ1K-116	ナイフ形石器	珩質頁岩A	5.2	1.8	0.9	7.7	
3	ブ1K-44	ナイフ形石器	黒曜石A	3.9	2.3	0.9	6.2	
4	ブ1K-94	ナイフ形石器	黒曜石A	2.4	1.1	0.5	1.0	
5	ブ1K-17	彫刻刀形石器	黒曜石B	3.5	1.8	0.8	3.9	
6	ブ1K-76	削 器	黒曜石A	4.4	2.7	1.3	17.4	
7	ブ1K-57	剥 片	黒曜石A	7.0	4.9	1.4	36.6	
8	ブ1K- <sup>87</sup> <sub>136</sub>	剥 片	黒曜石A	4.1	2.9	0.6	7.6	
9	ブ1K- <sup>4</sup> <sub>117</sub>	剥 片	黒曜石A	5.6	3.9	1.3	25.8	
10	ブ1K-38	剥 片	黒曜石A	3.3	4.4	1.2	12.1	
11	ブ1K-129	剥 片	黒曜石A	4.8	5.9	1.9	42.6	
12	ブ1K-68	剥片石核	黒曜石A	4.4	5.6	2.6	40.0	
13	<sup>a-04-16.2</sup> ブ1K-136	剥 片	珩質頁岩A	4.7	7.7	1.8	52.7	
14		接合資料	珩質頁岩B					
a	ブ1K-97	碎 片					0.6	
b	ブ1K-140	碎 片					0.7	
c	ブ1K-141	剥 片		1.9	3.2	0.6	3.4	
d	ブ1K-5	剥 片		1.9	1.7	0.4	1.5	
e	ブ1K-100	剥 片		1.9	2.9	0.65	3.1	
f	ブ1K-81	剥 片		1.9	2.1	0.4	1.4	
15		接合資料	珩質頁岩B					
a	ブ1K-139	剥 片		3.8	3.2	1.1	8.8	
b	ブ1K-36	剥 片		3.5	2.9	0.9	8.0	
c	ブ1K-126	剥 片		2.0	1.4	0.5	0.8	
d	ブ1K-52	剥 片		3.3	4.9	0.6	6.1	

第50表 第13ブロック出土石器表(1)

採掘 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
16		接合資料	黒曜石A					
a	フレIK-130	剥片		3.8	4.7	1.2	15.1	
b	フレIK-91	剥片		3.1	3.6	1.25	9.9	
c	フレIK-45	剥片		3.2	5.2	1.7	18.7	
d	フレIK-2	剥片		3.1	3.2	1.2	8.5	
e	フレIK-59	剥片		2.3	2.8	1.3	6.0	
f	フレIK-34	剥片		3.3	4.2	1.4	19.9	
g	フレIK-73	剥片石核		3.3	5.6	2.0	29.1	
17	フレIK-142	石板	安山岩	9.9	11.2	3.8	425.5	
18	フレIK-43/4 49,71,123	礫	安山岩	12.3	7.2	7.1	549.6	
19	フレIK <sup>35</sup> <sub>29</sub>	礫	連化木	5.0	8.0	2.7	145.4	

第51表 第13ブロック出土石器表(2)

石材	器種	ナイフ 形石器	彫削刀 形石器	石 錐	錐 器	削 器	C.A.A. ヌケモノ	P- フレイク	U- フレイク	石 屑	削 片	剥 片	砕 片	石 核	磨 石	磨 片	計
黒曜石A	数値	3				1						38	20	5			67
	%	4.5				1.5						56.7	29.8	7.5			45.6
黒曜石B	数値		1														1
	%																0.7
遠賀真岩 A	数値	1										2	3	1			7
	%	14.3										29.5	42.9	14.3			4.8
遠賀真岩 B	数値											12	16				28
	%											42.9	57.1				19
安山岩	数値											3				29	23
	%											13.1				85.9	15.6
砂 岩	数値											1				5	6
	%																4.1
石灰質砂	数値														2		2
	%																1.3
片麻岩	数値															12	12
	%																8.2
連化木	数値															1	1
	%																0.7
計	数値	4	1			1						56	39	6		40	147
	%	2.7	0.7			0.7						38.1	26.5	4.1		27.2	100

第52表 第13ブロック母岩別資料石器組成表

いことから搬入品である可能性が高い。調整は片側縁のみに止まり、先端部に現状で2条のフットが確認できる。打面を残している。

6は黒曜石製の削器である。右側縁の剥離面は剥片採取後に折断されたものと思われる。刃部は荒い調整により作出されており、調整が施される部位からすると搔器との見方もあるが、調整の形状が搔器のものとは異なるため、削器とした。

7から11は黒曜石製の剥片である。剥片の形状は一定しておらず、大きさも大小様々である。概して言えるのは剥片採取後、折断しているものが多いことである。また剥片剥離工程における打面は一定しておらず、頻りに打面を転移しているのが、各剥片に残る剥離の方向より窺える。10の剥片の表面上部に見られる微細な剥離は、頭部調整痕である。

12は剥片利用石核である。かなり大型で部厚な剥片より更に剥片を搾取している。

13は珪質頁岩製の剥片で、2のナイフ形石器と同一の石材である。

14・15は珪質頁岩製の剥片が接合したものである。この例を見ると、剥片剥離工程は打面再生→頭部調整→剥片搾取としているのが窺える。

16は黒曜石製の接合資料である。各剥片は終始上部に見られる節理面を打面としており、また多くの剥片が折断されている。剥片は一様に部厚なものであり、16gの剥片利用石核に限らずほとんどのものが剥片利用石核に成りうる可能性がある。

17は安山岩製の石核である。原石の形状は扁平であったと思われる。しかし第13ブロックで出土している同一の安山岩製の剥片はごく少数である。

18は安山岩製の礫が接合したものである。一様に被熱している。第13ブロックからは安山岩を中心として、砂岩、石英斑岩、片麻岩等の礫片が出土している。

19は珪化木である。被熱している様子は見られない。実測図上部に年輪が見られるものである。

#### 第14ブロック (プレB) (第82・83図、第53表、図版29)

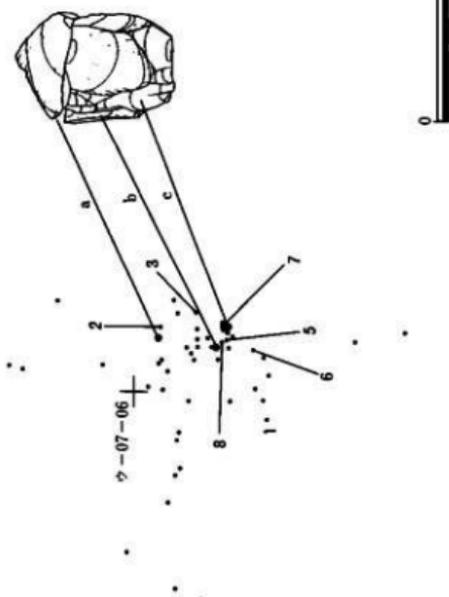
第14ブロックは径5mの範囲で石器が出土している。ソフトローム層の下部に集中して上下50cmほどの垂直分布を見るが、N層下部に属するものと思われる。

出土した石器はすべて安山岩製のものであり、定型的な石器は確認できなかった。出土している安山岩は水和層が発達し、母岩別に識別するのは困難であるが、石核の数より察すると4個体分の母岩が存在していた可能性が高い。

#### 遺物

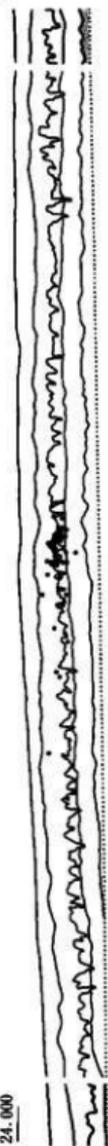
1・2は同一母岩と考えられ、2の石核を観察すると、上下に打面を設定し、連続的に剥片を搾取しているのが窺える。

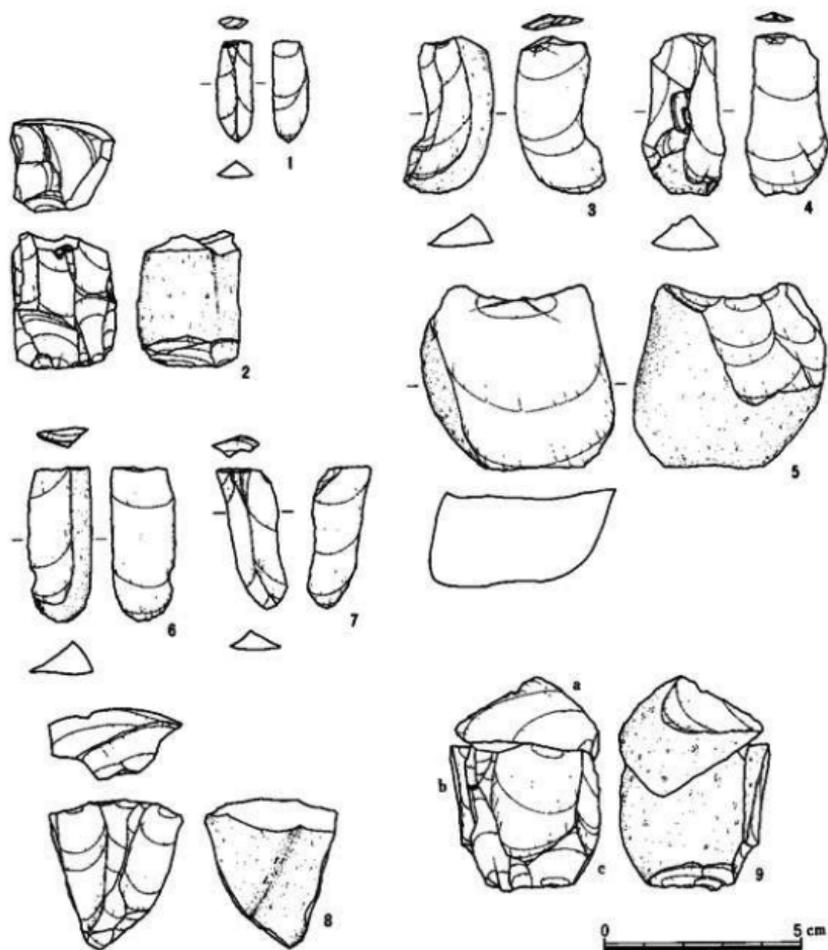
3から5はやはり同一母岩であるが、5の石核からは3・4の剥片を搾取した形跡は見られ



第82図 第14アロック遺物分布図

24,000





第83図 第14ブロック出土石器実測図

ず、5に対応する石核の存在が考えられ、それより掬取された剥片と思われる。

6から8も同一母岩であり、8の石核は2の石核に対し、単一の打面である。よって石核の形状も立方体ではなく円錐に近くなっている。6・7の剥片の表面の剥離痕はすべて同一方向からのものであり、共に打面側を折断している。

9は接合資料である。9cの石核に打面再生剥片(9a)と剥片(9b)が接合している。2の石核と同じく上下両端に打面を有するものである。この資料を見ると、打面再生は頻繁には行なわれず、数回の打撃によって打面を作出していることが窺える。

押図 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(m)	幅(m)	厚(m)	重量(g)	
1	プレB-34	剥片	安山岩	2.65	0.9	0.5	1.2	
2	プレB-17	石核	安山岩	3.5	2.5	2.7	28.5	
3	プレB-31	剥片	安山岩	4.0	2.95	0.9	7.9	
4	プレB-35	剥片	安山岩	4.2	2.15	1.0	8.3	
5	プレB-25	石核	安山岩	4.7	4.8	2.4	74.2	
6	プレB-29	剥片	安山岩	3.9	1.65	0.9	6.4	
7	プレB-42	剥片	安山岩	3.6	1.7	0.5	2.6	
8	プレB-23	石核	安山岩	4.0	3.5	1.7	23.8	
9		接合資料						
a	プレB-46	剥片	安山岩	3.65	3.55	0.8	8.5	打面再生剥片
b	プレB-39	剥片	安山岩	2.7	1.6	0.4	1.9	
c	プレB-45	石核	安山岩	4.0	3.6	2.0	43.4	

第53表 第14ブロック出土石器表

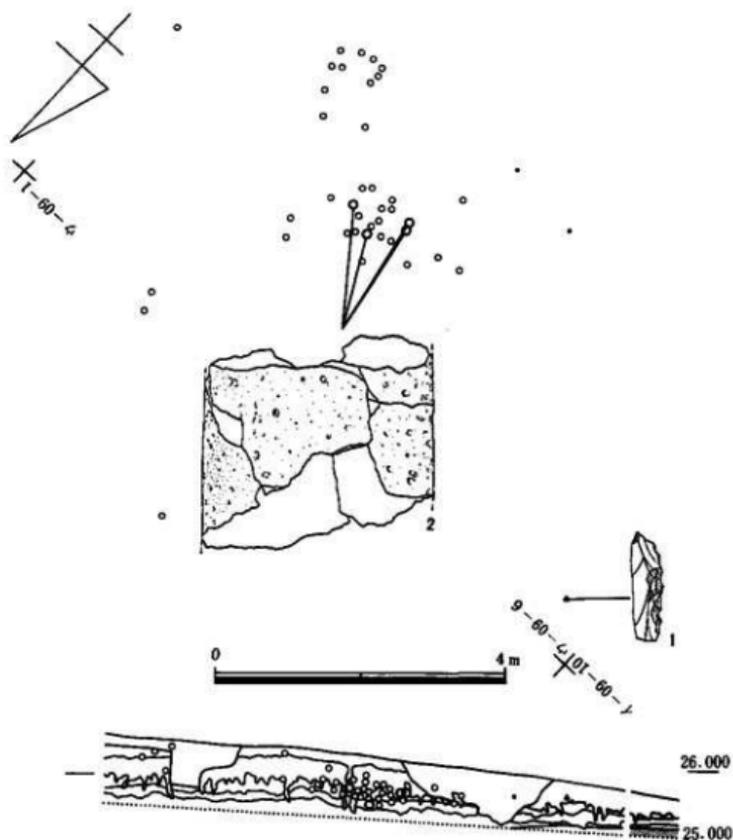
第15ブロック (プレ1B) (第84・85図, 第54・55表, 図版29)

押図 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(m)	幅(m)	厚(m)	重量(g)	
1	ウ-09-6.2	ナイフ形石器	頁岩	3.7	1.1	1.0	3.6	
2	プレB <sup>33.41</sup> 33.41	磯	石英斑岩	7.4	7.8	5.8	434	

第54表 第15ブロック出土石器表

石種	数量	%	ナイフ 形石器	実器類	石核	石片	剥片	D.ス. スカー フ	D. フリフ	石芽	剥片	剥片	片	石核	石片	石片	計	
																		数量
頁岩	数量		1															1
	%																	2.3
頁岩石	数量												1					1
	%																	2.3
ノノウ	数量													1				1
	%																	2.3
砂岩	数量																28	28
	%																	65
安山岩	数量																3	3
	%																	7.3
石英斑岩	数量																9	9
	%																	20.8
計	数量		1										2				40	43
	%		2.3										4.7				95	100

第55表 第15ブロック母岩別資料石器組成表



第84図 第15ブロック遺物分布図

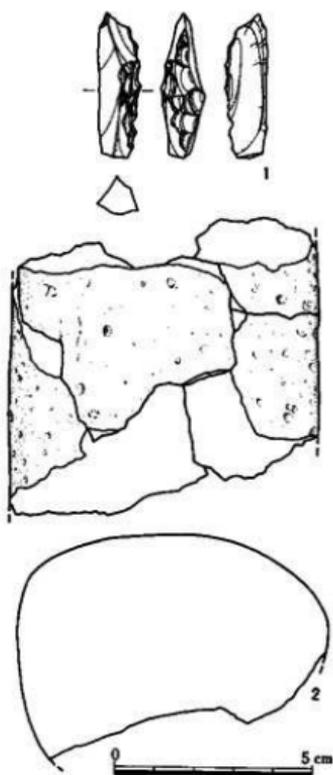
第15ブロックは遺物のほとんどが礫片であり、出土している剥片類も黒曜石、メノウ、頁岩が各1点ずつと極めて少数である。礫片は砂岩が大半を占めているが、小破片なため砂岩、安山岩、石英斑岩とも1個体分であると思われる。

頁岩製のナイフ形石器が1点出土しているが、礫群の範囲とは離れており、伴うものかどうかは不明である。

分布範囲は長径7.5m、短径5mであり、出土層位はソフトローム層下部である。N層下部に属するものと思われる。

#### 遺物

1は黒色を呈す頁岩製の剥片を素材とし、打面を除去するように調整を加えたものである。



第85図 第15ブロック出土石器実測図

### 第16ブロック (プレG) (第86～88図, 第56・57表, 図版30・31)

第16ブロックは長径5m, 短径4mの範囲で遺物が分布しており, ソフトロームの下部に40cmの垂直分布を見る。層位的にはN層下部に属するものと思われる。

石器はナイフ形石器が主体であり, 石材は安山岩, 頁岩で出土している石器のほとんどを占める。他に礫群を石器の分布範囲内に含み, 分布範囲の中でも, ある程度の礫群の範囲として括れる感がある。

石器の石質であるが, 多様であり, 同一名の石材においても個体別に分類できる。以下におのおのの石材の特徴を附記する。

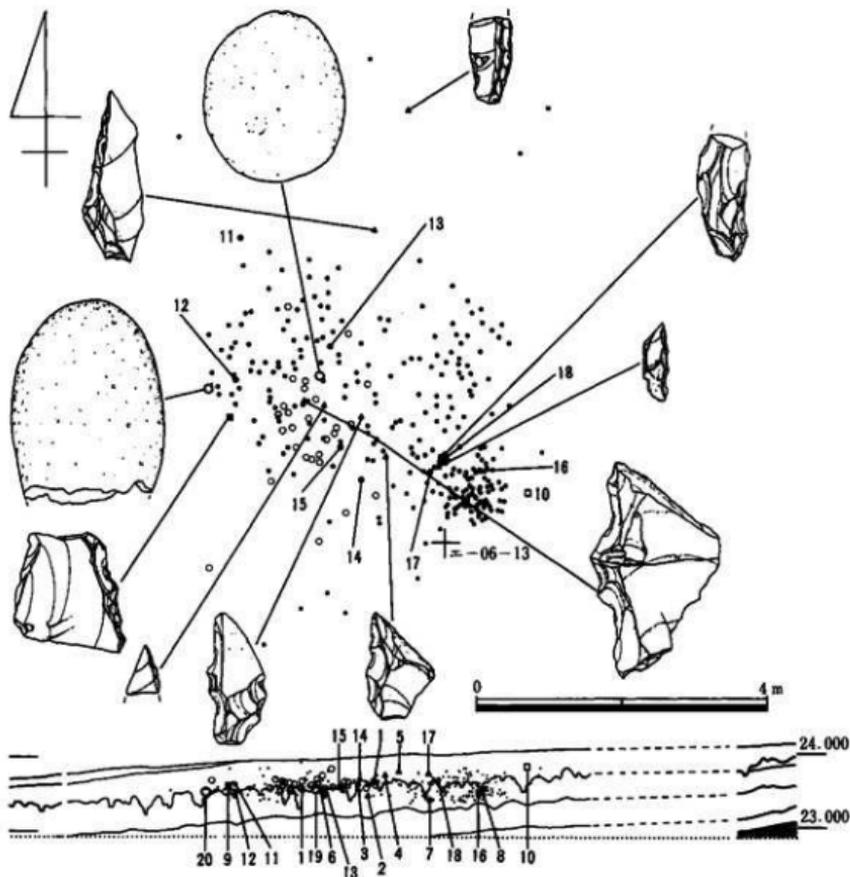
凝灰岩A: 色調は薄い緑色を呈し, 石器の表面は水和層が著しく発達しており, 剥離痕の切りあい関係を把握するのが困難である。欠損面は黒色あるいは灰色を呈す。

凝灰岩B: 色調は灰色を呈す。きめの細かいものであり, 量的にはごく少量であるが, 0.5

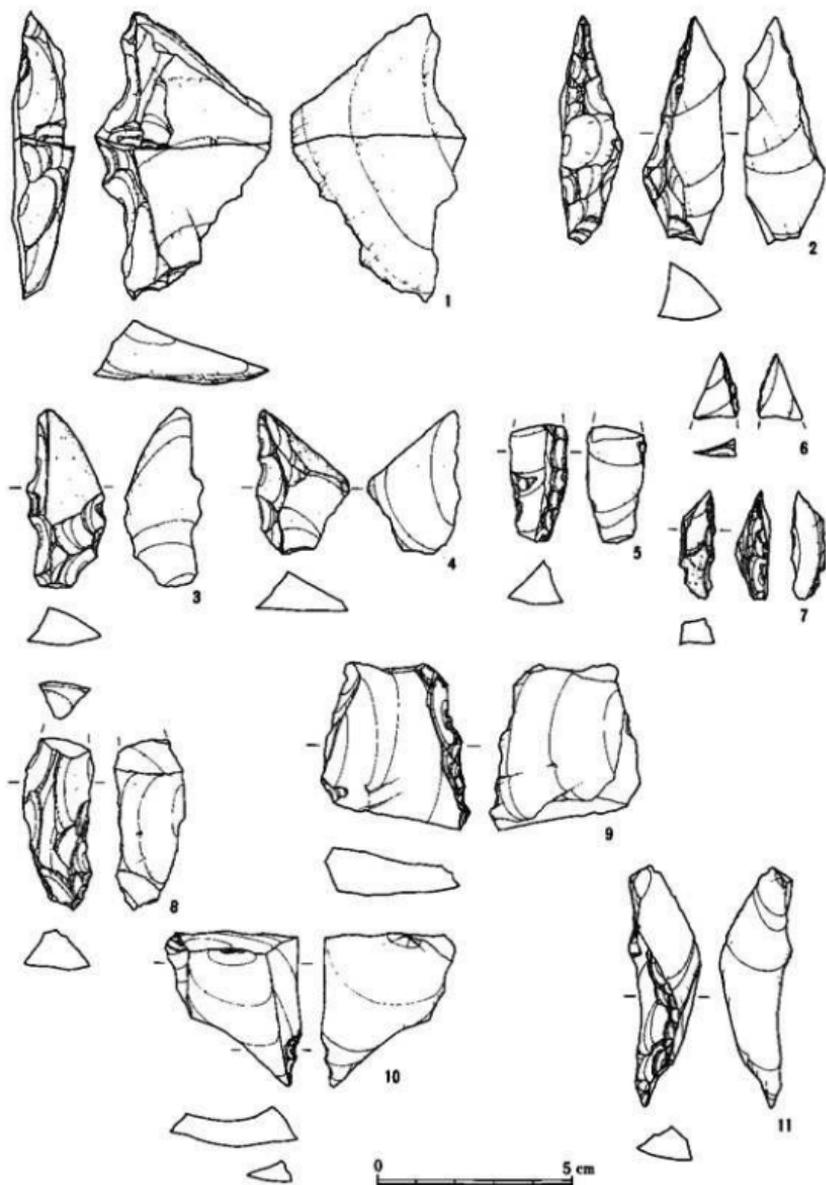
mm程の夾雑物を含んでいる。

頁岩A : 黒色あるいはこげ茶色を呈し、原石面は黄土色である。きめがこまかいが、頁岩B程ではない。

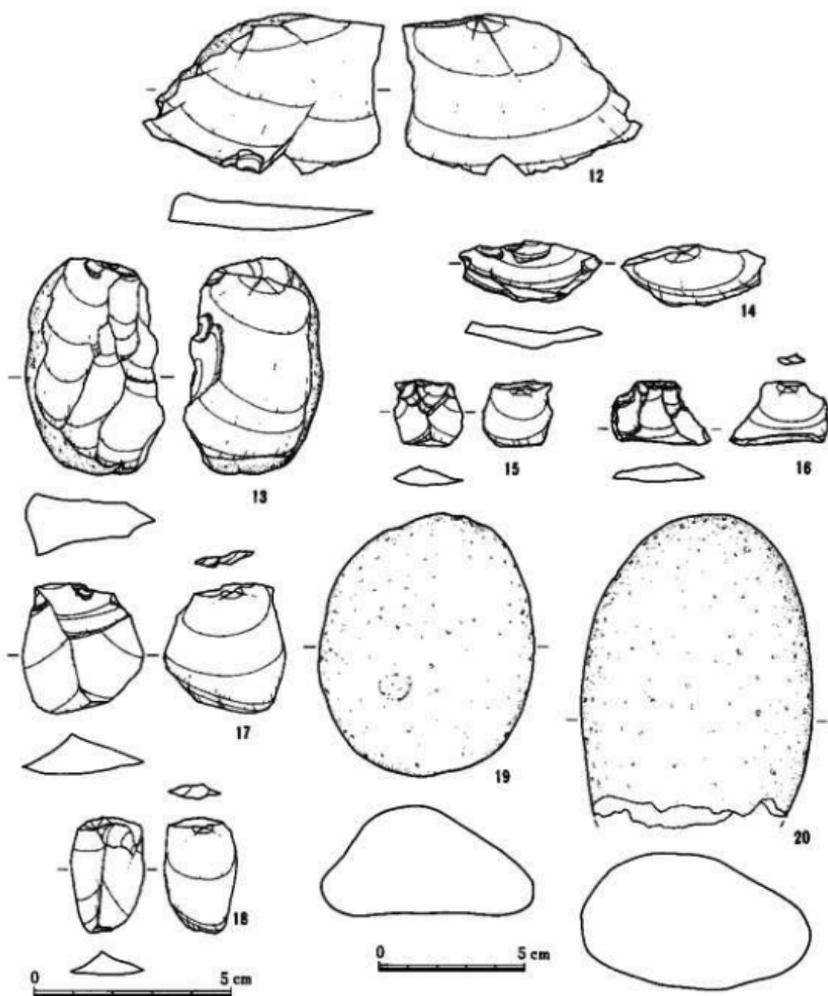
頁岩B : 薄い黄色を呈する。第13ブロックから出土している珪質頁岩では同一の石材においても色調の異なる部分が確認できるが、このブロックで出土している頁岩は、原石面で区別できる。



第86図 第16ブロック遺物分布図



第87図 第16ブロック出土石器実測図(1)



第88図 第16ブロック出土石器実測図(2)

#### 遺物

第16ブロックから出土した石器はナイフ形石器を主体とし、他に角錐状石器、削器などが見られる。個々の石器の形状は様々であり、素材となる剥片も縦長剥片、横長剥片と統一性は見られない。強いて特徴的なことを挙げるとすれば、石器の断面が正三角形に近く、石器そのものが部厚であるといえるだろう。

1から7はナイフ形石器である。1は安山岩製の大型の剥片を素材とし、打面側に調整を施

採回 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
1	ブルG-118 191	ナイフ形石器	安山岩	7.4	4.4	1.5	35.0	
2	ブルG-109	ナイフ形石器	凝灰岩A	5.8	2.1	1.7	13.0	
3	ブルG-97	ナイフ形石器	凝灰岩A	4.6	2.0	1.3	6.8	
4	ブルG-119	ナイフ形石器	頁岩A	3.6	2.5	0.9	5.4	
5	ブルG-111	ナイフ形石器	凝灰岩B	3.0	1.5	1.1	4.7	先端部欠損。
6	ブルG-81	ナイフ形石器	頁岩B	1.7	1.2	0.5	0.5	先端部のみ遺存。
7	ブルG-273	ナイフ形石器	頁岩A	2.8	0.9	0.7	2.0	
8	ブルG-222	角錐状石器	凝灰岩B	4.3	1.8	1.0	8.3	先端部欠損。
9	ブルG-27	削 器	メノウ	4.2	3.8	1.3	20.0	
10	ブルG-134	調整痕ある剥片	頁岩B	3.9	3.4	1.3	11.5	
11	ブルG-2	剥 片	頁岩B	5.1	1.8	0.8	6.3	
12	ブルG-19	剥 片	安山岩	4.3	6.0	1.3	24.7	
13	ブルG-69	剥 片	安山岩	5.3	3.8	1.5	37.6	剥片利用石核の可能性あり。
14	ブルG-121	剥 片	安山岩	1.7	3.6	0.5	3.0	
15	ブルG-93	剥 片	黒曜石	1.6	1.8	0.5	1.3	
16	ブルG-266	剥 片	頁岩B	1.7	2.5	0.4	2.0	
17	ブルG-127	剥 片	珪質頁岩	3.25	3.05	1.0	9.4	
18	ブルG-129	剥 片	珪質頁岩	2.9	1.9	0.8	3.7	
19	ブルG-192	礫	安山岩	8.9	7.3	3.8	308.5	被熱する。
20	ブルG-185	礫	安山岩	10.6	7.9	4.7	485.6	被熱する。

第56表 第16ブロック出土石器表

すものである。中央部で欠損しているが、欠損した先端部側には、欠損面より更に調整が加えられているのがわかる。石器製作過程の中で欠損したものであると思われる。2は凝灰岩製で調整は面を意識して作出している感がある。3は剥片剥離工程初期の段階に押取された剥片を素材としているのが、表面に残る原石面より窺える。凝灰岩製である。4は3と同様に原石面を残しているが、3の素材となる剥片が押取された以後の剥片を素材としている。5は凝灰岩製の部厚な縦長剥片を素材としている。調整はやはり面を意識して施されている。6は先端部のみ遺存しているもので、頁岩製のものである。7は小型の頁岩製の剥片を素材とし、打面を除去するように調整を施し製品としている。

8は凝灰岩製の角錐状石器である。先端部が欠損している。調整は全周にかけておこなわれており、その点で他のナイフ形石器に見られる調整と異なる。調整も微細なものではなく、やや粗く面的におこなわれている。

9はメノウの剥片を素材とし、打面と側縁部を除去した後に末端部に刃部を作出している。

10は頁岩製の剥片に微細な調整を施したものである。ナイフ形石器の未製品である可能性も

ある。

11から18は剥片である。形状は一定しておらず、12の頁岩製の縦長剥片や、13の安山岩製の剥片のように様々である。12の表面にみられる細かい剥離痕は、剥片剥離工程における頭部調整痕である。また14は横長剥片を連続して搾取した剥離痕を表面に残している。13の安山岩製のものは剥片利用石核の可能性が高い。

19・20は礫であり、ともに安山岩製である。このほかに同ブロックでは別個体の安山岩の礫破片、砂岩製の礫破片を伴っている。量的には砂岩が多いが、当時の個体を考えてみると安山岩と砂岩がほぼ同数の3個体ずつであると思われる。礫片は皆一様に被熱している。

石材	種類	ナイフ 形石器	実測値	石 量	体 積	割 取	ピエス ・ ス ・ ク ・ ク	ク ・ ク ・ ク	ク ・ ク ・ ク	石 片	剥 片	剥 片	剥 片	石 核	石 核	石 核	計
安山岩	数値	1										38	60			12	111
	%	0.9										34.2	54.1			10.8	35.6
凝灰岩A	数値	2									1	5					8
	%	25									12.5	42.5					2.6
凝灰岩B	数値	1	1								1	2					5
	%	20	20								20	40					1.6
頁岩A	数値	2									18	117					137
	%	1.5									13.1	85.4					43.9
頁岩B	数値	1						1			7	15					24
	%	4.2					4.2				29.1	62.5					7.7
ノコ	数値					1					2	3					6
	%					12					33	50					1.9
黒曜石	数値										1						1
	%																0.3
砂岩	数値											1				19	20
	%											5				95	6.4
計	数値	7	1			1		1			66	203				51	312
	%	2.2	0.3			0.3		0.3			21.9	65				10	100

第57表 第16ブロック母岩別資料石器組成表

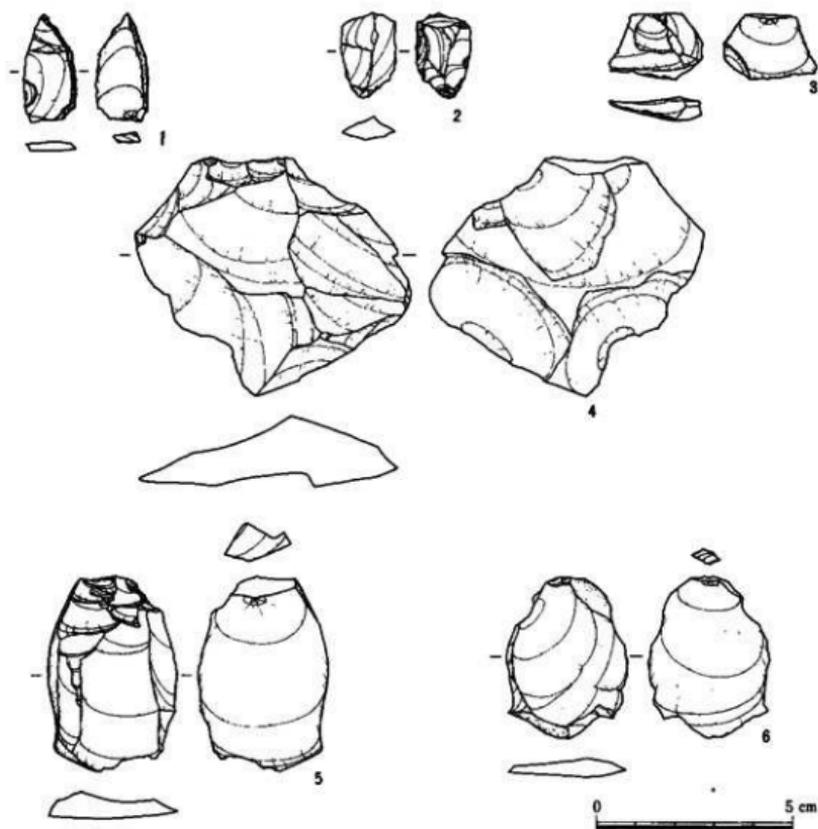
### 第17ブロック (プレ1N) (第72・89図, 第58・59表, 図版31)

第17ブロックは先の第11ブロックの上層に位置し、出土層位はソフトローム層中位である。

分布は径5mの範囲でおさまり、出土した石器は総計7点である。ナイフ形石器を1点、調整痕の認められる剥片を2点、剥片石核を含む。

#### 遺物

1は安山岩製のナイフ形石器である。原石面を側縁部に残し、対となる側縁部に調整を施している。



第89図 第17ブロック出土石器実測図

採図 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
1	プレIN-10	ナイフ形石器	安山岩	2.8	1.3	0.3	1.7	
2	プレIN-19	調整痕ある剥片	チャート	2.2	1.4	0.6	2.2	
3	プレIN-8	調整痕ある剥片	チャート	1.7	2.4	0.5	2.3	
4	プレIN-12	剥片石核	安山岩	6.1	7.0	2.0	57.9	
5	プレIN-11	剥片	チャート	4.9	3.4	0.9	15.8	
6	プレIN-9	剥片	チャート	4.1	3.1	0.6	8.0	

第58表 第17ブロック出土石器表

2・3は調整痕の認められる剥片である。いずれもチャート製のもので、2は元の剥片の形状を折断、調整により著しく変えている。3は剥片末端部に微細な調整を加えるものである。

石種	ナイフ形石器	知蔵器	石 錐	鎌 形 器	削 器	C.M.S. A.S.P.-M	R. フレイク	U. フレイク	石 片	削 片	剥 片	石 錐	石 錐	石 錐	削 片	計
安山岩	数量	1									2					3
	%															42.8
チャート	数量						2			2						4
	%															57.2
計	数量	1					2			4						7
	%	14.2					28.6			57.2						100

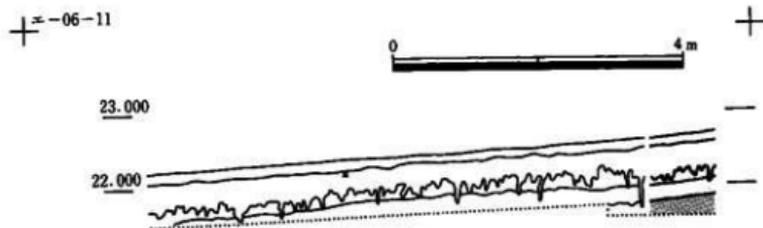
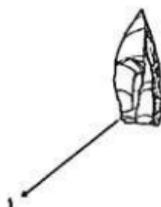
第59表 第17ブロック母岩別資料石器組成表

ナイフ形石器とも考えられる。

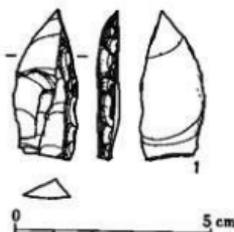
4から6は剥片である。4は安山岩製の大型の剥片で、更に剥片を搾取しているのが、主要剥離面に残る剥離痕より窺える。5・6はチャート製の剥片で、両方とも一部に原石面を残している。

#### 第18ブロック (ブレE) (第90・91図)

ナイフ形石器1点のみの単独出土である。出土層位もⅢ層上面であり、ブロックとしてとらえるには疑問がある。



第90図 第18ブロック遺物分布図



#### 遺物

1は黒色頁岩製のナイフ形石器である。縦長剥片を素材とし、打面を除去した後調整を施している。主要剥離面の打面の方向と表面にみられる剥離の打面が正反対の方向であることから、両面に打面を持つ石核より搾取された剥片を素材としていると思われる。

長さ3.85cm、幅1.7cm、厚み0.55cm、重量3.8gを測る。

第91図 第18ブロック出土石器実測図

#### 第19ブロック (プレ1N) (第72・92図, 第60・61表, 図版31)

第19ブロックは、第11・17ブロックに隣接して検出された。ソフトロームの上部に属するものと思われる。

径10mの範囲内で異なる文化層に属するブロックが3ヶ所検出しているが、このうち第17ブロックとこの19ブロックはソフトローム層中に属し、定型的な石器の数量は少ないが、ナイフ形石器を有するブロックと、槍先形尖頭器を有するブロックとで内容が異なる。

石種	種類	ナイフ 形石器	尖頭器	石核	槍先	槍頭	ボウス クローブ	石 フリヤ	石片	削片	剥片	砕片	石核	削片	石片	計
珪質頁岩	数量		1							1						2
	%															33.4
凝灰岩	数量		1		1					1						3
	%															50
砂岩	数量												1			1
	%															16.6
計	数量	2			1					2					1	6
	%	33.4			16.6					33.4					16.6	100

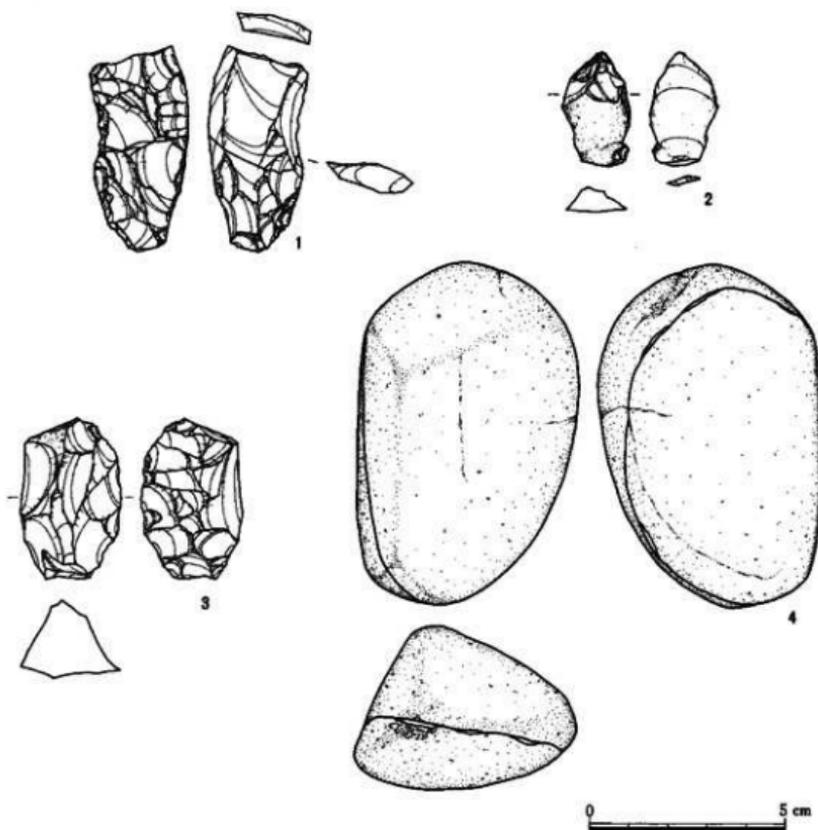
第60表 第19ブロック母岩別資料石器組成表

#### 遺物

1・2は槍先形尖頭器である。1は珪質頁岩製のものであり、先端部が欠損している。調整はほぼ全周にわたる。2は凝灰岩製で、剥片の末端部に近い両側縁に調整を施している。

3は凝灰岩製の削器である。かなり部厚な剥片を素材とし、主に主要剥離面側に調整を施している。

4は砂岩製の敲石である。小範囲ではあるが敲打痕が見られる。縦方向に分割して出土しており、敲打の際に割れたものと考えられる。



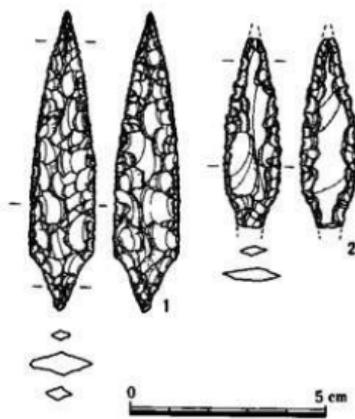
第92図 第19ブロック出土石器実測図

挿図 番号	遺物番号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
1	ブレIN <sub>4</sub> <sup>3</sup>	槍先形尖頭器	珪質頁岩	5.3	3.1	0.9	15.5	
2	ブレIN-2	槍先形尖頭器	凝灰岩	3.0	1.7	0.6	2.7	
3	ブレIN-1	削 器	凝灰岩	2.6	4.1	2.0	23.8	
4	ブレIN <sub>7</sub> <sup>6</sup>	敲 石	砂 岩	8.2	5.4	4.7	263.6	

第61表 第19ブロック出土石器表

## 第7文化層出土石器 (第93図, 図版32)

今回の発掘調査では、有舌尖頭器が2点出土している。いずれも単独の出土であり、ブロックを形成していないが、芝山遺跡における第7文化層に属する遺物として扱いたいと思う。



第93図 第7文化層出土石器

### 遺物

上層遺構確認のための精査中に出土したもので、層序的にはローム漸移層に属している。出土地点は2点とも不明である。

1は頁岩製のもので、色調は乳白色を呈する。実測図正面側にはところどころに茶色の縞模様が見られ、原石面に近い部分の剥片と思われる。

調整は全周にわたり施され、剥片拵取時の剥離痕はすべて調整により消滅しており、よって素材となった剥片の形状は不明である。先端部と基部を結ぶ線に対して左右ほとんど対象であ

る。長さ7.2cm、幅1.7cm、厚み0.6cm、重量7.5gを測る。

2はチャート製であり、青灰色を呈する。先端部と基部の一部が欠損している。調整は全周に施されるが、縁辺部のみに限り、剥片拵取時の剥離痕を残している。主要剥離面の様子から縦長の剥片を素材としているのが窺えるが、実測図表面にみられる剥離痕は、打点の方向が異なるため、縦長剥片ではあるがブレイド状に連続的に拵取されたものではない。長さ4.9cm、幅1.4cm、厚み0.3cm、重量3.0gを測る。

以上、芝山遺跡から検出された先石器時代ブロックについて説明した。

おのおののブロックはある程度のまとまりをみせながら7つの文化層に位置しており、更に各文化層の中で細分が可能であろう。だが、定型的な石器の出土量がブロックによってまちまちであり、また剥片剥離技術を明らかにするにも点数的に難がある。現時点では無理に細分を試みるよりも大別して考えたほうが良いと思われる。

芝山遺跡先石器時代の様相を考える場合、特に着目したいのが第1・第2ブロックとして扱った環状ブロック群である。南関東のIX層文化を考えるにあたり、見逃すことのできない資料であろう。後に若干の考察を試みたいと思う。

## 第2節 縄文時代

芝山遺跡における縄文時代に属する遺構は少数であり、時的にもまとまりが見られない。よって各時期ごとの集落の形成という点に着目した場合、それを明らかにすることは現時点では不可能である。

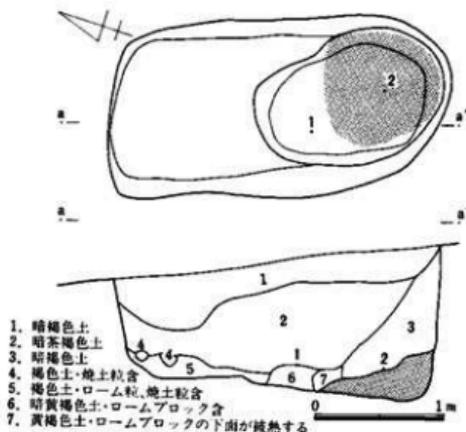
遺構は早期の炉穴が2基、後期に属する土壇墓と思われる土壇が1基、前期、中期、後期に属する住居跡が各1軒ずつ検出している。特に後期に属する住居跡からは、住居床面より把手の部分欠損しているが、良好な資料が出土している。

その他に時期決定は不可能であるが、陥穴状遺構を44基検出している。この陥穴状遺構の中には、中期加曾利E式に属する住居跡が埋没した後に設置されたものが認められるため、今後の陥穴状遺構の時期を考えるにあたり、比較・検討資料となるであろう。

上記の遺構の他に5,000㎡ほどの範囲で土器片が出土しており、時期は縄文時代早期より後期に及ぶ。特に縄文時代前期に相当する土器片が多く出土している。

### 1. 炉穴・土壇類

#### 110号炉穴

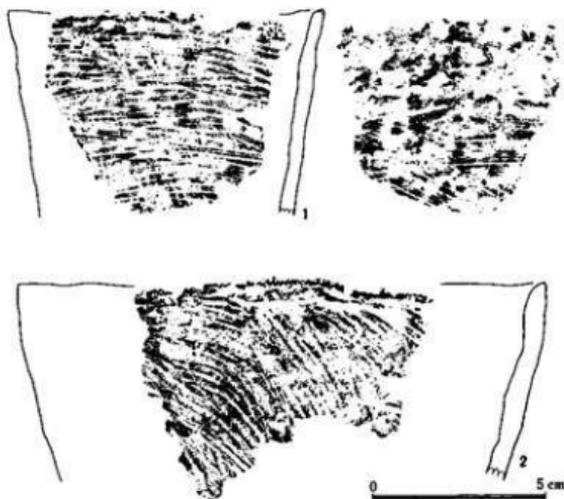


第94図 110号炉穴実測図

長径2.6m、短径1.3m、深さ1.15mを測る。条痕文系の土器を共存している。覆土中にロームブロックの層が見られ、下面が焼けている。本来焚口と燃焼部の間に煙道状の施設が想定され、それが崩落した可能性がある。遺物は焼土層の上部およびロームブロックの混在する層の上部より出土している。

## 出土遺物

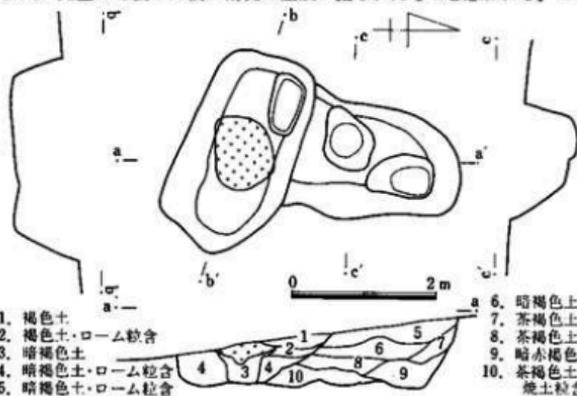
口径の復元可能な土器片2片が出土している。1は復元口径17.8cm, 土器表面および内面に貝殻腹縁による条痕が見られ、口縁には指の圧痕が見られる。2は復元口径31cm, やはり土器表面および内面に貝殻腹縁による条痕が見られるが、内面の条痕ははっきりとしない。



第95図 110号炉穴出土遺物実測図

## 072号土壌

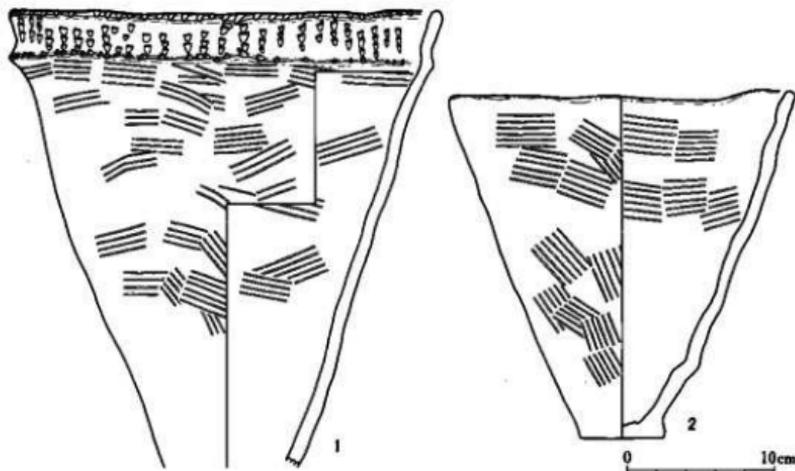
炉穴とそれを切る土壌である。炉穴の土層を見るかぎりでは自然に埋没したものと思われ、炉穴が完全に埋没した後に南側の土壌が掘られたものと思われる。この土壌からは貝層が検出



されているが、土壌床面よりかなり上面に検出されており、この遺構と時期を同じくするものとは思えない。かなり完全に近い形に復元できた土器が出土しているが、出土位置および出土層位は不明である。

第96図 072号土壌実測図

## 出土遺物



第97図 072号土壙出土遺物実測図

1は口径29.2cm、現存高30.8cmを測る。胴部の内外面には貝殻腹縁による条痕が見られ、口縁部付近には棒状工具による連続刺突文が見られる。口縁および口縁下の隆帯状の部位には、棒状工具の圧着による刻目状の文様が見られる。2は口径23.6cm、器高23.3cmを測る。胴部の内外面には貝殻腹縁による条痕が見られる。口唇部には貝殻腹縁または棒状工具による刻目状の文様が見られるが、非常に浅く小さなものであり施文具の断定は難しい。1、2ともに縄文時代早期に属する条痕文系土器で芽山下層式と考えられる。

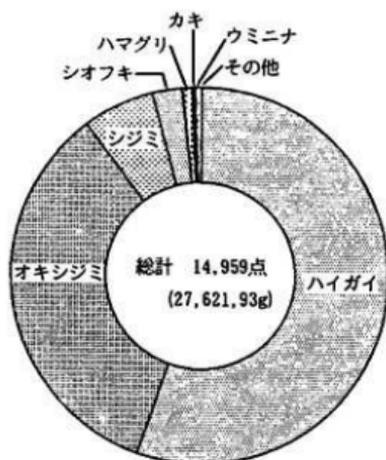
### 貝層

072号土壙の覆土中にはほぼ純貝層といえる貝層が含まれていた。貝層を構成する貝の種類はオキシジミ、シオフキ、ハマグリ、サルボウ等であり、おのおの計測値は以下のとおりである。

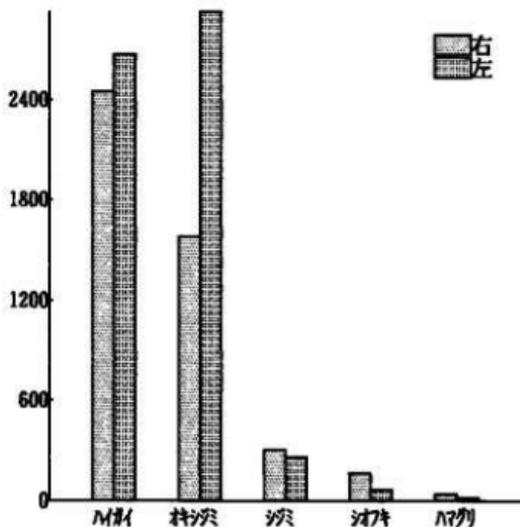
なお、いずれも小破片で図示は出来ないが、胎土内に繊維を含む土器片が貝層に混在して3点出土している。器形、文様は定かではないが、前期黒浜期に属するものと思われる。よって貝層を伴う土壙も同時期に位置づけられよう。

貝殻の洗浄は5mm、2mm、0.5mmの3種類のメッシュのフルイを用いておこない、それぞれのフルイに止まった貝殻について集計した。0.5mmメッシュの洗浄では、魚骨の有無を確認するためおこなったが、結局072土壙の貝層内には、魚骨は含まれていないことが判明した。また貝殻の分類、集計は、完全な形状を留めるものあるいは類別可能な貝殻破片のみを対象とし

たものであり、数値は貝層総体を示してはいない。



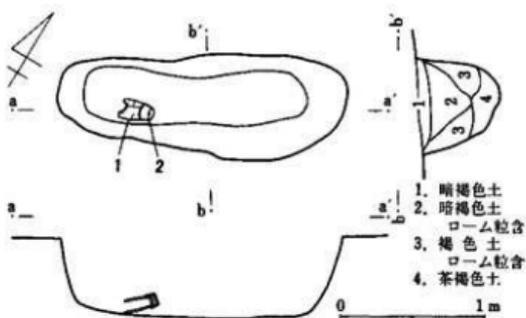
	個数	重量	%
アサリ 右	2,756		
アサリ 左	2,923	6641.8 g	(37.96%)
ハイガイ 右	2,451		
ハイガイ 左	2,672	1260.4 g	(34.25%)
オキシジミ 右	1,578		
オキシジミ 左	2,629	5972.4 g	(21.44%)
シジミ 右	303		
シジミ 左	259	666.2 g	(3.76%)
シオフキ 右	167		
シオフキ 左	69	2388.9 g	(1.58%)
ハマグリ 右	43		
ハマグリ 左	24	188.7 g	(0.5%)
カキ	46	146.5 g	(0.45%)
その他	4	14.1 g	(0.06%)



第98図 072号土壌内貝層組成図

## 014号土墳

長径2.0m、短径0.7m、深さ0.55mを測り、陥穴状遺構のような長楕円形を呈するが、底部施設はなく、掘り込みも浅いため陥穴状遺構とは考えられない。底部付近からは小型の完形



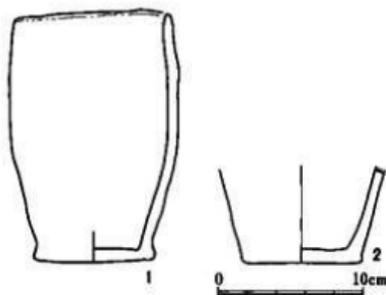
第99図 014号土墳実測図

土器の底部に別個体の土器の底部をかぶせた状態で土器が出土しており、遺構と密接な関係にあるものと思われる。

遺構内覆土の堆積状況は自然堆積と思われるが、自然に埋没する過程においては成り得ない遺物の状況であることから、あるいは土墳墓の可能性も十分考えられる。

## 出土遺物

1は小型の深鉢で、口径5.2cm、底部径4.1cm、器高8.5cmを測る。胴部中位に最大径があるが、ほとんど口径と差はない。胴部中位以下より底部にかけてすぼまり、底部付近で一度外面に張り出す器形である。土器内外面共に文様はなく、外面には土師器に見られるような、ケズリによる胎土内の粒子の移動した痕跡が見られる。2は現存の状態



第100図 014号土墳出土遺物実測図

で最大径5.7cm、底部径4.1cmを測る。やはり深鉢の器形を呈するものと思われる。文様はなく、ケズリによる整形痕が認められるのみである。1と同様に底部付近で一度外面に張り出す器形である

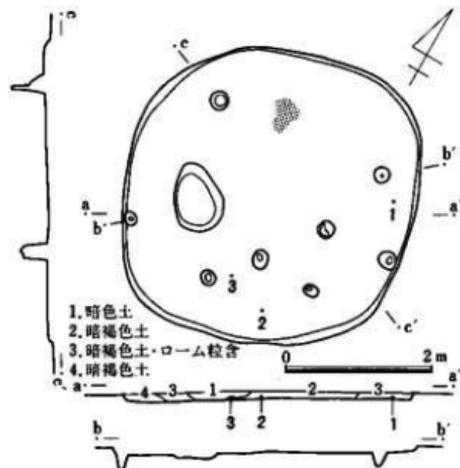
が、張り出す度合いは1に比べ小さい。土器は輪積痕から欠損しておりその欠損面はわたれたままの状態であり、特に欠損後の整形の痕跡は見られない。また両方の土器とも二次焼成により土器表面が脆くなっている。

1および2の土器は、互いに重なり合った状態で出土しているが、人為的に重ねられたものと考えられる。この遺物の出土状況から014号土墳は土墳墓である可能性がうき出てくる。遺構の時期決定は、出土している土器に文様が見られず、また形状も本遺跡で出土している土器に類例が見られないため、極めて難しいが、縄文時代後期に属するものと考えられる。また、同様の形態の土墳も若干認められるが、本土墳との共通の属性は認められず、014号土墳の性格

づけ、時期決定は、他の遺跡の土壌基の類例に頼らざるを得ない。

## 2. 住居跡

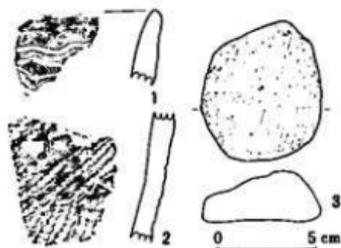
### 106号住居跡



第101図 106号住居跡実測図

遺跡調査区南側の台地平坦面より検出した。プランは直径4mほどのほぼ円形である。柱穴と思われるピットが8基確認されているが、すべてがこの遺構に係わるものであるとは断定できない。北側の床面に伊跡が確認されているが、掘り込みはなく、焼土が分布する程度のものである。遺物は非常に少なく土器片数点に、形状を整えようとした痕跡のある軽石が出土している。数少ない遺物より時代を限定するのは非常に危険であるが、前期黒浜期に属するものと思われる。

### 出土遺物



第102図 106号住居跡出土遺物実測図

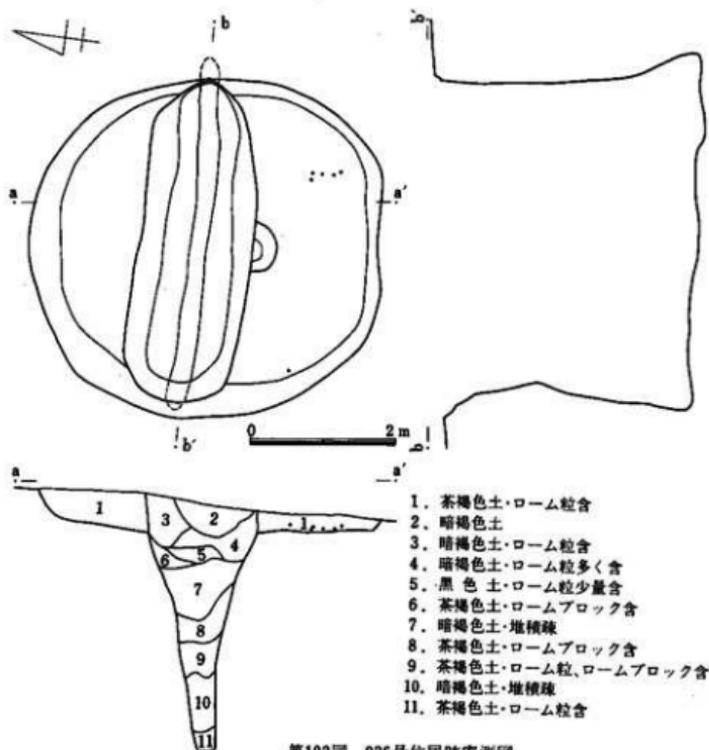
先に述べたように当住居跡より出土した遺物は少数であり、図示可能な土器片は第102図に示したとおりである。

1は深鉢の口縁部である。内外面共に赤褐色を呈し胎土内には繊維が混入している。土器表面には棒状工具による波状の沈線文が施文される。沈線の断面形状から察すると、棒状工具の先は平坦なものであると思われ、沈線どうしが平行に並ばないことから

単体の棒状工具により何回も施文したものと思われる。2は深鉢の胴部破片である。やはり土器内部に繊維が混入する。土器表面には1の無節縄文を棒状のものに巻き横位に回転させて施文されたと思われる縄文が見られる。この場合土器表面に見られる縄文の節の幅がそのまま当初に燃らされた縄の太さとなり、よってかなり太い原体により施文されているものと思われる。3は軽石である。片面は平坦であるが、他の部位は特に平面を意識して擦られていない。

軽石という石質だけに、使用する目的は浮子等のようにある程度限定されると思われるが、穿孔しようとした痕跡、あるいは側縁の刻みも見られず、どのような使用目的で形状を整えたのかは明らかでない。

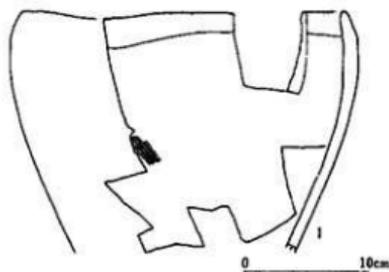
### 036号住居跡



第103図 036号住居跡実測図

平面は径4.8mのほぼ円形であり、柱穴は確認されていない。中央部の円形になると思われるピットは炉跡と思われるが、詳細は不明である。遺物量は少数であるが、遺物の復元により加曾利E式土器を伴う住居跡であると思われる。なお、陥穴状遺構が住居跡と重複している。土層断面によると住居跡を陥穴状遺構が切っており、陥穴状遺構が加曾利E式の時期より新しいものとなる可能性が強い。

## 出土遺物

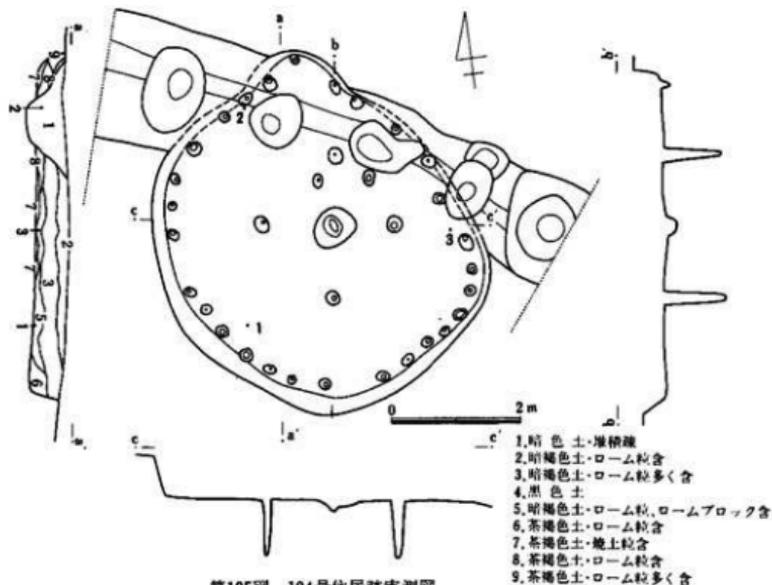


第104図 036号住居跡出土遺物

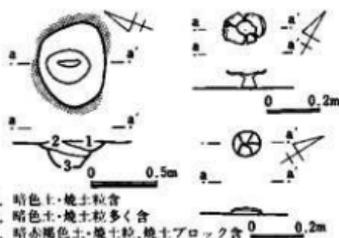
当住居跡からは土器片数点が出土している。破片はすべて同一個体であり、接合により口縁部から胴部にかけての深鉢に復元できた。口径25.7cm、現存高15.8cmを測る。口縁部付近に小隆帯を持ち、この付近が胴部の最大径となる。体部には縦位LRの単節縄文が見られるが、原体が確認できるのは一部であり、他の部位は無節縄文のように見える。焼成は良好であるが、器表面は荒れており、色調は灰白色を呈する。

## 104号住居跡

長径5.1m、短径4.7mの楕円形を呈する。換言すれば隅丸の長方形に近い形といっても良いかもしれない。



第105図 104号住居跡実測図

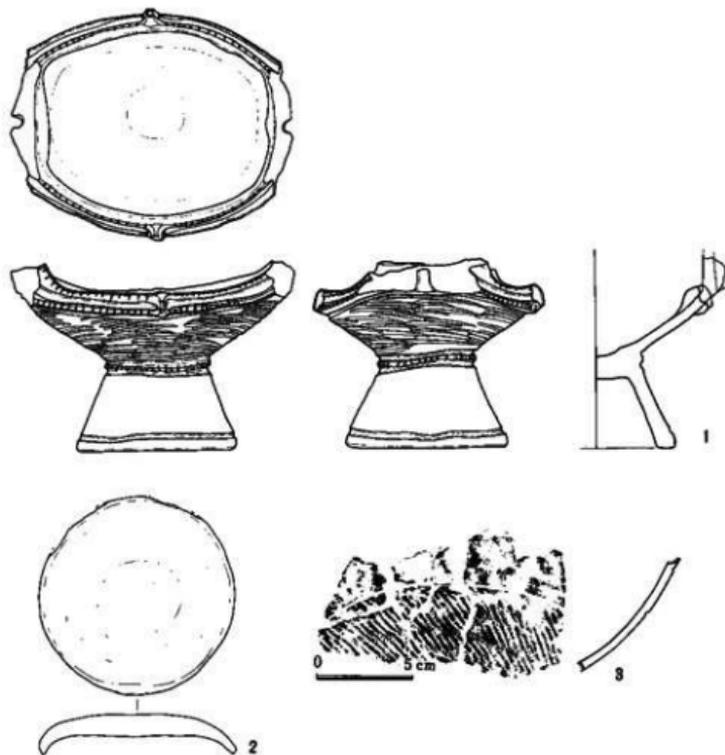


第106図 104号住居跡炉跡実測図

直径15cm内外の壁柱穴が28基確認され、深さはほぼ20cmである。また床面中央部に主柱穴が4基確認されている。深さは1mに及ぶ。床面は中心部の掘り込みは炉跡である。深さは20cmあり、掘り込みはしっかりしている。炉跡の掘り込み周辺の床面が熱を受け焼けている。

この住居跡にもなる遺物は数量こそ少ないが、すべて床面の出土であり、住居跡の時代決定および他の遺跡との比較資料として良好な遺物といえ、加曾利B式と考えられる。

### 出土遺物



第107図 104号住居跡出土遺物実測図

1は器台を有し、把手と思われる部分が欠損している。器台より上は楕円形を呈す器形で、口縁部の長径14.4cm、短径11cm、現存高9.6cm、器台高3.6cmを測る。口縁部外面直下は数細な刻目が施された隆帯と沈線により装飾され、口縁部短径方向に小突起を有す。全体にわたりよくミガかれ、体部にはヘラ状工具による装飾を兼ねたミガキが残る。体部内面の所どころに赤色顔料が付着している。色調は暗褐色を呈す。

2は蓋と思われるが把手や穿孔がなく、内面はミガキ、外面はケズリ痕が見られるのみである。径10cmを測り、かなり中心部が厚く最大1.2cm程である。色調は暗褐色を呈し、所どころに赤色顔料が付着している。

3は深鉢の胴部破片である。胴部を巡る沈線が2条みられ、沈線により区画された中にRL単節縄文を横位に施文している。また縄文により施文されていない区画はよくミガかれている。色調は暗褐色を呈する。

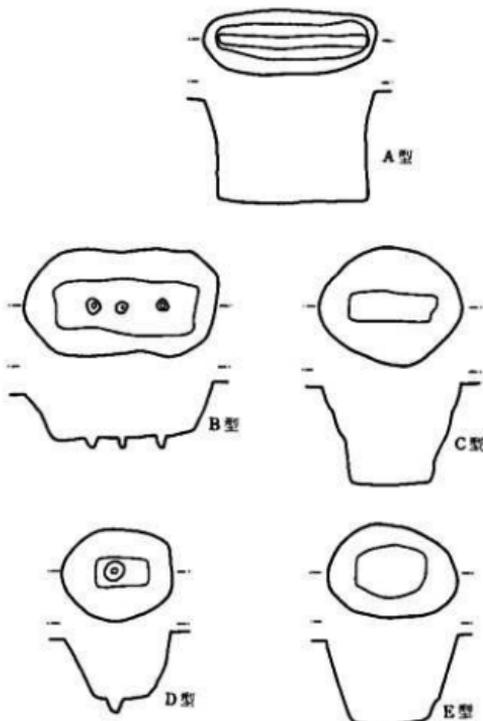
### 3. 陥穴状遺構

今回の調査では陥穴状遺構と思われる土壌が44基検出した。このうち一般に陥穴状遺構と呼称されるものは14基であるが、他のものも遺構の性格を考えた場合、掘り方の深さなどを見ると貯蔵穴のような日常的なものと思えず、敢えて陥穴状遺構として扱うことにした。

これらの陥穴状遺構からの遺物の出土は皆無であり、また遺構を検出した時点の確認面の層位も明らかでなく、よって時期は決定できない。しかし036号住居跡を切っている陥穴状遺構が確認されているため、この中には中期後半の加曾利E式の段階より新しい時期のものもあるといえるだろう。なお、この陥穴状遺構の平面形は短軸と比較し長軸が極めて長く、深さも2mに達するものであり、芝山遺跡で検出した陥穴状遺構の中には何基か同じ形態のものがあるが、形態を同じくするというので、それらもすべて加曾利E式の段階よりも新しいものであるとは断定できない。

本書では陥穴状遺構の形態の特徴により、大まかではあるが5つに分類し、その位置関係を見ることにした。形態分類の基準は以下に記す。

またこの陥穴状遺構の形態分類を考えるにあたり、明確な長軸、短軸の比率、陥穴状遺構の深度、同一の平面形態の中での大きさの違い、および下部施設の数などを考慮したうえで更に細分を試みたが、細分するには陥穴状遺構が数量的に少なく、結論として何も見出すことができなくなるので、5つの形態分類により、芝山遺跡での陥穴状遺構のあり方を考えることにした。



第108図 陥穴状遺構形態分類図

A型：長軸，短軸の比が5：1以上の長楕円形を呈する。下部に行くに従い幅が狭くなるが，長軸方向の長さはさほど上面と変わらないものである。

B型：長軸，短軸の比が2：1程のもので，上面と底面の平面形はさほど変わらない。底面に単数あるいは複数の小ピットを有するものである。

C型：平面形はB型に準ずるが，底面の小ピットを有さないものである。

D型：円形あるいは楕円形を呈するもので，底面の平面形状は正方形あるいは長方形を呈し，底面に小ピットを有する。

E型：上面および底面の平面形はD型に準ずるが，底面に小ピットを有さないものである。

第109図は陥穴状遺構を形態の違いによりドットを変えて一様に表わした図である。ドットを分割する線は，各々の長軸方向を表わすものである。長軸方向を明確にすることにより地形と陥穴状遺構の長軸との関係を見る目的であったが，長軸が等高線に対して平行であったり，また直角であったりし，特に等高線と遺構の長軸との相関関係は見られない。もっとも陥穴状遺構の性格を考えると符號を目的としたものであり，獣が通る道に設けるものと考えるのが通常であり，そうなる と捕獲しようとした獣の種類・習性までも考慮しなくてはならない問題であろう。

形態の違いによる陥穴状遺構の分布にやや圍りが見られ，ある程度の範圍によりそれぞれ括れる感がある。各形態の特徴を以下に記す。

A型については調査区南西の緩斜面にまともて分布する傾向があり，特にウー06グリッド周辺に密に分布しているのがわかる。またオー03グリッド付近の埋没谷周辺にも2基ではあるが検出している。長軸と地形の関係は特に指摘できない。

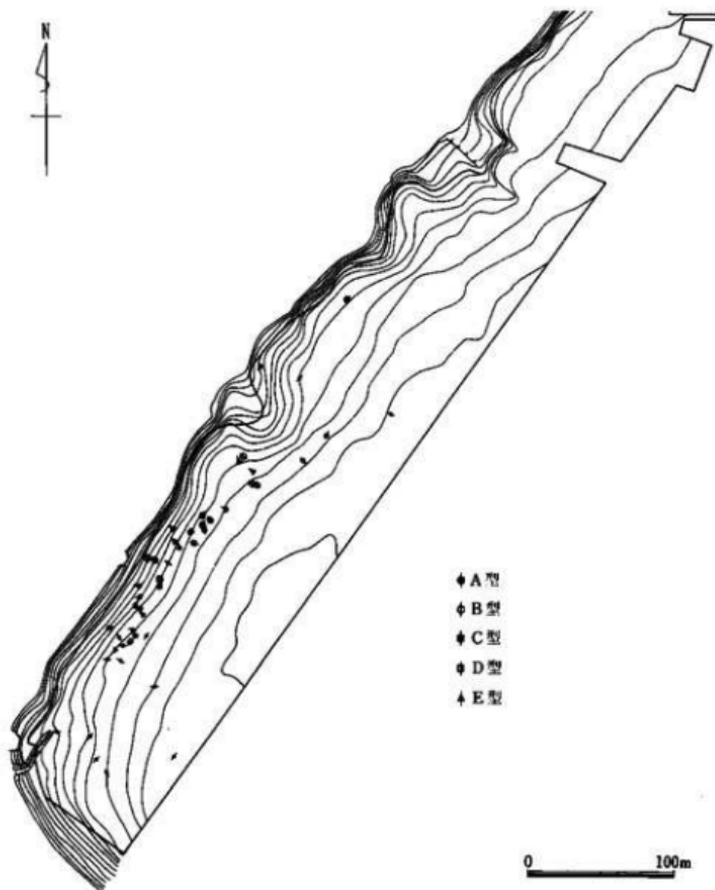
B型は数的に少なく分布範圍として括るのは難があるが，A型とはほぼ同じくウー06グリッド

周辺とオ-03グリッド付近の埋没谷周辺に分布しているといえよう。

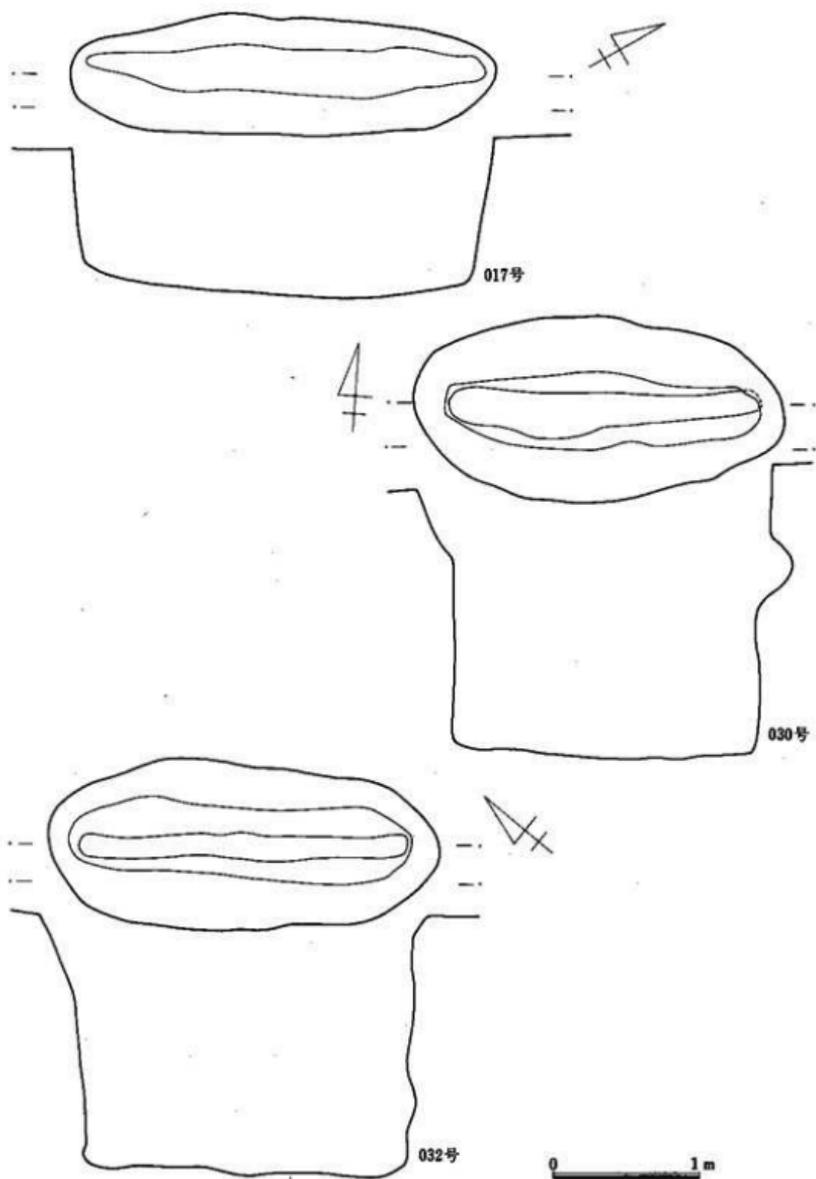
C型はエ-05グリッドに密に分布し、陥穴状遺構の総数に対してのこの形態の数量は少ないが、ある程度分布範囲がまとまっているものとしてとらえられる。

D型は一ヶ所に密に分布する傾向はなく、発掘調査区内の陥穴状遺構が分布している範囲全体に見られる。

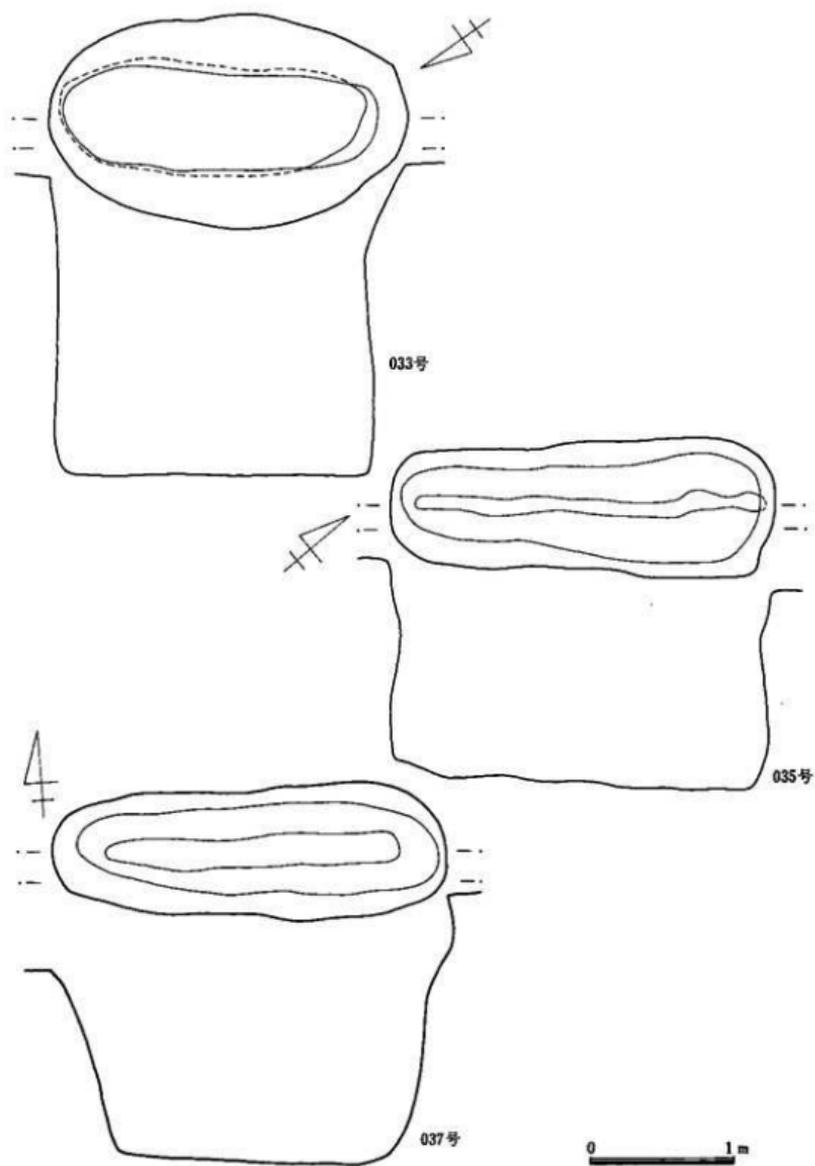
E型は分布範囲としてではなく、数基が列状に並ぶ傾向があることが指摘できよう。また長軸方向が等高線に対して直角かあるいはそれに近いものであることも特徴としてあげられる。ウ-06グリッド、ウ-05グリッドに位置するこの形態の陥穴状遺構に、上記の傾向が特に顕著である。これらの陥穴状遺構の列の延長線は台地斜面を斜めに横切るのがわかる。



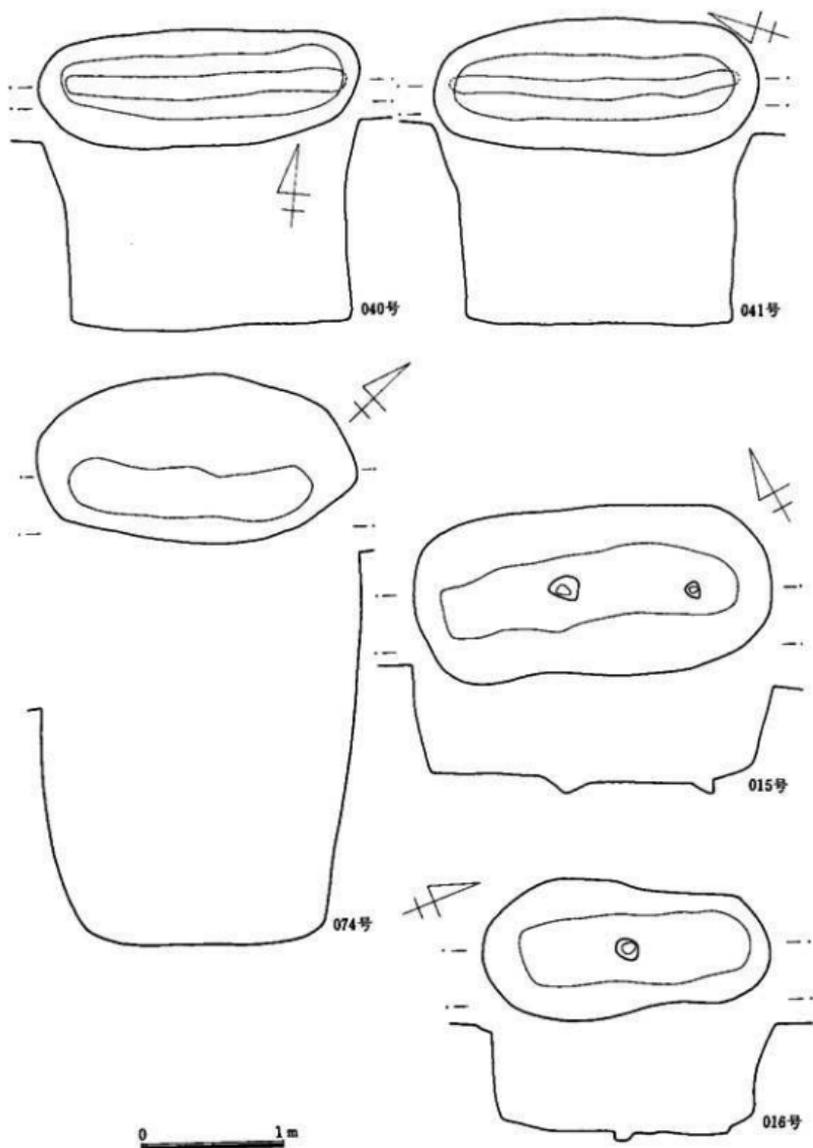
第109図 陥穴状遺構配置図



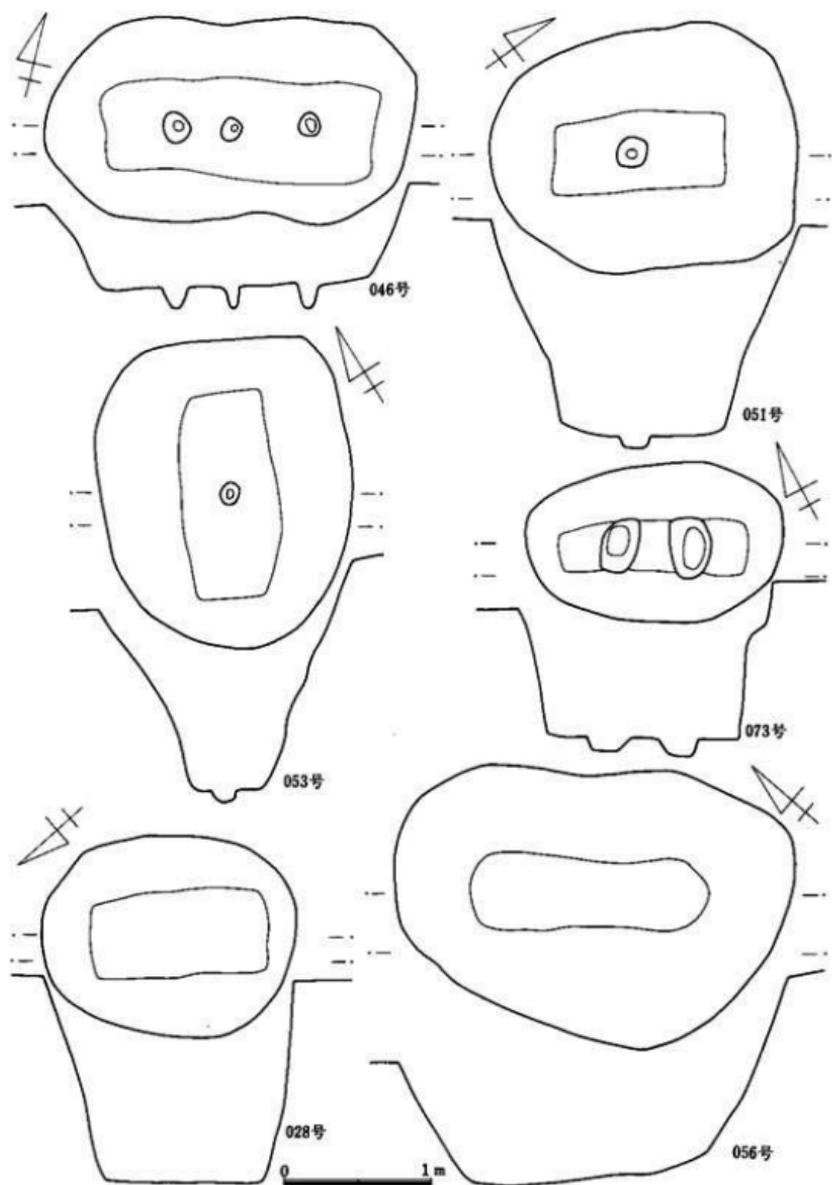
第110图 陷穴状遺構実測図1 (A型)



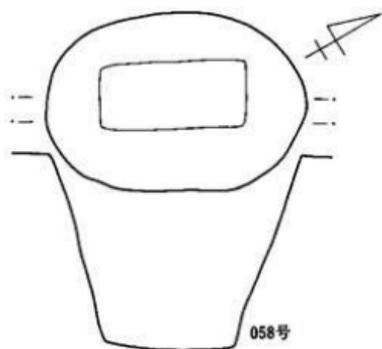
第111图 陷穴状遗構实例图2 (A型)



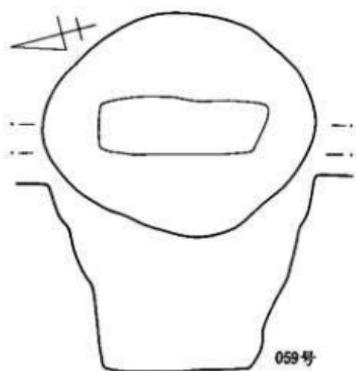
第112图 陷穴状遺構実測図3(A・B型)



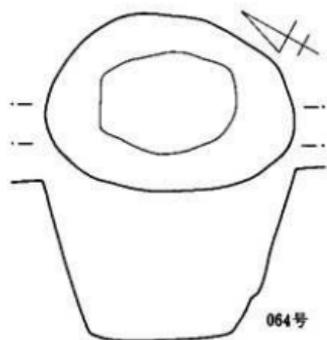
第113图 隔穴状遗構实测图4 (B·C型)



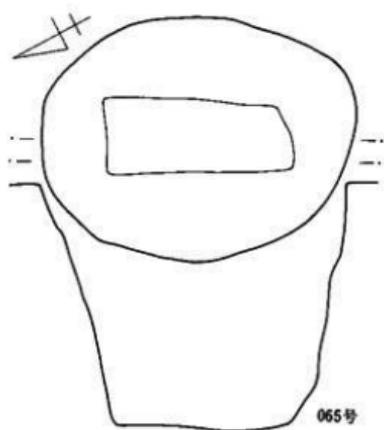
058号



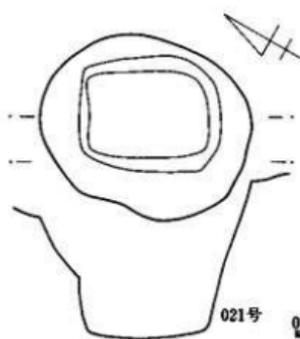
059号



064号

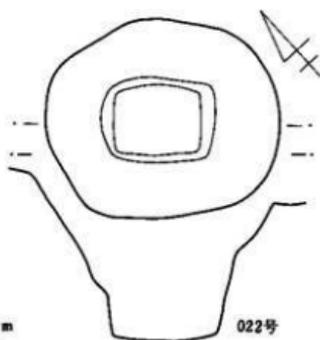


065号



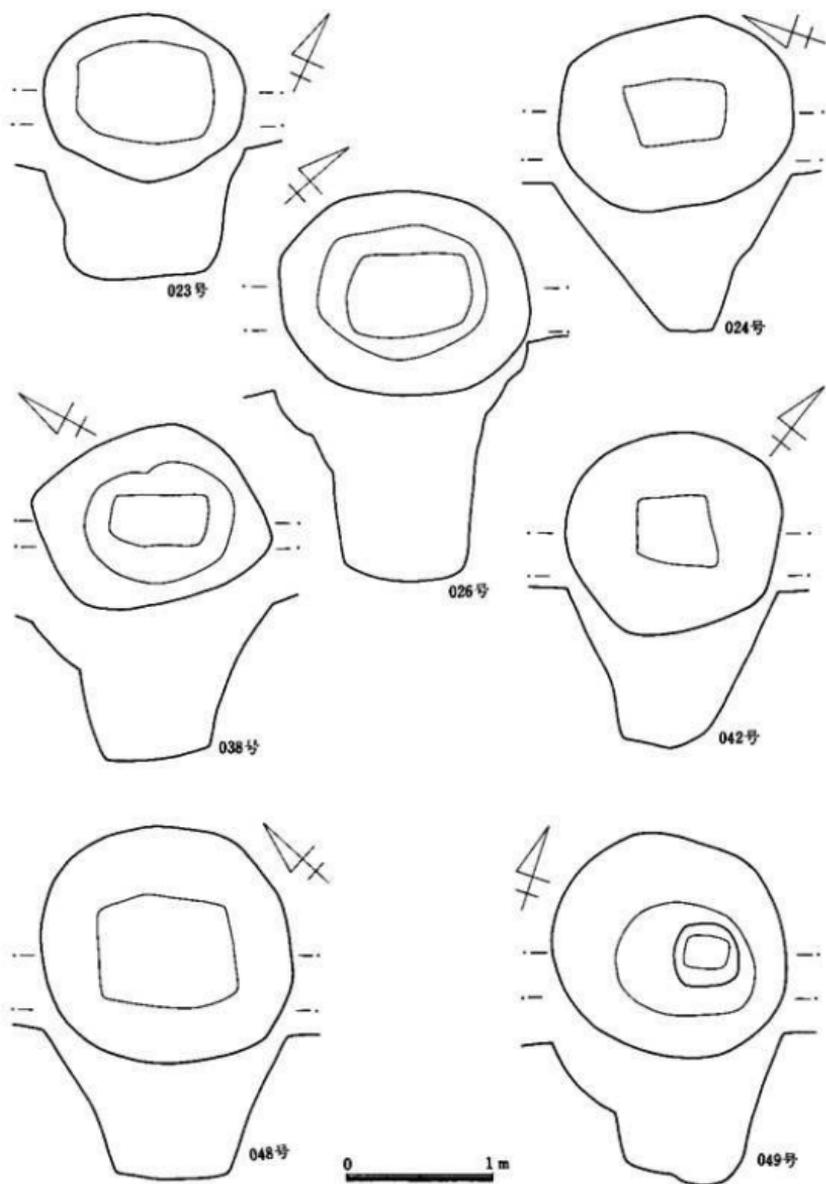
021号

0 1 m

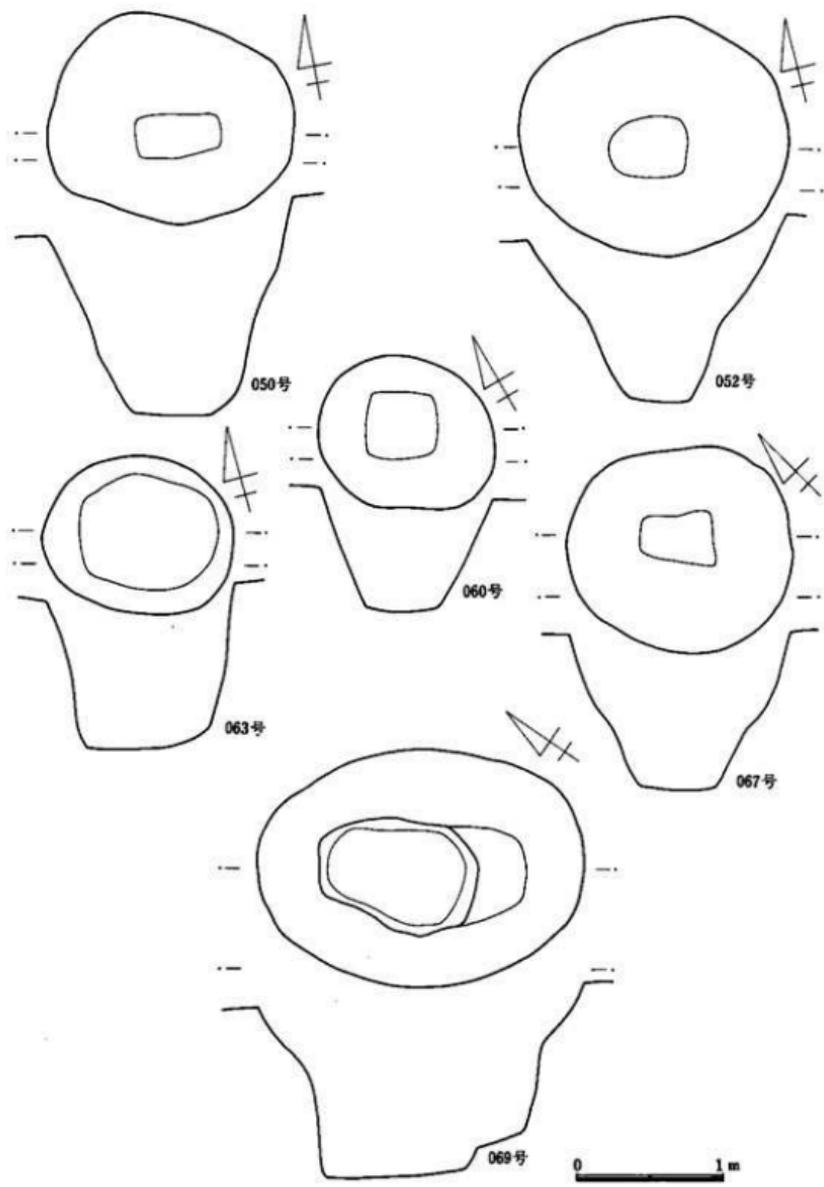


022号

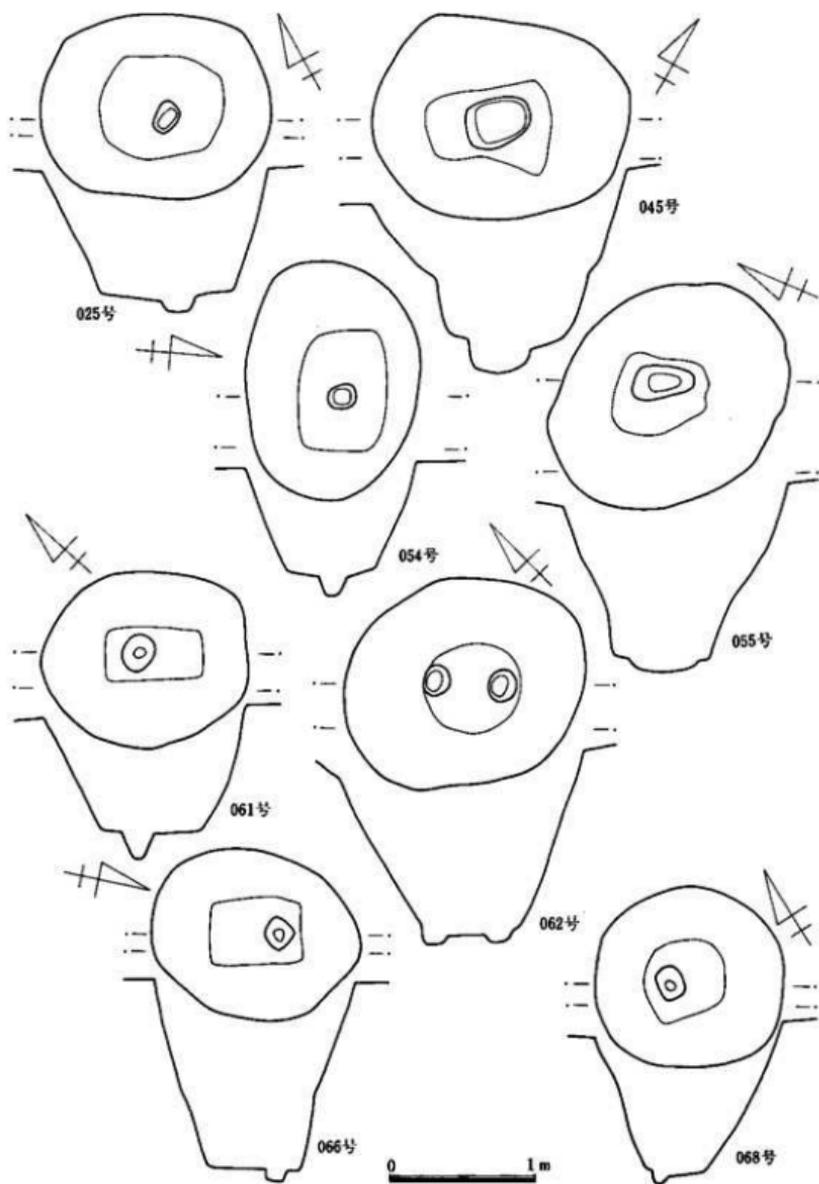
第114图 陷穴状遺構実測図5(C·D型)



第115图 陷穴状遺構実測図6(D型)



第116圖 陥穴状遺構実測図7 (D型)



第117图 陪穴状遺構実測図8 (E型)

## 4. 包含層出土遺物

芝山遺跡では縄文早期から後期にかけての土器群が確認された。包含層が分布する範囲はE-04、O-02、K-02グリッドにまたがり、遺跡中央部に位置する埋没谷の両岸である。

時期ごとの分布の偏りは見られず、各時期とも数量的な差異はあるがほぼ同地点に遺物が集中しているため、時期差に係わる分布についてはふれないこととする。ここでは記述のため便宜的に下記のような7群に大別し、またそれぞれの中で細分をおこなった。

- 第1群土器 早期沈線文系・条痕文系土器
- 第2群土器 黒浜式土器・浮島・興津式土器
- 第3群土器 前期後半諸磯式・十三菩提式土器
- 第4群土器 前期末葉～中期初頭土器
- 第5群土器 中期中葉阿玉台式・勝坂式土器
- 第6群土器 中期後半加曾利E式土器
- 第7群土器 後期加曾利B式・安行式土器

第1群土器 沈線文系・条痕文系土器（第118図、図版52）

第1類 沈線文系土器（1～18）

2～4はいわゆる初期沈線文土器、あるいは三戸式土器である。細沈線により文様を構成している。1・5～16は田戸下層式土器である。5～7は斜めの沈線により文様を構成している。施工具はヘラ状のものと思われしっかりした沈線である。1は、底部のみの遺存であり、胴部の文様形態は不明である。8～16は貝殻腹線により施文されている。

第2類 条痕文系土器（19～26）

貝殻条痕文以外には沈線、刺突文等の文様は確認できない。繊維の混入は微量もしくは可視的に認められない程度で器表面は脆い。茅山式土器である。

第2群土器 黒浜式土器・浮島・興津式土器（第119～123図、図版53・54）

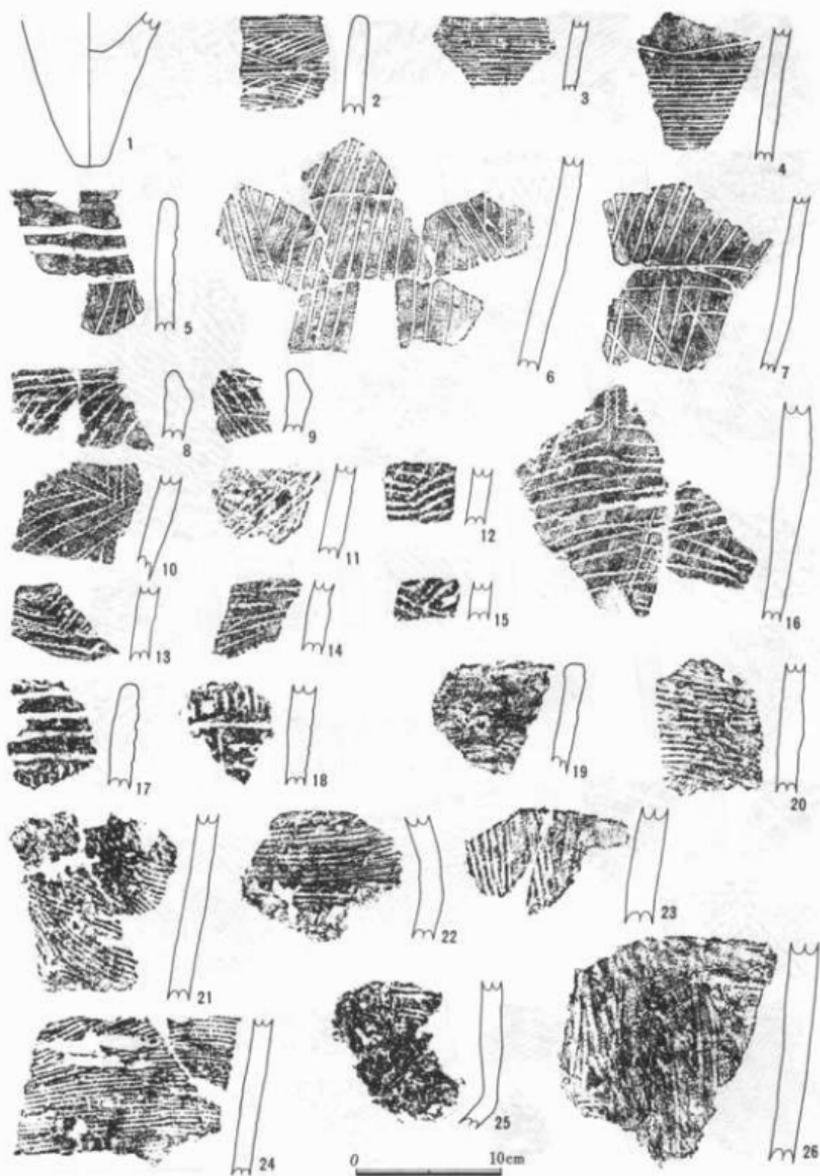
第1類 黒浜式土器

第1種 縄文・燃糸文を主文様とするもの（1～25）

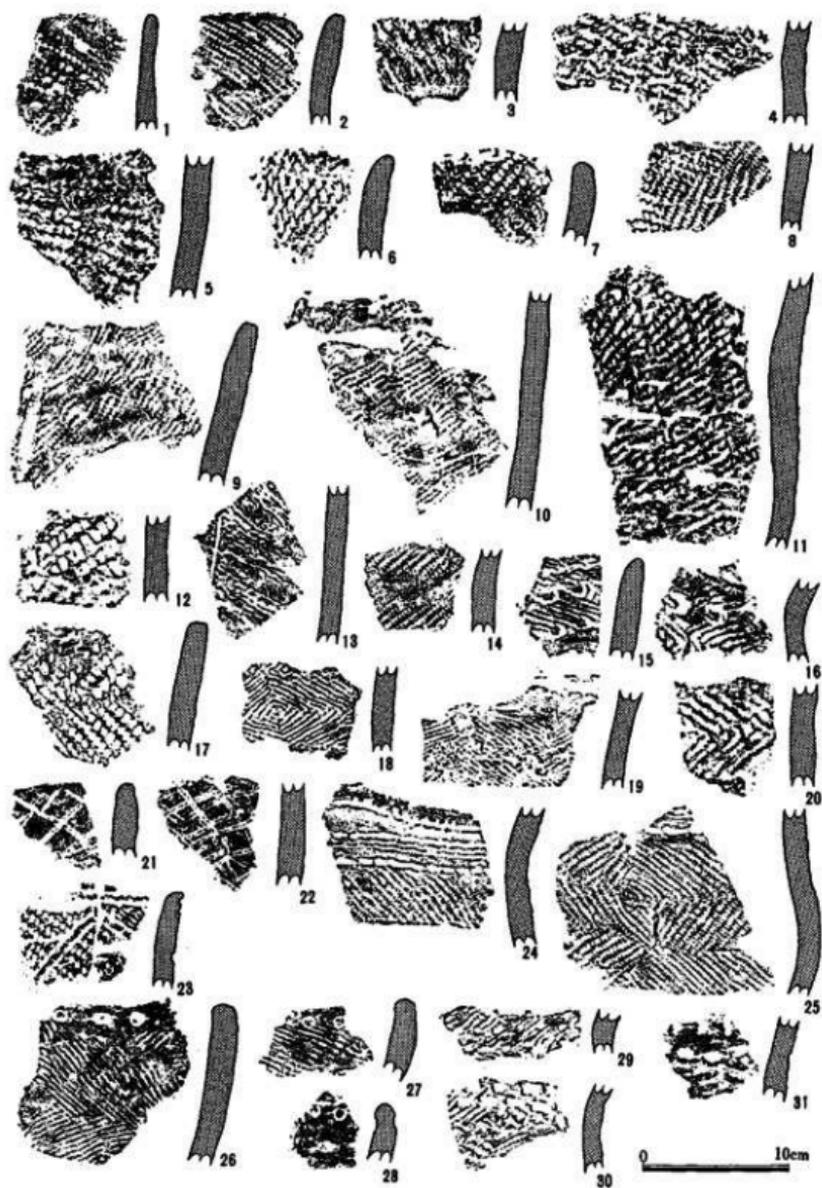
1～12は単節縄文、13は燃糸文、14～25は羽状縄文による文様構成である。21・22は格子状の縄文が見られるが、網目状燃糸文と思われる。また24・25は頸部にやはり燃糸文が横位に数条巡るものである。

第2種 縄文および竹管文を主文様とするもの（26～31）

26～28は口縁直下に円形竹管文がみられ、同一個体と思われる。29～31は不鮮明であるが小



第118图 早期土器拓影图

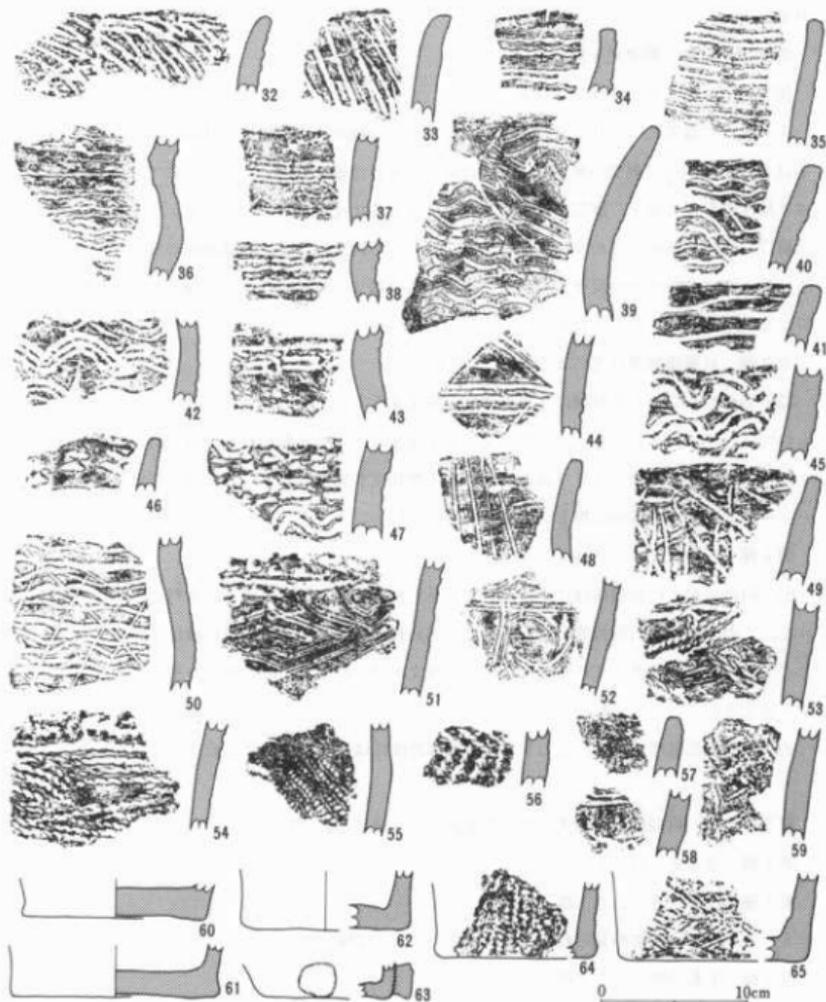


第119图 黑漆式土器拓影(1)

さな円形竹管文がみられる。

第3種 沈線による文様 (32~52)

32~38は斜線あるいは横位の沈線により文様を構成している。横位の場合はやや波がかかっている感がある。39~47は波状沈線によるものである。このうち46・47は不連続の波状沈線である。48~52は沈線と波状沈線がともに施文されている。



第120図 黒浜式土器拓影図(2)

#### 第4種 燃糸瓦痕による文様 (53~59)

53~59は燃糸瓦痕により施文される。56は交互に燃糸を任着させ、羽状縄文状に施文されている。

60~65は底部破片である。64は単節縄文、65は無節縄文が体部最下部まで施文されている。63は体部最下部に円形の突起が貼付され、おそらく対角にもう1つ設けられているものと思われる。

#### 第2類 浮島・興津式土器

##### 第1種 沈線による文様 (1~31)

1~5は口縁部にヘラ状工具による刻目をもち、口縁部直下に横位の沈線が施される。6~8は口縁部に刻目・刺突が施され、内側に細かい平行沈線を充たしているものである。9~12は口縁部の刻みに加え、胴部には櫛歯状工具による波状沈線が施されている。13~18・26~29は縦位、斜位の沈線のみの文様構成であり、このうち14・15・28には鋸歯状の沈線が確認できる。19~24は口縁部が外反する器形で、口唇部には刻目、口縁直下には沈線が巡る。25・30・31は連続した刺突文がみられる。

##### 第2種 貝殻腹縁波状文による文様 (32~60)

32~39・42~51は貝殻腹縁による波状文を施文するものである。この中には貝殻腹縁によるものではなく、ヘラ状工具による爪形文も若干含まれていると思われる。40・41・52~60はハイガイ・サルボウ等のアナダラ属の貝殻による波状文が施文されている。61・62は貝殻腹縁をロックンダセずに直線的に押しつけ文様をつけている。

##### 第3種 三角文による文様 (63~88)

63・64は口縁下に貝殻腹縁による波状文が見られる。65~83は口縁下に2列の三角文が見られる。このうち74は円形竹管による三角文と思われる。また82・83には口縁部に縄文が施文される。84~88は胴部破片である。いずれも三角文が見られるが、87・88はやや小さめの工具により施文されているのがわかる。

89~93は底部破片である。このうち90の底部外面には貝殻腹縁による波状文が見られる。

#### 第3群土器 前期後半諸磯式・十三善提式土器 (第124図、図版55)

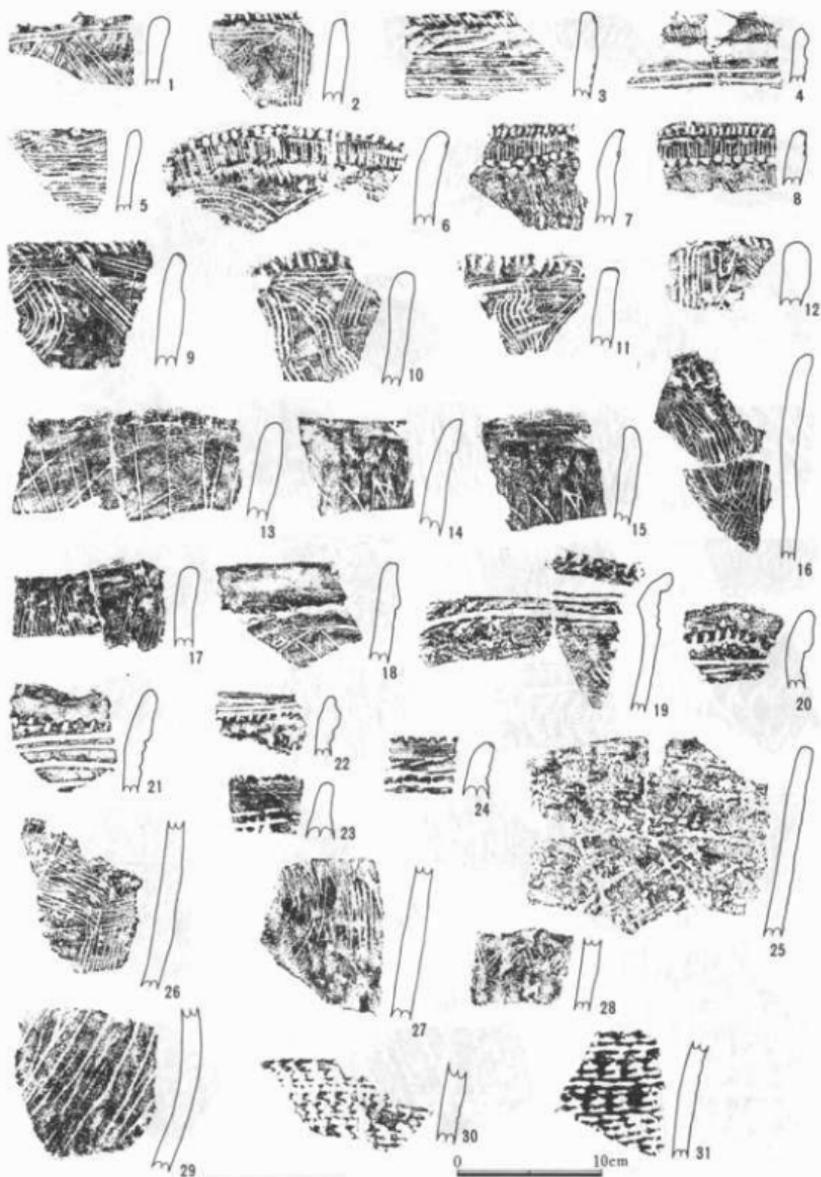
##### 第1類 諸磯式土器 (1~7)

##### 第1種 円形竹管による文様

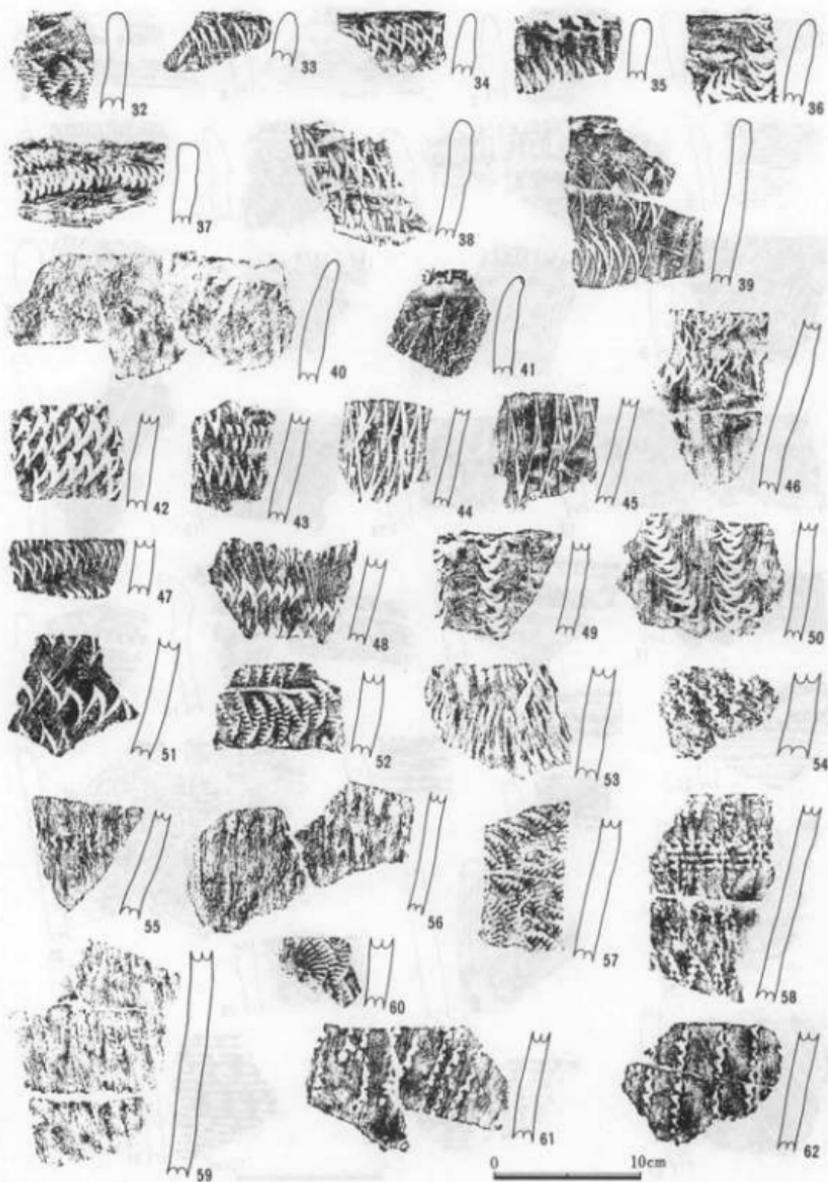
6・7は円形竹管文が見られる。他の施文工具による文様は特に見られない。諸磯a式。

##### 第2種 半截竹管による文様

1~5は半截竹管の内側で浮線文状の文様を施文したものである。色調は灰白色であり、芝山遺跡から出土している他の土器片と異質なものである。諸磯C式である。



第121图 浮島・興津式土器拓影图(1)



第122図 浮島・興津式土器拓影図(2)

第2類 十三菩提式土器（8・9）

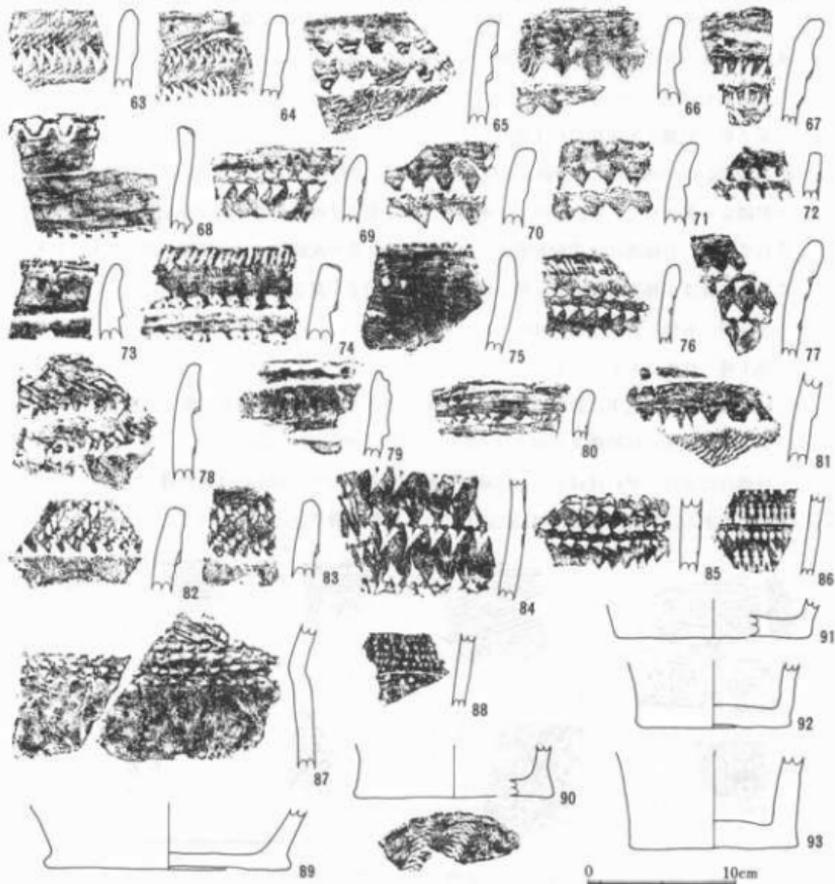
8・9ともに同一個体である。半載竹管による沈線が隆帯にそって廻り、隆帯上にも刻みが施される。

第4群土器 前期末葉～中期初頭の土器（第125～135図、図版55～58）

第1類 浮島式土器以降から五領・台式土器の間に位置する縄文を多用する土器をここでは第1類とし、その中でさらに細分を試みた。

第1種 口縁部に原体圧痕をもつもの（4・5・8～48）

口唇部、口縁部直下に原体圧痕がみられる。胴部は結節縄文が施文されている。波状口縁



第123図 浮島・奥津式土器拓影図(3)

(8~24) と平縁 (25~48) の両方が存在する。色調は赤褐色を呈し、器表面は光沢がある。

第2種 口縁部に結節縄文をもつもの (49~66)

色調、器表面の様相は第1種とほぼ同じであるが、口縁直下に結節縄文を施文するものである。胴部の文様はほぼ第1種と同様に結節縄文による施文と思われる。

第3種 口唇部直下より縄文が施文されるもの (120~144)

口縁部に捺糸瓦痕や結節縄文をもたず、単節縄文あるいは無節縄文を施文している。胴部の文様はやはり縄文が施文されていると思われるが、結節縄文かどうかは不明である。

第4群、第1類としてあつかった土器は、先にも述べたように浮島式土器から五領 $\times$ 台式土器の間に位置するものであるが、資料的にも少なく未だ不明な点が多い。第125図1・2・6のように極めて五領 $\times$ 台式土器に類似しているものもあれば、第130図162のように鋸歯状の沈線文がみられる土器もある。五領 $\times$ 台式土器の一部にあたるとも考えられるが、前期の土器との関連も見逃せない。

第2類 前期大木式類似の土器

第125図3は口縁端部に2個1単位の貼付文が小突起状につくもので、以下は撚りのゆるい単節縄文が施される。168~191は半載竹管による集合沈線文が器表面ほぼ全体にわたって施文されている。口縁部には突起を有し、口縁下には2条の沈線文により区画が設けられ、椀形状の集合沈線文が施されている。胎土は緻密で雲母粒子が混在している。

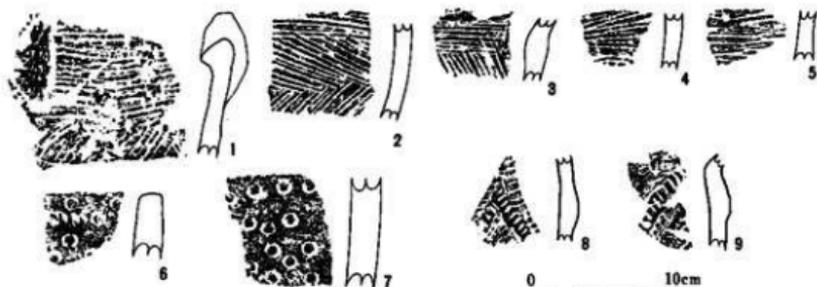
第3類 五領 $\times$ 台式土器 (166・167 192~317)

第1種 沈線文を有するもの

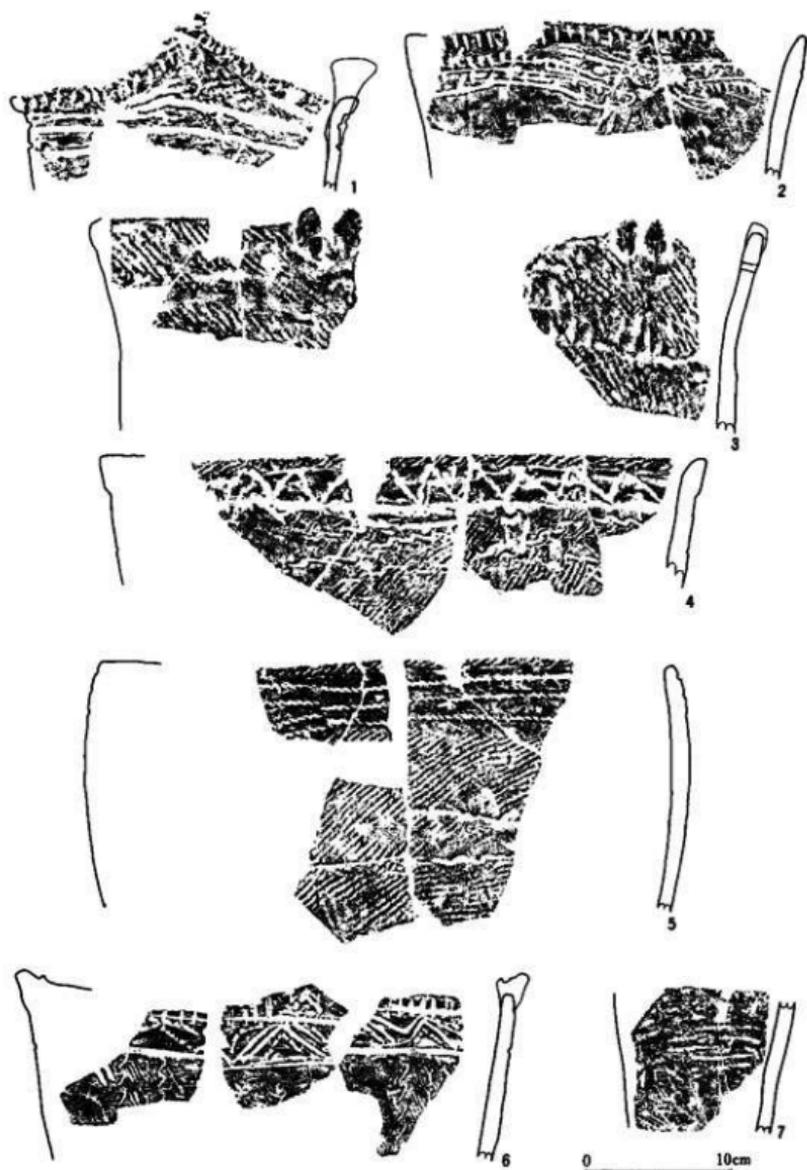
166・167は口縁直下に数条の沈線が巡るものである。色調は乳白色で胎土は緻密である。

第2種 胴部に結節縄文を施文するもの (192~219・307・308)

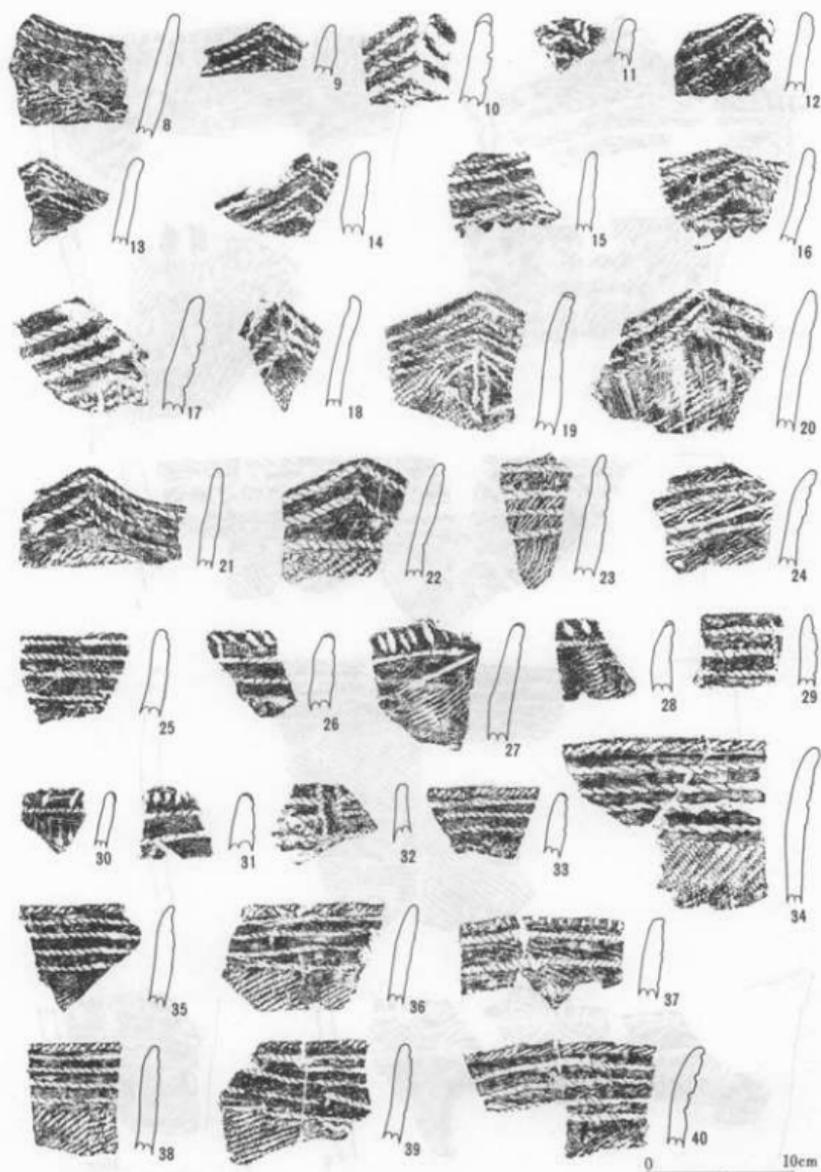
口縁部は縦位の平行沈線あるいは縄文を施文するもので、胴部には結節縄文を縦位に施文するものである。胴部の縄文は第132図219のように胴部最下部に及ぶものである。



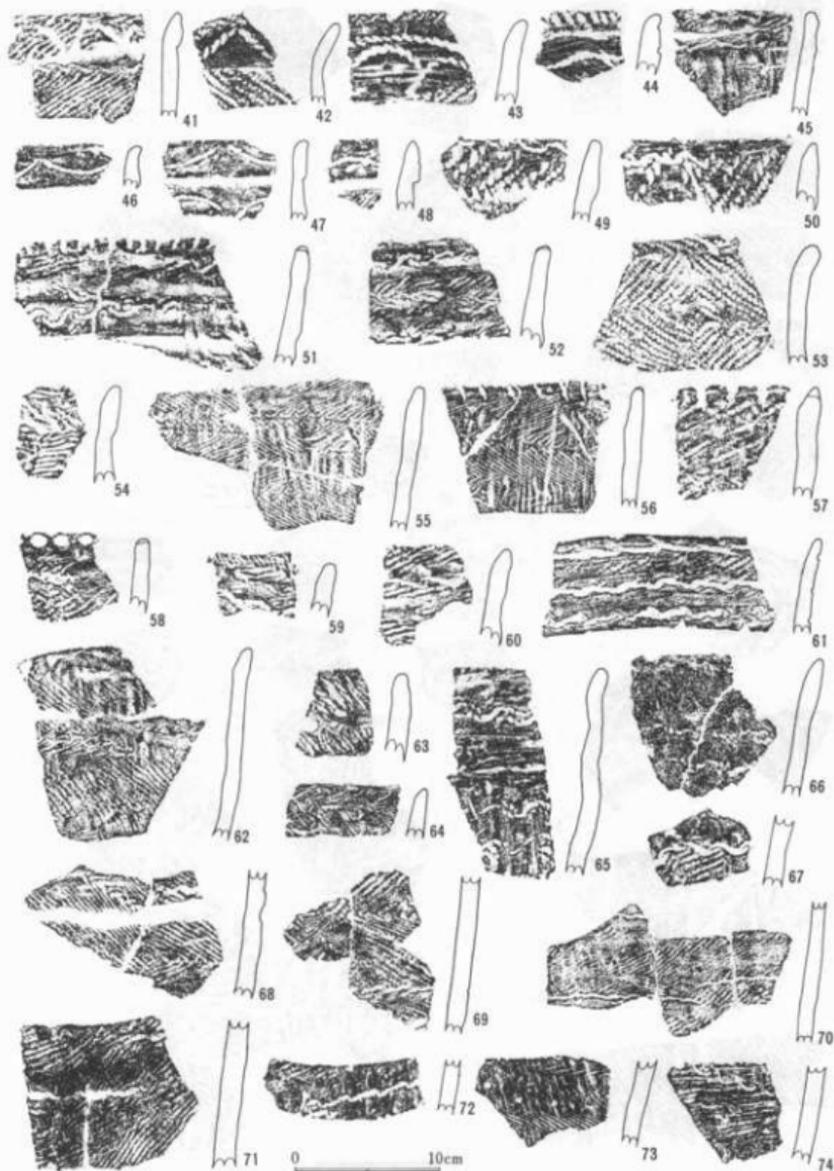
第124図 諸磯・十三善提式土器拓影図



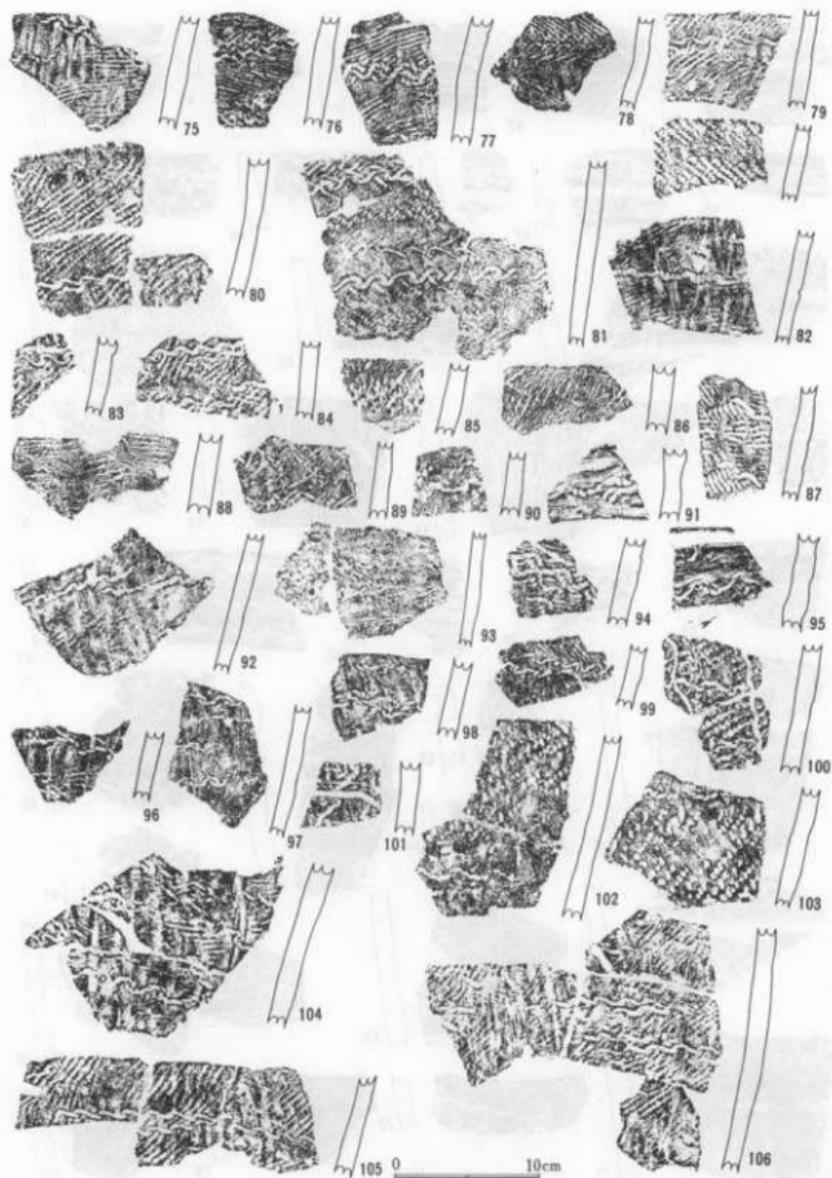
第125圖 前期末葉～中期初頭土器拓影圖(1)



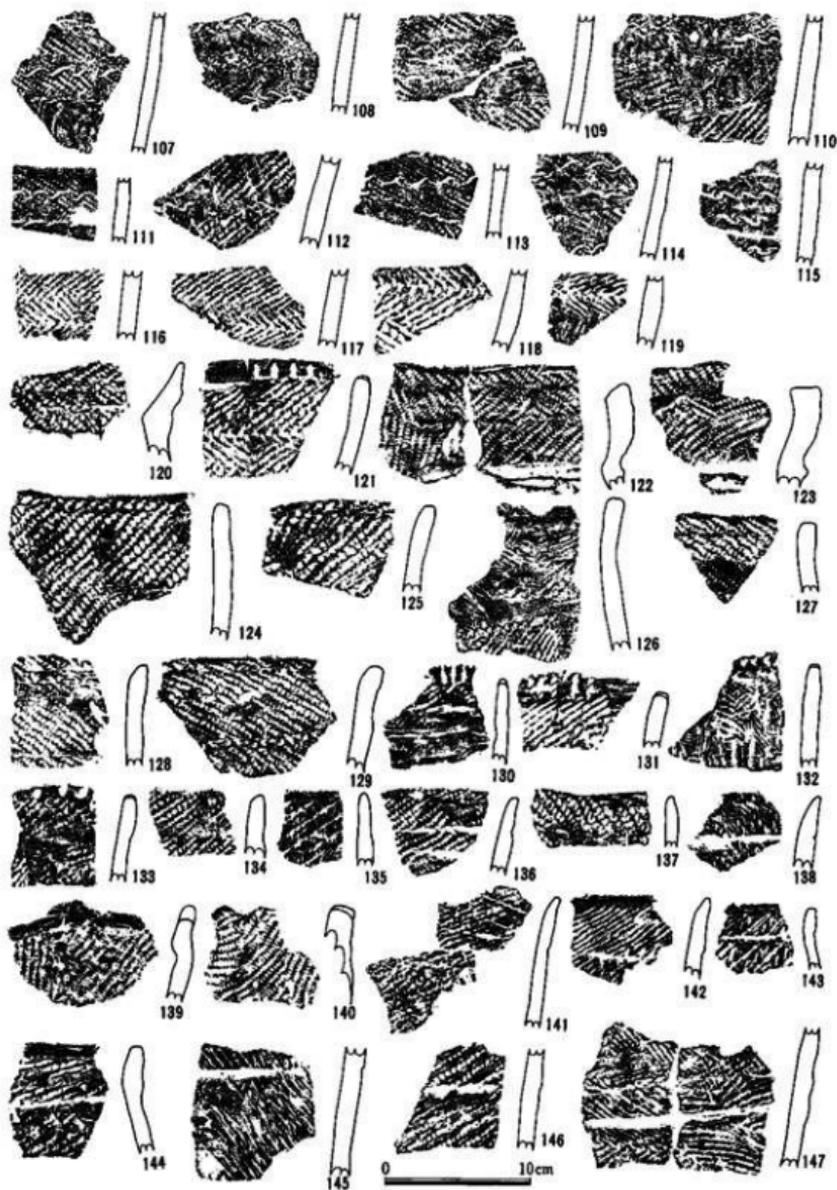
第126图 前期末葉～中期初頭土器拓影圖(2)



第127圖 前期末葉～中期初頭土器拓影圖(3)



第128图 前期末葉~中期初頭土器拓影图(4)



第129图 前期末葉～中期初頭土器拓影圖(5)

第3種 沈線および刺突による文様 (221~245・309・310)

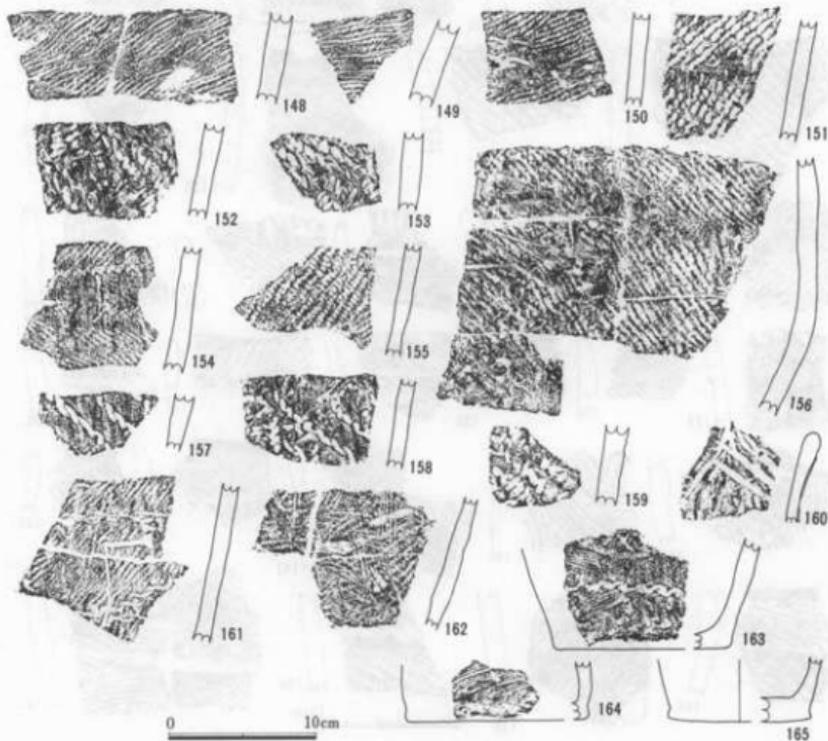
口縁部の数条の沈線と、それより垂下する沈線に刺突を加えたものである。口縁部に縄文の施文されているものもあるが、胴部には沈線、刺突の他は文様は見られない。

第4種 沈線および縄文を施文するもの (246~277・311~313)

波状口縁と平縁の両方がみられる。口唇部には刻目が施され、また沈線間の小隆帯にも同様に刻目がみられる。平縁の中には沈線の替わりに半載竹管による連続刺突が施されるものもある。胴部には口縁部を巡る沈線が垂下し、沈線内の区画には縦位の細かい縄文が施文される。第134図270のように結節縄文を施文しているものも若干みられる。

第5種 連続刺突および縄文を施文するもの (280~297・314)

口縁部に突起を有するものもある。口縁部の文様は簡素になる感がある。沈線を施すものもあるが、沈線に替わり連続刺突が施される。口縁部より垂下する沈線がなくなり、縦位の縄文を施文した後磨消による文様となっている。



第130図 前期末葉~中期初頭土器拓影図(6)

第6種 折返し口縁をもつもの (298~306)

口唇部の刻みの他は文様は少ない。302・305のように縄文や刺突が残るものも若干みられる。306は口縁直下に小突起がみられる。

第5群土器 中期中葉の土器 (第136・137図, 図版58)

第1類 勝坂式土器

第1種 角押文および刺突による文様 (1・2)

角押文および角押文に沿って刺突が施される。また1のように角押文間の区画を刺突で充たすものもみられる。

第2種 隆帯上に爪形文が施されるもの (3・4)

2対の隆帯上に爪形文が施される以外、全体の器形あるいは他の部位の文様構成は不明である。

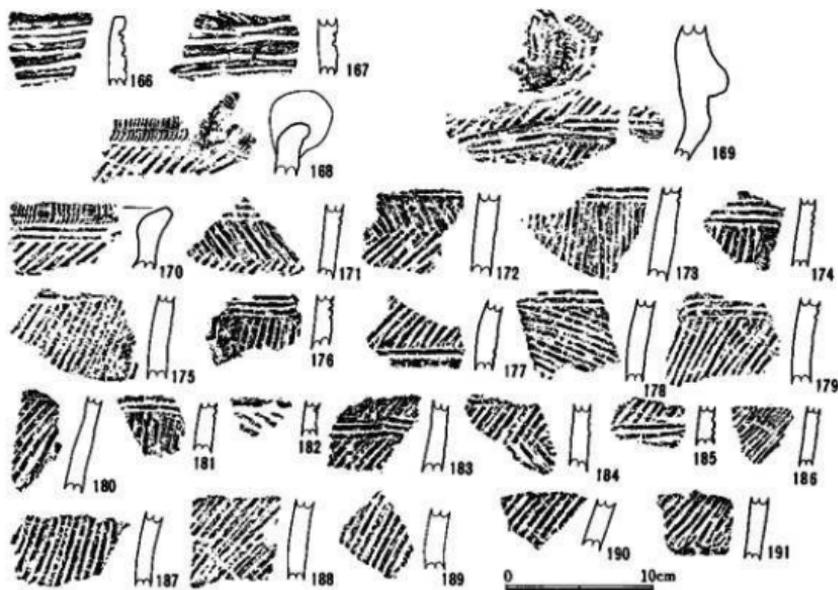
第2類 阿玉台式土器

第1種 無文あるいはひだ状文を施すもの (5~13・18~23)

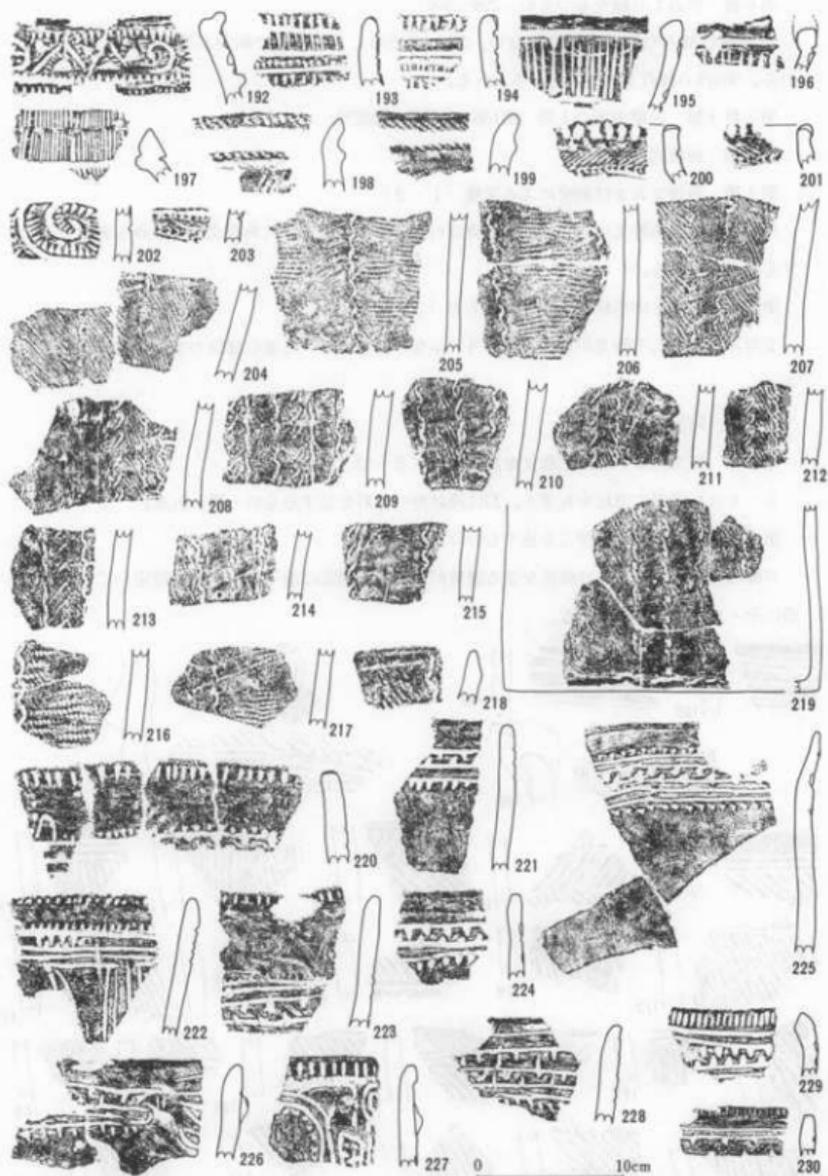
5・6は口縁部に突起を有する。23は浅鉢形の器形を呈するものと思われる。

第2種 隆帯に沿う角押文を施すもの (14~17)

口縁部は厚みをもち、口縁部を巡る隆帯がそのまま胴部に垂下し、区画を設定している。隆帯にそって角押文が施される。



第131図 中期中葉土器拓影(7)



第132图 中期中头土器拓影(图8)



第133图 中期中初頭土器拓影(图9)



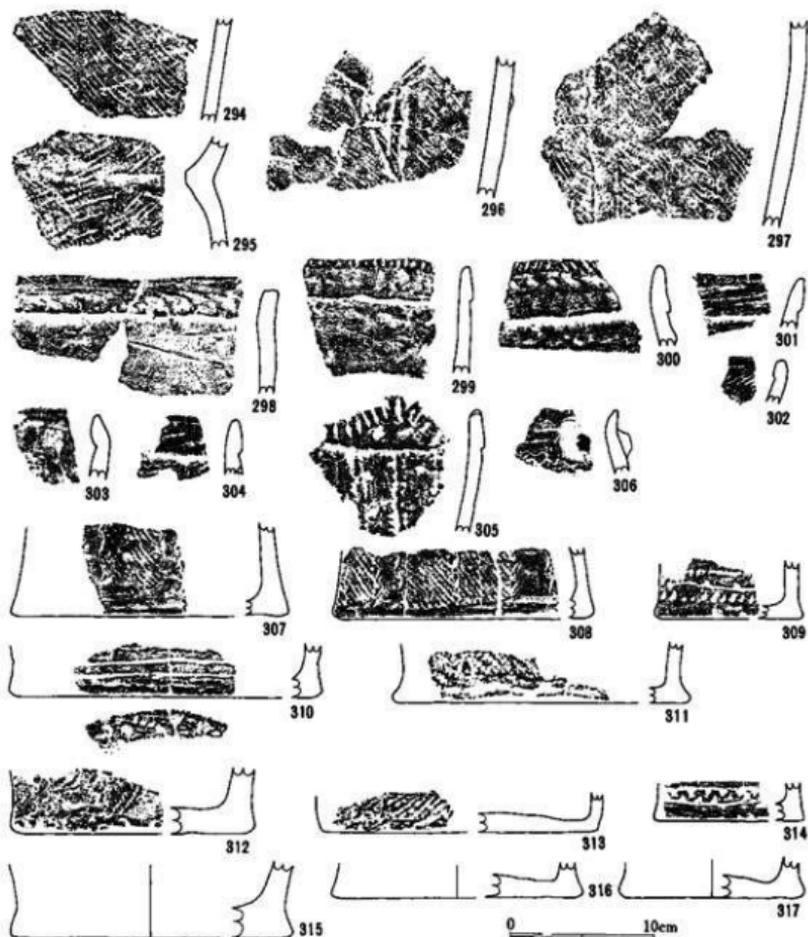
第134图 中期中頭土器拓影図⑩

第3種 隆帯および連続刺突，角押文を施すもの（24～39）

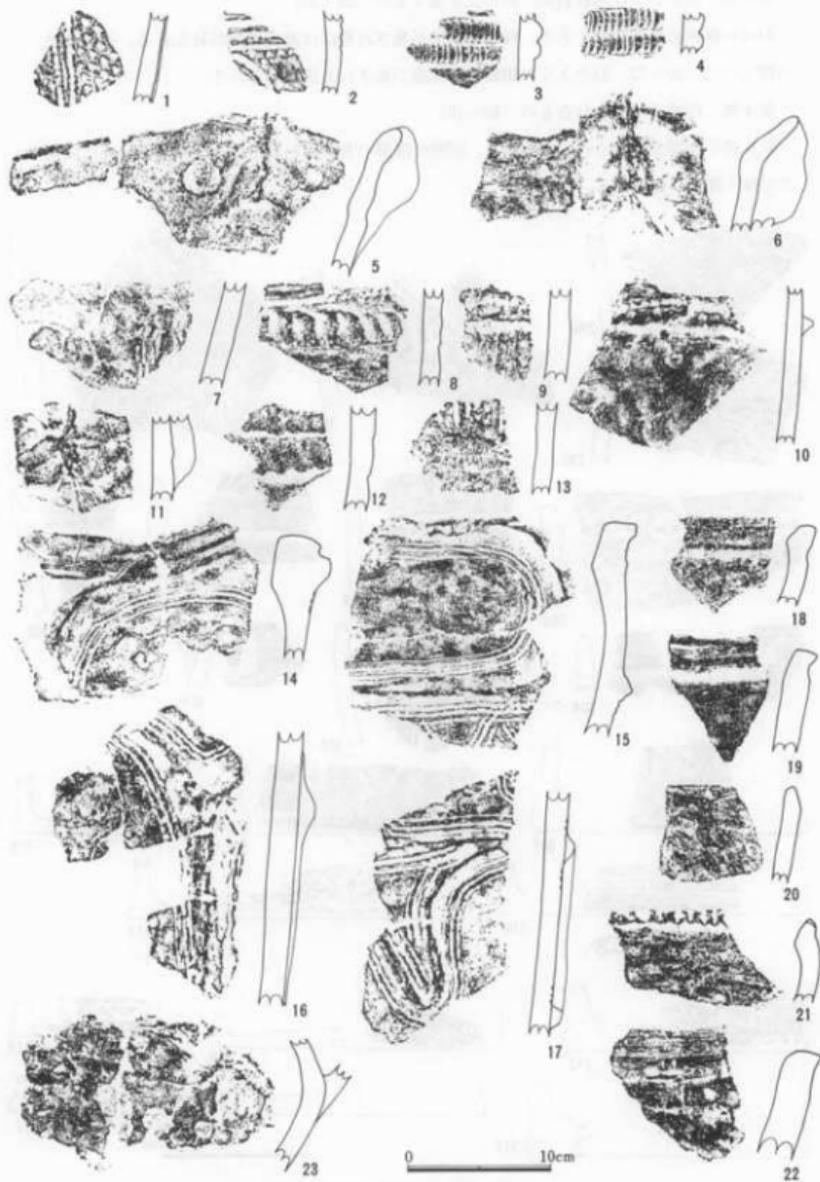
24は口縁部の裝飾突起である。縁辺に刺突が施され他には連続刺突が見られる。連続刺突，角押文に加え29・32・33のように鋸歯状の沈線が施される例も見られる。

第4種 角押文が施されるもの（40～48）

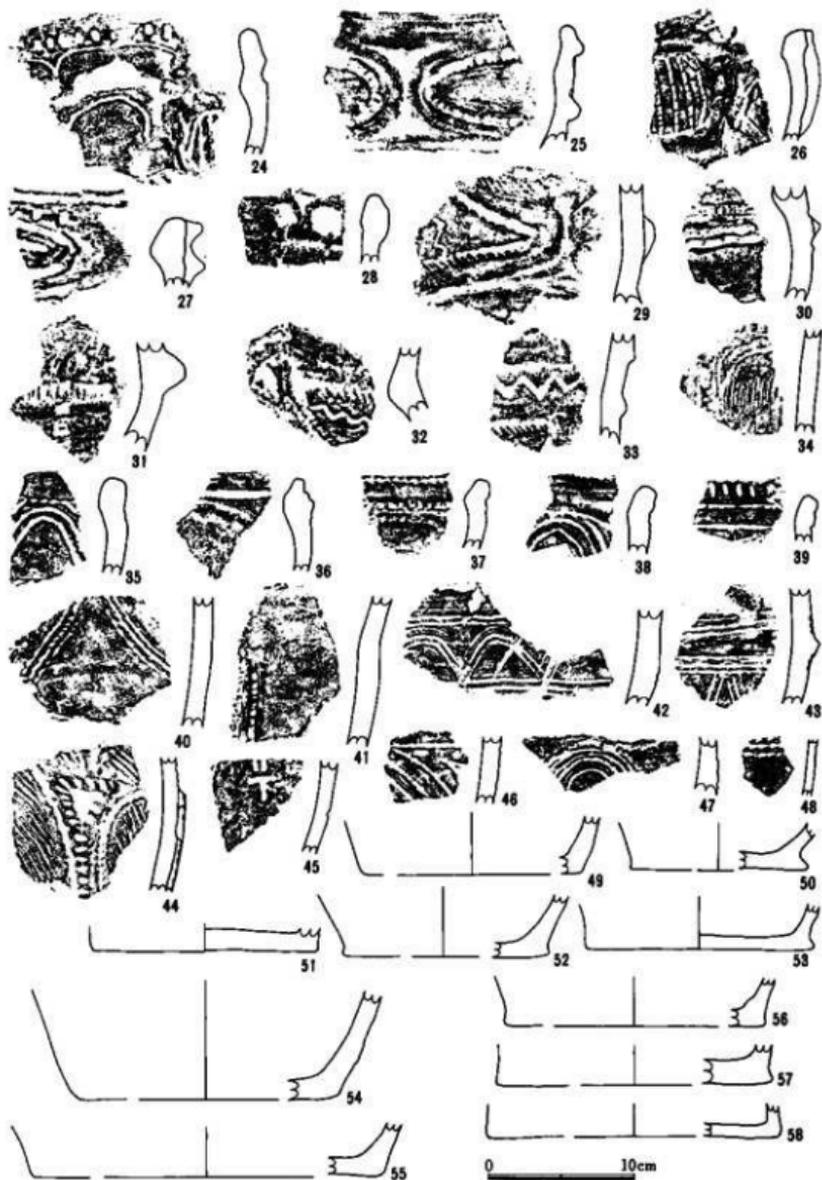
弧を描く角押文が多くみられる。胴部の隆帯の有無はわからないが口縁部付近には角押文を伴う隆帯が見られる。



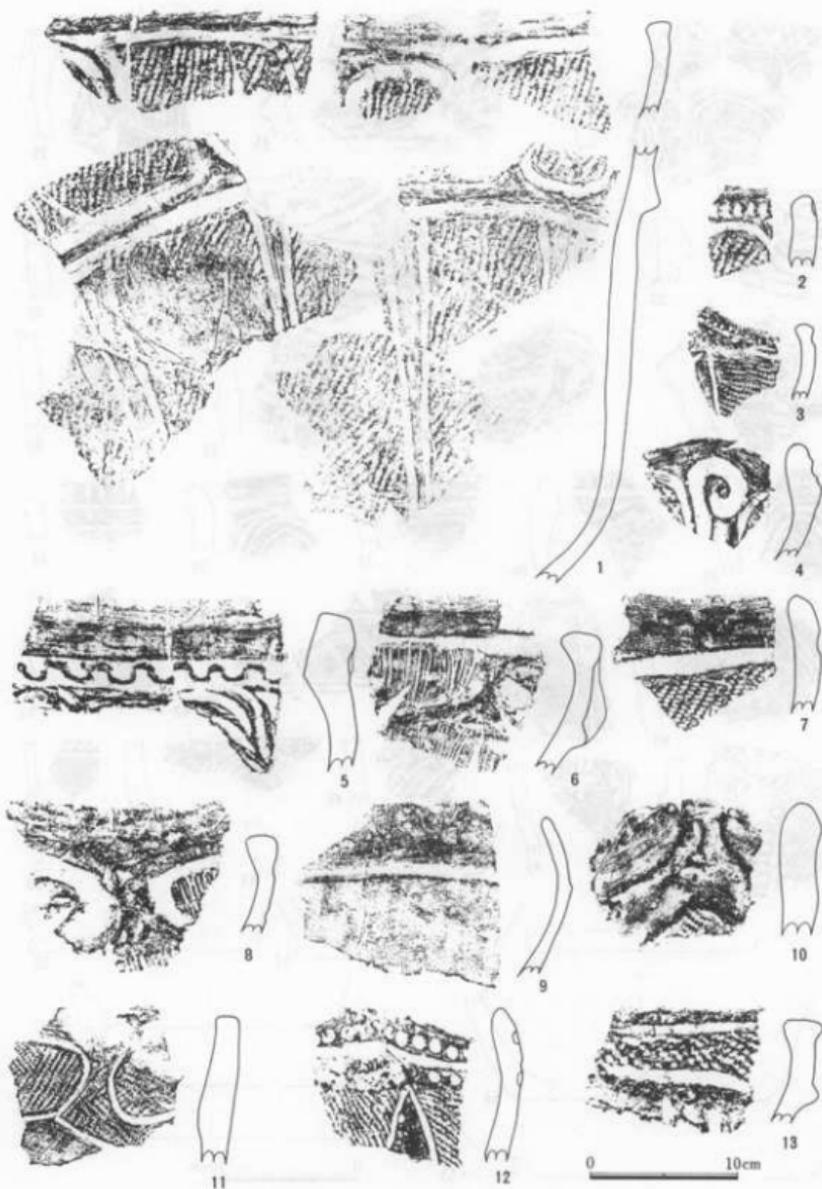
第135図 中期初頭土器拓影(国)



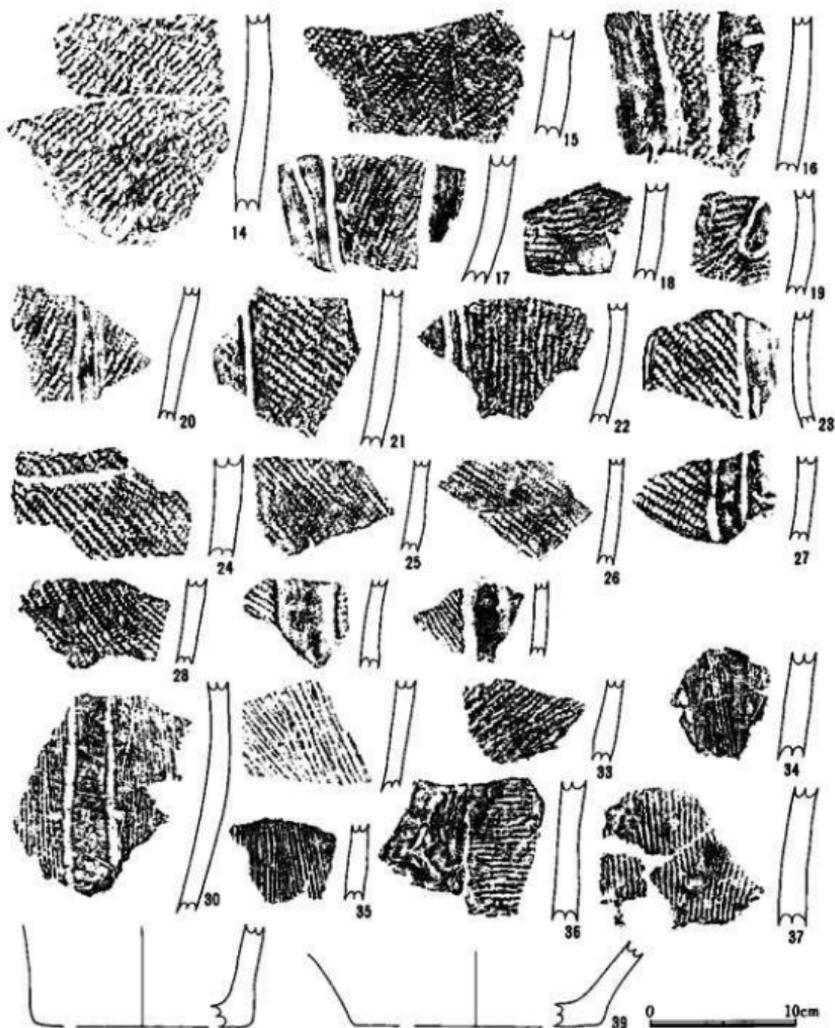
第136图 中期中葉土器拓影圖(1)



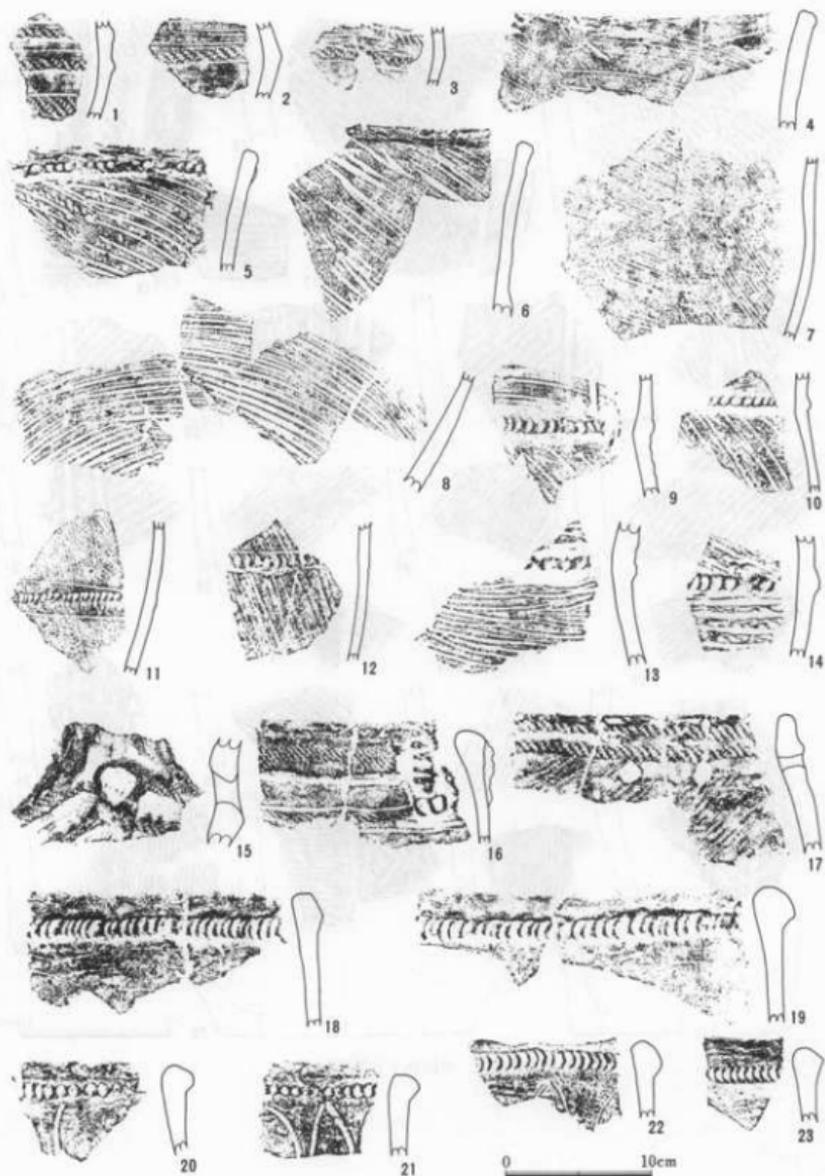
第137图 中期中葉上段拓影(图2)



第138图 中期後半土器拓影(原1)



第139回 中期後半土器拓影(2)



第140圖 後期土器拓影圖

## 第6群土器 中期後半の土器（第138・139図，図版59）

加曾利E式土器を総括して第6群とした。芝山遺跡で出土しているこの時期の土器は第135図5の中峠式土器を除いては、ほぼ加曾利EⅡ・EⅢ式で占められる。

口縁部の形状は4・10のような波状口縁が若干含まれるが、ほとんどは平縁である。口縁部の文様は隆帯により区画が設けられているもの（1・5・6・8）や、沈線により区画が設けられているもの（2・3・7・11・12・13）がある。11・12は沈線区画内の縄文が磨り消されている。胴部は垂下する2条の平行沈線間の縄文が磨り消されているのが通常である。縄文はRLの単節縄文（14～20）、LRの単節縄文（21～30）、縦位または斜位の条線文（31～35）が施文される。

## 第7群土器 後期の土器（第140図，図版60）

### 第1類 加曾利B式土器

#### 第1種 磨消縄文が認められるもの（1～3）

器厚は薄く沈線間の細かい縄文を磨り消している。加曾利B1式土器である。

#### 第2種 条線文が施されるもの（4～14）

口縁部直下に鎖状文が巡るもの（5）や無文のものがある（6）。胴部は条線文が横位あるいは斜位に施文され、縄文が部分的にみられるものもある（10・13・14）。頸部にはヘラ状工具を連続的に圧着した隆帯が巡る。加曾利B2式である。

### 第2類 安行式土器

#### 第1種 磨消縄文が認められるもの（15～17）

精製土器である。口縁部には装飾突起がみられるものと（15）平縁のものがあり（16・17）孔を穿っている。また16に代表される、刻みを施した小突起と∞状の貼付文がみられる。安行2式である。

#### 第2種 口縁下に爪形文を施すもの（18～23）

粗製土器である。砲弾形を呈する器形と思われ、口縁部に厚みをもつ。この隆帯状に巡る口縁直下に爪形文が施されているが、中には20・21のようにヘラ状工具による連続的な圧着が施されているものもある。胴部最大径の箇所にも隆帯が巡るものと思われるが、その部分が遺存している破片が出土していないため詳細は不明である。口縁とこの隆帯の間には文様区画が設けられるものが多いが、18・20・21・22にみられるように沈線による文様から、同様の文様区画のあることがわかる。

### 第3節 平安時代

芝山遺跡では、平安時代の住居跡8軒および製鉄炉1基が検出された。

住居跡の年代は、8世紀後半に属するものが019号住居跡の1軒、9世紀後半から10世紀前半に属するものが001・009・011・018号住居跡の4軒として考えられる。また010・012・029号住居跡の3軒については、住居跡に伴う遺物の出土が見られなかったため、年代を限定するには難があるが、住居跡形態より察すると、9世紀後半から10世紀前半に属するものと思われ、よってこの年代に属する住居跡は計7軒となる。

住居跡の形態は多様であり、方形を呈するもの、長方形を呈するもの、また隅丸の不整形を呈するもの等、同年代に属する住居跡の中でもまとまりがみられない。カマドの設置されている位置についても同様であり、北側にあるもの、南側にあるもの、あるいは住居跡隅部に設けられている例もあり、多種多様という点で逆に特徴づけられる。

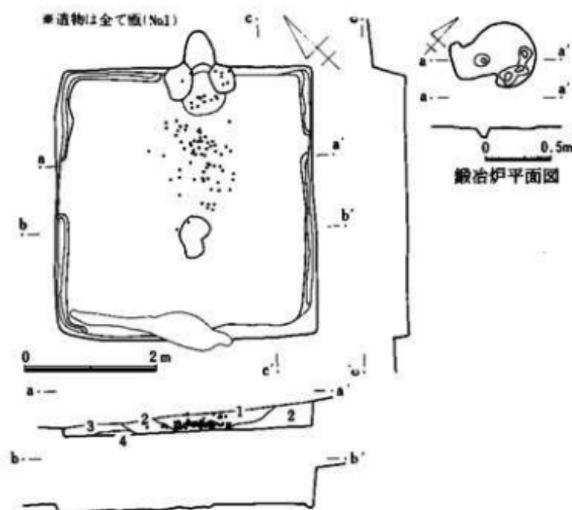
製鉄跡は台地斜面部に構築されており、大型羽口、炉壁材であったと思われる植物繊維の混入した焼土塊、流出滓、および炉壁と思われる溶解した鉄の付着している焼土塊が多量に出土している。今回の発掘調査で確認された製鉄炉は1基のみである。また範囲を図示した資料がないため範囲を明確に表わせないが、製鉄炉の位置する斜面下に多量の木炭の分布もあったとされており、製鉄炉に密接に関係するものと思われる。

9世紀後半から10世紀前半に属する住居跡と製鉄跡は密接な関係にあったと思われる。特に001号住居跡床面には鍛冶炉が検出され、また住居跡の所在する場所をみても、台地平坦部には住居跡の存在は認められず、台地縁辺部の傾斜地に点在している状態で検出されていることから、住居跡は、製鉄に携わる工人の居住地、あるいは鍛冶に関係する工房跡である可能性が考えられる。

各住居跡からの遺物の出土は少数か、または全く遺物の出土をみないものもある。出土している土器もいずれも小破片であり、住居が埋没する過程で土圧により潰れてきたようなものではなく、人為的に破壊されたような破片である。

芝山遺跡の平安時代、特に9世紀後半から10世紀前半にかけての性格は、遺構のあり方などから推測すると、製鉄跡およびそれに付随する工人集団の居住地・工房跡という性格が強く浮き出てくるが、製鉄炉は複数でなく1基しか存在せず、極めて小規模な製鉄跡であるといえるだろう。また住人あるいは工人の移動に伴い廃棄されたものであろうかと思えるような遺物の出土状態であり、時期的にもある程度限定されるため、製鉄がおこなわれていたのはごく短期間であり、製鉄炉が機能を果たせなくなった、あるいは中途の段階で工人の移動があったものとも考えられる。しかしそれが果たして社会的規制・要因によるものなのかどうかは現時点では明らかでない。

## 001号住居跡 (第141～143図, 図版61・67)



第141図 001号住居跡実測図

オー03-18グリッドに位置する。一辺4m前後の規模で、芝山遺跡で検出された該期の住居跡の中では大型の部類に入るものである。北東壁にカマドを有し、平面形は方形を呈する。

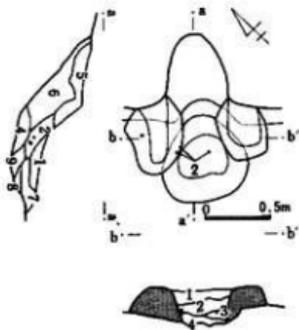
周溝は壁際全体に巡らず、カマドに対する南西壁部分および直行する壁の中央部では周溝は確認されていない。住居床面中心部よりやや南側に鍛冶に関するも

のと思われる炉があり、鍛冶炉とするとこの遺跡で検出された製鉄炉に関係する住居跡であると考えられる。しかし、この住居跡からの鉄滓の出土は見られなかった。また調査者によれば鍛冶炉としてあるが、焼面の様子・範囲等は全く明らかでなく、床面からの掘り込みも極めて浅いものであり、疑問が残る。

遺物の出土量は少なく復元によりほぼ完形の甕およびカマド内から小型の甕の底部が出土している。甕破片の出土状況であるが、カマドから床面中央部に向かって流れたような様子が窺える。

### 001号住居跡規模

位 置 :	オー03-18グリッド	カマド位置 :	北東壁ほぼ中央
形 状 :	方形	壁 高 :	13~56cm
規 模 :	4.1m×3.8m	周 溝 :	南西壁と他の壁の一部を除く
主 軸 方 位 :	N-44°-E	柱 穴 :	なし
覆 土 層 位 :	1. 暗褐色土 (ロームブロック含, 堆積礫), 2. 暗褐色土 (山砂少量含, 堆積礫) 3. 暗茶褐色土 (ロームブロック含, 堆積礫), 4. 褐色土 (山砂含, 堆積やや礫)		

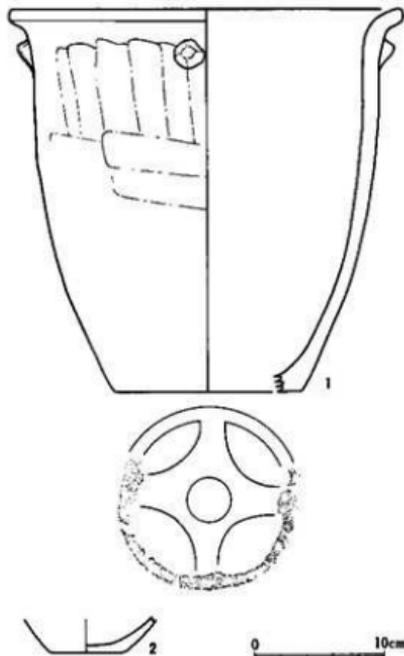


第142図 001号住居跡カマド実測図

### 001号住居跡カマド

遺存状態は良好である。袖部は山砂を構築材としており、特に他の材料を使用している様子は見られない。然焼部が袖部よりも前方に突出する感がある。

層位：1.暗褐色土（山砂含、堆積礫）、2.褐色土（焼土粒・山砂含、堆積礫）、3.焼土層、4.暗赤褐色土（焼土粒含、堆積礫）、5.暗茶褐色土（ロームブロック含、堆積礫）、6.茶褐色土（焼土粒・山砂含、堆積礫）、7.褐色土（焼土粒・山砂含、堆積やや密）8.暗褐色土（焼土粒多く含、堆積やや密）、9.暗赤褐色土（焼土粒・山砂含、堆積礫）



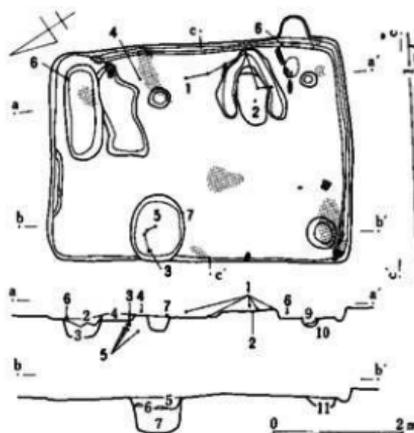
第143図 001号住居跡出土遺物実測図

### 出土遺物

1は瓶である。口径30cm、底部径14.2cm、器高29cmを測る。底部が欠損しているが、4つの半月状の透かし孔の中央部に円形の透かし孔が設けられるものと思われる。頸部の4か所に小突起が張付けられており、調整法は胴部上位は縦方向のヘラ削り、それ以下は横方向のヘラ削りである。長石・砂粒を胎土内に含み、色調は暗茶褐色を呈す。

2は小型の壺の底部破片で、カマドの覆土内の出土である。胴部の調整はヘラ削りであるが、小破片のため削りの方向は確認できない。二次焼成を受けて赤変し、土器表面は脆くなっている。胎土内に長石・砂粒を含む。

009号住居跡 (第144~146図, 図版62・67)



第144図 009号住居跡実測図

ケー11-11グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。カマドは南東壁右側に偏っており、壁右側に煙道の痕跡とそれに付随するものと思われる燃焼部が確認できる。住居を拡張あるいは新規に建て直した様子はなく、カマドのみを新規に作り直したと思われる。新規に作られたカマドは完全に住居内に設けられており、壁を掘り抜いたような煙道の形跡は見られない。

住居掘り方内に円形の土塊1基、長楕円形を呈する土塊2基が検出されているが、貯蔵穴であると思われる。住居が埋没する過程で流れ込んだものと思われる杯の破片が円形の土塊から出土している。

床面には焼土および住居の上部構造物のものであろうか炭化材が検出されているが、いずれも分布範囲、量的には多くなく、ところどころに見られる状態である。

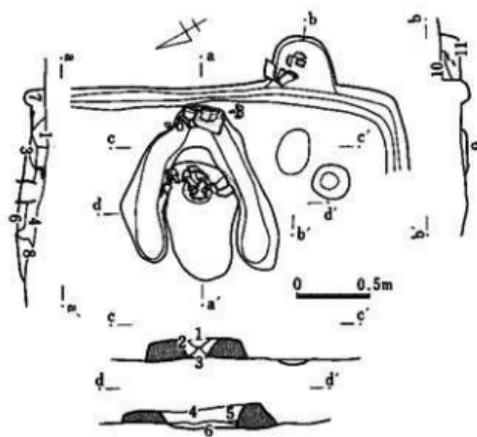
009号住居跡規模

位置	ケー11-11グリッド	カマド位置	南東壁右側
形状	長方形	壁高	5~15cm
規模	3.4m×4.6m	周溝	南東壁および南西壁
主軸方位	S-57°-E	柱穴	3基?

覆土層位：1.暗褐色土（焼土粒含、堆積密）、2.暗褐色土（焼土粒含、堆積やや疎）、3.茶褐色土（ロームブロック含、堆積やや疎）、4.暗褐色土（焼土粒含、堆積やや疎）、5.暗褐色土（焼土粒含、堆積疎）、6.暗赤褐色土（焼土粒多く含、堆積やや疎）、7.暗茶褐色土（ロームブロック含、堆積やや密）、8.暗褐色土（ロームブロック含、堆積やや疎）、9.暗褐色土（ロームブロック含、堆積やや密）、10.暗黄褐色土（ロームブロック多く含、堆積密）、11.暗褐色土（焼土粒少量含、堆積疎）

009号住居跡カマド

009号住居跡では住居掘り方内に作られたカマドおよびそれ以前に使用されていたと思われ



第145図 009号住居跡カマド実測図

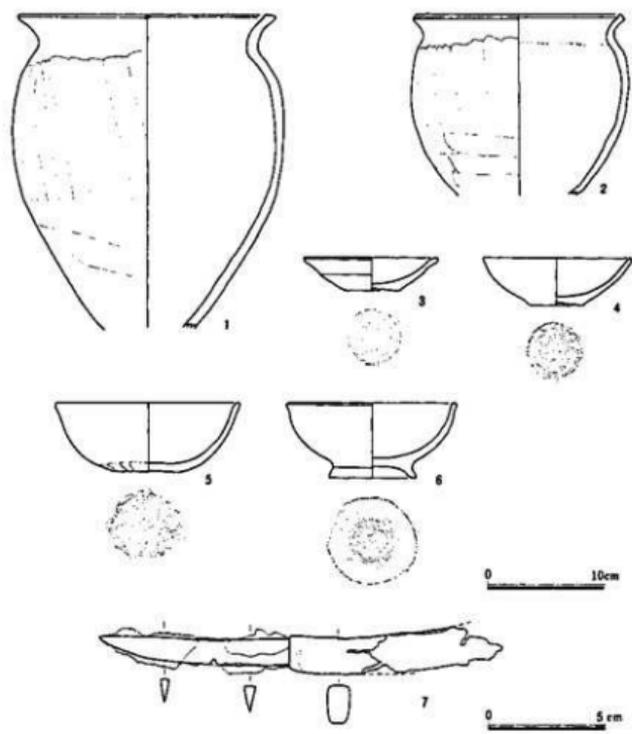
るカマドの煙道と燃焼部の痕跡が検出された。以下、前者を新カマド、後者を旧カマドとして扱う。新カマドの上面は平坦であるため、上部は削平により破壊されたものと思われるが、遺物の出土状況からさほど影響はなかったと思われる。両側の袖部から煙道にかけて山砂により構築されており、現存する煙道は壁の内側に設けられている。燃焼部上部および煙道付近から甕の破片が出土しており、また、燃焼部からは底部の欠損した小型の甕が倒立した形で出土している。さほど被熱しておら

ず、支脚として使用されたものとは考えられない。旧カマドは住居壁に煙道と床面に燃焼部が残存するのみであり、燃焼部も掘り込みはほとんど残らず、焼けた面が見られる程度のものである。

層位：1.暗褐色土（焼土粒含、堆積疎）、2.暗赤褐色土（焼土粒多く含、堆積疎）、3.赤褐色土（焼土粒多く含、堆積やや疎）、4.暗褐色土（山砂・焼土粒含、堆積疎）、5.褐色土（山砂含、堆積疎）、6.焼土層、7.暗褐色土（山砂・焼土粒含、堆積やや疎）、8.褐色土（山砂・焼土粒含、堆積やや疎）、9.赤褐色土（焼けたロームブロック含、堆積疎）、10.暗褐色土（山砂・焼土粒含、堆積密）、11.暗褐色土（焼土粒含、堆積密）

#### 出土遺物

009号住居跡から出土した遺物は、図化可能なもので7点を数える。このうち柄の木質部が遺存する鉄製刀子が1点出土している。1は底部が欠損している甕である。口径22.1cm、現存高26.8cmを測る。胴部上位に最大径をもち、最大径部分の器厚が最も薄くなる。口縁部内面に稜をもち、調整法は胴部上半が縦方向のヘラ削り、下位は横方向のヘラ削り、口縁部外面はヨコナデ、胴部内面は横方向のヘラ削りである。色調は暗茶褐色を呈し、胎土内に長石・砂粒を含む。2はカマド燃焼部に倒立した形で出土したものであり、口唇部が尖り、口径は17.7cm、現存高は15.7cmであり底部が欠損している。調整は胴部外面上半が縦方向のヘラ削り、下半は横方向のヘラ削り、口縁部内外面はヨコナデ、胴部内面は横方向のヘラ削りである。口縁部内面に輪積み底が残る。色調は赤褐色で被熱し表面は脆くなっているが、著しいものではなく、



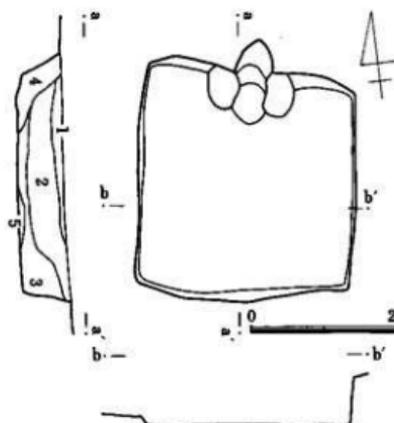
第146図 009号住居跡出土遺物実測図

支脚として使用されたものとは思えない。長石・砂粒を胎土内に含む。3は杯である。口径11.7cm、器高2.8cm、底径4.6cmを測る。口縁部が外反する器形である。調整は体部外面はロクロ整形の跡が見られるが方向は不明。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はヘラミガキである。底部はヘラ削りにより内面に窪むような調整を施すが、切り離し方は定かでない。4は杯であり口径15.9cm、器高4.0cm、底径4.5cmを測る。体部外面はロクロ調整痕が見られるが、回転方向は不明である。口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラミガキである。底部には承切り離し痕が見られ、切り離し後の調整は施されていない。色調は暗褐色、砂粒を胎土内に含む。5は壺である。口径15.9cm、器高5.9cm、底径5.6cmを測り、口縁部がやや外反する。調整法は体部外面はロクロ調整の跡が見られるのみである。口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラミガキである。また体部外面下部にはヘラ削りによる調整が施される。底部はヘラ削りによる調整が施されるが、切り離し法は不明である。6は高台付壺である。口径14.9cm、器高6.5cm、底径6.9cm、高台高0.9cm、高台径7.7cmを測る。口縁は丸みをもち、やや外反する、調整法は体

部外面はロクロ調整の跡を残し、口縁内外面はヨコナデ、体部内面はヘラミガキ。高台部は内外面共にヨコナデである。糸切り離した後無調整で高台部を付けている。

7は鉄製刀子である。柄の木質部が遺存しており、この資料によると柄の部分はやや上方に湾曲している感がある。

### 010号住居跡 (第147・148図, 図版63)



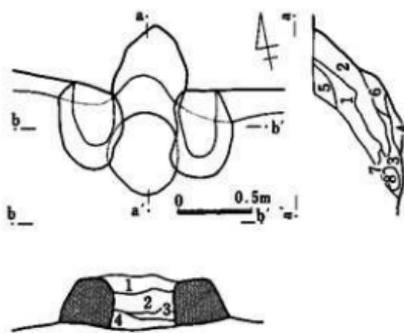
第147図 010号住居跡実測図

オー02-13グリッドに位置する。平面形は一辺3mの不整形を呈する。北壁はほぼ中央部にカマドを有し、柱穴・周溝は検出されなかった。土器は少なくいずれも小破片で、覆土上層から出土しているため、この住居跡に伴う土器は皆無と言って良いかもしれない。

#### 010号住居跡規模

位置：オー02-13グリッド  
 形状：不整形  
 規模：3.2m×3.0m  
 主軸方位：N-10°-E  
 カマド位置：北壁ほぼ中央

壁 高：16cm～66cm 周溝：なし 柱穴：なし  
 覆土層位：1.暗褐色土（ロームブロック含む、堆積礫）、2.暗茶褐色土（焼土粒少量含、堆積礫）、3.暗茶褐色土（焼土粒・山砂含、堆積やや礫）、4.褐色土（山砂含、カマド袖部分）、5.褐色土（山砂・焼土粒含、堆積密）



第148図 010号住居跡カマド実測図

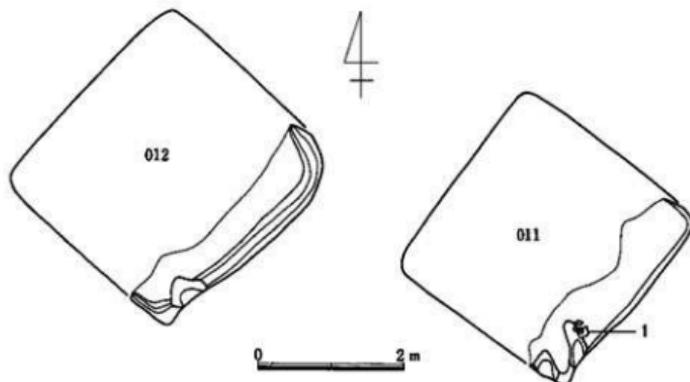
#### 010号住居跡カマド

遺存状態は良好である。001号住居跡のカマドと同様に燃焼部が煙道方向に突出する感がある。

層位：1.暗褐色土（山砂・焼土粒含、堆積礫）、2.暗茶褐色土（山砂・焼土粒含、堆積礫）、3.焼土層、4.暗赤褐色土（焼土ブロック含、堆積礫）、5.暗褐色土（山砂含、堆積やや礫）、6.茶褐色土（焼土

粒合，堆積やや密)。7.暗褐色土(山砂・焼土粒合，堆積やや疎)，8.褐色土(山砂多く含，堆積やや疎)

### 011・012号住居跡(第149・150図，図版64・67)



第149図 011・012号住居跡実測図

011号住居跡はオー02-17グリッド，012号住居跡はオー02-18グリッドに位置する。西に向かって傾斜する斜面に位置するため，両方とも西側壁が検出されなかった。カマドは住居跡南隅に設けられ，011号住居跡は煙道がそのまま住居の隅部となっている。遺物は極めて少量で011号住居跡カマド袖部付近から環が1点出土しているのみである。

#### 011号住居跡規模

位 置：	オー02-17グリッド	カマド位置：	南隅部
形 状：	隅丸方形？	壁 高：	5 cm
規 模：	3 m × ？	周 溝：	なし
主 軸 方 位：	？	柱 穴：	？
覆 土 層 位：	不明		

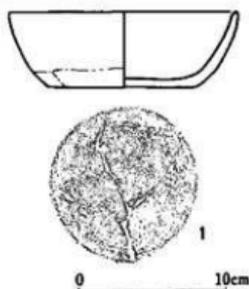
#### 012号住居跡規模

位 置：	オー02-18グリッド	カマド位置：	南隅部
形 状：	隅丸方形？	壁 高：	5 cm
規 模：	3.3 m × ？	周 溝：	全周？
主 軸 方 位：	？	柱 穴：	？
覆 土 層 位：	不明		

#### 011・012号住居跡カマド

両方とも削平により袖部の下部のみが残るのみで、カマドの位置、および山砂により構築されていることが確認できる程度である。共に隅部をそのまま経過としている。012号住居跡カマドは下部に周溝が確認されている。

#### 011号住居跡出土遺物

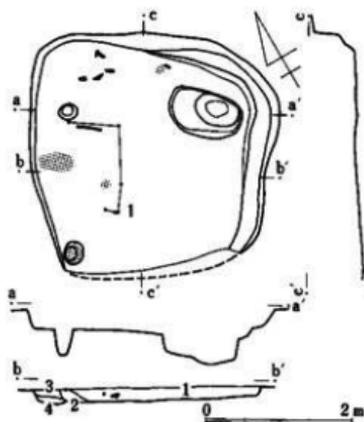


第150図

011号住居跡出土遺物実測図

011号住居跡から坏が出土している。出土位置はカマド左袖の外側である。口径15.5cm、器高5.3cm、底径10.0cmを測る。底部外面付近に横方向のヘラ削りの跡が確認でき、他の部位は体部外面はロクロ調整痕を残し、口縁部内外面はともにヨコナデ、体部内面はヘラミガキが施される。底部外面は切り離し後ヘラ削りにより調整される。切り離し力は不明である。色調は赤褐色、焼成は良好で胎土内に砂粒を含む。

#### 018号住居跡 (第151・152図, 図版64・67)



第151図 018号住居跡実測図

ク-11-23グリッドに位置し、平面形は不整隅丸方形を呈す。東壁付近が2段になるが、特に拡張した様子は見られない。カマドは無く、また火を焚いたような跡も見られない。柱穴は確実なものが2本確認でき、東側にあるものは柱穴の掘り方か、あるいは貯蔵穴の可能性もある。住居床面付近には、焼土と炭化材が検出されたが、分布範囲、量的にも多くはない。要と坏が出土している。

#### 018号住居跡規模

位 置：ク-11-23グリッド

形 状：不整隅丸方形

規 模：3.3m? × 3.3m

カマド位置：なし

周 溝：なし

主 軸 方 位：?

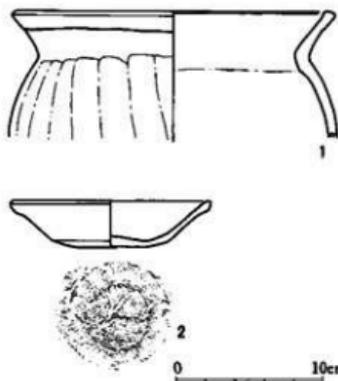
壁 高：20cm~40cm

柱 穴：2基(3基)

覆土層位：1. 暗褐色土(焼土粒・炭化材含、堆積疎)、2. 暗茶褐色土(焼土粒・炭化材含、

堆積礫), 3. 暗褐色土 (焼土粒少量含, 堆積礫), 4. 茶褐色土 (ロームブロック含, 堆積やや礫)

#### 出土遺物



第152図 018号住居跡出土遺物実測図

1は鉢である。胴部中位から底部にかけて欠損する。口径22cm, 現存高9cmを測る。頸部のくびれ部の器厚は厚く, 口縁部内面が内側にやや突き出る器形である。胴部外面は縦方向のヘラ削り, 口縁部内外面はヨコナデ, 胴部内面は横方向のヘラ削りである。口縁部外面直下および頸部内面に輪積み痕が残る。焼成は良好で茶褐色を呈し, 長石・砂粒を含む。2は坏である。口径13.7cm, 器高3.1cm, 底径4.3cmを測る。口縁部に厚みをもち, やや外反している。口縁部内外面はヨコナデ, 体部内面はミガキが施されるが, ヘラによるミガキとは思えない。底部はヘラ削りにより調整される。色調は明茶褐色を呈し,

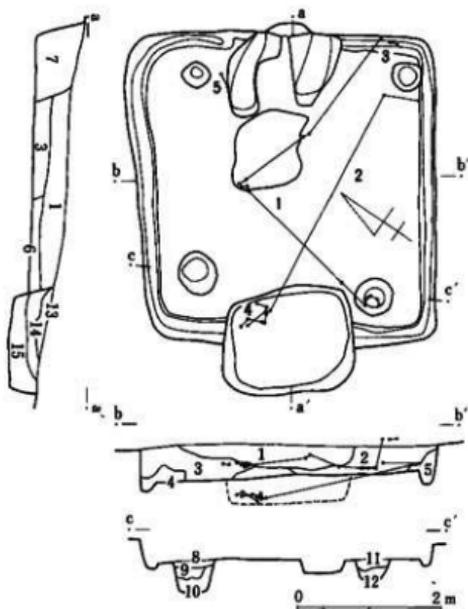
砂粒を胎土内に含む。

#### 019号住居跡 (第153~155図, 図版65・66・67)

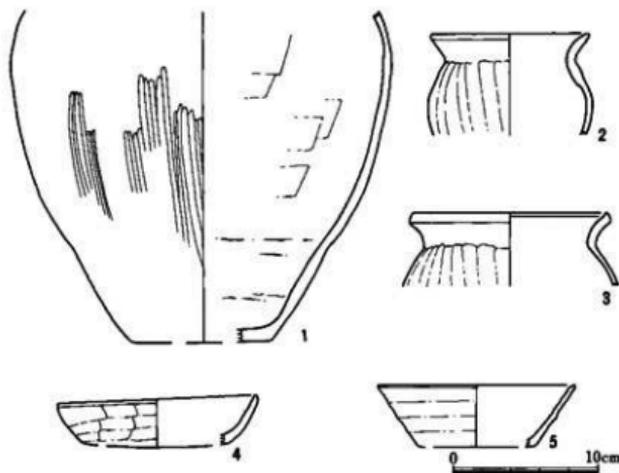
ク-00-03グリッドに位置し, 平面形は一辺4m程の不整隅丸方形を呈す。周溝は北東壁にあるカマドの下部を除く全周に巡り, 柱穴は4基認められる。カマドは構築材である山砂がカマド手前側に流れたような様相を呈する。南西壁には039号土壌が住居跡を切る形で位置しており, 切り合い関係は土層断面によると土壌のほうが新しい時期であることが確認できる。

#### 019号住居跡規模

位置:	ク-00-03	カマド位置:	北東壁ほぼ中央
形状:	不整隅丸方形	壁高:	23cm~45cm
規模:	4.2m×4.1m	周溝:	カマド下部を除くほぼ全周
主軸方位:	N-55°-E	柱穴:	4基
層位:	1. 黒褐色土 (堆積礫), 2. 暗褐色土 (山砂含, 堆積やや礫), 3. 暗褐色土 (焼土粒・山砂含, 堆積やや礫), 4. 暗褐色土 (ロームブロック含, 堆積やや密), 5. 暗褐色土 (ロームブロック含, 堆積やや密), 6. 暗茶褐色土 (焼土粒・山砂含, 堆積やや密), 7. カマド部分 (山砂・焼土粒多く含, 堆積密), 8. 暗黄褐色土 (ロームブロック含, 堆積やや礫), 9. 黒褐色土 (ロームブロック少量含, 堆積礫), 10. 暗黄褐色土 (ロームブロック多く含, 堆積密), 11. 暗褐色土 (ロ		



第153図 019号住居跡実測図



第154図 019号住居跡出土遺物実測図

ームブロック含、堆積礫), 12. 暗黄褐色土 (ロームブロック含、堆積やや密) 13. 黒褐色土 (堆積やや礫), 14. 暗褐色土 (ロームブロック含、堆積礫), 15. 暗茶褐色土 (焼土粒少量含、堆積やや密)

#### 019号住居跡カマド

左袖部分がやや前方に張り出す。構築材は山砂を使用し、煙道基底部付近まで袖部が構築されるものである。明確な燃焼部は確認されず、焼土の堆積位置によりある程度の燃焼部の位置が判断できる程度である。カマド焚口前方には山砂の堆積が認められ、住居廃棄時にカマドを破壊した名残りである可能性が考えられる。

層位：1. 暗褐色土 (焼土粒・山砂

含、堆積やや密), 2. 暗赤

褐色土 (焼土粒多く

含、堆積やや礫),

3. 赤褐色土 (焼土粒

多く含、堆積礫),

4. 明褐色土 (山砂多

く含、堆積礫), 5.

明褐色土 (山砂多く

含、堆積やや密),

6. 褐色土 (焼土粒・

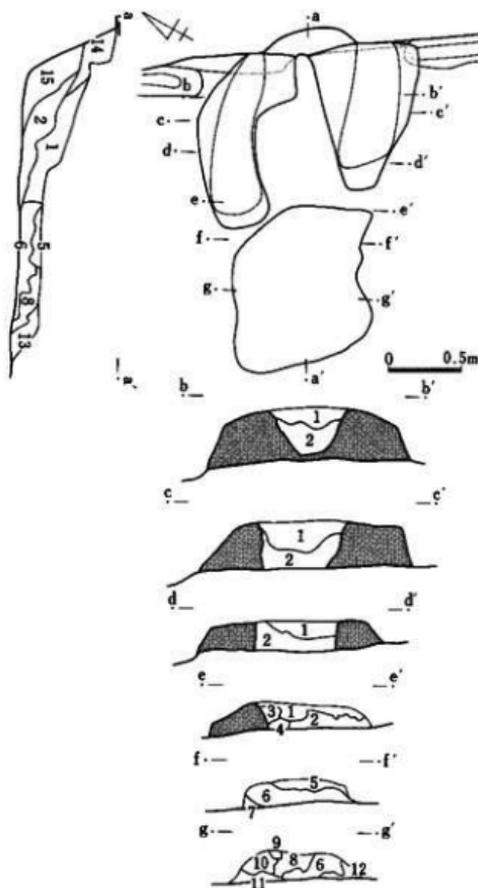
山砂含、堆積密),

7. 暗茶褐色土 (焼土

粒含、堆積密),

8. 褐色土 (山砂含、

堆積密), 9. 黒褐色



第155図 019号住居跡カマド実測図

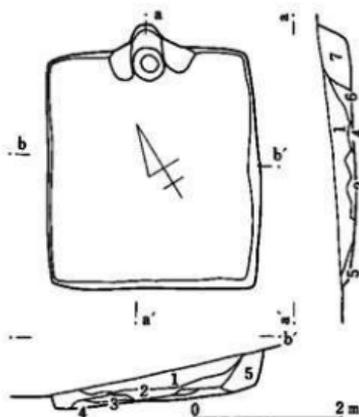
り、胴部以下が欠損している。調整は胴部内面は縦方向のヘラ削り、口縁部内外面はヨコナデ、胴部内面は不明である。暗赤褐色を呈し、胎土内に砂粒を含む。4は坏である。推測される口径は13.6cm、器高2.3cm、底径8.8cmを測り、底部が欠損する。調整は体部外面は横方向のヘラ削り、口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラミガキが施される。色調は暗赤褐色を呈し、胎土内に砂粒を含む。5は須恵器坏である。底部が欠損している。口径13.7cm、器高4.2cm、底径7.9cmを測る。内外面共にクロコ調整痕が残される。色調は灰褐色、胎土内に砂粒を含

土（焼土少量含、堆積やや密）、  
 10. 明褐色土（山砂含、堆積密）、  
 11. 暗褐色土（焼土粒・ロームブロック含、堆積密）、12. 暗褐色土（焼土粒含、堆積密）、13. 暗褐色土（焼土粒含、堆積やや疎）、14. 暗茶褐色土（焼土粒含、堆積やや疎）、15. 暗褐色土（焼土粒多く含、堆積やや疎）

出土遺物

1は甕である。胴部上位から口縁部にかけて欠損しており、現存高22cm、底部の推定径9.5cmを測る。調整は胴部外面は縦方向のヘラミガキが、胴部内面は横方向のヘラ削りが施されるが、底部の調整は不明である。茶褐色を呈し、胎土内に砂粒と3mm程の長石粒を含む。2は小型の甕である。口径11cm、現存高6.8cmを測る。胴部中位以下が欠損する。調整は体部外面は縦方向のヘラ削り、口縁部内外面はともにヨコナデ、胴部内面は横方向のヘラ削りである。色調は暗褐色を呈し、胎土内に砂粒、長石を含む。3は甕である。口径13.5cm、現存高4.9cmを測

029号住居跡 (第156・157図, 図版66)



第156図 029号住居跡実測図

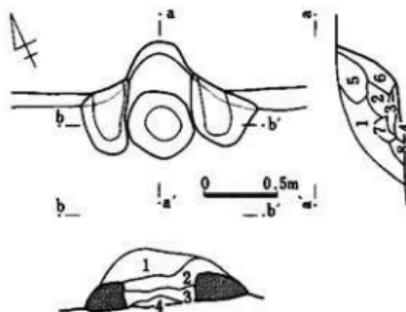
エー04-21グリッドに位置し、平面形は長方形を呈す。北壁中央にカマドを有する。周溝、柱穴は確認されなかった。住居跡に伴う土器はごく少数でいずれも小破片であり、図示するには至らなかったが、019号住居跡を除く他の住居跡と時期を同じくするものと思われる。

029号住居跡規模

位置：エー04-24  
 形状：長方形  
 規模：3.3m×2.8m  
 主軸方位：N-29°-E  
 カマド位置：北壁ほぼ中央  
 壁高：10cm~40cm  
 周溝：なし  
 柱穴：なし

覆土層位：1.黒褐色土（ロームブロック少量含、堆積礫）、2.暗茶褐色土（山砂少量含、堆積礫）、3.暗褐色土（焼土粒含、堆積礫）、4.暗褐色土（焼土粒・山砂含、堆積やや礫）、5.褐色土（ロームブロック含、堆積やや礫）、6.褐色土（山砂含、堆積やや密）、7.カマド部分（山砂・焼土粒含、堆積やや密）

029号住居跡カマド



第157図 029号住居跡カマド実測図

遺存状態は良好である。山砂を構築材として使用している。

袖はやや小振りであるため燃焼部が煙道方向に位置する感がある。

層位：1.明褐色土（山砂・焼土粒含、堆積やや密）、2.明褐色土（山砂・焼土粒含、堆積やや密）、3.赤褐色土（焼土粒多く含、堆積礫）、4.焼土層、5.褐色土（焼土粒含、堆積やや礫）、6.暗茶褐色土（焼土粒含、堆積やや礫）、7.暗赤褐色土（焼土粒・山砂含、堆積礫）、8.暗褐色土（焼土粒・山砂含、堆積礫）

土粒含、堆積やや礫）、7.暗赤褐色土（焼土粒・山砂含、堆積礫）、8.暗褐色土（焼土粒・山砂含、堆積礫）

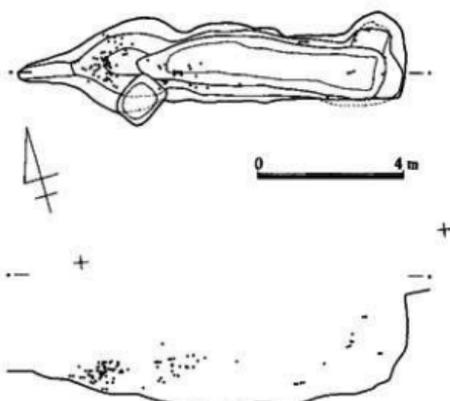
### 004号製鉄跡 (第158図, 図版68・69)

オー02-14グリッド, 台地斜面部に位置する。長軸11.4m, 短軸2.02mの長方形を呈し, 長軸はほぼ等高線に直交している。

斜面側の掘り込みは浅く, 注ぎ口状に斜面下に向かって突き出るような形状が, かなり確認できる程度だが, 台地平坦部側の掘り込みは3mにも及ぶ。

遺構内からは大型羽口2個体のほか, 溶鉄の付着した植物繊維を粘土に混入した炉壁材, 流出滓が出土している。しかし鉄滓はほとんど含まれていない。

出土している溶鉄の付着した炉壁材は, 垂直分布を見ると, 製鉄炉掘り方床面よりかなり上部に分布しており, 製鉄がおこなわれなくなったのち人為的に破壊されたものではなく, そのまま廃棄され, 遺構が自然埋没する過程で崩落したものであろうか。



第158図 004号製鉄炉実測図

#### 遺物

遺物と解釈してよいのであろうか, 大型羽口が2個体出土している。炉壁材とは異なり, 植物繊維を混入しない粘土により成形される。上方径17.5cm, 下方径14cmを測り, 下方がややすぼまる形状を呈す。周囲には帯状に粘土が付着しており, 天井部のような上部構造部分のなごりであると思われ, これにより, 羽口は単体で成形されたものではなく, 上部構造部分を建設する際に一体で成形されたものと考えられる。

当遺構より出土した, 炉壁材が付着している溶鉄, 流出滓は, 総重量164.54kgに及ぶ。このうち鉄滓, 流出滓等の, 崩落した炉壁と異なるものは30.19kgであり, わずかに18.3%を数えるのみである。あるいは製鉄跡の斜面下方に鉄滓が分布している可能性が考えられる。

## 第3章 小 結

### 1. 先土器時代

本文中で紹介した第1・2ブロックは、環状に小規模なブロックが巡ることは確認されていないが、いわゆる「環状ブロック群」の範疇に含まれるものである。ここで現在確認されている各地の環状ブロック群の様相と比較し、若干の考察を試みたいと思う。

現在環状ブロック群として確認できるものは北関東、南関東（特に下総台地）に多く分布しており、これからも同様の事例が増加する可能性は大きい。下総台地では立川ローム層の堆積が薄く、地表から2mも掘削すれば、立川ローム層中のほとんどの文化層に属する石器群を検出可能である。また面的にも広範囲にわたる面積の調査がおこなわれているため、相模野・武蔵野台地と比較するとIX層段階の石器群の検出例が多いのは当然のことである。以下、環状ブロックが検出された遺跡を列記し、層序、形状、石器組成等の観点より環状ブロック群を検討してみる。

#### 北関東

群馬県  
分郷八崎遺跡  
下触牛伏遺跡

#### 南関東

下総台地  
聖人塚遺跡  
中山新田I遺跡  
土持台遺跡  
御山遺跡  
池花南遺跡  
武蔵野台地  
下里本邑遺跡  
高井戸東遺跡

#### 層序、形状・規模

層序的にはほぼIX層に属する。下総台地では第2黒色帯をⅤa～Ⅴc層と呼称していたため報告書に記載されている層序はⅤ層等とされているが、IX層として考えられる。また分郷八崎遺跡、下触牛伏遺跡では、A T層下部の黒色帯から検出されているが、IX層に相当するかは検討を要する。

形状・規模は必ずしも一致しない。下触牛伏遺跡、中山新田I遺跡、池花南遺跡のように円形にブロックが巡るものが大半であるが、聖人塚遺跡、分郷八崎遺跡のように楕円状に分布をみるものも若干含まれる。また、環状の中央部にブロックが存在する例も見受けられる。規模は下触牛伏遺跡、中山新田I遺跡のように径40m以上に及ぶものと、聖人塚遺跡、分郷八崎遺跡のように径20m内外のもの2種に限定される。芝山遺跡第1ブロックは後者、第2ブロックは前者に対比できよう。

### 石器組成・剥片剥離技術

環状ブロック群に共通して見られる石器は、台形石器、局部磨製石斧があげられ、剥片剥離技術も台形石器の素材剥片を得るためのものであり、よって環状ブロック群からは多面体の石核が多く出土している。また縦長剥片を有し、本遺跡の第1ブロックのように単独母岩の石刃を有している、同じく第2ブロックでは縦長剥片を搾取したと思われる石核が出土しているにもかかわらず、同一母岩の縦長剥片は確認されていないことなどから、客体的であるが縦長剥片剥離技術にも関係があるといえる。だが聖人塚遺跡のように石刃が主体となるものや、高井戸東遺跡のように、縦長剥片剥離技術と横長剥片剥離技術が明確に共存している例を見ると、環状ブロック群を形成した人々の剥片剥離技術は、完全に横長剥片剥離技術であるとは現時点では断定できない。

芝山遺跡では大小2か所の環状ブロック群が検出されたが、同遺跡、あるいは同じ台地の近接した場所で複数の環状ブロック群が検出した例は現在の所まだない。だが第1ブロック、第2ブロックの双方を比較してみると、使用されている石材が全く異なること、台形石器の形態が異なることなどから、弱干の時間的なずれ、あるいは環状ブロック群を形成した集団の違いが考えられる。ただ一つ、第1ブロックで出土している局部磨製石斧の成形剥片と思われるものが、第2ブロックで集中して出土していることに着目される。

環状ブロック群の形成過程、形成状態を考えると、環状ブロック内の小ブロック相互に接合関係が認められることから、時期的に異なるブロックが残された結果環状に巡るのではなく、ほとんど同時期に形成されたものであるといえる。すなわち最小単位の集団（家族？）から構成される大集団が、環状を呈するキャンプサイトを設け、石器製作をおこなった結果環状ブロック群となったのではないであろうか。またこの集団の持つ石器製作技術は横長剥片剥離であり、客体的に見られる縦長剥片剥離技術は、他の集団のものであると考えられる。

## 2. 縄文時代

芝山遺跡では先に述べたように、前・中・後期の住居跡各1軒、早期伊穴2基、前期・後期土壇各1基、および時期不明陥穴状遺構44基が検出された。だが当遺跡における縄文時代の、ひいては各時期別について考察をおこなうとすると、その性格は現時点では明らかでない。

集落について考えるならば、各時期の住居跡が属する集落が、いずれの方向にあるのであろうか。可能性があるとするれば、遺跡東側の台地平坦部か、あるいは北東方向の桑納川に面した台地上に立地するものと思われる。

出土した遺物について考えると、包含層より出土している土器より、多期にわたり何らかの人為的な作業がおこなわれていたことは確実である。特に前期末から中期初頭に属する土器の

数量は他の時期のそれを凌駕している。だがこの時期に属する遺構は確認されておらず、果たしてどのような人為的な行為の結果として芝山遺跡の立地する台地に存在するのであろうか。

唯一性格付けするという点では、44基検出した陥穴状遺構に着目したい。陥穴状遺構がどの時期に属するものなのかは不明であるが、形状からすると時期的に多期にわたって設けられたものであろう。それが連続的・非連続的いずれにせよ、同じ台地斜面部に設けられていることは、陥穴状遺構の本来の機能である狩猟が、多期にわたっておこなわれていたことを示している。換言すれば、陥穴状遺構による狩猟の対象となる獣類が棲息し、この場所に立ち入る頻度が高かったことに他ならない。芝山遺跡の西側斜面部には湧水箇所が多く、水量も豊富であったと聞く。このため芝山遺跡の縄文時代の性格は、水場を求めて斜面を下る獣類の狩猟を目的とした、狩場的な場所であるといえる。

### 3. 平安時代

芝山遺跡における平安時代の様相を考えると、9世紀から10世紀の間のある程度限定された時期に着目せざるをえない。本文中であつかった平安時代の遺構の中で、009号住居跡を除いた他は、ほぼ9世紀から10世紀に属すると思われるからである。

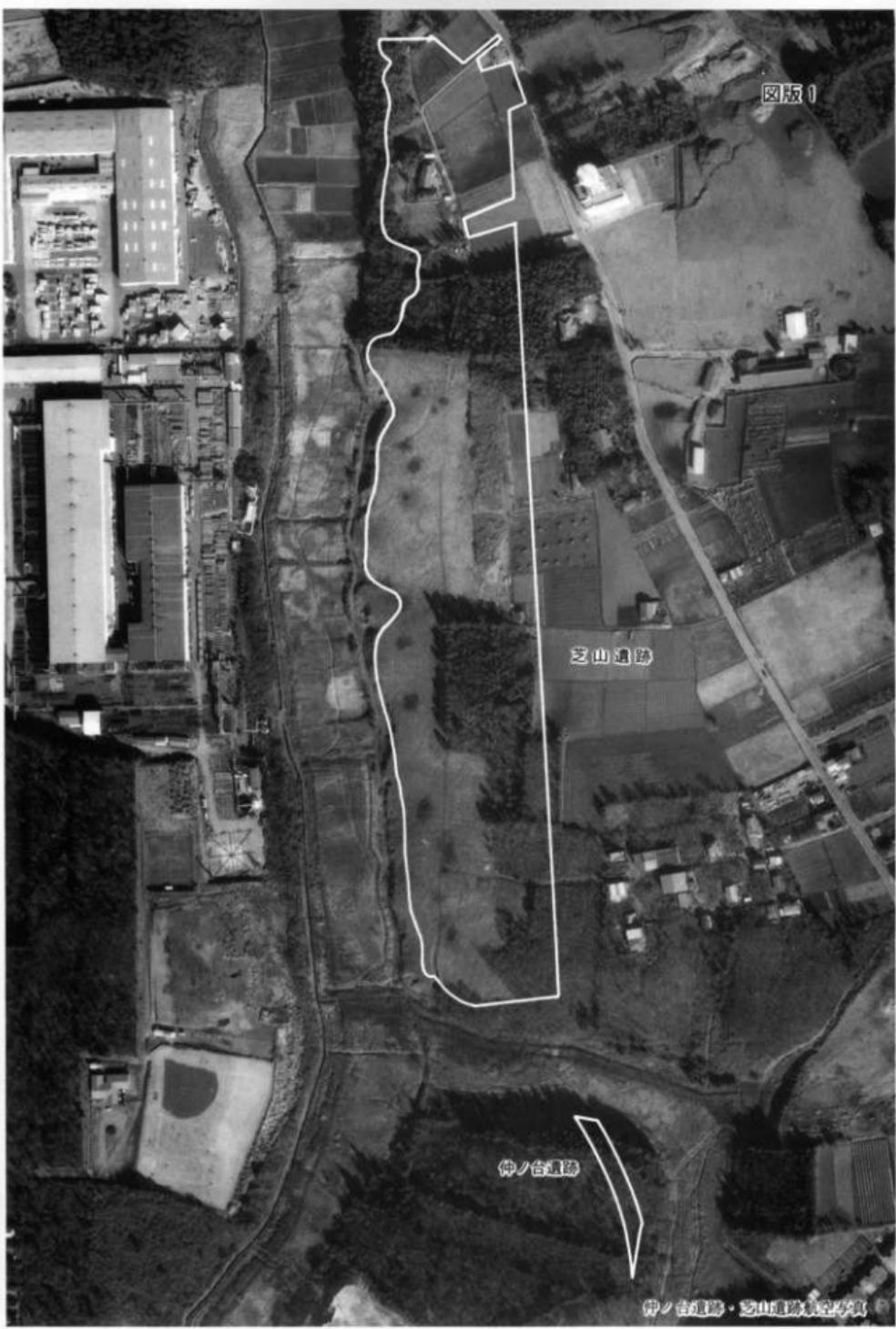
各遺構の性格から考えた場合、住居跡との直接的な関係は実証できないが、製鉄炉が設置されており001号住居跡では鍛冶炉が検出されている。また010・011・012号住居跡は004号製鉄炉に近接しており、規模・形状から製鉄がおこなわれていた際の作業場とも考えられる。

よって本文中でも示唆したとおり、居住空間とするよりも製鉄跡として考えたい。

# 写 真 图 版

芝山遺跡

仲ノ台遺跡





1. 仲ノ台遺跡遠景（北より望む）



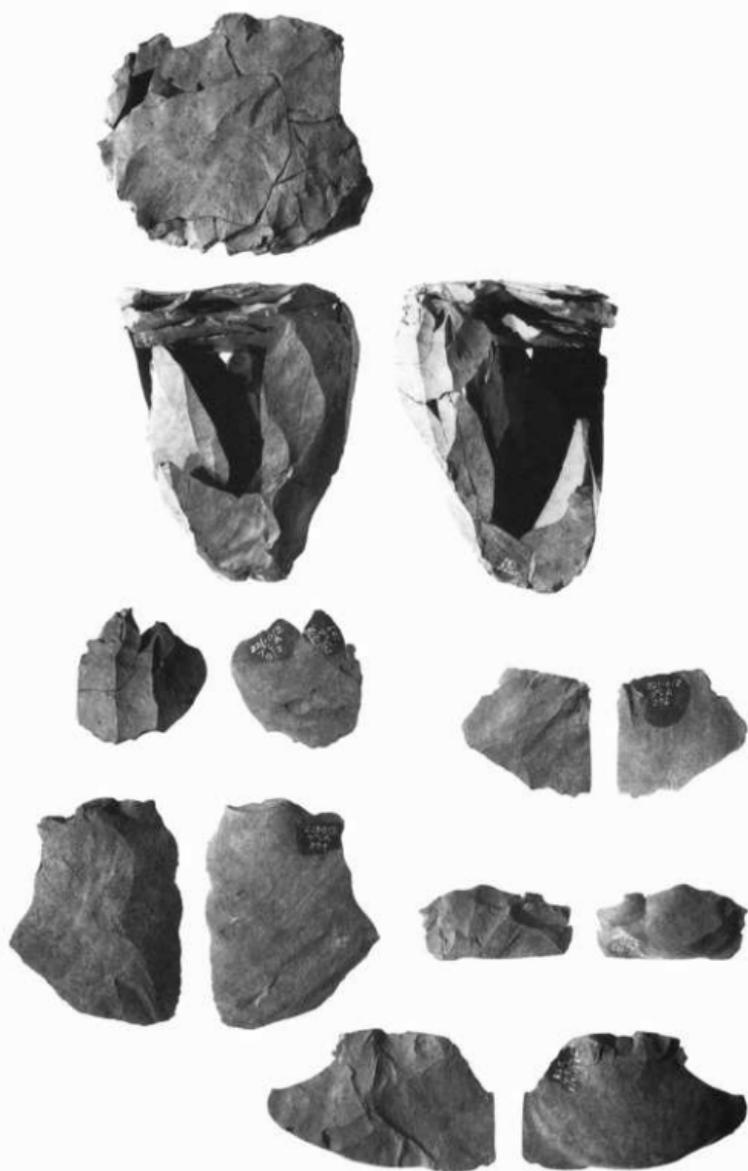
2. Aブロック遺物出土状況



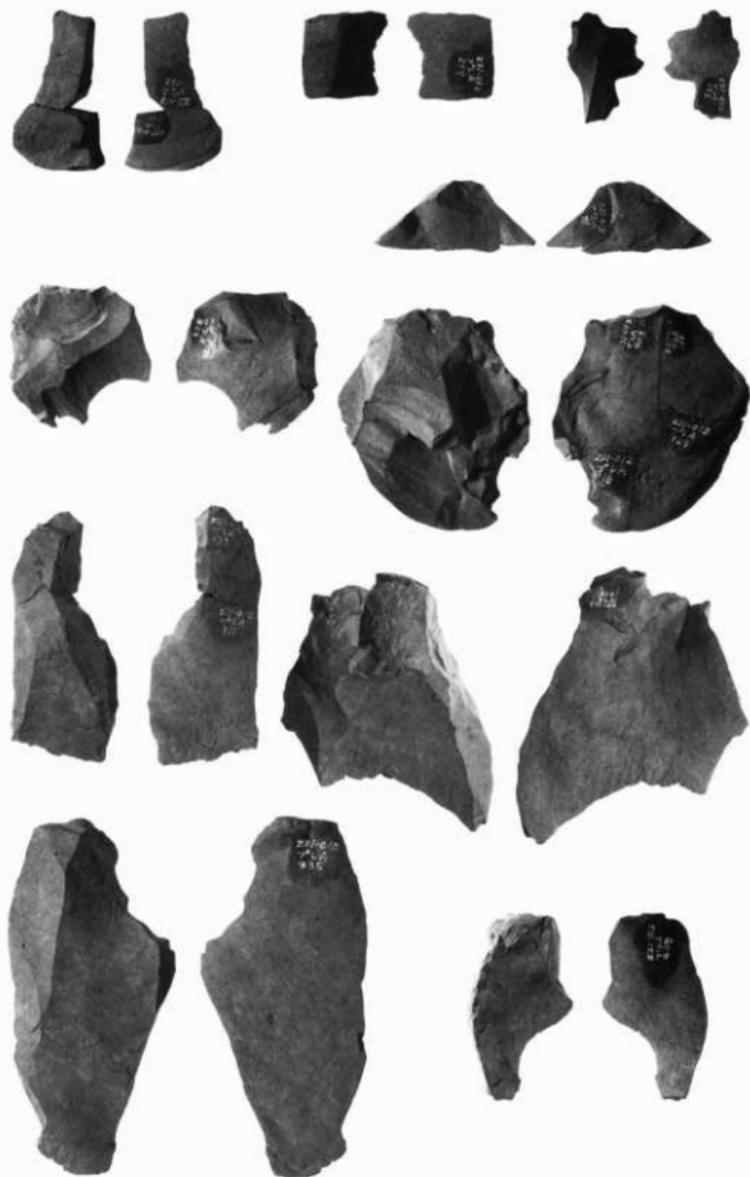
3. Bブロック遺物出土状況



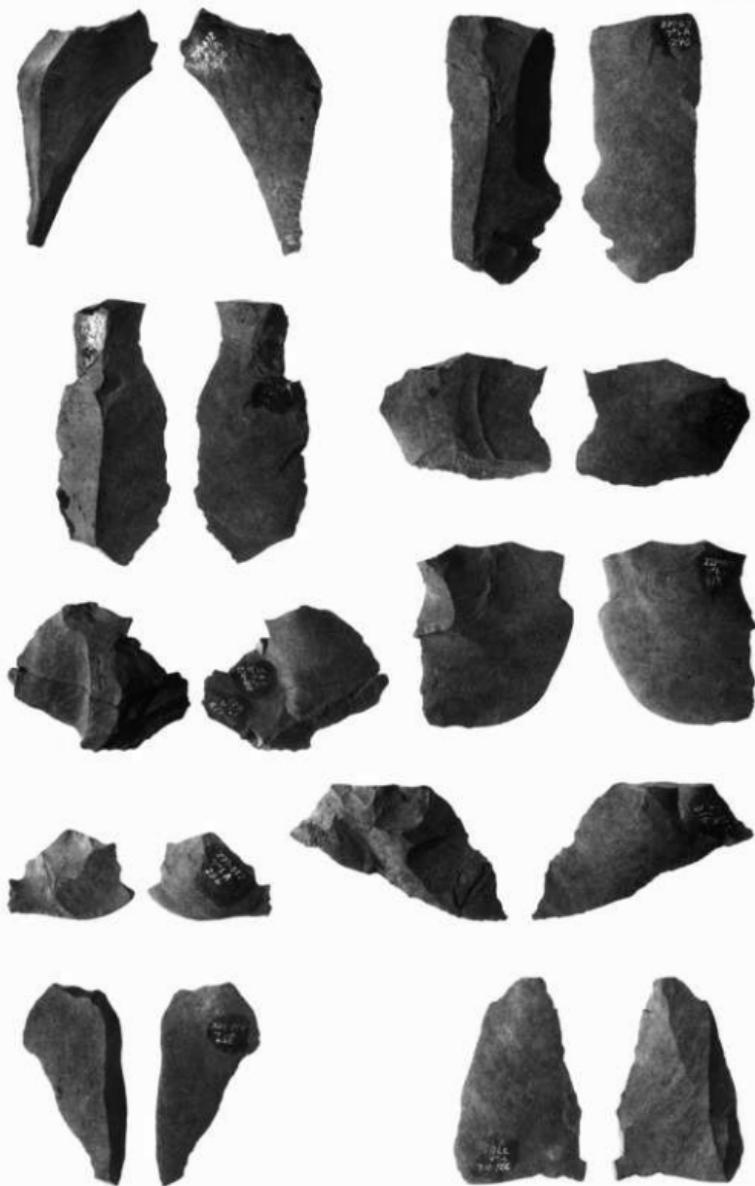
Aブロック出土石器



Aブロック凝灰岩A接合資料(1)



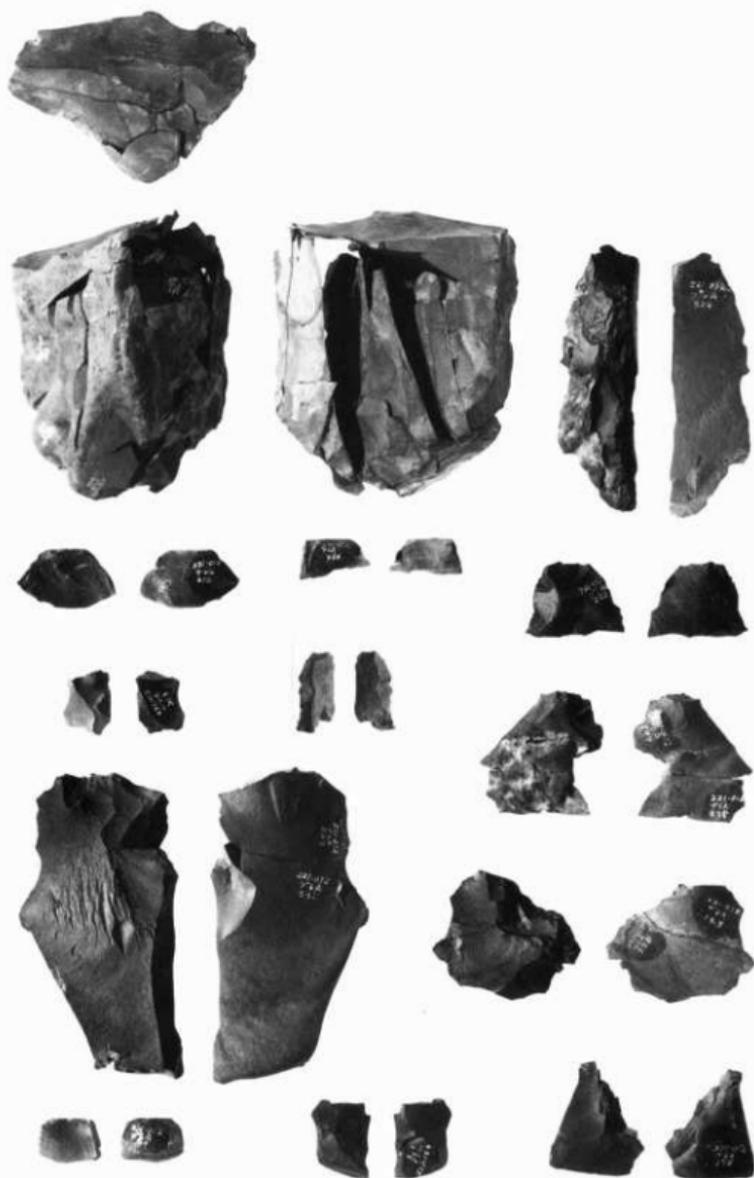
Aブロック凝灰岩A接合資料(2)



Aブロック凝灰岩A接合資料(3)



Aブロック凝灰岩A接合資料(4)



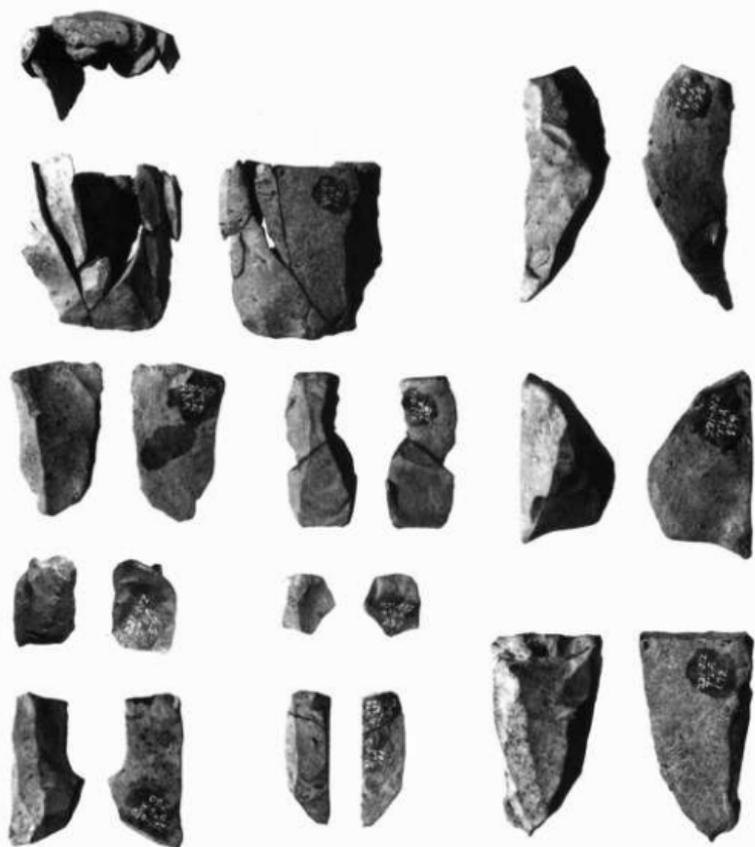
Aブロック頁岩接合資料(1)



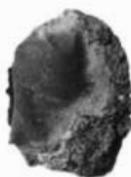
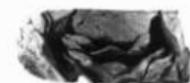
Aブロック頁岩接合資料(2)



Aブロック頁岩接合資料(3)



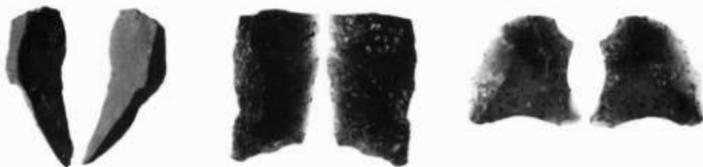
1. Aブロック凝灰岩B接合資料(1)



2. Aブロック珪質頁岩接合資料(1)



Aブロック珪質頁岩接合資料(2)



1. Bブロック出土石器



2. Bブロック安山岩接合資料(1)



Bブロック安山岩接合資料(2)



1. 芝山遺跡遠景（南西より望む）



2. 芝山遺跡遠景（北東より望む）



1.土層断面（オー06-03グリッド南壁）



2.第1ブロック遺物出土状況



3.局部磨製石斧出土状況



第1ブロック出土石器(1)



第1ブロック出土石器(2)



1. 第2ブロック遺物出土状況



2. 第2ブロック出土石器(1)



第2ブロック出土石器(2)



1. 第3ブロック遺物出土状況



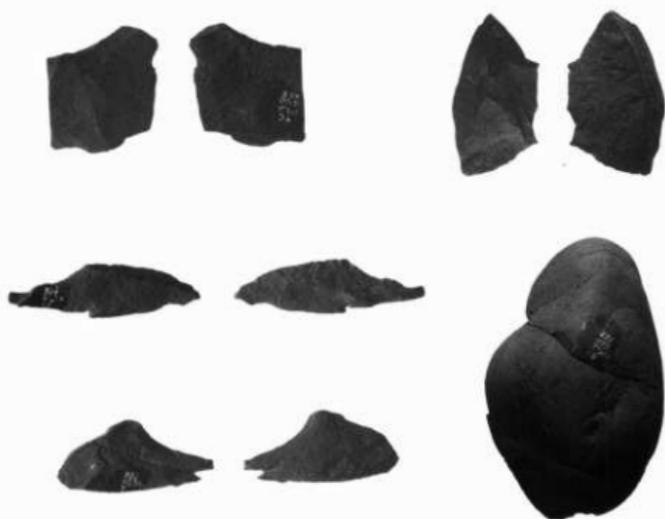
2. 第3ブロック出土石器



3. 第4ブロック遺物出土状況



4. 第4ブロック出土石器



1. 第4ブロック出土石器 (2)



2. 第5ブロック遺物出土状況



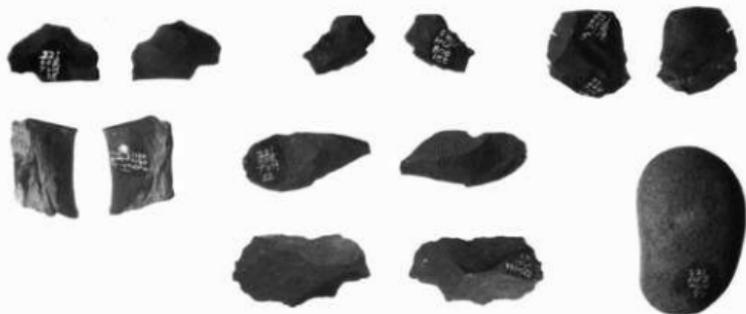
3. 第5ブロック出土石器



1. 第6ブロック出土石器



2. 第7ブロック遺物出土状況



3. 第7ブロック出土遺物



4. 第8ブロック出土遺物



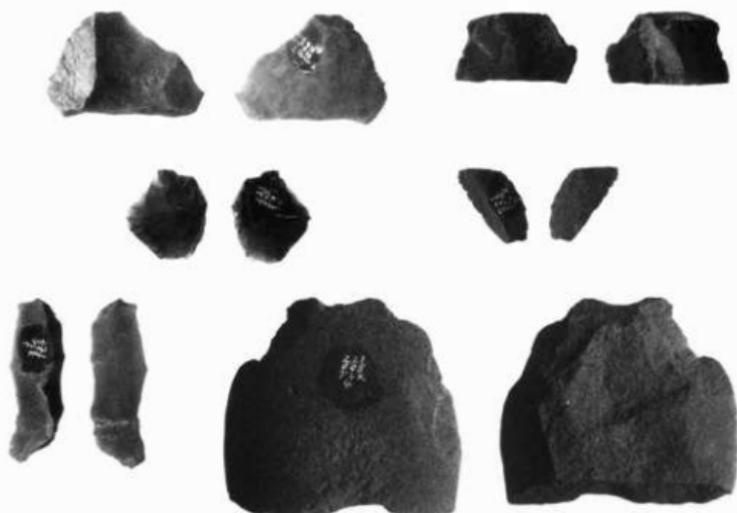
1. 第9ブロック遺物出土状況



2. 第9ブロック出土遺物



3. 第10ブロック遺物出土状況



1. 第10ブロック出土遺物



2. 第11ブロック出土遺物



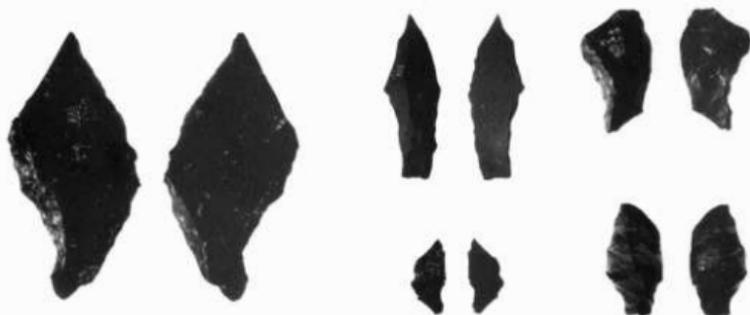
3. 第12ブロック遺物出土状況



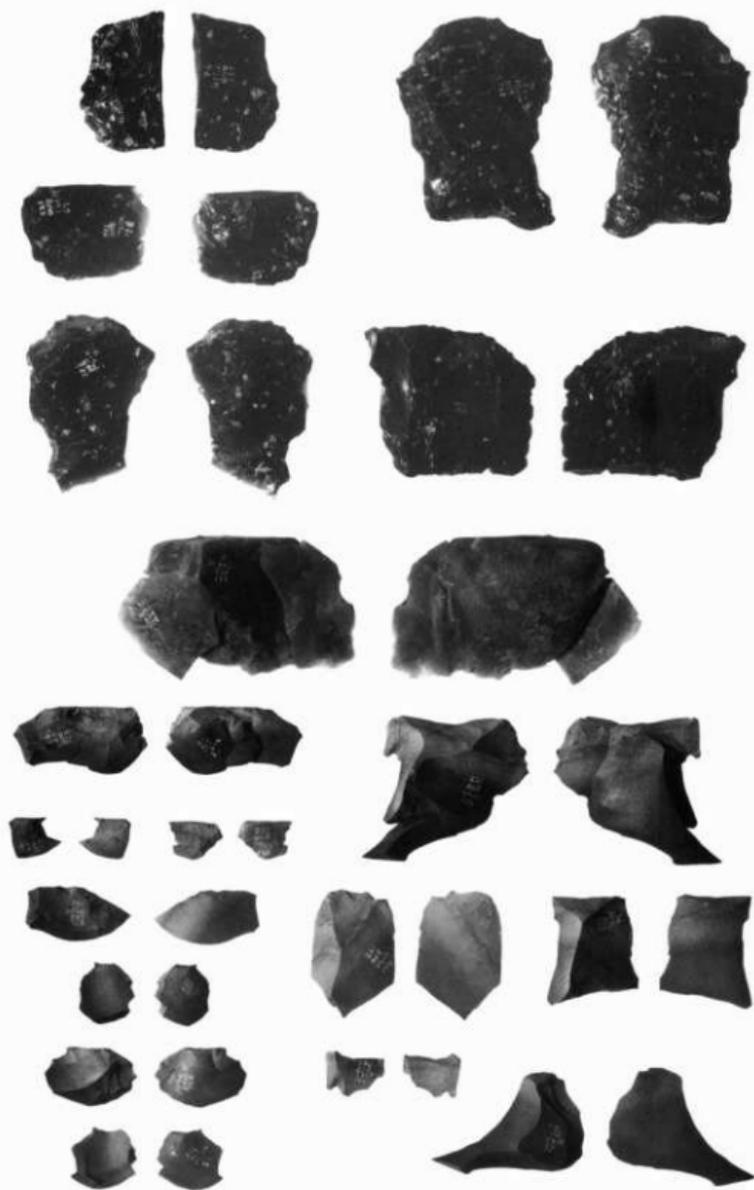
1. 第12ブロック出土遺物



2. 第13ブロック遺物出土状況



3. 第13ブロック出土遺物(1)



第13ブロック出土遺物（2）



第13ブロック出土遺物(3)



1. 第14ブロック遺物出土状況



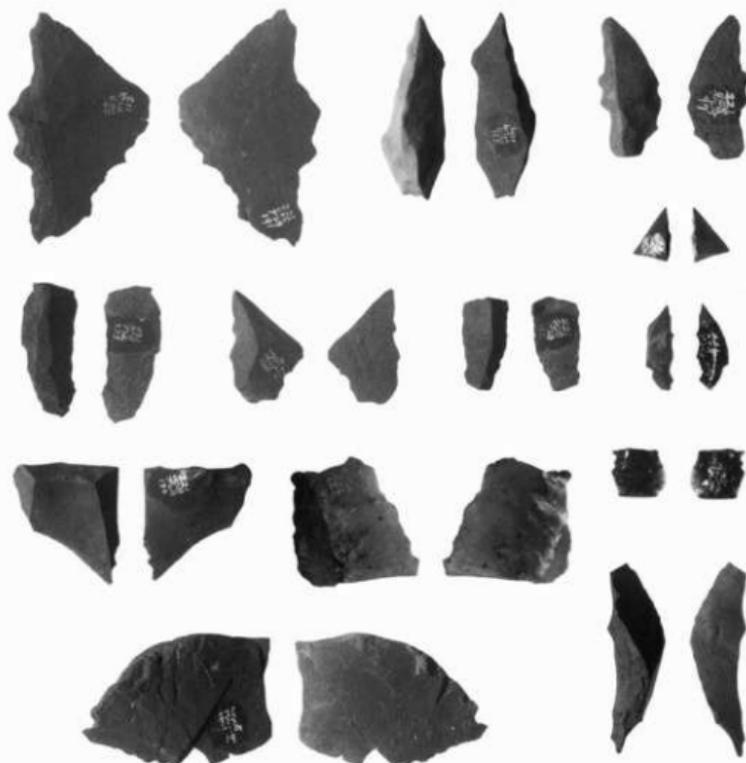
2. 第14ブロック出土遺物



3. 第15ブロック遺物出土状況及び出土遺物



1. 第16ブロック遺物出土状況



2. 第16ブロック出土遺物 (1)



1. 第16ブロック出土遺物 (2)



2. 第17ブロック出土遺物



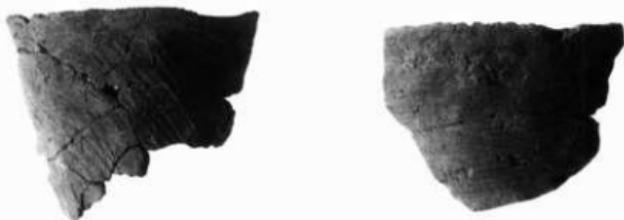
3. 第19ブロック出土遺物



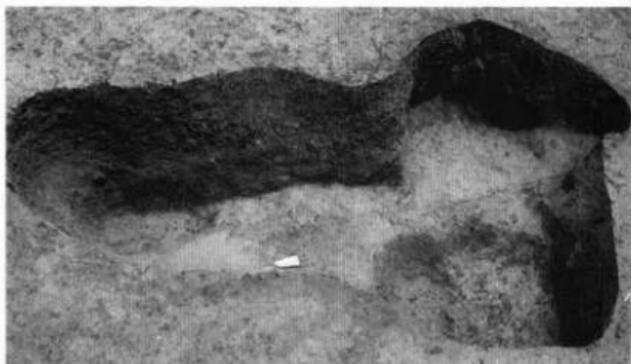
1. 第7文化層出土遺物



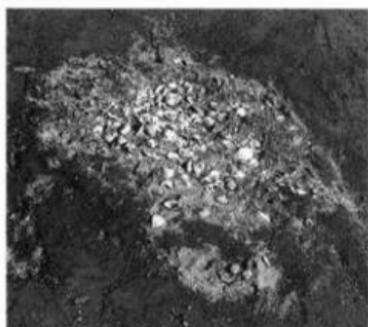
2. 110号炉穴全景



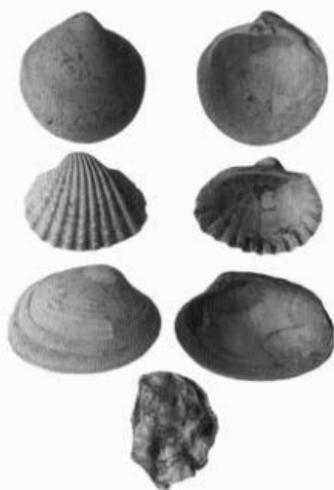
3. 110号炉穴出土遺物



1. 072号土坑全景



2. 072号土坑貝層檢出狀況



3. 072号土坑出土遺物



1. 014号土坑全景



2. 014号土坑遗物出土状况



3. 014号土坑出土遗物

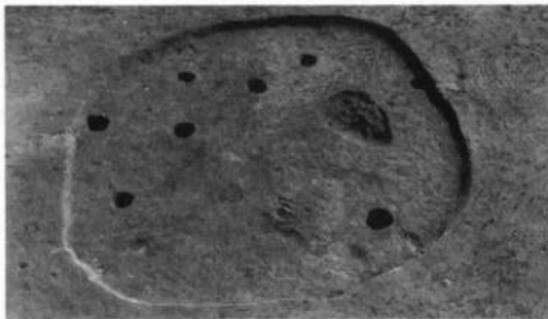


1. 036号住居跡・陥穴状遺構全景

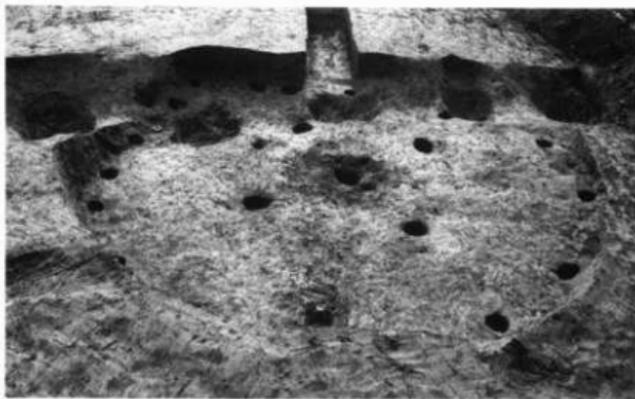


2. 106号住居跡出土遺物

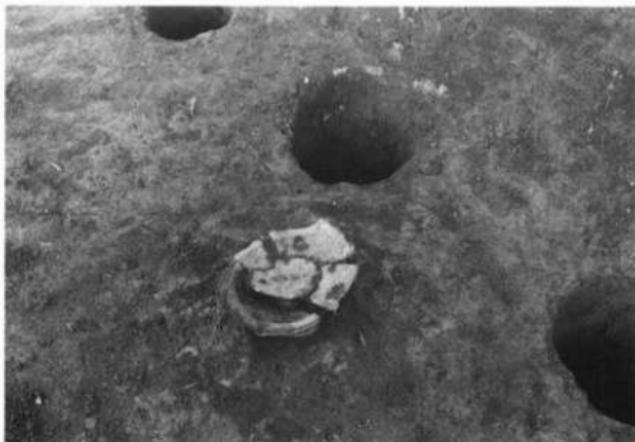
3. 036号住居跡出土遺物



4. 106号住居跡全景



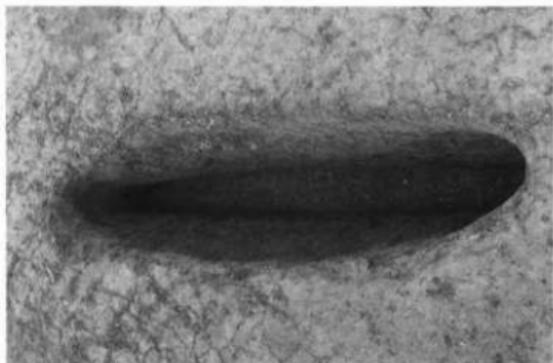
1. 104号住居跡全景



2. 104号住居跡遺物出土状況



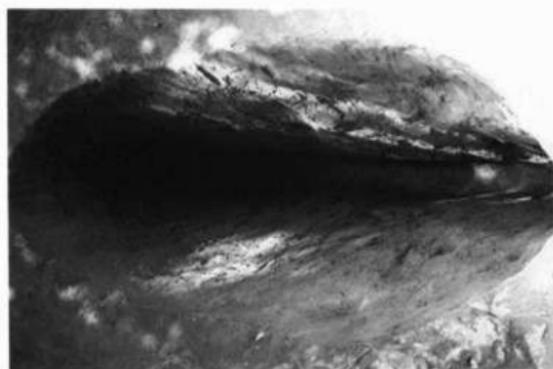
3. 104号住居跡出土遺物



1. 017号陷穴状遗構全景



2. 030号陷穴状遗構全景



3. 032号陷穴状遗構全景



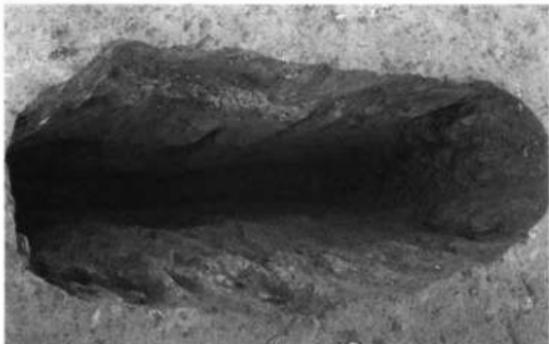
1. 033号陷穴状遗構全景



2. 035号陷穴状遗構全景



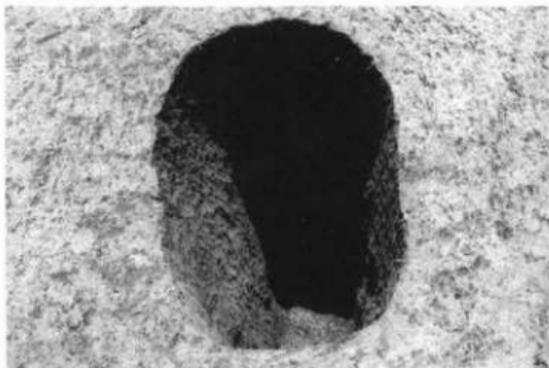
3. 037号陷穴状遗構全景



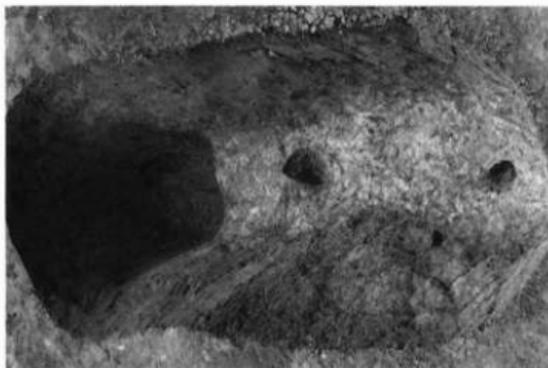
1.040号陷穴状遗構全景



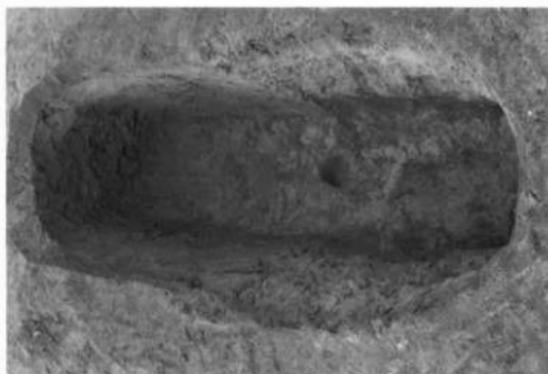
2.041号陷穴状遗構全景



3.074号陷穴状遗構全景



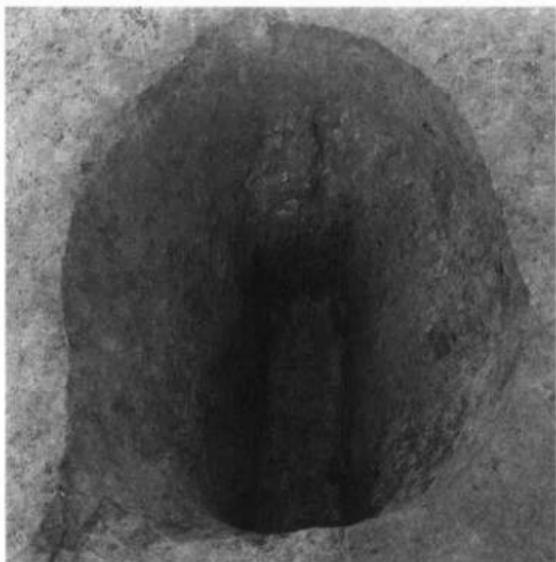
1. 015号陷穴状遺構全景



2. 016号陷穴状遺構全景



3. 046号陷穴状遺構全景



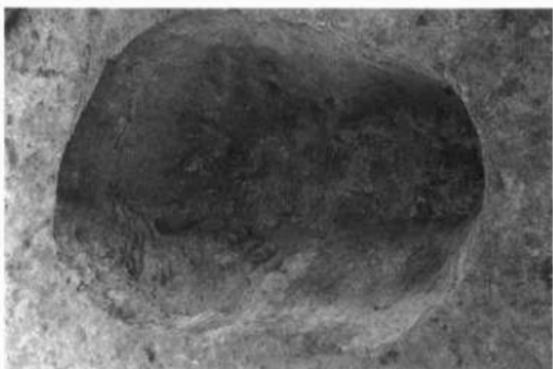
1. 051号陷穴状遺構全景



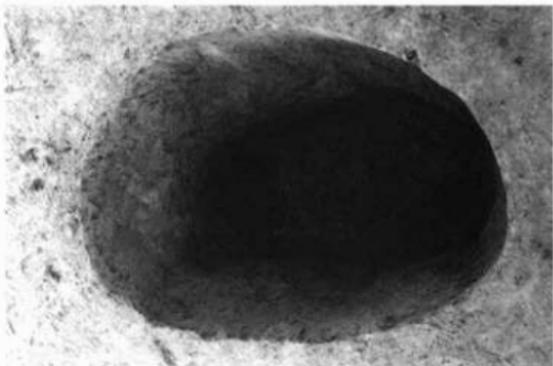
2. 053号陷穴状遺構全景



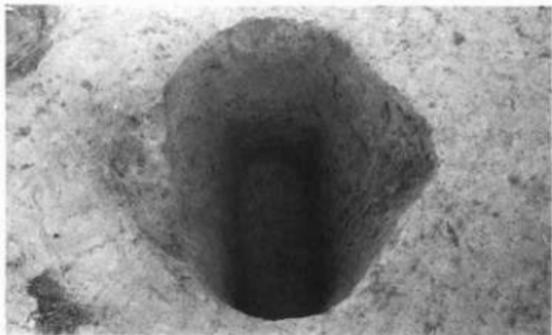
1. 028号陷穴状遺構全景



2. 056号陷穴状遺構全景



3. 058号陷穴状遺構全景



1. 059号陷穴状遺構全景



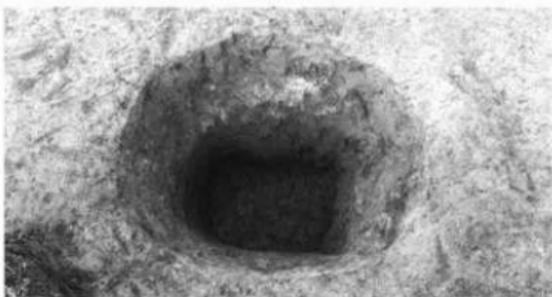
2. 064号陷穴状遺構全景



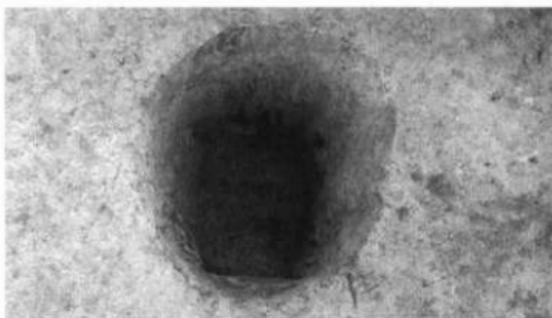
3. 065号陷穴状遺構全景



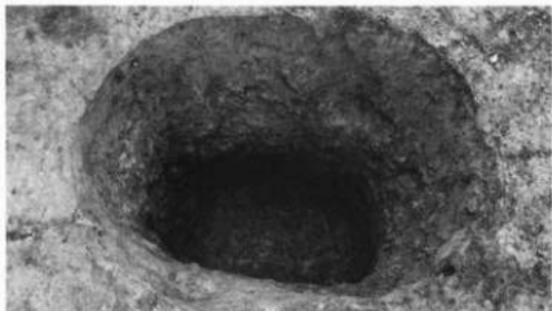
1. 021号陷穴状遗构全景



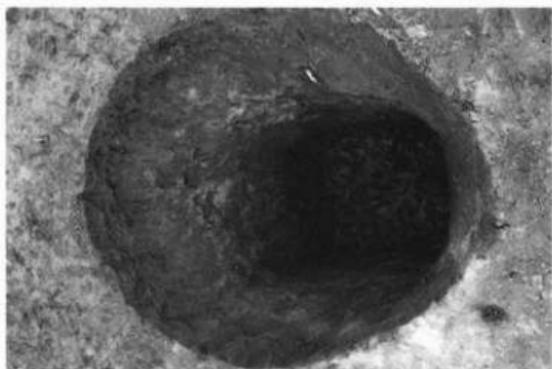
2. 022号陷穴状遗构全景



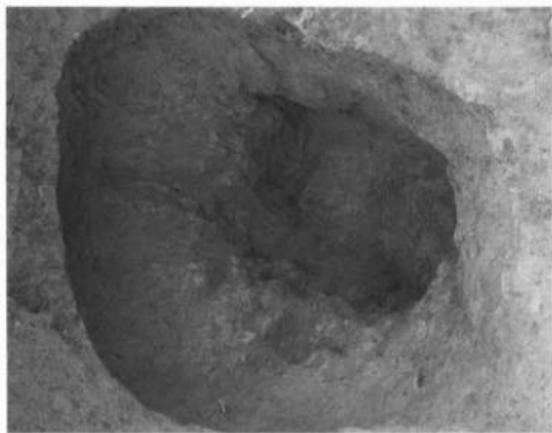
3. 023号陷穴状遗构全景



1. 024号陷穴状遺構全景



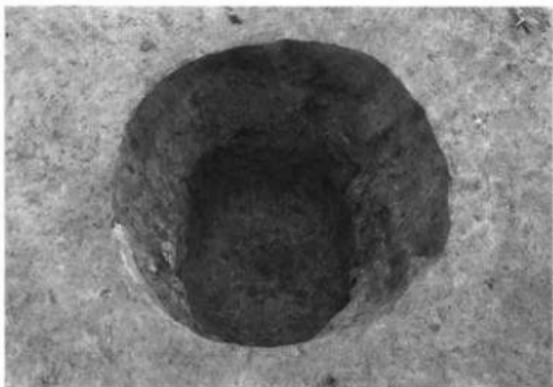
2. 026号陷穴状遺構全景



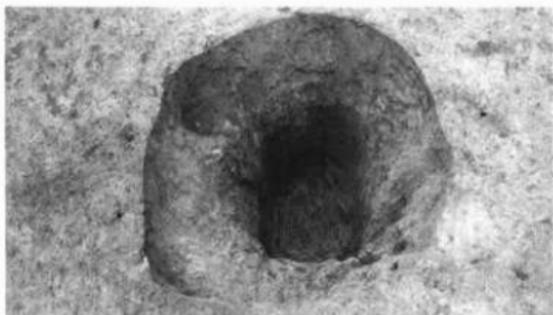
3. 038号陷穴状遺構全景



1. 042号陷穴状遗构全景



2. 048号陷穴状遗构全景



3. 049号陷穴状遗构全景



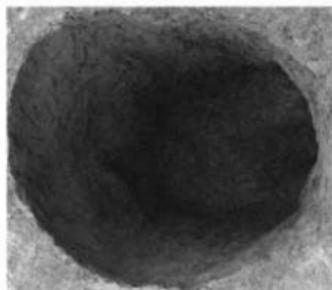
1. 050号陷穴状遗構全景



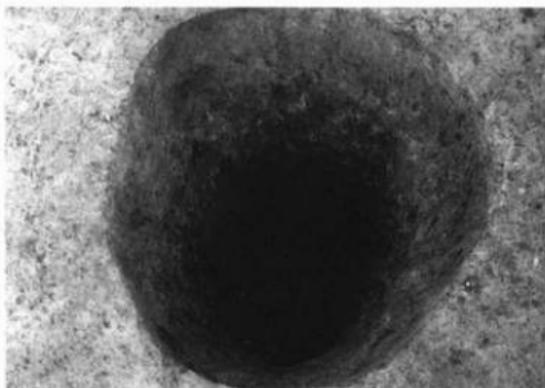
2. 052号陷穴状遺構全景



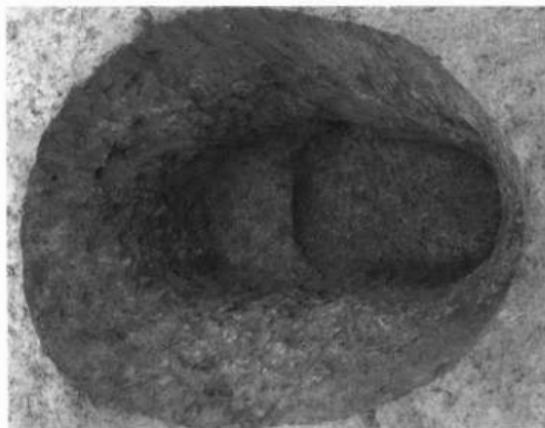
3. 060号陷穴状遺構全景



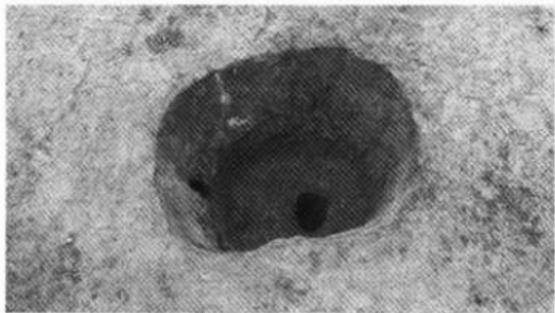
1. 063号陷穴状遗構全景



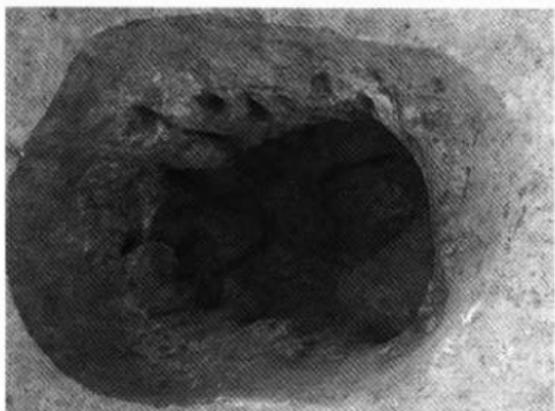
2. 067号陷穴状遗構全景



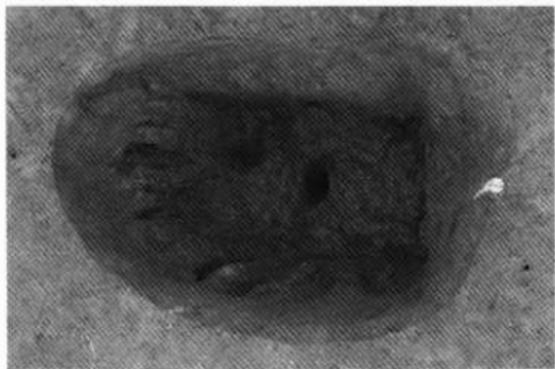
3. 069号陷穴状遗構全景



1. 025号陷穴状遺構全景



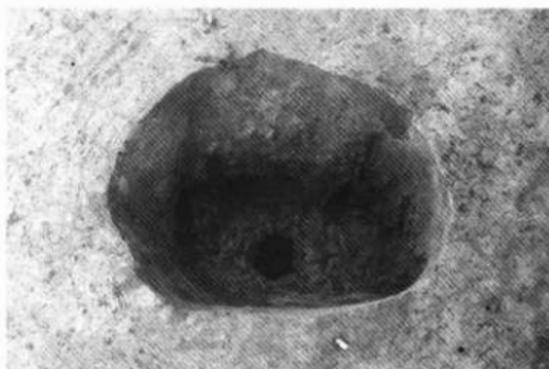
2. 045号陷穴状遺構全景



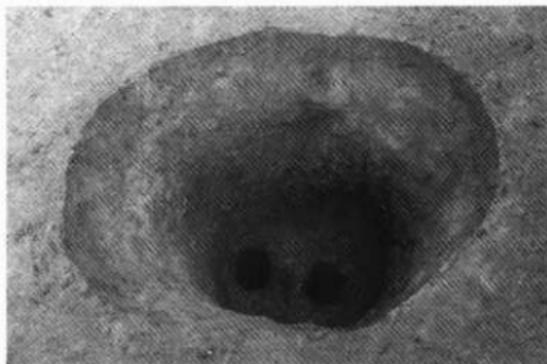
3. 054号陷穴状遺構全景



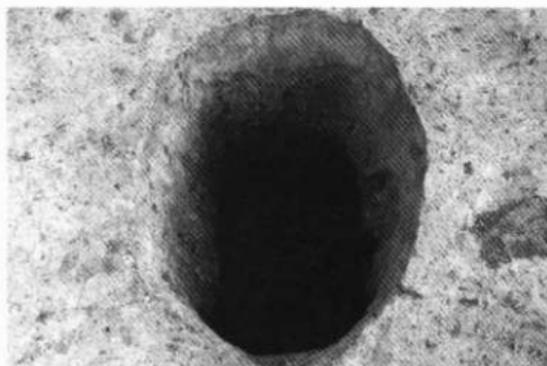
1. 055号陷穴状遺構全景



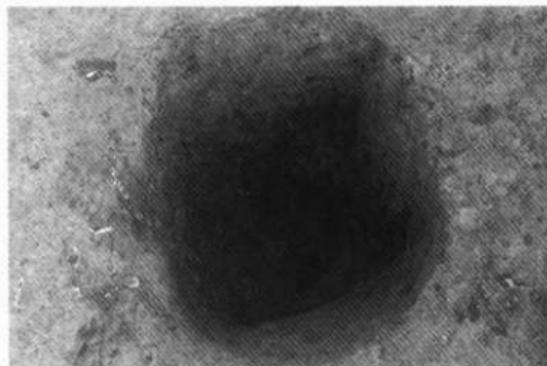
2. 061号陷穴状遺構全景



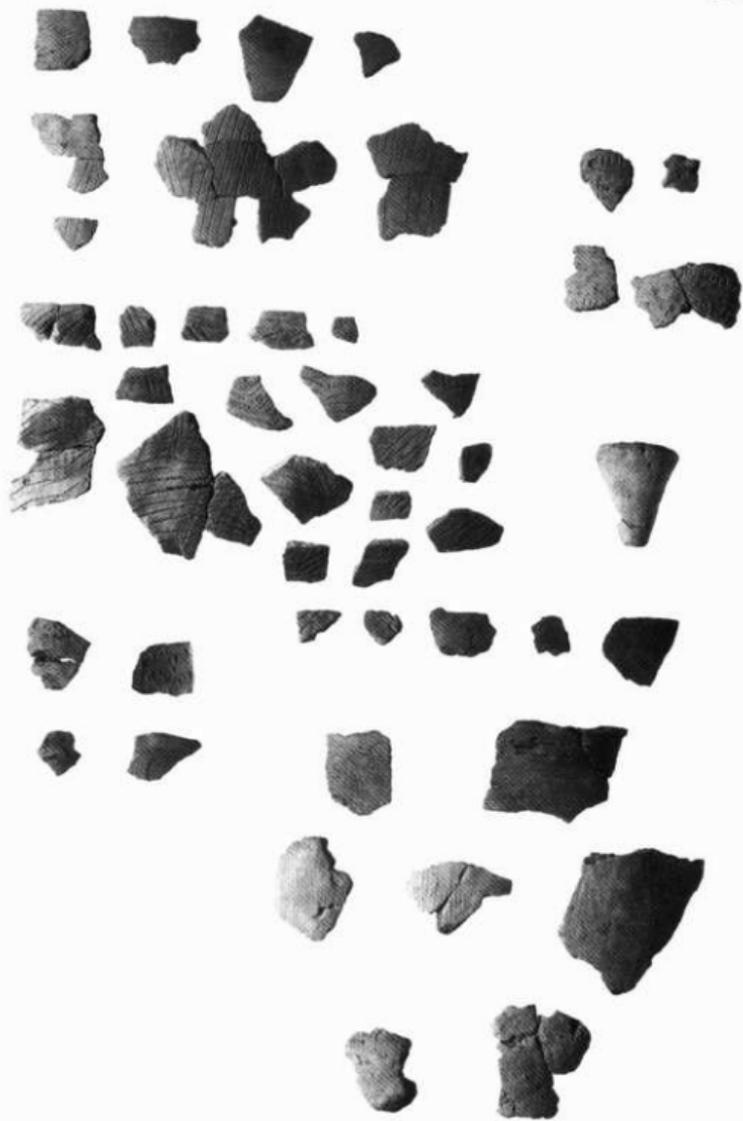
1. 062号陷穴状遗构全景



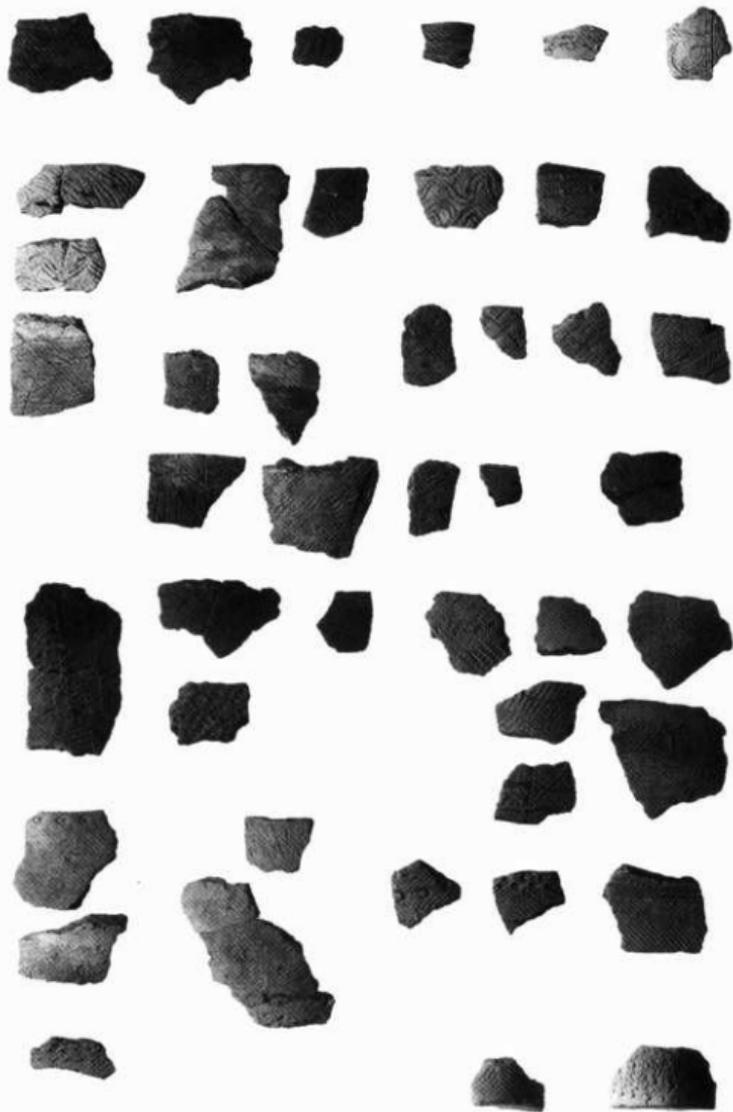
2. 066号陷穴状遗构全景



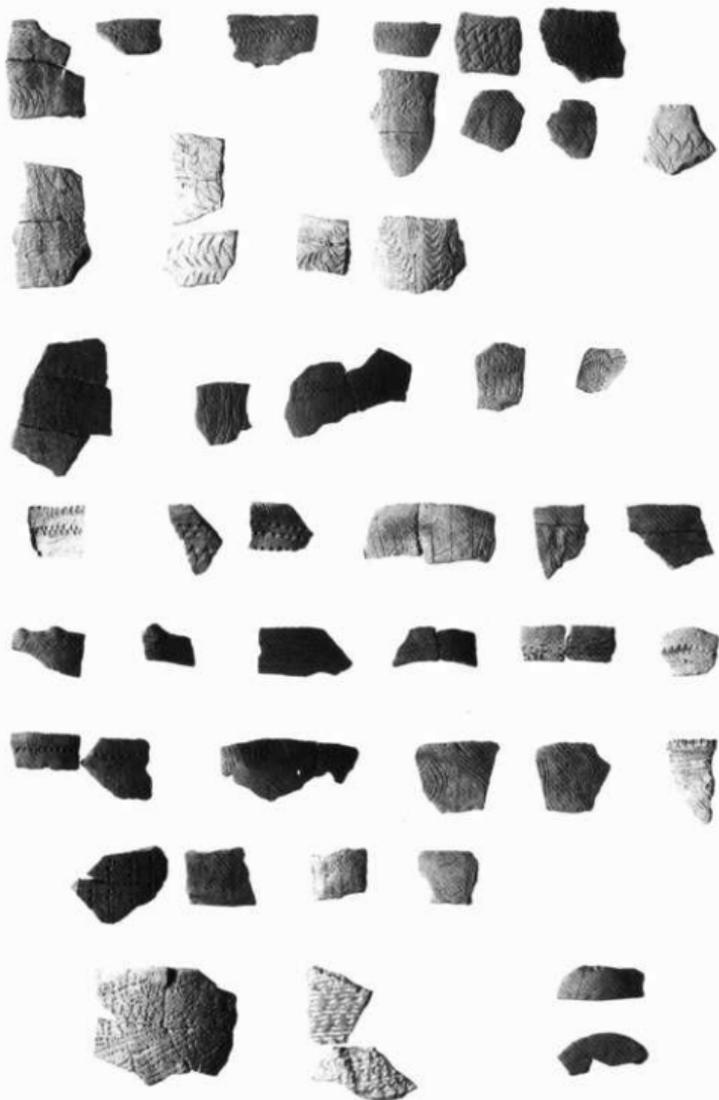
3. 068号陷穴状遗构全景



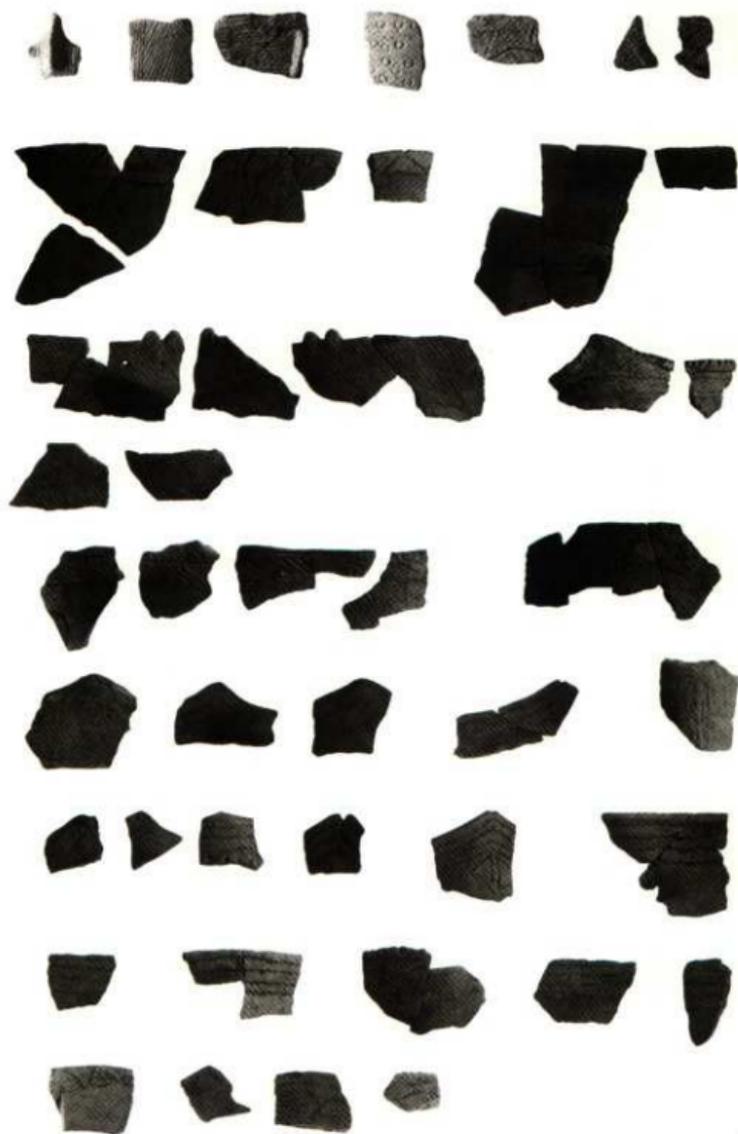
繩文時代包含層出土土器 (1)



縄文時代包含層出土土器（2）



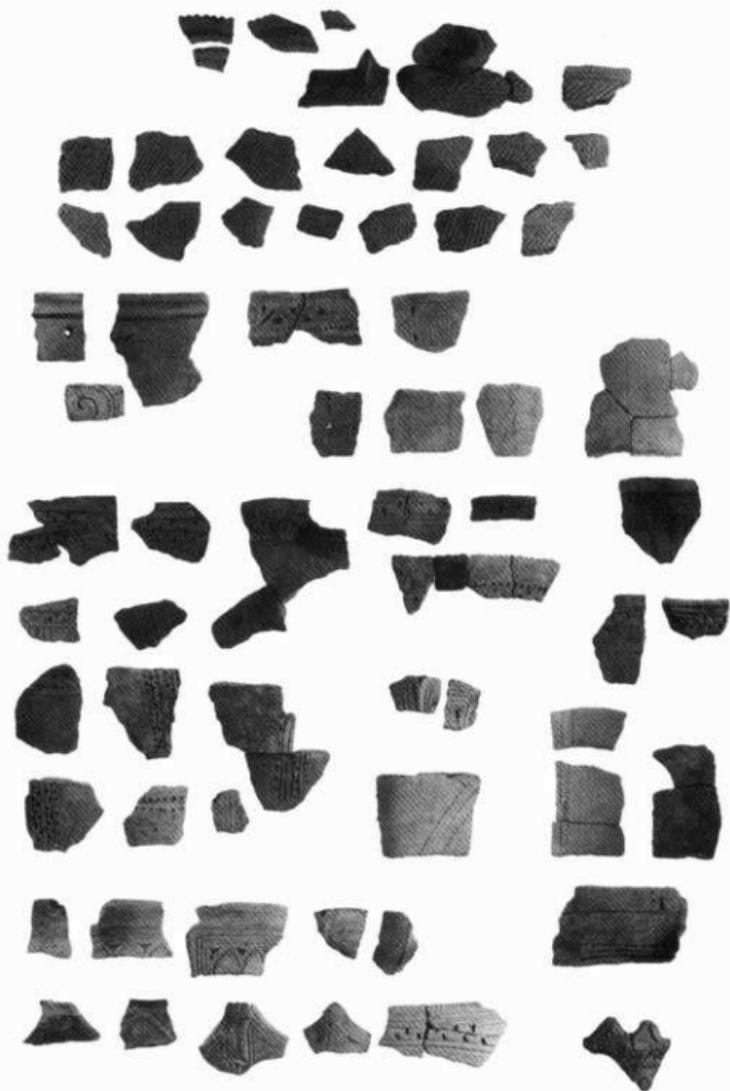
繩文時代包含層出土土器 (3)



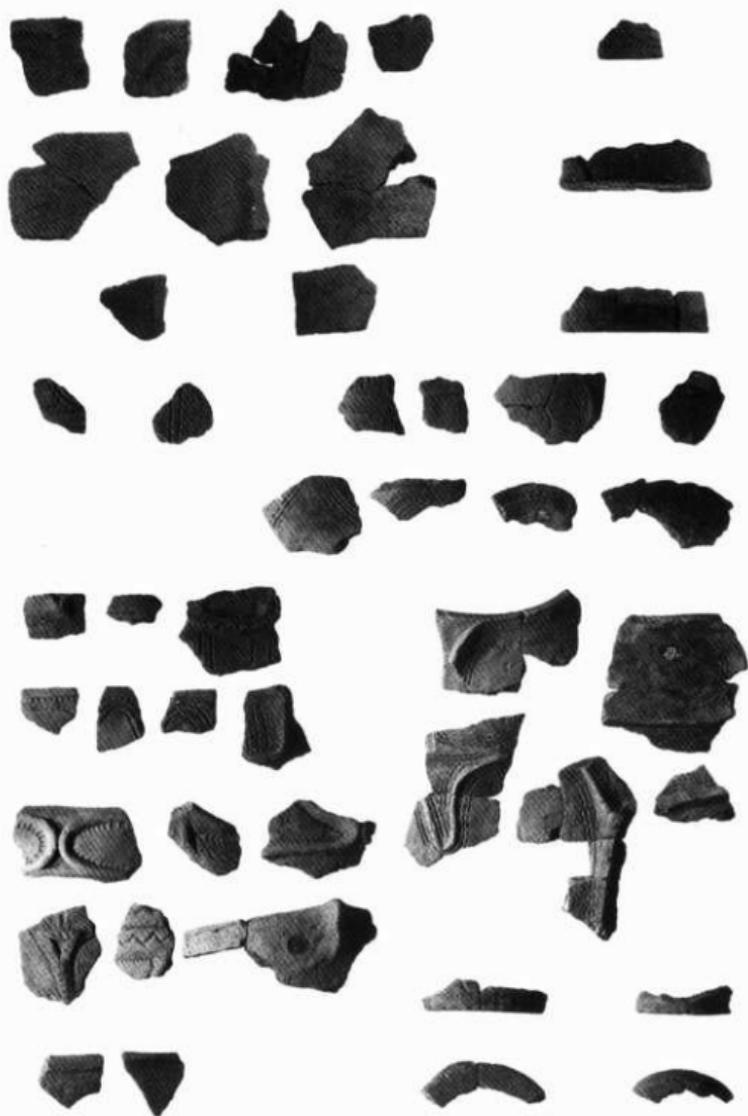
縄文時代包含層出土土器（4）



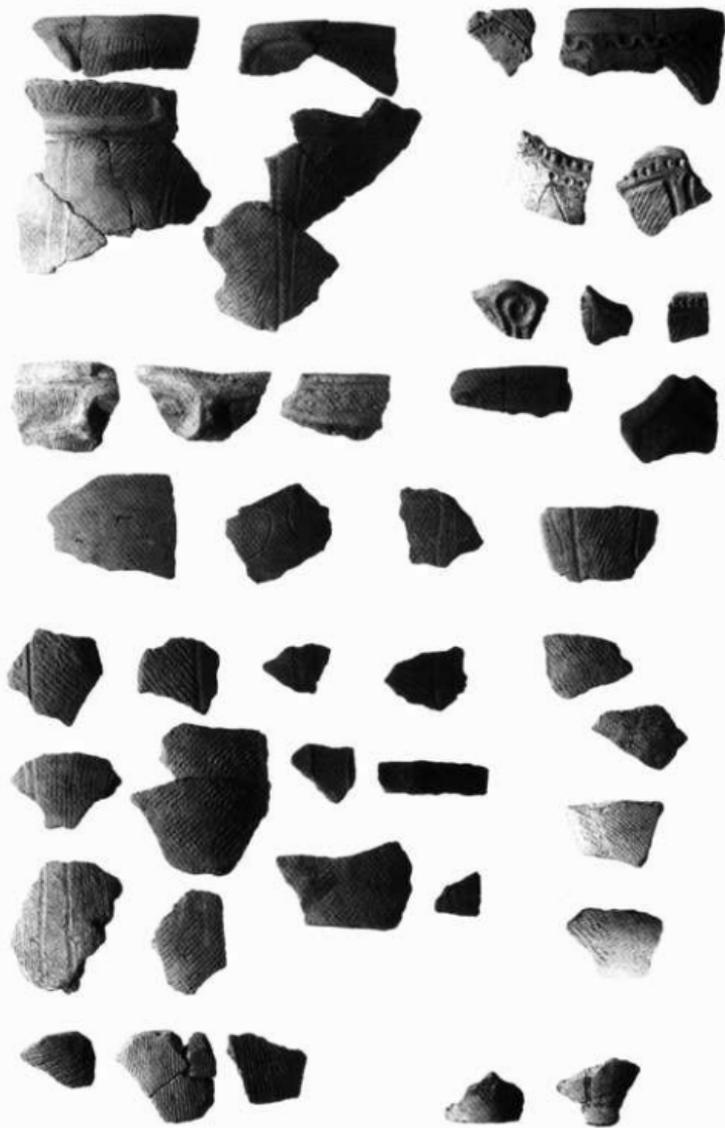
縄文時代包含層出土器 (5)



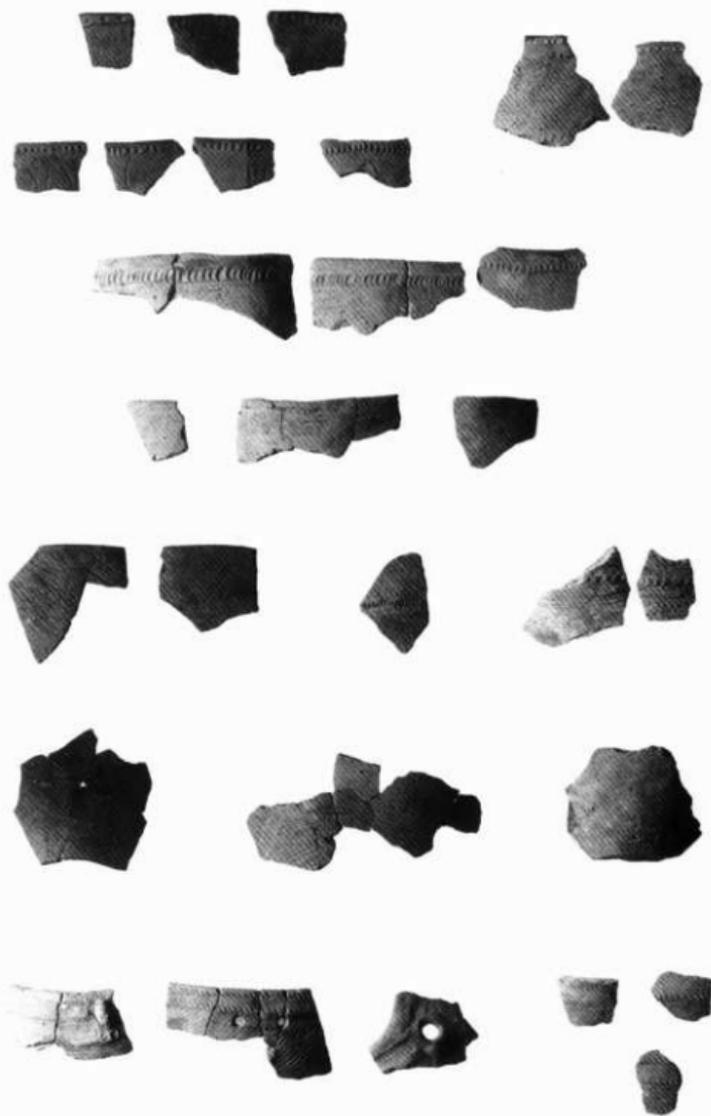
繩文時代包含層出土土器 (6)



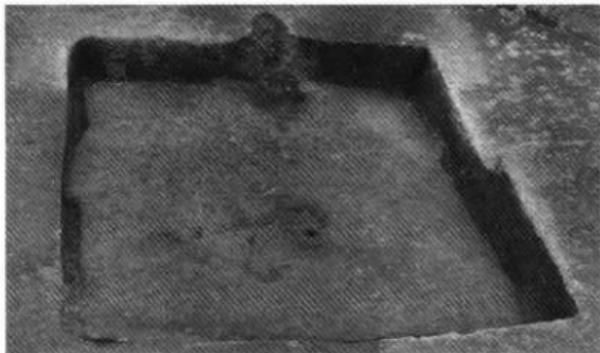
縄文時代包含層出土土器 (7)



繩文時代包含層出土土器 (8)



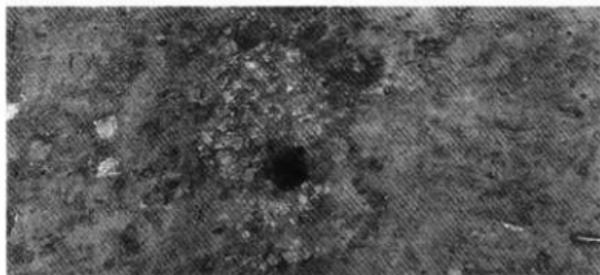
縄文時代包含層出土土器（9）



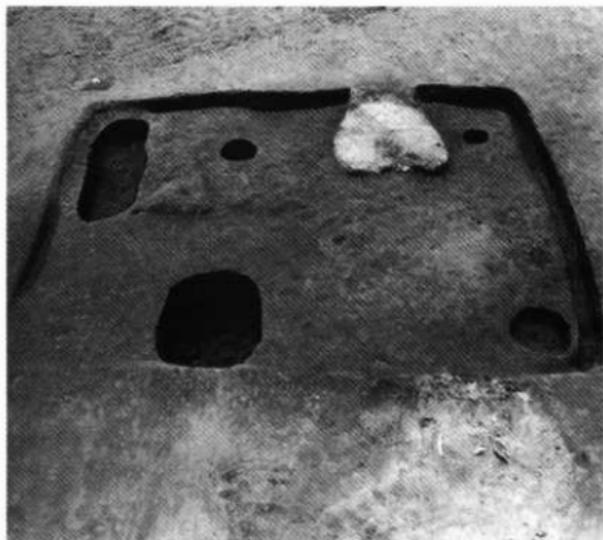
1.001号住居跡全景



2.001号住居跡カマド全景



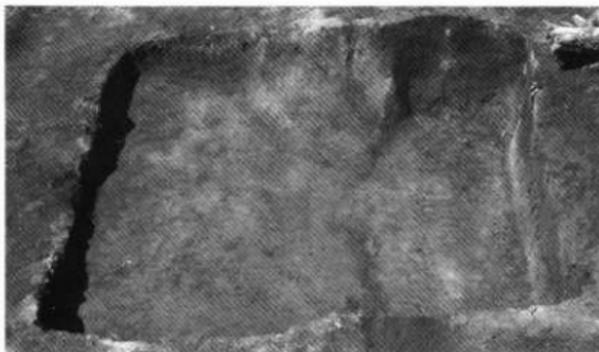
3.001号住居跡鍛冶炉



1.009号住居跡全景



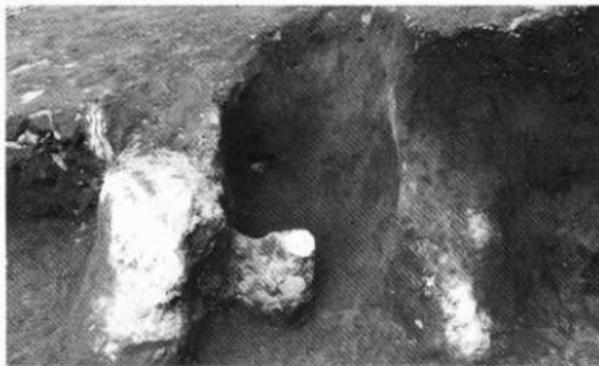
2.009号住居跡カマド全景



1. 010号住居跡全景



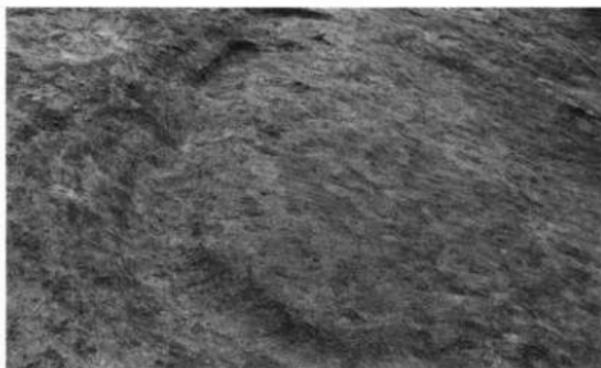
2. 010号住居跡遺物出土状況



3. 010号住居跡カマド全景



1.011号住居跡全景



2.012号住居跡全景



3.018号住居跡全景



1.019号住居跡カマド検出状況



2.019号住居跡カマド断面



1. 019号住居跡・039号土壇全景



2. 029号住居跡全景



3. 029号住居跡カマド全景



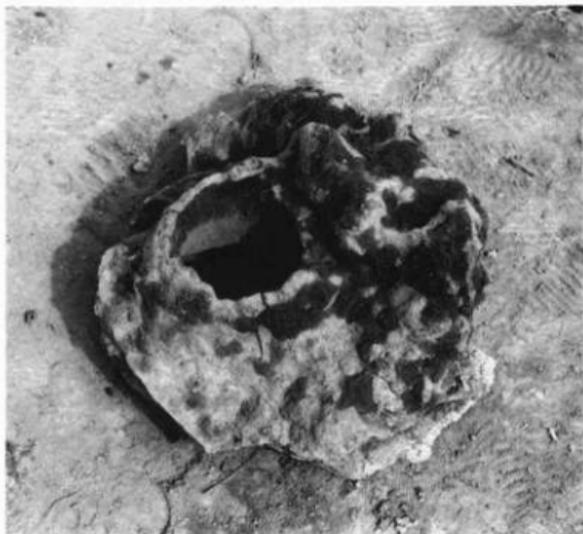
平安時代住居跡出土遺物



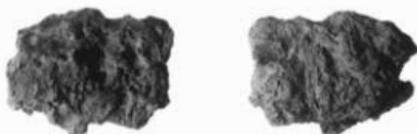
1.004号製鉄炉全景



2.004号製鉄炉壁面



1.004号製鉄炉出土大型羽口



2.004号製鉄炉炉壁破片



3.004号製鉄炉出土鉄滓

千葉県文化財センター埋蔵文化財報告第176集

八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡

—東葉高速鉄道引込み線および車庫用地内埋蔵文化財調査報告書—

---

---

平成2年3月31日発行

発行 東葉高速鉄道株式会社  
船橋市本郷町465番地

編集 財団法人 千葉県文化財センター  
千葉市葛城2丁目10番1号

印刷 新柳印刷株式会社  
千葉市葛城1丁目8番1号

---

---